

世紀転換期の英米哲学における 観念論と実在論

現代哲学のバックグラウンドの探究

染谷 昌義・小山 虎・齋藤 暢人 編著

有村 直輝・伊藤 遼・入江 哲朗・大厩 諒・岸本 智典 著

THE
MEETING OF EXTREMES
DICTIONARY
IN
PHILOSOPHY AND PSYCHOLOGY
CONTEMPORARY PHILOSOPHY
XII.—SYMPOSIUM—THE STATUS OF SENSE-DATA.

By G. E. MOORE and G. F. STOUT.

WRITTEN BY MANY HANDS

AND EDITED BY

JAMES MARK BALDWIN

PH.D. (PRINCETON), HON. D.Sc. (OXFORD), HON. LL.D. (GLASGOW)

VISITANT PROFESSOR IN PRINCETON UNIVERSITY

WITH THE CO-OPERATION AND ASSISTANCE OF AN INTERNATIONAL
BOARD OF CONSULTING EDITORS

FELLOW OF THE BRITISH ACADEMY

New York

THE MACMILLAN COMPANY

London

MACMILLAN AND CO., LIMITED

1901



世紀転換期の英米哲学における 観念論と实在論

現代哲学のバックグラウンドの探究

染谷 昌義・小山 虎・齋藤 暢人 編著

有村 直輝・伊藤 遼・入江 哲朗・大厩 諒・岸本 智典 著

ISBN 978-4-907438-65-4
特定非営利活動法人 ratik

本研究は JSPS 科研費 JP20K00015 の助成を受けたものです。

目次

| | |
|---|----|
| はじめに | 1 |
| 第1部 実在論の地平 | 7 |
| 第1章 世紀転換期の認識論：認識関係をめぐる論争としての観念論・実在論論争 [染谷 昌義] | 8 |
| 1. はじめに：観念論と実在論との論争をイメージするための架空の会話 | 8 |
| 2. 本章の道案内 | 12 |
| 3. 世紀転換期の観念論 | 14 |
| 4. 主観主義の認識論 | 18 |
| 4.1 認識関係、内的関係、外的関係 | 18 |
| 4.2 内的関係としての認識関係とその帰結 | 19 |
| 5. 実在論的な認識論 | 21 |
| 5.1 認識関係は外的関係である | 21 |
| 5.2 実在論の意義と課題 | 23 |
| 6. 現代の哲学的議論への示唆 | 25 |
| 第2部 ブリティッシュリアリズム | 31 |
| 第2章 ムーアの実在論と英国哲学史におけるその位置づけ [伊藤 遼] | 32 |
| 1. はじめに | 32 |
| 2. ムーアの素朴な直接知覚説 | 35 |
| 3. 「センスデータ」概念にもとづく直接知覚説(1) | 37 |
| 4. 「センスデータ」概念にもとづく直接知覚説(2) | 40 |
| 5. ムーアによる常識の擁護 | 42 |

| | |
|---|-----------|
| 6. シジウィックによる「常識の哲学」 | 46 |
| 7. おわりに | 50 |
| 第3章 計画の実行、またはやり直し：ボザンケから見た世紀転換期の 観念論と實在論 [有村 直輝] | 54 |
| 1. はじめに | 54 |
| 2. 経験による實在の探究としての「思弁哲学」の系譜 | 58 |
| 2.1 思弁哲学は経験の哲学である | 58 |
| 2.2 思弁哲学は實在の探究である | 59 |
| 3. 思弁哲学と新観念論 | 60 |
| 4. 新實在論に対する評価と批判 | 63 |
| 4.1 新實在論者による批判への反論 | 63 |
| 4.2 新實在論者の基本姿勢の評価 | 64 |
| 4.3 新實在論者に対する批判点 | 64 |
| 5. 批判的實在論に対する評価と批判 | 66 |
| 6. 「最も具体的な實在論」としてのホワイトヘッドの評価 | 69 |
| 6.1 自然の二元分裂批判 | 69 |
| 6.2 システムとしての自然 | 70 |
| 6.3 ボザンケのホワイトヘッドに対する評価 | 70 |
| 7. おわりに | 73 |
| 第4章 フィーリングの形而上学：観念論と實在論のあいだ [齋藤 暢人] | 77 |
| 1. はじめに | 77 |
| 2. 観念論とフィーリング：ブラッドリー | 77 |
| 3. 實在論とフィーリング：ジェームズ | 79 |
| 3.1 意識の流れ | 79 |
| 3.2 見かけの現在 | 80 |
| 3.3 活動性の経験 | 80 |
| 4. 實在論の展開とフィーリング：ホワイトヘッドとサンタヤーナ | 81 |
| 4.1 ホワイトヘッド | 81 |

| | | |
|------------|--|-----------|
| 4.2 | サンタヤーナ | 83 |
| 5. | 实在論の可能性とフィーリング：ベルクソニズムと現象学 | 85 |
| 5.1 | ベルクソン | 85 |
| 5.2 | フッサール | 86 |
| 6. | 概念論と实在論、フィーリング：パース | 88 |
| 7. | おわりに | 92 |
| | | |
| 第3部 | アメリカンリアリズム | 95 |
| | | |
| 第5章 | 「6名の实在論者による探究計画および第一綱領」訳解 [大塚 諒] | 96 |
| | 【解題】 | 96 |
| | 6名の实在論者による探究計画および第一綱領 | 100 |
| | | |
| 第6章 | E・G・スポールディングの分析概念と分析的实在論：世紀転換期アメリカ哲学史(3) [大塚 諒] | 114 |
| 1. | はじめに | 114 |
| 2. | 『新实在論』について | 114 |
| 3. | 「分析の擁護」について | 116 |
| 3.1 | スポールディング略伝 | 116 |
| 3.2 | 分析とは何か | 117 |
| 3.3 | 「分析の擁護」における实在 | 121 |
| 4. | 『新合理論』について | 121 |
| 4.1 | 『新合理論』の意図と全体像 | 121 |
| 4.2 | 『新合理論』における分析 | 123 |
| 4.3 | 『新合理論』における实在 | 126 |
| 5. | おわりに | 133 |
| | | |
| 第7章 | もう一つの世紀転換期アメリカ实在論、自然主義：デューイ、ウッドブリッジ、コーエンからネーゲルへと続く「科学的な哲学」の系譜 [小山 虎] | 136 |

| | |
|---|------------|
| 1. はじめに | 136 |
| 2. ネーゲルの自然主義的实在論 | 138 |
| 3. コロンビア自然主義：デューイとウッドブリッジ | 140 |
| 4. コーエンと自然主義：論理と实在 | 142 |
| 5. 自然主義の「科学的な哲学」 | 144 |
| 6. おわりに | 146 |
| | |
| 第 8 章 観念論的でも機械論的でもない社会のかたち：世紀転換期米 国におけるタコの形象 [入江 哲朗] | 150 |
| 1. はじめに | 150 |
| 2. タコへの注目の理由と方法 | 152 |
| 2.1 ノリスの『オクトパス』におけるタコの形象 | 152 |
| 2.2 タコの表象ないし形象に関する先行研究 | 154 |
| 3. 世紀転換期米国に関する従来の思想的構図 | 156 |
| 3.1 弁証法的な近似 | 156 |
| 3.2 ノリスの自然観 | 157 |
| 3.3 社会科学の優勢へ | 158 |
| 4. タコの形象の思想的な興味深さ | 160 |
| 4.1 有機的なもの | 160 |
| 4.2 分散された諸部分の複合体 | 161 |
| 5. 世紀転換期米国におけるタコの形象 | 163 |
| 5.1 19 世紀半ばまでの米国におけるタコ | 163 |
| 5.2 ケラーによるタコの形象の利用 | 164 |
| 5.3 独占の表象としてのタコ | 167 |
| 6. おわりに | 169 |
| | |
| 第 9 章 ジョサイア・ロイスの教授学論とその知的文脈：ハーヴァー ド教育大学院誕生前夜の哲学者たち [岸本 智典] | 176 |
| 1. 序 | 176 |
| 2. ディルタイ「普遍妥当的教育学の可能性について」の概要と位置 づけ | 178 |

| | |
|---|-----|
| 3. ロイス「教育の科学は存在するか」におけるディルタイ理解と彼の教授学論 | 181 |
| 4. ロイス教授学論の知的文脈 | 189 |
| | |
| 付 録 | 197 |
| | |
| 著者紹介 | 201 |

はじめに

染谷 昌義

本書は、日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成金）基盤研究（C）（一般）20K00015「世紀転換期の英米哲学における観念論と実在論——現代哲学のバックグラウンドの探究」（令和2年度～令和5年度（1年延長）、研究代表者：染谷昌義）の研究成果を書籍としてまとめたものである。本研究は、齋藤暢人（第4章）、小山虎（第7章）の2名の連携研究者と、有村直輝（第3章）、伊藤遼（第2章）、入江哲朗（第8章）、大厩諒（第5章 訳解、第6章）、岸本智典（第9章）の6名の研究協力者をメンバーとして3年間実施された。令和2年度（2020年度）にスタートした研究だったが、コロナ禍の時期とまるかぶりとなり、令和4年度（2023年度）まで対面での定例研究会は一度も実施できず、すべてオンラインで実施された。研究期間を1年延長し、その間にこれまでの各自の成果をまとめて本書とした。

コロナ禍と研究期間が完全に重なっていたこともあり、研究代表者である染谷は当時の勤務校でのコロナ対応業務や遠隔授業に忙殺され（これまで経験したことのない忙しさだった）、連携研究者や研究協力者を牽引して研究を促進するパワーを十分に発揮できなかったことをとても悔いている。そんななかで研究成果としての書籍を出すまでついてきていただいたメンバーには改めて感謝したい。

また本書を作成するにあたり、出版業務を引き受けてくださり、入稿の遅延など多大なるご迷惑をおかけしながら、多くの実務の労をとっていただいた、特定非営利活動法人 ratic 代表理事の木村健氏には、心より感謝を申し上げたい。木村さんがいなければ、このような形での成果発信はできなかった。ありがとうございました。

本書は、研究タイトルにもあるとおり、世紀転換期の英国および米国において生じていた観念論と実在論の論争、それも特に実在論の側の議論とその

意義を明らかにするものである。ここで言われている「世紀転換期」とは、19世紀後半から20世紀前半まで、およそ1880年～1930年までの40～50年間を指す。この期間に英国とアメリカで生じた観念論哲学とそれに対する批判と論争、批判を支える实在論のさまざまな立場と主張内容を探り、1950年代以降現代に至る英米哲学の哲学的バックグラウンドを明らかにすることが研究の目的だった。

世紀転換期に論文や著作を通して発言していた哲学者たちのうちの多くは、本書を読まれる読者の方にとって、おそらく初めて眼にしたり、名前だけしか聞いたことがないだろうと予想される。私たちにとっても状況は似たようなものだ。いくぶんマニアックな研究であるが、私を含め、本研究に携わった全員が、そうしたいまだあまり知られていない哲学者たちの思考内容を知ることには、前人未到の未開拓地を冒険する面白さと期待を感じていたし、いまでも感じている。なぜなら、現代の哲学とは異なる思考や概念との出会いがそこにはあり、そうした出会いによって現代の哲学的問題を考えるインスピレーションが得られるからである。人類学者が、自分たちとは異なる様式で異なる生活資源を用いる物質文化のなかで生きている人々を知ったとき、自らの生活が相対化され、この生き方が唯一のものではなく別の生き方と生きる道があり得ることを自覚するように、哲学史を旅する者には、現在の慣れきってしまった思考の束縛からいつときであれ解放され別様に考える自由が手に入る。別様の思考がストーンと腑に落ちるまでの苦労はあるが、苦労をしてでも手に入れるべき価値がそうした思考にはあるのだ。

一例を出してみようか。1960年にチザムが1冊の哲学アンソロジー(Chisholm, 1960)を編んだ。タイトルは、『实在論、そして現象学のバックグラウンド (*Realism and the background of phenomenology*)』。この本には、世紀転換期の様々な哲学者たちの著作からの抜粋、論文が収められている。ブレンターノ「心的現象と物的現象の違い」(『経験的立場からの心理学』から)ほか、ブレンターノが3本、マイノック「対象の理論」、フッサール「現象学」(『イデーニ I』から)他1本、ブリチャード「現象と实在」、ホルトラ「新实在論への導入」、アレクサンダー「实在論の基底」、ラッセル「物質の究極的要素」、ラヴジョイ「時間的实在論」、ムーア「常識の擁護」。ブレンターノ、フッサール、マイノックの3名を除いた人物は、いずれも英

米哲学の世紀転換期の实在論者である。本書の論文でも登場するが、世紀転換期の英米系の哲学圏では、实在論は大きく3つの派閥に分けられる。いずれもチザムのアンソロジーに登場する人物たちだ。

1) ラッセル、ムーアを筆頭とする英国のネオ实在論 (neo realism)、2) ホルト、ペリー、モンダギュたちのアメリカの新实在論 (new realism) そして3) ドレイク、ラヴジョイ、セラーズ (お父さんの方) らの批判的实在論 (critical realism) である。これらは、本書所収のいくつかの論文のなかでも触れられている。ここで問題にしたいのは、むしろ本書では論じられていない、現象学派の哲学者たちだ。この人たち、特にフッサールの現象学の背後になぜ实在論があるのか。このアンソロジーと出会い、ラッセルやムーアを除き上記の3派の存在を全く知らなかった私には、フッサール現象学のバックグラウンドが实在論だということは謎だった。丸い四角や金の山のサブシステムを主張するマイノクの対象論が实在論であることは腑に落ちるが、ブレンターノとフッサールと实在論との繋がりは不明だった。しかし、世紀転換期の英米圏の实在論と観念論の論争を理解していくうちにわかってきた。意識の志向性を主張することは、実は实在論に足を突っ込むことになるのである。志向性とは、意識は常になにかについての意識であるという意識の特徴、「～ついて性 (aboutness)」のことである。意識に志向性を認めること、これはすでにもってして实在論的主張なのだ！

なぜか？「～ついて性」の「～」の部分は、意識でないもの、意識を超越したものだからである。意識する主体ではないもの、意識の否定物へと関わる性格を、意識という心のはたらきは最初からもっているのである。実は、世紀転換期の観念論と实在論の論争の起源には、思考作用・意識作用・心のはたらきが関係しているのが、心的な観念なのか、非観念の实在なのかをめぐる問題への対応があった。意識の志向性は、意識の非観念への関わり (意識でないものへの関わり) を意味しているのである！空想であれ、思考であれ、想像であれ、そこで空想され思考され想像されているものは、自分の意識ではない。自分の意識ではないものが空想され思考され想像されているのだ。だから、現象学が登場しつつある20世紀直前までの思潮に、英米圏の实在論観念論論争が連なるのである。

志向性と实在論とのつながりが見えたとき、現象学への寛容さが生まれ、

現象学へのバイアスから自由になることができたというのが私の体験である。哲学史研究の効用を実感した瞬間だった（ちなみにチザムのアンソロジーを読むべき価値は今でも衰えていない。この本、いけます）。

さて、本書の内容を駆け足で紹介したい。全体はおおきく3部に分かれ、第1部で世紀転換期实在論への導入、第2部は英国の实在論、第3部がアメリカの实在論（世紀転換期の科学・文学・ジャーナリズム・教育といった分野での言説も含む）を取り上げる。

第1部、第1章の染谷論文は、世紀転換期の観念論と实在論の論争がどのような文脈で生じ、どんな概念的道具立てを用いて議論されていたのかが、新实在論の主張を見ながら紹介される。本研究の俯瞰地図的な論考である。

第2部、第2章の伊藤論文ではムーアの実在論がシジウィックを介して伝えられたトマス・リードの常識の哲学の理念を実行した試みであることが示される。英国ネオリアリズムの一端を深掘りした研究である。第3章の有村論文は本邦ではほとんど未知であるボザンケの思弁哲学（实在論と観念論を止揚した独自の立場）が紹介される。新实在論へ歩み寄りながらもそこに足りないものを鋭く見抜き、自身の思弁哲学を構築する歩みを読者は味わってほしい。第4章齋藤論文はフィーリング（感じ・感情・感覚）が観念論・实在論の両陣営で根源的な実在として形而上学的探究の対象になっていたことを、ブラッドリー、サンタヤーナといったわが国ではマイナーな哲学者を紹介しつつ概観する。現在から見れば不思議に思われる19世紀末の思想・哲学状況に触れることができる。

第3部の第5章は、ホルトラ新实在論の实在論宣言（1910年）の翻訳である。『新实在論』（1912年）のイントロダクションの翻訳も2023年に大阪大学の豊泉俊大氏らによってなされたこともあり、これで本邦では新实在論の導入的協働論文、宣言は出揃った。続く第6章の大厩論文は『新实在論』に収められたエドワード・スポールディング（新实在論者の1人）の論文と彼の単著『新合理論』（1918年）を検討したものである。複合者を要素的な原子単位に分析・分解するという哲学の方法と、存在の基礎区分が解説される。マイノクの対象論に類似した試みがアメリカでなされていたことに驚かされる。

第3部、第7章の小山論文は、アーネスト・ネーゲルの自然主義哲学に流れ込んでいる實在論的思潮（方法論的自然主義、形而上学的自然主義）を丁寧に追いつながら、世紀転換期の實在論は、自然主義哲学（科学的探究を支える哲学）につながっていることを伝えている。第8章の入江論文は、ウィリアム・ジェームズの大学批判エッセイ「タコ博士」をきっかけに、世紀転換期にタコの形象が持っていた意味を文学作品、挿絵、批評を獵歩しながら探究している。タコ形象の意味だけでなく、世紀転換期に潜む時代精神のようなものをあぶり出す作業がどのように行われているかを読者は体験できる。第9章の岸本論文は、観念論者として知られるアメリカの哲学者ジョサイア・ロイスがハーヴァード大学における高等教育改革者でもあったという事実を踏まえ、観念論者と高等教育改革者とがロイスのなかでどのような意味で並立していたのかを探っている。観念論と實在論の論争というだけにとどまらない世紀転換期の哲学の意味に触れることができるだろう。

読者はどの論文から読み出しても構わない。願わくは、本書をきっかけにして、世紀転換期の歴史に埋もれた哲学や思想の鉱脈を発掘する作業を続けてくれる方が1人でも多く現れてくれることを願っている。現代の思考を相対化し、思考の自由を取り戻す意味でも――。

文献

Chisholm, R. M. (Ed.) (1960). *Realism and the background of phenomenology*. Atascadero: Ridgeview Pub. Company.

2024年1月1日

第 1 部 実在論の地平

第 1 章 世紀転換期の認識論：

認識関係をめぐる論争としての観念論・実在論論争

染谷 昌義

Keywords: 新実在論、主観的観念論、自我中心的窮地、
認識関係、内的関係、外的関係

1. はじめに：

観念論と実在論との論争をイメージするための架空の会話

19 世紀末世紀転換期（本章では世紀転換期を 1880 年代から 1930 年代までのおよそ 40～50 年間の時期を指すものとする）のあるとき、ベルリンあるいはオックスフォードあたりの遊学を終えて米国に帰国した若者 A の会話が耳に入ってきた。その一部を文字に起こしてみる。季節は冬だろうか。

A：ところで、キミは今そこに見えているマントルピースが、そしてその色や形や大きさや硬さや、暖炉で燃えている炎のゆらめきやパチパチという音が、それ自体で絶対的に存在すると思えるかね。

B：「それ自体で絶対的に存在する」とはどういうこと？

A：何も難しいことはない。いまは、ボクやキミがそれを見ているし、音も聞いているし、暖かさも感じている。こんなふうには知覚しているボクやキミが、この場から立ち去っていなくなったときに、マントルピース、その色や形や硬さ、炎の運動や薪の燃える音は、あり続けるだろうか、という問題だ。

B：これだから頭のいい人は困る。何も悩む必要などあるまい。むろん、あり続けるし、存在する。そんなのは当然だ。

A：ところがボクにはそうは思えないんだ。それらを知覚できる者がいなくなると、それらは存在できない・・・というか、正確に言えば、マントルピースや暖炉の性質を知覚するキミやボクがいなくなると

しても事物やその性質が存在する、あり続けると考えることは、矛盾しているということなんだ。

B：ぜんぜん矛盾しているとは思えないけど。どこがおかしいの？

A：マントルピースや暖炉、そしてそれらの性質は、キミやボクの心の外側に、知覚するという心のはたらきとは無関係に存在することなどあり得ない。それらが存在できるのは、ボクらの心のはたらきがそれらに向けられているから、つまり、心のはたらきがあるからなんだよ。だから、マントルピースや暖炉やその性質が、ボクらの心のはたらきから独立してそれ自体で絶対的に存在するというのは、おかしいこと、矛盾したことなんだ。

B：ちょっと待ってくれ。おかしいのはキミの話の方だ。キミは「そのマントルピースや暖炉やそれらの性質がボクらの心の外側にはあり得ない」って決めつけているけど、その考えがそもそも常識に照らしておかしいよ。ボクやキミ、それに誰かがマントルピースやその色や形を見ていなくたって、マントルピースもその色や形もそこにあり続けている。それを疑う根拠はなんなのさ。誰も見ていないし聞いても触ってもいないマントルピースや暖炉は存在しないという考え方の方が非常識で間違っているよ。事物、モノってのはさ、その特徴や性質も含めて、心の外側にあるから事物なんだし、事物の性質なのさ。キミの考えは事物、物質否定論だよ。本気でそう思ってるの？

A：もちろん！ 事物なんて存在しない。外的物体、外的物質なんて存在しない。それらは、本当は、心が自らの内側で知覚している心的なアイテムなのさ。このアイテムを観念と言います！ 観念の存在は心のはたらきに依存しているのです！

B：お前、海外で学んで頭おかしくなったな。そこの庭の石ころでも蹴りとばしてこいよ。石はお前に蹴っ飛ばされなくたって存在してんだから。

A：そこまで言うならさ、何でもいい、とにかく事物がさ、それを知覚する人の心の外側に存在できる事例を1つでもいいから示してよ。いや、現実の例でなくたっていい。想像のうえでいいから、そういうことをうまく想像してみせてよ。

B：簡単、簡単。たとえば、公園のなかの木や部屋のなかにある本を想像する。それから、その木や本を誰も見ていないことを想像する。うまく想像できるでしょ。

A：（まってましたとばかりに瞳を輝かせて）いや、それは心の外側に事物が存在することの想像になってないよ。今、キミがやった想像はね、キミが本とか木とかと呼ぶ観念をキミの心のなかで作っておきながら、それと同時に、本や木を見ることのできる誰かある人という観念を作らないでおいた、ただそれだけのことだ。その想像をしているあいだ、誰であろうキミ自身が木や本をずっと考えているはずだ。キミのその想像で示されたのは、木とか本とかの観念を作る能力がキミの心にあるということであって、心やそのはたらきの外側に、心とは無関係に木や本が存在するというのではない。キミが木や本を想像し思考する、その心のはたらきの外側に木や本が存在できることをきちんと想像できていないんだよ。

そもそもそんなことは想像できない。なぜなら、想像され思考される木や本が、想像されず思考されずにある・存在するなんてことは、矛盾してるからね。考え想像しながら考え想像しないって、明らかにおかしい。ボクらが「外界に事物が存在する」と全身全霊で考えているあいだずっと、ボクらはボくら自身が作り出した観念のことに思いをめぐらせているだけなんだよ。18世紀のバークリーという英国の哲学者は次のように言ってる。「精神 (mind)」という言葉は「心」に置き換えて理解してみてよ。

「精神は自分自身に注意をしていないときには思い違いをしてしまい、物体は誰かによって考えられていなくても存在する、あるいは物体は精神のそとに存在すると考えることができると思ってしまふし、じっさいそう考えていると思ひ込む。しかしながら、精神がそのように考えているときには、それと同時にそれらの物体はその精神自身によって把握されている、あるいはその精神自身のなかに存在しているのである。ほんのわずかでも注意してみれば、ここで言われていることが真で明白であることは誰にでも

分かるだろうし、物質的実体が存在することへの反論をこれ以上に挙げることなど不要であろう。」(Berkley, 1710 宮武訳 2018 p. 74. 筆者の責任で既存の翻訳に若干の変更を加えた。)

B : . . . それで、何なのさ . . .

A : 森のなかで木が倒れたとする。そのとき木が倒れた音は、あたりには誰もいないから、誰にも聞こえないし聞かれない。木が倒れる出来事も誰にも目撃されない。けれどもこうした場面であっても、誰かが必ず思い浮かべている。今の場合なら思い浮かべているのは、キミとボクだ。誰にも見られも聞えもしないと想像している木や音は、キミやボクが考えている——難しい言葉で言えば「思念している」——木や音だ。誰も知覚していない木や音であっても、キミとボクによって思念されている。そうした木や音の存在は、キミやボクの考える・思念する心のはたらきの存在に根拠づけられ支えられ依存している。パークリー先生が主張したのは、心のはたらきから独立した物質的実体——モノのことだけど、ここにモノの性質や特徴を含めてもいい——などあり得ないということだったんだ！ 心の外側にそれ自体で存在する物体・物質の否定だ！

今までの話は外的事物やその性質の存在が心のはたらきに依存しているという話だったけど、この話はもっと広げることができる。事物やその性質だけではなくて、抽象的なモノ、たとえば数とか三角形とか平均とか正義とか愛とか、いるかいないかよくわかんないモノ、たとえば幽霊とか雪男とかサンタクロースとかスーパーサイヤ人とか、身近で馴染みのあるモノだけど事物でも事物の集まりでもないもの、たとえば国家とか大学とか市場とか、こういったありとあらゆる存在が心のはたらきに依存している。これがボクの言いたかったとき。難しい言葉を使うとね、「心のはたらきは存在の普遍的条件である」というわけなさ。ボクが西欧で学び知ってきたのは、こうした思潮、アイディアリズム（観念論）だ。

2. 本章の道案内

本章では、世紀転換期における観念論と実在論との論争、実在論の側からの観念論への攻撃と批判が、どのような内容をめぐってどのような文脈でどのような道具立てを用いて行われていたのか、その一部を明らかにしてみたい。取り上げるのは、エドウィン・ビッセル・ホルト (Edwin Bissel Holt、米、1873–1946) を筆頭とする米国の新実在論一派である (Holt et al., 1912a)。この作業を通して本章が読者に理解してもらいたいことは、現代とは異なる 100 年以上前の議論の文脈である。本章での以降の説明を概略的に先取りすれば、世紀転換期の観念論と実在論の論争は、少なくとも実在論側の主張に従うなら、認識主観 (knower, subject) と認識対象 (thing known, object) との「認識関係」(cognitive relation) がどのような性格をもった関係なのか——それは内的関係 (internal relation) なのか外的関係 (external relation) なのか、そもそも認識関係なる関係などあるのか——をめぐって行われていた。世紀転換期の哲学的言説と思考の一角は、認識関係・内的関係・外的関係という、現代ではほとんど見かけなくなった道具立てによって占められていた。のちに述べるが、世紀転換期の実在論と観念論の論争は、認識論・知識論^{*1}の文脈のなかで行われていたのだった。

冒頭の会話は、一般に研究者の間でバークリーのマスター・アーギュメント (the Master Argument, cf. Gallois, 1974) と呼ばれてきた議論——バークリーが『人知原理論』(Berkley, 1710) 22–23 節で展開した議論——をもとに、世紀転換期の観念論の姿を筆者が創作したものである。マスター・アーギュメントについてはさまざま解釈や議論もあり (cf. Downing, 2011,

^{*1} 本章では epistemology (認識論) と theory of knowledge (知識論) を特に区別しないで議論を進める。厳密には、世紀転換期の観念論・実在論論争において、認識の可能性の条件を問う認識論の文脈と、信念と知識の違いや、規範や制度、技術とのつながりまでも考慮に入れた知識の形成と生産の仕組みを問う知識論の文脈とは区別して議論した方がよいとも考えられるが、それは今後の宿題としたい。実際、批判的実在論の一派 (Drake et al., 1920) は、認識の誤謬や相対性だけでなく知識の歴史性や改訂可能性を気にして、そうした現象と両立できる実在論的認識論——実在と認識過程との媒介者を指定する一種の間接実在論——を擁護している (cf. Sellars, 1912)。

sec. 2.2.1)、『人知原理論』の当該箇所のみでは、パークリーの物質否定論・非物質論 (immaterialism) を根拠づけることにならないという意見もあるが (Grayling, 2005, p. 174ff.)、これから本章で見ていくように、世紀転換期に實在論の側から批判と攻撃を受けていた観念論は、明示的であるかいなかを問わず、マスター・アーギュメントの「考えるという心のはたらきを被らず、心のはたらきとは独立に存在する事物や性質については思考できない」ことに依拠した、一定の認識論・知識論を背景に展開されたものだった。思考する心から独立して絶対的に自存する事物や性質は事物や性質の本性からしてあり得ず、したがって、一般に存在は本質的に心のはたらきへ依存することを主張する立場だった。この意味での観念論への反論のやり方はさまざまなものがあるだろうが、本章で注目したいのは、認識関係 (cognitive relation) という概念をめぐる議論が戦わされていたという事実である。この議論方式が、世紀転換期に特異なことなのである。

議論は次のように進める。まず、次の3節で世紀転換期において観念論への實在論側からの攻撃が始まる前の英米圏の哲学的言説の状況を探る。パークリーの主観的観念論や非物質主義が再燃し、認識論における観念論が成長する舞台裏を探る。続く4節で、認識関係、内的関係、外的関係というキーワードを導入し、これらの概念を用いて Holt et al. (1912b) が特徴づける観念論の内実を明確化する。ホルトラは、観念論の問題の最大の原因が認識論上の主観主義 (subjectivism) にあると規定し、この認識論的主観主義への論駁をしていた*2。5節では、4節の関係概念を用いて、今度はホルトラの實在論の主張を特徴づけるとともに、同時代に同じように認識関係の考察によって實在論を展開するサミュエル・アレクサンダー (Samuel Alexander, 英、1859-1938) の考え方を概観する。その上で、こうした世紀転換期における實在論の考え方が当時何を目指していたのかをはっきりさせる。最終節である6節では、こうした世紀転換期の議論が現代においてもつ意義、現代

*2 以下、論述上に問題がない限り、「認識論的主観主義」は単に「主観主義」と記し、認識論を強調したい場合には、「主観主義の認識論」という言い方をする。これは、世紀末に起こった観念論の拒否運動のうち、ホルトラの運動が、主観主義の認識論を是正することにより、認識論と存在論 (形而上学) を分離する運動であったからである。以下の 5.2 を参照。

の哲学的議論に示唆することを考察する。

総じて、本章では世紀転換期の実在論運動の一端を生け捕ることを試みたい。米国の新実在論の出来を際立ったエポックとする実在論運動のヒストリーは、実在論的な認識論を基礎にして観念論的な認識論を拒否するストーリーとして描くことができる。5節で触れるが、このストーリーの不思議な点は、主観主義の認識論に反対するものの、実在論的な認識論（特に知覚論）は構築されないままに終わることだ。世紀転換期の認識論そして知覚論は、主観主義という観念論への論駁として出発したのだが、どのような認識論・知覚論を構築するか（センスデータ論、表象説、直接知覚説その他）はオープンなのである。

現代でも認識論・知覚論は哲学的考察の俎上に上る。しかしながら、そこで実在論的か観念論的か、認識関係は内的か外的かということが議論されることはほとんどない。本章をとおして、現代と100年前との議論における動機や問題の定式化、議論の仕方の異同を学び知ること、それまでなかった新しい想像と思考の明かりを現代にともすヒントが得られれば、本章の目的は達成できたと言える。

3. 世紀転換期の観念論

1節での架空の会話でイメージした世紀転換期の観念論は、18世紀のバークリーの主観的観念論を敷衍した観念論だった。この観念論とそれと対立する実在論とは、まずは認識主観によって知覚的に知られる外界（客観）の存在論的な身分についての見解の違いによって区別される立場であると理解できるだろう。観念論は客観を主観の心のはたらきに依存したものと見なすが、反対に実在論は独立したものと見なすというわけである。論争の中身に踏み込む前に、世紀転換期の観念論と実在論のこうした理解を裏づける状況証拠を確認しておきたい。

一つ目の状況証拠は、1901年から1905年にかけてジェイムズ・マーク・ボールドウィン (James Mark Baldwin、米、1861-1934) が編集長となって編まれた『哲学・心理学事典』 (*Dictionary of Philosophy and Psychology*)

の観念論 (Idealism) の項目である (Baldwin, 1901, 500–503)^{*3}。この1901年の観念論の解説によれば、観念論には、形而上学における観念論と認識論における観念論という二つの意味がある。

前者は、宇宙・世界の存立を理性もしくは精神のはたらきによって説明したり、理性や精神が具現化することで宇宙・世界が維持されることを説くような、宇宙・世界についての一定の見方を意味する。この意味での観念論に対立するのは、唯物論もしくは自然主義だとされる。ここで挙げられている観念論の哲学者は、19世紀のドイツ観念論の3人の哲学者、フィヒテ (主観的観念論—ただし主観は個人ではなく絶対的自我である)、シェリング (客観的観念論)、ヘーゲル (絶対的観念論) である。

これに対し、より現代的 (世紀転換期当時の) 意味での観念論が、認識論における観念論である。こちらの観念論は、感覚知覚された対象 (客観) の存在が知覚主観の心のはたらきに依存していると考える立場を意味する。この意味での観念論と対立するのは、知覚された対象が知覚主観から存在論的に独立していることを主張する立場であり、これが実在論とされる。

後者の認識論の意味での観念論は、世紀の変わり目である「現代の哲学に完全に属している」と形容され、バークリーにも言及しながら主観的観念論と呼ばれているように (ibid., 502)、世紀転換期の思想哲学界で観念論というタームは、バークリー流の観念論・非物質論であったことが予想できるだろう^{*4}。

二つ目の状況証拠として、19世紀半ばの英国哲学界事情を挙げておきたい。1860年代から1950年までの英国の認識論の展開を追跡したマリオン (Marion, 2009) によれば、英国では1871年にフレイザー版のバークリー全集 (Fraser's edition, *The Works of George Berkeley, D. D., Formerly Bishop of Cloyne*. 4 vols., London: Macmillan and Co., 1871) が刊行され

^{*3} 執筆者は英国のヘーゲリアン哲学者であるアンドリュー・セス (Andrew Seth, 英、1856–1931) である。世紀転換期の観念論と実在論の概略を知るにあたり、大塚諒氏より、ポールドウィン編集の当該事典への参照をアドヴァイスいただいた。記して感謝する。

^{*4} なお事典には主観的観念論以外に、認識論における観念論の亜種として、デカルトやロックの観念説 (間接実在論)、ジョン・ミルの現象主義、カントの超越論的観念論、ハミルトンの仮説的観念論 (hypothetical idealism) が挙げられている。

た。そしてジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill、英、1806–1873) がこの全集の書評なかでパークリーの非物質論への賛同を表明している (Marion, 2009, 16–17)。またミルは、スコットランド常識学派の代表であるトマス・リードの知覚認識論をカントの認識論によって補強しようと試みたウィリアム・ハミルトン (William Hamilton、英、1788–1856) の考えを 1865 年に批判しており (Mill, 1865/1979)、ミルはこの批判のなかでもパークリーに直接言及しながら、自身の現象主義を規定しているという (Marion, 2009, 16)。ミルは、ハミルトン批判をとおして最終的にはリードに対する批判を試みていた。

注目したいことは、世紀の転換へと向かう時期に、英語圏ではパークリーの主観的観念論・非物質論が議論の俎上にあがってきていたという事実である。しかもミルの例で見たように、パークリーへの賛同とハミルトン (リード) への批判には、観念論と実在論の対立が見て取れる。再びマリオンの見解に頼れば、19 世紀半ば以降の英国の哲学には、二つの伝統が流れていた (ibid., 21. この「二つの伝統」の見方を最初に提示したのはコリングウッド (Collingwood, 1940/2005) とのことである)。一つは、リードとスコットランド常識学派を経由しハミルトンまで至る伝統で、認識論上では実在論よりの伝統であり、もう一つがヒュームからベンサム、ジェイムズ・ミルを経てジョン・ミルとスペンサー (Herbert Spencer、英、1820–1903) まで至る、認識論上は観念論よりの立場である。この二つの伝統が観念論と実在論という看板のかかった激しい論争になるには、もう少し時間を要する。けれども、ミル個人の思索の文脈において、パークリー哲学の再評価 (観念論への賛同) とハミルトン批判をとおしてのリード批判 (実在論への批判) という対立構図があることからわかるように、認識論上の見解の違いとして観念論対実在論の対立が築かれつつあった。

より細かく見るなら、19 世紀半ば以降の英国哲学の認識論の文脈では、認識の相対性 (認識されることがらが認識者の感覚機構や能力に相対的であること——マリオンはこの相対性を「偉大なる公理 (great axiom)」と呼ぶ) と認識の直接性 (対象の知覚認識は直接的であり、媒介物を介して認識していないこと) とが両立できないと考えられており、どちらに重心を置くかによって二つの立場に分かれた (Marion, 2009, 17–18)。前者に重心を置けば

ミルの現象主義やバークリー流の観念論に、後者に重心を置けばリード流の常識的な実在論になる。以上は、英国の事情ではあるが、世紀転換期の観念論と実在論の論争前夜の舞台裏であったとすることができる。

一点、急いで付け加えたい。この二つの伝統の両方に反対した論者もいる。マリオンそしてコリングウッドの考えでは、それがフランシス・ハーバート・ブラッドリー (Francis Herbert Bradley、英、1846-1924) である。かれは当時の英国哲学の二つの伝統の両者に反対した。具体的には、論理学における心理主義に反対し (ibid., 5-8)、認識論における現象主義・主観的観念論に反対した (ibid., 19-20)。しかしこれだけを聞くと、ブラッドリーはリード的常識学派・実在論の系譜に連なると思われるだろう。しかしそうではない。ブラッドリーが特異なのは、客観的観念論 (objective idealism) という立場に立つからである。実在はただ一つの絶対者であり、認識とは無関係に独立自存する精神 (spirit) である。ブラッドリーの立場が観念論と言われるのは、精神という単一絶対者の一元論を採用するためだ (ibid., 20)。なお、ブラッドリー観念論と同時代の哲学・思想との異同の詳細な研究として白水 (2022) がある。

ブラッドリーはこうした特異な立場に立つため、また内的関係であれ外的関係であれ関係そのものを否定するため、主観主義の認識論を批判するという仕方でも観念論を攻撃する、本章での新実在論の議論は、ブラッドリーの観念論にはストレートにヒットしない。ブラッドリーと主観主義の認識論や実在論者とのあいだにどのような対立や論争があったのかは興味深い問題である。また、ブラッドリーが中心人物となって世紀末の時期に英国の観念論運動が活発化する (ブラッドリーの *Appearance and Reality* の刊行は1893年である。Bradley, 1893) こと背景には、スペンサーやダーウィンの進化思想に対して、宗教的関心が強いビクトリア期の哲学者たちの反動的反応があるという点 (Marion, 2009, 13) も興味深い。今日的には自然主義、当時の意味では唯物論が宗教的な世界観や人間観の領域へ侵犯してきたことへの大規模な反動反応の一つとして、ブラッドリー人気に結実する観念論の興隆があったのである。

4. 主観主義の認識論

世紀転換期のこのような思想状況において、実在論の側から観念論に対しどのような攻撃がなされたのだろうか。ここからは、新実在論運動である Holt et al. (1912b) の議論を参照しながら、世紀転換期の実在論がどのようなやり方で観念論を拒否しているのか、言い換えれば、本章の冒頭で紹介したパークリー流の主観的観念論を批判し論駁するのを見ていこう。繰り返しになるが、その議論の道具立て着目したい。

ホルトラは、観念論を拒否するための優先的議論として、観念論が問題である最大の原因は認識論上の主観主義 (subjectivism) にあると規定した上で、この主観主義の認識論への論駁を開始する。かれらの議論は、主観主義の批判と拒否の部分のみを抽出すれば、1) 主観主義は認識関係を内的関係と見なす立場であるとし、2) こうした主観主義の認識論からは不合理な帰結が生じることを示す、という2段階にまとめることができる。

4.1 認識関係、内的関係、外的関係

認識関係 (cognitive relation) とは、認識する者 (knower)・主観 (subject)・意識 (consciousness) と認識されるもの (known)・客観 (object)・対象との関係のことである。何かを認識する、たとえば何かを知覚することとは、知覚者と知覚される対象との二項のあいだに知覚認識という関係が成立することだと考えられた。それがどのような関係なのかを問うことが当時の哲学的課題の一つだった。たとえば、ウィリアム・ジェイムズは自身の純粋経験説の効用を説明する際に「認識関係」の問題への寄与を主張し、主観と客観との隔たりを、表象や観念などの仲介者を入れて埋めたり、主観の自己超越的跳躍によって主客の隔たりを無効化するといったこれまでの試みよりも自説が有効であることを強調している (James, 1912/1996, pp. 52–61, 伊藤訳 2004 pp. 58–68)。意識の志向性を内在から超越へと跳躍する一種の関係と見なすことができるなら、このような志向性についての考え方も認識関係を規定する一種の理論と言える。

ホルトラは自らの新実在論を「認識する過程と認識される対象とのあいだ

の関係についての教説」(a doctrine concerning the relation between the knowing process and the thing known)と規定し(Holt et al., 1912b, p. 2)、観念論と実在論との違いをこの認識関係の違いとして捉え直している。認識関係を規定する際、観念論と実在論との違いは、関係の種類の違いとして表現される。ここで導入される概念が、内的関係(internal relation)と外的関係(external relation)である。

内的関係とは、関係項の本性によってその関係を有することが必然的に含意される、そうした関係のことである。たとえば、数3は、数2と「より大きい」という関係にあるが、この関係は、3であることの本性によって2「より大きい」という関係が数3に必ず含意される。この点で、3は2より大きいという関係は内的関係である。2と「より大きい」関係にない3は、3の本性からしてあり得ない^{*5}。

これに対して外的関係とは、関係項の本性と当の関係とのあいだに、影響関係のない関係のことである。関係項が関係項であることをやめ(関係しなくなる)、別種の関係に立ったとしても、関係項の自己同一性は保たれ、関係項の本性は何ら影響を受けない、そうした関係である。空間的位置関係が理解しやすい例である。たとえば「上にある」や「下にある」という関係では、ノートが机と「上にある」という関係にあるときでも、ノートが机の「下にある」という関係に変わったとしても、ノートはノートであり机は机であり、関係項の本性は何ら影響を受けない。したがって、「上にある」「下にある」という関係は外的関係である。

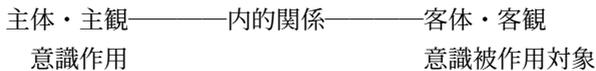
4.2 内的関係としての認識関係とその帰結

ホルトラは、観念論は認識関係を内的関係と見なし、認識主体の認識作用を認識対象の必要不可欠な構成要素と考える立場として観念論を理解する(Holt et al., 1912b, 9)。言い換えれば、ある主体によって認識されていることが、その対象がその対象として存在することの一部を構成するというこ

^{*5} 歴史的にはホルトたちの新実在論よりも後になるが、ムーアは内的関係の一般的定義を次のようにしている(Moore, 1919, p. 47)。「Rが内的であるのは、xがyとRならxは必然的にyとRであるとき、そのときに限る」。

とである。たとえば、私の目の前に見える椅子は、私に見られ知覚されているということ、その椅子であることの不可欠な成分とする。私に知覚されなくなったときに、その椅子はその椅子であることをやめるもしくは存在しなくなる。これはバークリー流の主観的観念論の立場に等しい。

しかしながら、このような観念論、主観主義の認識論の特徴づけは、実は認識関係だけに限定されるものではない。ホルトラが、認識作用を狭義の「知る」はたらきだけではなく、「一般に思考の対象として与えられている」(given as an object of thought, cf., Holt et. al., 1912b, p. 11, n. 3) という意味であると補足しているように、認識作用はより広く思考作用一般にまで拡張することができる。さらにより広く「意識する」あるいは「経験する」心のはたらき・作用と、その作用を被っている対象とのあいだに内的関係があるとする立場を観念論と規定することができよう。こうしてホルトラは明示的に指摘しているわけではないが、二項関係の種類によって観念論と実在論との差異を特徴づけるかれらのやり方では、観念論は次のように規定することができる。観念論とは、主体・主観と客体・客観とのあいだに内的関係を主張する立場である。



この拡張した観念論は、認識関係だけではなく、想起・予期・想像・空想・欲求・感情・期待といったおよそ心のはたらきとして想定される主体のすべての意識作用とそれらが向けられた対象とのあいだの関係を内的関係だと主張する立場となる。この観念論は、バークリーの主観的観念論・非物質論よりもさらに強い主張であり、1節の会話でも出たように外界の事物やその性質だけでなく、思考された抽象的对象(数や論理的对象、愛や正義)とその性質、空想や想像の対象(サンタクロースやスーパーサイヤ人)とその性質、過去や未来の対象、感情や期待の向けられた対象とその性質といった、ありとあらゆる存在を観念論の射程に収めることができる。具体と抽象、個別と一般を問わず、すべての存在の存立条件に意識のはたらきを被ることを要請する観念論である。この観念論は、主観の意識作用を存在(being)の

普遍的条件とするという立場である。ホルトラの協働者の一人であるペリーは、こうした観念論の特徴を「自我中心的窮地 (ego-centric predicament)」(Perry, 1910; Holt et al., 1912b, pp. 11-12) と呼んだ。自我中心的窮地とは、およそ思考され意識される対象は、主体の心のはたらきである思考作用・意識作用から独立して存在できないこと、したがって、存在とは被思考物・被意識物であり、自我の外側に脱出できない窮地に陥った状況にあることを表現している。

5. 実在論的な認識論

5.1 認識関係は外的関係である

これまでの議論から予想されるように、以上の主観主義の認識論・観念論に対して実在論が主張するのが、認識関係の、あるいは主観客観関係の外的関係性である。認識関係も含め、主観と客観との関係は内的関係ではなく、対象・客観の存在条件に主観の意識作用を要請しない外的関係であるというわけだ (Holt et al., 1912b, pp. 10-11)。知覚経験で言い換えるならば、知覚経験における主体と客体の関係は外的関係であり、知覚される対象やその性質の存在は、知覚者の知覚するという心のはたらき・意識作用から影響を受けず、自己同一性を保っている。知覚されること、意識作用を被ることは、知覚対象の存在条件でも、知覚対象の構成要素でもない。

この見方では、認識関係や主観客観関係において、関係項である主体の側の意識作用と客体の側の意識対象は、相互に独立性を維持し、それぞれの同一性に影響を与えないままで関係することができると考えられている。外的関係の説明で取り上げたように、空間的位置関係は、関係の種類が変わったとしても、また別の項と関係することになったとしても、項の本性・同一性が崩れることはない。私に見られている事物が、別の主体によって見られることになったとしても、また、私が事物を見るだけでなく触ったとしても、さらにはその事物が私や別の主体によって見られも触られもしていないときでも、それは同じ事物でありつづけると言うことができる。外的関係では、関係に立つ項は独立性と同一性を保持したまま、異なる関係に立ち、異なる関係項になることが許容されるのである。

ホルトラも指摘しているように、これは素朴実在論・自然な実在論 (natural realism) の見方であり、常観的な存在観である (Holt et. al., 1912b, p. 10)。しかしながら、どうしてこの素朴実在論の見方、主観の意識作用と客観という意識対象との外的関係という見方には落ち着かず、わたしたちは、主観主義の認識論、観念論へと誘惑されてしまうのだろうか。それは、主観と客観との関係があたかも内的関係であるかのように、言い換えれば、わたしたちの意識作用が向けられている対象の存在が、意識作用を成分として構成されているように思えてしまう場面があるからである。

ホルトラが導入部で紙幅を割いて外的関係の実在論の説得を試みる作業は、大部分が誤謬、たとえば見間違いや聞き間違いといった錯誤 (error) や錯覚や幻覚、そして経験される対象や性質が主体の影響を受け主体のあり方によって変化してしまう事態——経験の相対性——への応答と解釈に当てられている。たとえば、経験の相対性としてよく用いられる例として、同じ温度のぬるま湯が冷たい手には熱く、温かい手には冷たく感じられる場面がある。そのとき感じられる冷温 (湯の性質) は知覚主体の感じる能力の影響を受けているという意味で、この冷温経験は主客の内的関係を示しているように思えてしまう。ホルトラの戦略は、こうした事例もまた外的関係であることを示すことで、観念論への誘惑を断つことである。ホルト自身もさまざまな錯誤経験を一つ一つ取り上げ、それらに対し主体と (錯誤した) 客体との関係は外的関係であるとする議論を展開している (Holt, 1912)。観念論を反駁し退ける戦略は、内的関係に思われる主客関係を外的関係として捉え直すという仕方になされる。この点が、ホルトラの新実在論の一つの目立った特徴である。

ところで、世紀転換期において、主客の内的関係を主張する観念論を批判し実在論を擁護する立場として、ホルトラのように主客関係・認識関係を基礎にしない立場もあった。そもそも認識関係など存在せず、主体は客体の本性・存在に影響を与えることなく、ただ態度を向けているだけであるとする立場である (cf. Sellars, 1912; Drake et al., 1920)。この立場は、認識関係や主客関係こそむしろ哲学が信仰してきたドグマであり、認識を関係的に理解することを最初から拒否してしまう。その上で、認識における二元性 (dualism) と対象の実在性を認め、観念論への誘惑となる錯誤や経験の

相対性を、観念・表象と実在とに実在を二重化することで理解し直そうとする (Sellars, 1912, 228–229)。詳細の検討は別の機会に譲りたいが、批判的実在論はこのような戦略を取った。

新実在論と類似の考え方をした世紀転換期の哲学者に、サミュエル・アレクサンダーがいる。かれもまた、主客の関係、主観の意識作用と客観の意識対象との関係を内的関係のような特別な関係とはしないという見方をとることで、実在論を主張する。アレクサンダーの用語では、主観と客観との関係は、共在 (compresent) という存在同士に普遍的に見られる関係の一つである。

アレクサンダーによれば、実在論の特徴とは「脱人格化」(de-anthropomorphise)にある。人間とその精神・心 (mind) を特別視せずに、それらを事物からなる自然の世界のなかのふさわしい場所に戻すこと、人間と心を自然の仲間にしよとすることからなる (Alexander, 1914, 279–80; cf. Thomas, 2022)。人間の心は、山やテーブルといった心以外の自然界の他の事物と共在しており、それはすべての実在が自分以外の他の実在と共在するのと何ら種的な違いはない。心と対象物との関係は、心の側に意識という特異性はあるけれども、共在であることに変わりはなく、意識もまた共在する存在の一種であるとされた (Alexander, 1914, 288)。アレクサンダーが観念論を拒否し、実在論を擁護する戦略も、主客関係のあり方を新たに考え直すことで行われている。

以上をまとめるなら、世紀転換期の実在論は、認識関係を代表とする主客関係、主観と客観との関係を内的関係とする見方を退け、自然な関係 (外的関係、共在) と見なし、内的関係と考えたくなるような事例を取り上げてはそれらは内的関係ではないと主張していたと言える。この議論のやり方は、現代ではあまり見られない道具立てと方式で行われていたのである。

5.2 実在論の意義と課題

では実在論を採用することにはどのような意義があるのだろうか。ホルトラはいくつかの主張をしているが、本章ではそれらを一つにまとめ、「形而上学の脱神秘化」と呼んでおきたい。ホルトラの見方では、主観主義の認識

論（観念論）は、存在を心のはたらきに依存すると考えることで存在を特別視し、存在について思考する形而上学を神秘化することで、素朴な実在観に満足する個別科学を蔑む態度をとっているとされる。存在について真に明らかにできるのは、科学ではなく、主観主義の認識論（形而上学）であるというわけである。

しかし実在論そして実在論的な認識論は、このように形而上学を神秘化・特別視し、形而上学（存在についての探究）と個別科学とを分離する哲学を拒否する（Holt et al., 1912b, p. 33）。実在論は、さまざまな個別科学や実証科学が存在について思考し、存在の本性を明らかにすることを認めるのである。実在論は個別科学と接続し、探究を後押しすることができる（*ibid.*, p. 36ff.）。たしかに実在の種類に応じてそれに関わる心のはたらきも異なるが、心のはたらきが関係するすべての存在（being）を許容するため、実在論は、数学や論理学が扱う数や論理的存在者から、物理学の対象となる物理的存在者、さらに想像的・創造的芸術が扱う存立者（subsistent）、感覚知覚される時空的存在者までのすべての存在に対して寛容である。だから、ある意味この実在論はプラトンの実在論に等しいとも主張された（*ibid.*, 35）。よって、個別科学、学問一般が、存在の探究という形而上学の課題へと接続できるのは、ホルトラの実在論では当然のことであった。わたしたちの学問的で知的な探究の正当性を支えているのが実在論であると言ってもよいだろう。

新実在論をとおして世紀転換期の実在論の内実を見てきたが、最後にこのホルトラの議論の課題を挙げておきたい。これまで見てきたように、世紀転換期の観念論と実在論は、一定の認識論的立場の違いに等しかった。今仮に観念論である主観主義の認識論を否定し、実在論の認識論的立場、ホルトラの考えでは認識関係を外的関係とする立場を採用するとしよう。では、このような認識論、たとえば知覚認識の理論とはどのようなものであるのだろうか。

ホルトラの主張を読む限り、認識関係が外的関係であるというテーゼさえ共有できていれば、実在論的な認識論や知覚論であるのに十分であると考えられる。言い方を変えれば、このテーゼを共有できていれば、どのような認識論や知覚論であってもよい。この問題は開かれている。そのため認識論や知覚論を絞り込み、一定の理論へと収斂できないところにホルトラの課題が

あるのではないかと思われる。

その証拠に、ホルトラは、外的な認識関係を許容しながら、認識対象と認識作用を媒介する媒介者（認識対象と数的に同一な認識内容）を導入し、媒介者が心のなかにありえることも許容できると指摘している（Holt et al., 1912b, pp. 35–36）。外的認識関係ではあるけれど、主観が認識し意識するものが内容であって対象ではない余地があるということだ。これは結局のところ、認識関係が外的関係であることと、認識の直接性（実在の無媒介な現前）とは同一のことがらではないことを意味している。認識作用・意識作用と認識されるもの・意識されるものとの関係が外的関係であったとしても、なお、認識されるもの・意識されるものは、実在ではなく実在を媒介するもの（観念なのだろうか？）であり得る。ホルトラの立場では、対象の直接的現前は実在論にとって不可欠な条件ではないということになるだろう。だとすれば、外的関係だけでは実在論的認識論の規定条件としては不十分であることになる。そうなのだろうか。検討すべき課題である。

6. 現代の哲学的議論への示唆

世紀転換期の文脈に寄り添いながら、新実在論の議論を見てきたが、このような議論の仕方は現代の哲学にどのような示唆を与えるのだろうか。二点を指摘したい。

第一に、認識関係、認識者（知覚者）と認識対象（知覚対象）との関係として、認知現象一般（知覚・記憶・想像・予期・思考）を考えるというやり方は、妥当だろうか。たしかに、関係を検討するという点では、心のはたらきと環境との関係・相互作用を強調する現代の心の科学や哲学との連続性が見出せそうであり、関係を強調する点は認知現象を考える上で不可欠と思われる。では、そこに、内的関係や外的関係のように、関係と関係項との性質・本性に従って、心のはたらきと環境との関係や相互作用を考察することで、これまで見えなかったことが見えてくるだろうか。

筆者の現時点の評価は、このやり方は得るところはあまりないという否定的なものである。なぜなら、これまでの議論は、認識対象やその性質は概念的に画定でき、そのカテゴリー的な性質や傾向性がきちんと規定できること

を前提にしているが、それは疑わしいと思われるからである。認識関係・主客関係は、主体・意識作用と客体・意識対象それぞれが、画定されているところから議論を進めている。しかしながら、主客はそれほどはっきりと区別されるものなのだろうか。

経験を二項関係とする理解自体が、認識観・知覚観を含めて心のはたらきについての一定のバイアスのかかった見方ではないかと筆者は考えている。ウィリアム・ジェイムズの徹底的経験論や、フッサールの現象学は、二項関係を前提とせず、二項関係が立ち上がるような経験や現出体験の流れに生じる構造や秩序に注目していた。かれらによれば、知覚経験で言えば、モノや出来事・変化の存在と、それらを環境のなかで見たり聞いたりしている自己の存在とが対になって現れてくるのが知覚という経験だった。環境の事実と自己の事実を特定する生態学的情報を、環境内を動き回ることによって抽出すると考える生態学のアプローチの知覚論 (Gibson, 1979/1986) や、知覚対象の何であるかという知覚の意味に必ず自己運動のパターンが随伴するとするエナクティブな知覚論 (Varela et al., 1991; Noë, 2006) は、ジェイムズやフッサールの考え方に連なっており、静的に画定された主体と対象の二項が知覚という関係に立つのではなく、動的な変化に伴いつつ知覚主体と客体の二項が知覚され画定されるという見方を取る。これらはいずれも、経験には二項関係という理解では捉えきれない動的特徴があることを教えており、そのため世紀転換期の実在論の議論の不十分さと限界を示している。

第二に、しかしながら、他方で世紀転換期の議論から学べることもある。外的認識関係のテーゼは、認識者と認識されるもの、知覚者と環境は存在的に独立であること、そして、アレクサンダーが明示していたように、認識関係も含め、主客の関係が世界のなかにあるさまざまな他の外的関係と種類の上で異ならないことを教えてくれた。これは、言い換えるならば、心や意識に超越性や特別な力を認めず、自然主義を徹底させる立場、心のはたらきを自然現象として、しかも、自己と非自己との関係やシステムとして心のはたらきを理解する立場を正当化できると考えられる。その意味では、世紀転換期において観念論に対抗して実在論を主張することは、自然主義への転回だったと言ってもよいだろう。そうだとすれば、世紀転換期の実在論の重要な側面は現代にも受け継がれていると言ってよいと思われる。

文献

- Alexander, S. (1914). The basis of realism. *Proceedings of the British Academy*, 5, 279–314.
- Baldwin, J. M. (Ed.) (1901). *Dictionary of philosophy and psychology*, Vol. 1. New York; London: The Macmillan Company.
- Bradley, F. H. (1893/2003). *Appearance and reality: A metaphysical essay*. NY. Routledge press.
- Berkely, G. (1710) *A treatise concerning the principles of human knowledge*. (バークリー, G. 宮武 昭 (訳) (2018). 人知原理論 ちくま学芸文庫)
- Collingwood, R. G. (1940/2005). *An essay on philosophical method*. rev. ed. Oxford: Clarendon Press.
- Downing, L. (2011). Berkeley. In *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Retrieved January 1, 2024 from <https://plato.stanford.edu/entries/berkeley/index.html#note-7>
- Drake, D., Lovejoy, A., Pratt, J. B., Rogers, A. K., Santayana, G., Sellars, R. W., & Strong, A. (Eds.) (1920). *Essays in critical realism: A co-operative study of the problem of knowledge*. London: Macmillan.
- Gallois, A. (1974). Berkeley's master argument. *The Philosophical Review*, 83, 55–69.
- Gibson, J. J. (1979/1986). *The ecological approach to visual perception*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (ギブソン, J. J. 古崎 敬・古崎 愛子・辻 敬一郎・村瀬 晃 (訳) (1985). 生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る——サイエンス社)
- Grayling, A. C. (2005). Berkeley's argument of immaterialism. In K. P. Winkler (Ed.), *The Cambridge Companion to Berkeley* (pp. 166–189). NY.: Cambridge University Press.
- Holt, E. B. (1912). The place of illusory experience in realistic world. In E. B. Holt et al. (1912a) pp. 303–373.
- Holt, E. B., Marvin, W. T., Montague, W. P., Perry R. B., Pitkin, W. B., & Spaulding, E. G. (1912a). *The new realism: Coöperative studies*

- in philosophy*. NY.: The Macmillan Company.
- Holt, E. B., Marvin, W. T., Montague, W. P., Perry R. B., Pitkin, W. B., & Spaulding, E. G. (1912b). Introduction. In E. B. Holt et al. (1912a) pp. 2–42. (ホルト, E. B. ・マーヴィン, W. T. ・モンタギュー, W. P. ・ペリー, R. B. ・ピトキン, W. B. ・スポールディング, E. G. 豊泉 俊大・磯島 浩貴 (訳)『新実在論——哲学における協働研究』「序文」共生学ジャーナル, 7, 314–360.)
- James, W. (1912/1996). *Essay in radical empiricism* (pp. 39–91). London: University of Nebraska Press. (ジェイムズ, W. 伊藤 邦武 (訳) (2004). 純粹経験の哲学 (pp. 46–96) 岩波文庫)
- Mill, J. S. (1865/1979). *An examination of Sir William Hamilton's philosophy. Collected works of John Stuart Mill*. Toront: University of Toront press.
- Marion, M. (2009). Theory of knowledge in Britain from 1860 to 1950. *Baltic International Yearbook of Cognition, Logic and Communication*, 4, 1–34. <https://doi.org/10.4148/biyclc.v4i0.129>.
- Moore, G. E. (1919). External and internal relations. *Proceedings of the Aristotelian Society*, 20, 40–62.
- Noë, A. (2006). *Action in perception*. Cambridge (Mass.): MIT Press.
- Perry, R. B. (1910). The ego-centric predicament. *The Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods*, 7(1), 5–14.
- Sellars, R. W. (1912). Is there a cognitive relation? *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, 9(9), 225–232.
- 白水 大吾 (2022). 理念なき絶対観念論:F. H. Bradley の形而上学についての試論 北海道大学大学院博士学位論文 <https://doi.org/10.14943/doctoral.k15062>
- Thomas, E. A. E. (2022). Samuel Alexander. In *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Retrieved January 1, 2024 from <https://plato.stanford.edu/entries/alexander/#ReaCom>
- Varela, F., Thompson, E., & Rosch, E. (1991). *The embodied mind: Cognitive science and human experience*. Cambridge (Mass.): MIT

第1章 世紀転換期の認識論

Press. (ヴァレラ, F. ・トンプソン, E. ・ロッシュ, E. 田中靖夫 (訳)
(2001). 身体化された心——仏教思想からのエナクティブ・アプローチ
—— 工作舎)

本研究は JSPS 科研費 JP20K00015 の助成を受けたものです。

第2部 ブリティッシュリアリズム

第2章 ムーアの実在論と 英国哲学史におけるその位置づけ

伊藤 遼

Keywords: 常識、知覚、センスデータ、分析、
リード、シジウィック、ムーア、ラッセル

1. はじめに

本章の目的は、1900年代におけるムーア（George Edward Moore、英、1873–1958）の認識論を検討することを通じて、「判断の本性」（Moore, 1899）から「常識の擁護」（Moore, 1925）に至るまでのあいだ、彼の立場がどのような意味で「実在論」とよばれるものであったのかを探ること、そして、このことによって、彼の実在論が英国哲学史において占める位置を改めて考察すること、この二つである。

当時のムーアの実在論を特徴づける方法の一つは、彼の立場を当時の英国において「観念論」とよばれていた立場の否定、すなわち、ブラッドリー（Francis Herbert Bradley, 1846–1924）や他の英国の哲学者が支持していた一元論的観念論の否定として理解することである。ムーアと並んで英国観念論批判を展開したラッセル（Bertrand Russell、英、1870–1972）は、自らの「実在論」を次のように振り返る。

ヘーゲルと彼の弟子たちは、つねに、時空間や物質の不可能性、そして一般に、日常的に人が信じるあらゆるものの不可能性を「証明」してきた。さまざまな事柄に対するこうしたヘーゲル的議論が妥当ではないと確信した私は、極端な逆方向へと進み、例えば、点や瞬間、粒子、プラトンの普遍者など、存在しないと証明され得ないあらゆるものの実在性を認めるようになった。（Russell, 1959, p. 12）

このまとめは、ラッセル自らの実在論の特徴だけでなく、その出発点となっ

たムーアの実在論の特徴もよく捉えている。彼らが1900年代から1920年代にかけて展開した実在論は、なにか一つの明確な主張によって特徴づけられるものではない。彼らは、なにか特定の原理を無批判的に受け入れるということはず、他者による、あるいは、自己による批判の妥当性に依じて、自らの立場を修正してゆくことを躊躇わなかった。むしろ、彼らの実在論は、ラッセルが上の引用において述べるように、英国観念論が「実在 (reality)」ではなく単なる「現象 (appearance)」であるとして退けたさまざまな事柄の実在性を擁護することを特徴とする。実際、「判断の本性」におけるムーアの立場は、われわれの心的作用から独立して存在する諸概念（プラトンの普遍者）から世界は構成されているとする「極端」な実在論であるが、これはブラッドリーが単なる「観念的 (ideal)」なものであって「実在的 (real)」なものではないと退けたもの、すなわち、われわれが述定にもちいる諸概念の実在性を認める試みである。また、「観念論論駁」(Moore, 1903)においてムーアが提示する一種の「直接知覚説」、すなわち、われわれの知覚は心的ではない存在者を対象とするという考えは、われわれが知覚の対象として想定する客観的事物の実在性を擁護する試みとして理解できる。この試み自体は、1900年代中頃から1910年代にかけて、「センスデータ」概念をもちいた直接知覚説にとって代わられることになり、さらに、そうした直接知覚説もまた「常識の擁護」においては単に可能な選択肢の一つとして扱われるようになる。しかし、「常識の擁護」の要点は、われわれの「常識 (common sense)」が認める諸々の信念、すなわち、ブラッドリーの観念論においてはせいぜい現象にのみ関わる部分的真理として退けられる諸々の信念が「十全に真である」という主張にある (Moore, 1925, pp. 197–198)*¹。「常識の擁護」におけるムーアによれば、もしある哲学者がこうした諸々の信念が措定する諸対象の実在性を否定するならば、実のところその哲学者自らがこれらの信念を保持している以上、矛盾を含む立場に陥ることになる。

しかし、このように、英国観念論が現象として退けるものの実在性を認め

*¹ 他方、ブラッドリーは、スタウト宛ての1903年3月29日付の書簡において自らは「常識についての理論や反省へ訴えると、常識の実質から離れてしまうと考える点でヘーゲルに従う」と述べている (Bradley, 1999, p. 250; cf. p. 218)。

る立場としてムーアの実在論を理解する限りでは、彼の立場の変化の連続性を理解することはできない。こうした理解に立つのみでは、彼は結局、異なる時期に異なる種類の対象の実在性を主張していただけたということになるからである。

本章では、1900年代から1910年代にかけてムーアが取り組んだ直接知覚説の擁護という論点と、主に1910年代から1920年代にかけて彼が取り組んだ常識の擁護という論点、この二つを連続的に理解するために、直接知覚説の擁護者の一人として、そしてまた、「常識の哲学者」として知られるリード(Thomas Reid、英、1710–1796)の立場、とりわけ、シジウィック(Henry Sidgwick、英、1838–1900)によって洗練された形で提示されたそれを取り上げる*2。本稿のみるところ、「観念論論駁」における素朴な直接知覚説に代えて「センスデータ」概念にもとづく新たな直接知覚説を提示する中でムーアが手がかりとしたものは、シジウィックが提示する、リードの「常識の哲学」の理念である。ムーアは、この理念を実践する形で議論を進めることで、リードの直接知覚説を乗り越えて、「センスデータ」概念にもとづく直接知覚説を擁護する。この新たな直接知覚説は、その出発点においてすでに常識の擁護という論点と結びついたものだったのである。

もしムーアによる直接知覚説の擁護と常識の擁護のあいだにこうした連続性がみられるとすれば、彼の実在論が英国哲学史において占める位置づけについて新たな展望が二つ得られる。一つは、ムーアの実在論は、その当初からロック、バークリー、ヒュームによるいわゆる英国経験論を、その立場の弁別的主張を受け入れるという意味で受け継ぐものではなく、むしろ、彼らの批判者であるリードの立場を受け継ぐものであるという点である。ムーアの実在論は英国経験論を受け継ぐものではないという指摘はすでによく知られたものである(Hylton, 1990, pp. 9–10; cf. Baldwin, 1990, pp. 40–41)。しかし、上述の考えが正しいとすれば、ムーアの実在論は英国経験論をむしろ批判することを通じて発展したものであるとさえ言えることになる。もう一つの展望とは、ムーアがリードの立場を受け継ぐにあたって、シジ

*2 ムーアに対するリードの影響については、Baldwin (1900, pp. 156–157) や Redekop (2004, pp. 318–319) による指摘がある。

ウィックがこれまで考えられてきた以上に重要な役割を果たしたというものである。

以下では、2節においてまず、ムーアが「観念論論駁」において提示する直接知覚説とその問題点を紹介する。次に、3節と4節において、「センスデータ」概念にもとづく直接知覚説をムーアがどのように擁護するのか、紹介する。5節と6節では、彼のこの取り組みにおいてまさに、シジウィックが洗練された形で提示するリードの「常識の哲学」の理念が実践されていることを示す。7節では、最後に、こうした考察を踏まえて、ムーアの実在論が英国哲学史においてどのように位置付けられるのか、上述の展望を改めて確認した上で、当の理念がムーア以後の哲学においてどのように受け入れられているのか、簡潔に論じることで本稿を締めくくる。

2. ムーアの素朴な直接知覚説

この節では、「観念論論駁」(Moore, 1903)におけるムーアの直接知覚説とその問題点を考察する。直接知覚説を支持する彼の論点は二つある。一つは、知覚作用と知覚の対象のあいだの区別である。もう一つは、間接知覚説批判である。

「観念論論駁」におけるムーアは、直接知覚説を、知覚という作用(act)とその対象(object)のあいだの区別を明確に行うことによって擁護しようとする。彼によれば、知覚という作用とその対象のあいだの区別をきちんと行うならば、「存在することは知覚されることである」という「観念論」を支える命題のもっともらしさは失われる(Moore 1903, 434-435)*3。知覚作用と知覚の対象を混同する場合にのみ、前者と同様に後者もまた心的なものであるという考えに至るからである。ムーアが批判の対象とする「観念論」は、世界は「精神的(spiritual)」であるという一元論的観念論にみられる主張を指す(Moore, 1903, 432)。この主張を批判するにあたってムーアがバークリーのよく知られた命題に着目する理由は、当の命題から、心的な

*3 同様の論点は、ムーアによるマクダガート『ヘーゲルの宇宙論の研究』の書評にもみられる(Moore, 1901-2, 187)。

存在者ないし精神的な存在者のみが実在するということが帰結するとムーアが考えたことにある。そして、彼は、当の命題の根拠は、知覚の対象はつねに心的表象であるという考え（「間接知覚説」）に求められると考える*4。それゆえ、彼は、間接知覚説（パークリーにおける「観念説 (idealism)」）が知覚作用とその対象の混同に基づく指摘することで、一元論的「観念論 (idealism)」の土台を掘り崩すことを試みたと考えられる。

「観念論論駁」におけるムーアは、間接知覚説に対する具体的な反論も提示する。彼は、間接知覚説を、われわれの知覚の対象は知覚の「内容 (content)」であるという考えとして定式化する。彼にとって、そしてまた、当時の他の哲学者にとって、何かがある内容を持つということは、その内容とその何かを構成する他の存在者のあいだに述定関係が成り立つことである*5。例えば、青さが青い花の内容であるということは、青さと花のあいだに「花は青い」という述定関係が成り立つことである (Moore, 1903, 447)。したがって、もし知覚作用が知覚の対象を内容として持つとすると、知覚の対象（例えば、青さ）と知覚作用を構成する他の存在者（すなわち、意識）のあいだに（「意識は青い」という）述定関係が成り立つことになる。しかし、直観的に言えば、われわれが青さを知覚するとき、それと述定関係に立つべきは、われわれの意識ではなくわれわれが知覚する対象の方であろう*6。「観念論論駁」におけるムーアは、このように間接知覚説を退けることによって、われわれは知覚作用を通じて「われわれ自身の感覚や観念の圏域の外に出る」ことができるという考え、すなわち、直接知覚説を擁護する (Moore, 1903, 451)。

しかし、「観念論論駁」におけるムーアの議論は、少なくとも二つの理由で、直接知覚説の擁護に失敗している*7。まずもって、(本章においてまさに

*4 この考えは、ムーアが1910年から1911年にかけてロンドンで行った講義で詳述されている (Moore, 1953, pp. 48-49)。

*5 例えば、1節で紹介したように、ブラッドリーも「観念 (idea)」ないし「観念的内容 (ideal content)」を実体に帰属される属性としてみなす。

*6 この論点は、空間上で延長を持つ物体についての知覚がそれ自体延長を持つかという、1890年代後半に英国ですでに論じられていた問題と関わる。この問題をめぐる論考としては、例えば、Bradley (1895) がある。

*7 以下二つの論点は、Stout (1904-5) が指摘するものであり、Moore (1905-6) はこう

そうしているように) 間接知覚説を知覚作用とその対象の区別と整合的な仕方
で定式化することはできる。それゆえ、当の区別に訴えることのみによっ
て、間接知覚説を退けることはできない。もう一つの理由は、ムーアが、い
わゆる「異なる現れの問題」を考察していないという点にある。われわれ
は、時として、同一の対象(例えば、一つのコイン)に対して相反する性質
(例えば、「円形である」という性質と「楕円形である」という性質)を知覚
する。このことは、同一の対象が相反する性質を保持することはないと想定
する限り、われわれが知覚する性質は当の対象そのものの性質ではないとい
うことを意味する*8。われわれの知覚作用の対象が当の対象そのもの(「物
的対象(material object)」)が持つ性質ではないとすれば、それは物的対象
の性質に対応する心的な表象(「現れ」)であると考えられる。このように、
異なる現れの問題は、少なくとも一見する限り、間接知覚説を支持する根拠
を与える。

3. 「センスデータ」概念にもとづく直接知覚説(1)

「知覚の対象の本質と実在性」(Moore, 1905-6)におけるムーアは、後の
「センスデータ」概念にあたる「感覚内容(sense-content)」という概念を導入
することで、新たな直接知覚説を提示する。彼は、われわれが直接知覚す
る対象、すなわち、感覚内容が実在すると認める限りにおいて、「ほとんど
すべての哲学者とほとんどすべての一般人」が保持する信念、すなわち、他
者の存在や物的対象の存在についての信念に理由ないし正当化を与えること
ができると論じることで、直接知覚説を擁護する(Moore, 1905-6, 68)。

ムーアはまず、次の二つの問いに現れる語句の意味を事細かに整理する。
それは「われわれはいかにして自分自身の知覚とわれわれが直接知覚するも
の以外になにかが存在するという事を知ることなのか」という問い、そして、「わ
れわれはいかにして他者が存在して、彼らは自らのそれといくつかの点で
類似した知覚を持つと知ることなのか」という問いである(Moore, 1905-6, 69)。

した指摘に答えるものとして理解できる。

*8 こうした想定を Nasim (2008, p. 51) は「スタウトの想定」とよぶ。

彼は「知る」という語は、それが適用されるにあたって、信念に対する「理由」が存在することを要求すると述べる (Moore, 1905-6, 70-74)。そして、彼は、信念に対する「理由」は、それが生じた「原因」と区別されなければならないと加える。また、彼は、ここでなにかが「存在する」ないし「実在である」と言うことは、それが知覚されるということと同義ではないと論じる。一つには、われわれが自らの知覚や思考、感情が「存在する」と述べる時、われわれはそれら自体が知覚されているということを意味しないからである (Moore, 1905-6, 106)。加えて、もし「存在する」ことないし「実在である」ことを「実際に知覚されている」こと、すなわち、「実在する知覚の対象となる」こととして説明するのであれば、その説明は循環したものとなる (Moore, 1905-6, 108)*⁹。

こうした整理を踏まえて、ムーアは、自分の心の外に諸事物が存在するという信念や他者が存在するという信念に理由を与えるためには、「一般化」が必要であると論じる。彼によれば、われわれの知覚によって、特定の対象 (例えば、他者の知覚) が存在するという信念に理由を与えるためには「特定の種の諸対象が存在するとき、たいていの場合、それに随伴して、あるいは、先行ないし後続して、別の特定の種の諸対象が存在する」ことを示す必要がある (Moore, 1905-6, 85)。そして、こうした一般化を含む命題は、諸対象の「観察 (observation)」ないし「直接知覚 (direct perception)」によってのみ正当化されると彼は論じる (Moore, 1905-6, 96)。彼は、こうした正当化が成立するための必要条件として、(1) 特定の種の対象、他の特定の種の対象、一方が他方に随伴ないし先行すること、この三つをそれぞれ私が観察すること、(2) これら知覚の対象がどれも存在すること (実在であること)、(3) ある特定の種の諸対象と他の特定の種の対象のあいだに常に同じ関係が成り立つこと、この三つを挙げる (Moore, 1905-6, 96-100)。

次に、ムーアは、われわれが上述の意味で観察可能なものとして、『『感覚を通して』われわれが知覚すると一般に言われるもの』と「自らによるそれ

*⁹ ムーアによれば、同様の問題は、例えば、「存在する」ことを「他の実在と体系的に結びついている」こととして説明する試みにも生じる (Moore, 1905-6, 109)。こうした試みの一例は、スタウトによる 1904 年の論考においてみられる。

らの知覚・思考・感情」、この二種類を挙げる (Moore, 1905-6, 110)。前者こそ彼が「感覚内容」と呼ぶものに他ならない。そして、彼によれば、後者のみを観察することによって、他者の知覚・思考・感情が存在するという信念を正当化することはできない。というのも、私の知覚・思考・感情とそれに伴う私の身体の運動についての私の知覚とのあいだの関係は、他者の知覚・思考・感情とそれに伴う他者の身体の運動についての私の知覚とのあいだの関係と同一ではないからである。前者の関係は、それがどのようなものであれ、私の知覚と私の知覚・思考・感情とのあいだに成り立つ関係であり、後者の関係のように、私の知覚と他者の知覚・思考・感情とのあいだに成り立つ関係ではない。したがって、前者の関係に立つ事物の具体例をいくつ観察しようとも、後者の関係が一般的に成立すると信じることは、上述の条件 (3) が満たされないために、正当化されることはないのである (Moore, 1905-6, 113)。他方、もしわれわれが感覚内容を直接知覚できるとすれば、言い換えれば、直接知覚説を認めるならば、こうした困難は解消される。

しかし、もし私が勧める仮説を採用するならば、すなわち、もし私が「感覚内容」と呼ぶ他の種類のデータが存在すると認めるならば、事態はどれほど違ったものになるだろう。この仮説によれば、私が私自身の身体の運動を知覚するとき私が知覚するものは実在であり、私が他者の身体の運動を知覚するとき私が知覚するものも実在である。(Moore, 1905-6, 114)

このように、もし感覚性質として他者の身体の運動を私が知覚できると認めるならば、自らの身体の運動とそれに先行する私の知覚・思考・感情とのあいだの関係を根拠に、他者の身体の運動とそれに先行する他者の知覚・思考・感情とのあいだの関係を推論することができる。

「知覚の対象の本質と実在性」におけるムーアは、異なる現れの問題に対する一つの応答を提示する。ムーアは、この問題に訴える直接知覚説批判を、「パークリーの議論と同じタイプのもの、すなわち、同一の水のかたまりが [...] 同時に熱いようにも冷たいようにも現れ得るが、熱さと冷たさが実際に [really] 同時に同じ対象のうちにあるということはないというもの」と理解する (Moore, 1905-6, 123)。そして、彼の応答の要点は、「熱さと冷

たさの双方が同じ場所に存在し得ないと仮定する（そして、この場合、たしかに、この仮定を否定することは常識に反するに思われる）としても、そのどちらもその場所に存在しないということは帰結しない」というものである（Moore, 1905-6, 123）。また、彼は、「二つの事物が同じ場所を占めることはできない」という前提はつねに受け入れられるべきものではないと論じる（Moore, 1905-6, 125）。同一の対象についても裸眼でみる場合に知覚される性質と顕微鏡を通して知覚される性質が相異なるものであることはあり得るからである。

4. 「センスデータ」概念にもとづく直接知覚説（2）

ムーアは、「心理学の主題」（Moore, 1909-10）において、「センスデータ」という表現を導入する。この論考においてムーアは、「心的（mental）」という語の意味を事細かに整理した上で、「疑いの余地なく心的な存在者」の三種類を明確に区別することを通じて、センスデータが心的でないことと論じることで、直接知覚説の擁護を試みる。

ムーアによれば、なんらかの対象が「心的」であると言うことは、次の四つのいずれかのことを意味する。第一に、それは、当の対象が意識の作用であるということの意味する（Moore, 1909-10, 39）。第二に、それは、当の対象が他の心的作用と「同じ人物ないし同じ心の作用」であるということの意味する（Moore, 1909-10, 40-43）。第三に、それは、当の対象が心的作用の「内容」であるということの意味する（Moore, 1909-10, 48）。（ただし、ムーアはこの意味で「心的」な対象が実際に存在することは疑わしいと考える。）第四に、それは、当の対象が意識の作用のみが持ち得る諸性質の一つ、すなわち、意識の諸作用のあいだの相互の区別を可能にするような諸性質の一つであるということの意味する（Moore, 1909-10, 50）。

そして、ムーアによれば、第一の意味で「心的」であるところの意識の諸作用は、第一種の「疑いの余地なく心的な存在者」を構成する（Moore, 1909-10, 39）。さらに、第三の意味で「心的」であるところの意識の諸作用のみが持ち得る諸性質は、第二種の「疑いの余地なく心的な存在者」である（Moore, 1909-10, 50）。加えて、彼は、第三種の「疑いの余地なく心的な存

在者」として、心的諸作用の統一体を挙げる (Moore, 1909-10, 50-51)。

このように「心的」という語の意味やわれわれが「疑いの余地なく心的な存在者」と認めるものを整理した上で、ムーアは、センスデータが心的なものか否かという問いに取り組む。彼はまず「センスデータ」という語を次のように導入する。

[ここで私が考察したい問い] は、「感覚 (sensation)」ないし「感覚現前 (sense-presentation)」としばしばよばれるが、私は「センスデータ」とよぶことを好む存在者に関するものである。私は、センスデータ [という語] によって、われわれがしばしば直接意識の対象とする、われわれにとってその多くがみなれたものであるような存在者たちの集まりを意味する。[センスデータ] には、私が辺りを見回すときに私が目にするさまざまな濃淡の色たち、私が実際に耳にする音たち、私が歯に痛みを感じる時に私が直接意識している、「この痛み」と私がよぶ存在者、そして、またその他多くの存在者が含まれる。(Moore, 1909-10, 57)

そして、彼は、センスデータが心的であるという結論を導いてしまう四つの考えを考察する。一つは、センスデータが第一の意味で「心的」であるという考えである。このように考えることは、知覚の対象 (センスデータ) と知覚作用を混同することに他ならない (Moore, 1909-10, 58)。もちろん、このような混同は、彼が「観念論論駁」以降一貫して批判するものである。また、彼は、センスデータが上述の第二の意味で「心的」であるという考え、すなわち、センスデータと心的諸作用はどちらも「同じ人物ないし同じ心」の作用であるという考えを批判する。この考えによれば、センスデータと私の心とのあいだに、私の心的諸作用と私の心とのあいだに成り立つ関係が同様に成り立つことになる。しかし、彼は、センスデータと私の心のあいだには、前者について後者が意識を向けているという関係のみが成り立つ一方で、私の心的諸作用と私の心のあいだにはそうした関係が必ずしも成り立たないということを指摘する。さらに、彼は、センスデータが上述の第四の意味で「心的」であるという考え、すなわち、センスデータが心的諸作用の性質であるという考えを批判する (Moore, 1909-10, 58-59)。(彼は、おそら

くは、第三の意味で心的な対象の存在がそもそも疑わしいと考えるために、センスデータがこの意味で心的な対象である可能性、つまり、間接知覚説が正しい可能性を考慮しない。) ムーアによれば、センスデータはつねにわれわれの意識作用の対象となるが、意識の諸作用が持つ性質は必ずしもそうした対象にはならない以上、センスデータが第四の意味で「心的」であるとは考えられない。最後に彼が取り扱う考えは、センスデータが知覚される限りにおいて存在するという意味で心的であるという考えである。彼は、実際に、センスデータがわれわれの知覚なしに存在するか否かを決定することは「大変難しい問題」であると認める (Moore, 1909–10, 60)^{*10}。しかし、彼はこの意味でセンスデータを「心的」であるとよぶことには「混乱を招く大きな可能性」があると言う (Moore, 1909–10, 61)。彼によれば、センスデータが心的であると主張する論者は誰一人として、単純にこの意味のみでセンスデータが心的であるとは主張してこなかったからである。しかし、もしそうした論者が他の三つの意味のいずれかにおいてもまたセンスデータが「心的」であると主張するならば、もちろん、彼らはすでにみた三つの考えに対する批判を受けることになる。

5. ムーアによる常識の擁護

この節では、ムーアによる常識の擁護の試みについて考察する。この試みは、ムーアの論考「常識の擁護」(Moore, 1925)によって今も広く知られている。以下ではまず、この論考における「常識」をめぐるムーアの議論を紹介した上で、その要点、すなわち、常識は哲学者にとっての「所与」であるという論点が「知覚の対象の本質と実在性」においてすでに提示されているということを確認する。

まずは、ムーアが「常識」とよぶものを確認しよう。よく知られているよ

^{*10} 1910–11年の講義では、ムーアは、センスデータがわれわれの知覚なしに存在しないことを示す決定的な議論はないと述べている (Moore, 1953, 44–45)。1914年にダラムにて催された「センスデータの地位」というシンポジウムでは、ムーアは、センスデータ(「感覚可能な対象 (sensibles)」)が知覚されることなく存在すると信じる傾向をわれわれに認めた上で、そうした存在を否定する決定的な議論はないと結論している (Moore & Stout, 1913–14, 366–370)。

うに、「常識の擁護」において、彼は「私が、確実に真であると知っている」諸命題のリストを提示する。それには、例えば、「現在、ある生きた人間の身体が存在しており、それは私の身体である」という文や「私の身体が誕生する何年前前から地球は存在してきた」という文、「私は自らの身体、および、他人の身体を含めた、周囲の環境の一部を構成する諸々の事物をしばしば知覚する」という文が含まれる (Moore, 1925, pp. 194–195)。加えて、ムーアは、「このリストに含まれる諸命題を大変多くの他者が自身の場合に関して知っている」という命題を加える。ムーアによれば、この命題を信じることは「常識的世界観」を受け入れることである (Moore, 1925, p. 207)。

ムーアはこうした「常識的世界観」をなんらかの哲学的理論に訴えて擁護するわけではない。むしろ、彼はそれがいかなる哲学的理論を支持する者によっても実のところ受け入れられていると指摘することで、それを擁護する。彼は、「あらゆる哲学者が例外なく私と同様に [常識的世界観] を信じてきた」と考える (Moore, 1925, p. 207)。それゆえ、彼によれば、常識的世界観と相反する理論を支持する哲学者は、同時に常識的世界観を肯定しているために、相互に矛盾するいくつかの信念を保持していることになる。彼にとっての「常識」とは、単に一般人の多くが普段信じている諸命題のことではなく、そうした諸命題を理論的に否定する哲学者すらも含めて「大変多く」の人が実のところ是認している真なる諸命題のことを指す。彼が「常識」とよぶものは、どのような立場に立つ哲学者にとっても彼らがそれを信じるという意味で「所与」であると言えよう。

「常識の擁護」においてムーアは、こうした世界観を明示的に支持してきた哲学者を具体的に挙げることはしない。しかし、その代表者としてリードを挙げることに問題はないだろう。リードは「常識」を「公理」、「第一原理」あるいは「自明な真理」と同一視する (Reid, 1785, VI.4; p. 452; 戸田訳 2022 下巻 p. 316)*¹¹。また、リードは、偶然的真理に関する第一原理とし

*¹¹ 『心の哲学』(Reid, 1764)へ言及する際は、エディンバラ版をもちいて、「章番号. 節番号; 頁数; 邦訳における頁数」の形で該当箇所を記す。『人間の知的能力に関する試論』(Reid, 1785)に言及する際は、同じくエディンバラ版をもちいて「巻数(ローマ数字). 章番号; 頁数; 邦訳における頁数」の形で該当箇所を記す。ただし、この著作の邦訳はエディンバラ版を底本とするものではない。訳出は、邦訳を参考に本章の著者が行ったも

て「私の意識となるあらゆるものの存在」や「われわれが感覚によって判明に知覚するものは実際に存在し、われわれが知覚するとおりのものである」ことを挙げる (Reid, 1785, VI.5; pp. 470, 476; 戸田訳 2022 下巻 pp. 349, 361-362)。

それでは、ムーアが所与としての常識の擁護という論点を自らの立場の特徴の一つとみなすようになったのはいつか。まずもって、「判断の本性」(Moore, 1899)におけるムーアに所与としての常識の擁護という意図はまったくみられない。世界が「諸概念から形成されている」という主張を、上述の意味での常識と整合的なものとして理解することは難しい。「観念論論駁」(Moore, 1903)では、その冒頭において、彼は「観念論的世界観」と「日常的世界観」のギャップについて指摘する (Moore, 1903, 434)。しかし、彼がこの論文においても「常識」について言及することはない^{*12}。

本章のみるところ、ムーアは「知覚の対象の本質と実在性」(Moore, 1905-6)においてはじめて、常識の擁護という論点およびリードに言及する^{*13}。3節でみたことを踏まえれば、この論考におけるムーアは、他者の存在や物的対象の存在についての「ほとんどすべての哲学者とほとんどすべての一般人」が保持する信念を先述の意味で「所与」として議論を行っていると言える。そして、彼によれば、これらの信念を真なる信念として受け入れるという考えは、リードに代表されるものである。

今日哲学者たちから受け取っている以上の敬意に値すると思われる、何が存在するのかということについての一つの見解がある。それは、物理科学によって想定される通りに、物的諸対象が実在として存在するという見解である。他者の存在だけでなく、空間内での物質の運動の存在についてもわれわれは知っていると考える哲学者たちが(リー

のである。

*12 「観念論論駁」におけるムーアによるパークリーへの言及は、リードによるパークリーやヒュームらの間接知覚説批判ではなく、ムーアが参照する Taylor (1902) の議論に由来すると考えられる (Moore, 1903, 438fn.)。

*13 Redekop (2004, pp. 318-319, 19n.) は、リードによるムーアへの影響を論じる中で、ムーアがリードに言及する箇所をいくつか指摘している。ただし、本章が以下で紹介する「知覚の対象の本質と実在性」におけるリードへの言及はその中に含まれない。

ドを含めて) 存在する。(Moore, 1905-6, 120)

このように、ムーアは、「知覚の対象の本質と実在性」において、他者の存在や物的対象の存在についての信念を正しいものとして認めるという点で、自らはリードをはじめとする哲学者たちと立場を一にすると考えている。

ただし、「知覚の対象の本質と実在性」におけるムーアは、自らが提示する直接知覚説はリードのそれよりも一層、常識に合致するものであると論じる。

リードは、実際、「観察」という語だけでなく「知覚」という語を、われわれは他者の思考や感情を観察ないし知覚すると言えるような広い意味で使う。そして、彼がこの意味でそれらの語を使うという事実のために、彼は自らの立場が実際以上にもっともらしいもの、常識に合致するものだと考える。(Moore, 1905-6, 91-92)

ムーアは、ここでおそらく、リードによる「原初知覚 (original perception)」と「獲得知覚 (acquired perception)」の区別を念頭に置いている。前者は、例えば、視覚作用を通じた、物の形や色の知覚、また、触覚作用を通じた、物の形や固さ、動きの知覚のことである (Reid, 1764, 6.20; p. 171; pp. 207-208)。後者は、前者をもとにわれわれが習慣的に獲得する知覚のことである (Reid, 1764, 6.20; pp. 171-174; pp. 207-211)。例えば、われわれが他者の表情からその感情を伺い知るとき、われわれの視覚作用の対象 (ムーアが「感覚内容」とよぶもの) は諸々の色や形のみであるが、それをもとにわれわれはなんらかの推論を行うことなく即座に他者の感情を「知覚」する。しかし、ムーアによれば、リードは、原初知覚を重ねることで獲得されるこうした「知覚」によって他者の思考や感情の存在を知ることができると述べる一方で、厳密な意味での知覚 (原初知覚) は他者の思考や感情が存在するという信念を正当化しないと認めるために、「なにかパラドクシカルなもの」を含む立場に陥っている (Moore, 1905-6, 94)。それゆえに、ムーアは、この「常識の哲学者」が「彼の論敵とは方向は違うにしても少なくとも同じくらいには常識から遠く離れてしまった」と結論する (Moore, 1905-6, 94)。

このように、「知覚の対象の本質と実在性」においてムーアは、多くの哲

学者が知識として認める信念を所与とした上で、それに唯一正当化を与える立場として自らの直接知覚説を擁護していると考えられる*¹⁴。こうした試みは、哲学的議論の所与としての常識という彼の「常識の擁護」における立場と合致するものであり、また、それは、彼が自ら示唆するように、常識を「第一原理」として直接知覚説を擁護するリードの試みと近いものであると思われる。とは言え、このことのみをもって、ムーアがリードの立場を受け継いだと結論することは早計であろう。リードが実際のところ「常識」という考えをどのようにもちているかという点についてはさまざまな解釈がある*¹⁵。それゆえ、ムーアがリードの立場をどのように理解していたのか、考察の余地がある。加えて、本論文において、そうしたさまざまな解釈の検討を通じてリードの実際の立場を明らかにするということが現実的でない。そこで、次節では、シジウィックによるその解釈、とりわけ、彼がリードに見出す「常識の哲学」の理念を実践するものとして、ムーアの直接知覚説擁護の試みが理解できるということを指摘する。

6. シジウィックによる「常識の哲学」

本章のみるところ、リードの立場をムーアが取り上げるようになったきっかけの一つは、それをさまざまな批判に耐え得る、洗練された形で提示しようとするシジウィックの試みにあると考えられる。

ムーアに対するシジウィックの『倫理学の方法』(Sidgwick, 1874)の影響はこれまでにしばしば指摘されてきた*¹⁶。例えば、Baldwin (1990) は、シジウィックがこの著作において「常識の道徳」を「その妥当性について少なくともわれわれの時代および文明に属する道徳的人物たちのあいだには明

*¹⁴ 1914年のシンポジウムにおいても、ムーアは物的対象の存在について同様のアプローチをとる (Moore and Stout, 1913-14, 370-371)。また、1910-11年の講義では、その初回において、常識的な信念の内実を詳細に検討している (Moore, 1953, Ch.1)。

*¹⁵ この点については、例えば、『心の哲学』(Reid, 1764)の訳者による解説や Wolterstorff (2004)を参照されたい。

*¹⁶ 他方、Griffin (1989)は1895年頃のムーアはラッセルと同じくシジウィックの講義を「単調で退屈」と評価していたと判定している。当時のシジウィックの講義の内容は『倫理学の方法』および『哲学の射程』(Sidgwick, 1902)から推測され得る。

確な同意が存在するところの一般的諸規則の集まり」として定義することに着目する (Baldwin, 1990, p. 157)。Baldwin (1990) によれば、常識の道徳が時代や文明において変わり得るという考えは、1910年代の常識に対するムーアの姿勢と合致する。また、Gandon (2017) は、『倫理学の方法』においてシジウィックがミルの功利主義を批判する際にいわゆる「自然主義的誤謬」の指摘を行なっていること、そして、『倫理学原理』におけるムーアは両者の功利主義をそれぞれ批判しつつも、シジウィックに対しては自然主義的誤謬を帰属させていないことを指摘する (Gandon, 2017, 10-11)。

しかし、直接知覚説の擁護という文脈において議論の所与としての常識という論点をムーアが発展させるにあたって、シジウィックはさらなる役割を果たしたように思われる。それは、直接知覚説の擁護およびバークリーの間接知覚説批判における先人としてのリードを紹介したこと、そして、より根本的に、「常識の哲学者」としての彼の立場を哲学的探究における方法論上の理念として洗練された形で提示したこと、この二つである。

ムーアの「知覚の対象の本質と実在性」から遡ること10年、シジウィックは「常識の哲学」という論考において、リードの立場を紹介している^{*17}。シジウィックによれば、リードにとって「常識」とは結局のところ「われわれ哲学者や他の一般の人々が日常的な思考や談話において習慣的に適用する、判断の非理性的な諸原理の集まり」であり、それはしばしば「混乱しており、また、整合性を欠く」(Sidgwick, 1895, 150)。ただし、シジウィックは、リードの議論がしばしばそうした諸原理に依拠しすぎることがあるとしても、それらを無批判的に受け入れることがリードの実際の立場ではないということを強調する。シジウィックによれば、リードの立場は、次のようなものである。

[...] リードが哲学者に不可欠のものとして要求することは、哲学者が自らの信念を一般人の信念と整合的にするということでは必ずしも

^{*17} シジウィックのこの論考は、もともと、グラスゴー大学哲学会において1895年に発表されたものである。当時の英国の哲学者による直接の応答としては、Carlie (1896) によるものがある。また、Stout (1900-1) は物的対象についての「常識的見解」を論じている。

なく、むしろ哲学者が自らの信念を自らの信念と整合的にするという
ことである。このように要求することの正当性は、われわれがその要
求を「常識」ではなく「哲学」の名においてなされる要求とみなす
とき、より一層明らかになると思われる。(Sidgwick, 1895, 150)

このように、シジウィックはリードの立場の要点を一つの理念として理解す
る。そして、シジウィックによれば、こうした理念は次のように実践される。

常識の哲学者は、当の疑問に関するあらゆる誤解を取り除くためにで
きることをすべて行なったとき、当人たちの判断が一般的な考えや知
識の有機的な構造を作り上げ絶え間なく維持するところの人々によっ
て、[その哲学者] 自らが確信することは、共有されているという考
えに訴えることが許されよう。(Sidgwick, 1895, 153)

シジウィックは、このように、リードの立場を「常識の哲学」の理念、すな
わち、哲学者は他の多くの人々と同様に自らが意識的ないし無意識的に保持
する信念を、さまざまな混乱や不整合、誤解の可能性を含まない形で明確に
述べた上で、それと整合的な哲学的理論を擁護するべきであるという考えと
して解釈する*18。

さらに、シジウィックによれば、こうした「常識の哲学」という理念のも
とでは、直接知覚説は、認識論における単なる一学説ではなく、常識の一部
として特別な位置を占めることになる。シジウィックのみるところ、リード
の功績の一つは「外的対象の通常の知覚は、内省を行えば、直接の認識とし
て、すなわち、いかなる心的媒介物もいかなる推論も含まないものとして現
れる」という立場、すなわち、直接知覚説を提示したことにある (Sidgwick,
1895, 154)。シジウィックによれば、リードは「知覚する心は、それが知覚
する対象と心的でない対象という二重の対象を持つわけではなく」、「それ
ゆえ、知覚されている心的でない対象が今存在しているというわれわれの
確信は、推論によって得られた判断ではなく、知識にとって原初的なデー
タである」と考えていた (Sidgwick, 1895, 154)。ただし、シジウィックは

*18 シジウィックは、このように定式化した「常識の哲学」という考えを自らの「形而上学
的立場」として支持する (Sidgwick, 1902, p. 42)。

この考えを無批判的に受容するわけではない。シジウィックは、(ムーアと同じく) リードによる「原初知覚」と「獲得知覚」のあいだの区別を退ける。シジウィックによれば、リードはこの区別によって異なる現れの問題の解消をはかるが、その区別は「明らかに維持不可能でありまた無関係」である (Sidgwick, 1895, 156)。しかし、シジウィックは、リードが提示する「実際に有効な応答」の一つとして、知覚の対象の実在性を疑うそうした議論それ自体がそうした諸対象の実在を前提するという指摘を挙げる。シジウィックによれば、この指摘は、「[そうした対象の存在についての] この根本的な信念を疑うのではなく信じることによって、科学へと組織化された常識は、素朴な常識をつねに訂正しまた承認する」ということを意味している (Sidgwick, 1895, 156)。言い換えれば、「常識の哲学」という理念のもとでは、直接知覚説は、それ自体、客観的事物を知覚しているというわれわれの素朴な常識的な信念を言い表すものであると同時に、その信念にはさまざまな混乱が含まれるために、整合的な定式化を与えるという試みの対象となるものであるということである。

このようにみると、ムーアは、リードの立場として、シジウィックが1895年の論考「常識の哲学」(Sidgwick, 1895)において紹介するものを念頭においていると考えられる。上述のように、シジウィックは、リードの立場を紹介するにあたって、二つの主張をなす。それは、(a)「常識の哲学」の理念は、常識の無批判的な承認ではなく、常識からさまざまな混乱や不整合、誤解の可能性を取り除くことで得られる信念との整合性を重視することにあるという主張、および、(b)「常識の哲学」という理念のもとでは、直接知覚説は、それ自体われわれが日常的に保持する信念の一つであると同時に、さまざまな誤りを含み得るもの、それゆえに、整合的な定式化の余地を持つものとして理解されるということである。そして、「知覚の対象の本質と実在性」や「心理学の主題」におけるムーアは、まさにこのように理解された「常識の哲学」の理念を実践している。「知覚の対象の本質と実在性」において彼は、5節で確認したように、他者の存在や物的対象の存在についての多くの哲学者の信念を所与として議論を展開するが、そのとき彼は、3節でみたように、「知識」や「理由」、「存在」といった語の意味を事細かに整理することでさまざまな誤解の可能性を排除する (a)。そして、この議論の目的は、

「観念論論駁」において提示された素朴な直接知覚説とは異なる形で、「感覚内容」概念をもちいて直接知覚説を定式化することである (b)。また、「心理学の主題」における彼は、4節でみたように、「心的」という表現が持つ三つの意味を事細かに整理すること、そして、それを通じて多くの哲学者が「疑いの余地なく心的な存在者」とみなすものを特定することから議論をはじめ (a)。そして、この議論から、われわれの知覚の対象はいずれの意味においても心的ではないという結論を導くことによって、彼は「センスデータ」概念にもとづく直接知覚説に整合的な定式化を与える (b)。いずれの論考においても彼は、多くの哲学者が持つ信念を混乱や不整合、誤解を含まない形で明確に述べた上でそうした信念を所与として、直接知覚説に整合的な定式化を与えることを試みているのである。

7. おわりに

本章6節の議論が正しいとすれば、すなわち、ムーアが、シジウィックが洗練された形で提示するリードの立場を学んでいたとすれば、語句の事細かな整理を通じて明確に述べられた常識的信念を所与に、「感覚内容」ないし「センスデータ」概念をもちいて定式化した直接知覚説を擁護するというムーアの試みは、まさに、その「常識の哲学」の理念を実践するものだったことになる。ムーアは、リードの細かな議論や結論それら自体には同意せずとも、シジウィックが提示する限りでの「常識の哲学」の理念ないしその弁別的主張、すなわち、哲学者は自らが他の哲学者と同様に持つ諸々の信念を明確に述べた上で、それと整合的な哲学的理論を支持するべきであるという理念を受け入れていると言える。そして、このことを踏まえて、「常識の擁護」におけるムーアの議論を捉え直すならば、それは、直接知覚説に整合的な定式化を与えることで知覚の対象となる客観的事物の実在性を示すという試みに代えて、客観的事物の実在性についての信念やそうした事物をわれわれが知覚しているという信念、これら自体がいかなる哲学者にとっても所与であると指摘することによって、客観的事物の実在性それ自体を直接擁護する試みだったと言えよう。もちろん、この試みにおいても、明確に述べられる限りにおいて常識的信念を所与とするという理念は保持されている。

このようにみると、英国哲学史においてムーアの実在論が占める位置づけについて本章1節で述べた二つの展望が得られることは明らかであろう。もしシジウィックの解釈が正しいとすれば、ムーアの実在論は、英国経験論の批判者たるリードの立場を、その理念ないし弁別的主張を認めるという意味で受け継ぐものである。そして、もし、シジウィックが提示するところのリードの立場を契機としてムーアの実在論が発展したならば、シジウィックはこれまで考えられてきた以上に大きな影響をムーアに与えたことになる。

さて、本章を締めくくるにあたって、常識をそれが明確に述べられる限りにおいて議論の所与として受け入れるという理念が、ムーア以後の哲学にとってもなじみのないものではないということを指摘したい。実際、彼が自らの実在論を発展させる中で支持してきた上述の理念は、いわゆる「概念分析」という営みに正当化を与えるものである。「常識の擁護」においてムーアは、自らの方法論は、広く受け入れられている諸々の信念を不確実なものとし、その正しさないし誤りをそこに含まれるさまざまな概念の分析を通じて明らかにしようとするものではなく、そうした信念を確かなもの、本章の表現で言えば、所与として受け入れた上で、そこでもちいられるさまざまな概念を分析する、すなわち、それらの概念になんらかの理論的な定式化を与えようとするものであると説明する。こうした考えは、例えば、特定の状況である行為者が知識を持つという直観的判断を所与として「知識」概念を分析するという営みに、当の直観的判断が混乱や不整合、誤解の可能性を含まない形で明確に述べられる限りにおいて、正当性を与えるものである。

文献

- Baldwin, T. (1990) *G. E. Moore*. London: Routledge.
- Bradley, F. H. (1895). In what sense are psychological states extended?. *Mind*, new series, 4(14), 225–235.
- Bradley, F. H. (1999). *Selected correspondence: June 1872–December 1904, Collected Works of F. H. Bradley, volume 4*. C. A. Keene (ed.), Bristol: Thoemmes Press.
- Carlie, W. W. (1896). [Discussion on] The philosophy of common sense.

- Mind*, new series, 5(18), 242–245.
- Gandon, S. (2017) Sidgwick’s legacy? Russell and Moore on meaning and philosophical inquiry. *Journal for the History of Analytical Philosophy*, 6(1), 1–22.
- Griffin, N. (1989) Russell and Sidgwick. *Russell*, 9, 12–25.
- Hylton, P. (1990). *Russell, idealism, and the emergence of analytic philosophy*. Oxford: Clarendon Press.
- Moore, G. E. (1899). The nature of judgement. *Mind*, new series, 8, 176–193.
- Moore, G. E. (1901–2). Mr. McTaggart’s ‘studies in hegelian cosmology’. *Proceedings of the Aristotelian Society*, new series, 2, 177–214.
- Moore, G. E. (1903). The refutation of idealism. *Mind*, new series, 12(48), 433–453.
- Moore, G. E. (1905–6). The nature and reality of objects of perception. *Proceedings of the Aristotelian Society*, new series, 6, 68–127.
- Moore, G. E. (1909–10). The subject-matter of psychology. *Proceedings of the Aristotelian Society*, new series, 10, 36–62.
- Moore, G. E. (1925). A defense of common sense. In J. H. Murihead (Ed.), *Contemporary British Philosophy (Second Series)* (pp. 191–223.). London: George Allen & Unwin.
- Moore, G. E. (1953). *Some main problems of philosophy*. London: George Allen & Unwin.
- Moore, G. E. & Stout, G. F. (1913–14). Symposium: The status of sense data. *Proceedings of the Aristotelian Society*, new series, 14, 355–406.
- Nasim, O. W. (2008). *Bertrand Russell and the Edwardian philosophers: Constructing the world*. London: Palgrave Macmillan.
- Redekop, B. W. (2004). Reid’s influence in Britain, Germany, France, and America. In T. Cuneo & R. Van Woudenberg (Eds.), *Cambridge Companion to Thomas Reid* (pp. 313–339). Cambridge: Cambridge University Press.
- Reid, T. (1764/1997). *An inquiry into the human mind on the principles*

- of common sense*. D. R. Brookes (Ed.), University Park: Pennsylvania State University Press. (リード, T. 朝広 謙次郎 (訳) (2004) 心の哲学 知泉書館)
- Reid, T. (1785/2002). *Essays on the intellectual powers of man*. D. R. Brookes (Ed.), University Park: Pennsylvania State University Press. (リード, T. 戸田 剛史 (訳) (2022・2023) 人間の知的能力に関する試論 上・下 岩波書店)
- Russell, B. (1959). *My philosophical development* (with an Appendix, Russell's Philosophy by Alan Wood). London: George Allen and Unwin.
- Sidgwick, H. (1874/1907). *The methods of ethics*. London: Macmillan (the 7th ed., 1907).
- Sidgwick, H. (1895). The philosophy of common sense. *Mind*, new series, 4(14), 145–158.
- Sidgwick, H. (1902). *Philosophy: Its scope and relations*. J. Ward (Ed.), Bristol, U.K.: Thoemmes Press.
- Stout, G. F. (1900–1). The common-sense conception of a material thing. *Proceedings of the Aristotelian Society*, new series, 1, 1–17.
- Stout, G. F. (1904–5). Primary and secondary qualities. *Proceedings of the Aristotelian Society*, new series, 4, 141–160.
- Taylor, A. E. (1902). Mind and nature. *International Journal of Ethics*, 13(1), 55–86.
- Wolterstorff, N. (2004). Reid on common sense. In T. Cuneo & R. Van Woudenberg (Eds.), *Cambridge Companion to Thomas Reid* (pp. 77–100). Cambridge: Cambridge University Press.

本研究は JSPS 科研費 JP20K00015、JP22K12966 の助成を受けたものです。

第3章 計画の実行、またはやり直し：

ボザンケから見た世紀転換期の観念論と実在論

有村 直輝

Keywords: 思弁哲学、新観念論、新実在論、批判的実在論、
経験、自然、思考、センサ、物、物理的対象、宇宙

1. はじめに

本稿の目的は、バーナード・ボザンケ (Bernard Bosanquet、英、1848–1923) による 20 世紀の観念論および実在論に対する評価や応答を概観し、彼が「思弁哲学」と呼ぶ晩年の哲学の輪郭を明らかにすることにある。

ボザンケは、19–20 世紀の世紀転換期に活躍したイギリス観念論の哲学者である。これまで彼の哲学、とりわけその形而上学は、新ヘーゲル主義者のフランシス・ハーバート・ブラッドリー (Francis Herbert Bradley、英、1846–1924) のそれに非常に近いものとして扱われる傾向があった (Metz, 1938, p. 380)。しかしながら、20 世紀末からボザンケとブラッドリーの形而上学の差異を強調する論文が現れるようになり (Sweet, 1996)、近年では、現代の実在論者の一人であるグラント (Iain Hamilton Grant、英、1963–) が、共著者のダナムらとともに『観念論——ある哲学の歴史』において、ボザンケの特に晩年の哲学をシェリングの観念論の系譜に位置づけるなど (Dunham et al., 2011/2014, p. 26)、ブラッドリーの哲学とは異なるものとしてボザンケの哲学を読み直す動きもある。

本稿ではブラッドリーとボザンケの哲学的な差異を扱うものではないが、両者の間にある一つの表面上の、しかし重要な違いとして、ブラッドリーは論争に進んで参加しない人物であったのに対して、ボザンケは 20 世紀に入ってからの哲学の動向に対して広く関心を持ち、積極的なコメントをし続けた点を注記しておきたい。たとえば、1912 年に論集『新実在論——哲学における協働的研究』 (Holt et al., 1912) を刊行したアメリカのペリー

(Ralph Barton Perry、米、1876–1957) やホルト (Edwin Bissell Holt、米、1873–1946) らによる新实在論の議論に対する応答をボザンケは早くも翌年の『心と対象の区別』(Bosanquet, 1913)で行っている。さらに、1917年の論文「实在論と形而上学 (“Realism and Metaphysics”）」(Bosanquet, 1917. 以下文献指示はRMと略記)では、新实在論に続いて現れていた「批判的实在論」を議論の俎上に載せている。また彼は实在論だけでなく、同時期にイタリアで生じていた「新観念論」についてもその動向を追い続けていた。そして、彼の生前最後の著作である『現代哲学における両極の一致 (*The Meetings of Extremes in Contemporary Philosophy*)』(Bosanquet, 1921. 以下本文では『両極の一致』と表記し、文献指示はMEと略記)において、ボザンケは、实在論と観念論の各陣営の議論を多角的に検討しながら、二つの陣営の対立は、ある条件のもとでは、最終的には収束をしていき、「両極の一致」を示すであろうと主張するに至る。

では实在論と観念論の動向を追い続けたボザンケはどのような条件において両極の一致がありうると考えていたのだろうか*1。彼は、二つの陣営の収束がありうるとすれば、それは両陣営が「経験」に対して開かれた態度において向き合う場合だとしている。ボザンケは次のように述べている。

要するに、実際の経験を、丹念にかつ適切に分析するならば、また、物事を単純明確かつ具体的に見つめ、それらの含意を慎重さと共感をもって解きほぐすならば（たとえば私はホホワイトヘッド教授の『自然という概念』を念頭に置いている）、宇宙の成員どうしの間にはあるつながりが存在し、そのつながりには「精神が創造する」や「精神が発見する」「センサ [sensa 感覚されるもの] が存在する、しない」「セ

*1 ボザンケは序文で、現時点での实在論と観念論の一致した主張の例として、時間を究極的な实在であるとする点や（人類の）無限の進歩を信じている点などを挙げている (ME viii)。これまでこの著作が取り上げられる場合もこの点が注目される傾向があった (cf. Sweet, 2007; Armour, 2007)。これらの論点はたしかに『両極の一致』後半で主題にはなっている。だがそれらはあくまで著作内の議論の一部であって、また、ボザンケはこれらの一致した主張に関しては否定的でもあった。ボザンケの实在論と観念論の評価を、彼が肯定的に捉えていた点も含めて明らかにし、彼自身の思弁哲学の主張を見極めるためには、前半部も含めた『両極の一致』の多層的な議論を精査する必要がある。本稿はそのための一作業をなすものである。

ンサは「心」に依存している、独立している」「センサは心的である、物的である」「物は空間内に位置している、位置していない」といった表現では十全に表されることのないような避けがたい相補性を示すさまざまな性質があることが分かるだろう。(ME x. [] 内は引用者による補足。以下同様)

ここでボザンケは、経験の徹底的な分析を行うのであれば、实在論と観念論に関する多くの対立点は解消されうることを主張している。この主張を裏返して考えてみるならば、互いに対立しあっている当時の实在論と観念論に対してボザンケは、そのいずれも現状では経験の分析が不徹底であると考えていたことが分かる。

さて、ここでようやくだが、ボザンケ自身の哲学について触れることにしたい。ボザンケは、实在論と観念論の動向に対して積極的な発言を行うようになる1910年代から、自身の立場を（あまりに主観的観念論の印象が強くなりすぎた「観念論」の語を避けて）「思弁哲学 (speculative philosophy)」と呼称するようになる。彼が当時の实在論と観念論について論じ続けたのも、その理論的な対決を通して自身の「思弁哲学」の立ち位置を明確にしようとしていたからにはほかならない。ボザンケの思弁哲学がどのようなものであったか、次節以降の議論を先取りして述べておけば、それは「経験」を深め広げることで实在へとアプローチする哲学であり、彼はこのような思弁哲学を、対立しあう従来の实在論と観念論を超克、あるいはこう言ってよければ「止揚」するものとして構想していたのである*2。

本稿で試みたいのは、ボザンケの思弁哲学の構想について、世紀転換期の

*2 ボザンケの哲学の中心に「経験」があることはこれまでさまざまな研究で指摘されている (Cunningham, 1926; 大島, 1931; Mander, 2011)。これらの先行研究においては、『個人と価値の原理』(The Principle of Individuality and Value, 1912) などの著作とそれ以後の著作の連続性を前提とした議論がなされているが、しかし晩年の『両極の一致』では『個人と価値の原理』での使われていた「中心的経験」や「個の原理」の語が使われておらず、「絶対者」の語さえも議論の前景には出てきていないなど、見逃すことのできない差異も存在する。そのため、晩年の思弁哲学とそれ以前の哲学との(非)連続性については慎重な検討が別途必要であるように思われる。この検討については別の機会に譲ることとし、本稿では1913年以降のボザンケの哲学に考察の範囲を絞ることとする。

実在論と観念論に対する彼の評価から考察することである。1923年の死によって彼の思弁哲学の構想は中断されており、その最終的な主張は必ずしも明確ではないのだが、彼が当時の実在論と観念論をどのように評価し、そしてその議論に何が足りないと考えていたのかを明らかにすることで、彼の思弁哲学が目指していた方向性を浮き彫りにすることはできるだろう。本稿では、当時の哲学の潮流のうち、特にイタリア新観念論、英米の新実在論、批判的実在論に対する彼の評価を扱い、さらにこれらに加えてホワイトヘッド (Alfred North Whitehead、英、1861–1947) の哲学も取り上げる。先の『両極の一致』からの引用の中で、ボザンケはホワイトヘッドの『自然という概念 (*The Concept of Nature*)』 (Whitehead, 1920. 以下文献指示はCNと略記) を経験の理想的な分析の例として挙げていたが、同書の別の箇所でもボザンケは彼の哲学を「最も具体的な実在論」の一つとみなし高く評価している。ボザンケのホワイトヘッドに対する評価を確認することは、従来の実在論や観念論に不足していた視点や、ボザンケの思弁哲学が目指していたものを理解するうえでも重要であることを以下の議論では示してみたい*3。

本稿の議論は以下のように進められる。まずはボザンケが「思弁哲学」を掲げるようになった時期の著作の記述をもとに、思弁哲学の基本的性格およびその哲学史的な背景を、独断論と批判哲学との違いから確認する (第2節)。次いで、ボザンケの新観念論、新実在論、批判的実在論の評価と批判を「センサ」「物」「物理的対象」という三つの存在の区別を導入しつつ概観する (第3節から第5節)。そして最後に、ボザンケによるホワイトヘッド論を取り上げ、ボザンケがホワイトヘッドの議論を、限界もあることは認めつつも、従来の実在論と観念論の対立を止揚するものとして見ていたことを確認する (第6節)。

*3 ボザンケとホワイトヘッドの哲学の近さを示唆しているものとしては先に触れた Dunham et al.(2011/2014, p. 190) がある。彼らの研究は観念論史の大きな文脈の中に、シュリングやボザンケの観念論、そしてホワイトヘッドの後期形而上学などを位置づけようとするものであるが、それに対し本稿では、ボザンケによるホワイトヘッドの中期自然哲学の解釈を、世紀転換期の実在論および観念論に対する彼の評価と関連づける形で扱う。

2. 経験による実在の探究としての「思弁哲学」の系譜

ボザンケの考える「思弁哲学」とは、第一にはポスト・カント主義の哲学、ヘーゲルらの「ドイツ観念論」およびその精神的系譜に属している哲学のことを指している*4。ボザンケは、晩年の著作のなかで繰り返し、ポスト・カント主義の哲学に対する従来の誤解を解くことによって「思弁哲学」の基本姿勢を説明している。本節では以下、「実在論と形而上学」『両極の一致』さらに『含意と線形推理』（Bosanquet, 1920）の記述をもとに、この思弁哲学の主張と哲学的な位置づけを見ていくことにしよう。

2.1 思弁哲学は経験の哲学である

ボザンケによれば、ヘーゲルらのポスト・カント主義哲学は、究極的な原理を想定してそこからの演繹によってすべてを説明する哲学であるとしばしばみなされ批判を受けてきた。しかし、このような批判は彼らの哲学に対する誤解からくるものである。原理からの演繹的な議論を行っていたのはカント以前の独断論的な合理主義の哲学であって、この方法論こそカントが批判し、その後の観念論者たちが脱却していったものだからだ（Bosanquet, 1920, p. 109; RM 9; ME 63）。むしろカント以降の哲学の方法論は、そうしたかつての演繹的な議論からあらゆる形態の経験の収集や総覧、その意義や含意を分析、精査するものへと変化していったのである（ME 63）。思弁哲学者は、あらゆるタイプの経験——感覚知覚の経験だけでなく本能的・感情的経験や宗教的経験などを含む（ME 65–66）——を取り集めつつ、さらにその経験内容について「思考（thought）」による分析を加え、その含意を解きほぐすことによって、経験を拡張し組織化を行う。ボザンケは、思弁哲学者たちの基本的姿勢は「より多くの経験」（ME 2）を求めること、あるいは経験された諸物を「経験が最も豊かに発展した地点」で扱おうとすることであると説明している（RM 9）。

*4 ただしボザンケはこの思弁哲学者の系譜はプラトンにまで遡ることができると考えている（cf. Bosanquet, 1913, p. 56; ME 2）。

2.2 思弁哲学は実在の探究である

ボザンケの考える思弁哲学は、カント以前の独断論的な合理主義ではない。この点を指摘しつつ、さらに彼は、思弁哲学は知の可能性を問うカント主義的な哲学でもないことを強調している。ボザンケによれば、むしろ思弁哲学の主題は形而上学にあり、「実在の直接的な探究」にあった (RM 6)。

では、実在の探究という主題と、さきほどの経験の探究という姿勢はどのように結びついているのだろうか。この点に関するボザンケの考えは、ポスト・カント主義の思弁哲学は「われわれは実在を知りうるのか」という問いではなく、「われわれが知っている実在的なものは、より仔細に見るならば、どのようなものなのか」という問いに答えようとするものだ、という言葉によく表れている (RM 14)。後者の問いの表現においては、われわれのうちで実在はすでに知られているものとして想定されていることに注意されたい。ボザンケによれば、思弁哲学者は、われわれが経験しているあらゆるもの——たとえばセンサや「物」や外的世界や自然——の存在を受け入れるところから出発する。ここで彼が著作の中でたびたび用いる「一見の、一応の」(prima facie) という語を利用するなら、経験されているさまざまな対象や性質を「一応の」実在として受け入れる。しかしそれらを孤立させたまに最終的な実在と性急に結論づけることはしない*5。経験やその内容に分析や反省を加え、最初の経験の対象の条件を明らかにし、それを他のさまざまな対象と共により大きな文脈に位置づける。思弁哲学者は、そのような「思考」の過程を通して、真の実在、「実在的全体」を追求する (ME 3)。ボザンケの考える実在とは、われわれの経験のうちで知られてはいるが、思考による分析を通してその全体性を明らかにするものであり、また、思考のうちで「経験がわれわれに肯定することを強いてくる」ものであった (ME 204)。

以上をまとめるならば、われわれの経験するものもまた実在であると認めつつ、経験の包括的な分析を行うことで究極的な実在、実在的全体にアプローチするというのが、ボザンケの考えるポスト・カント主義の哲学であ

*5 「思弁哲学は、その一見したところの本性 (its prima facie nature) のうちで独立し、揺らぐことなくどまっているものを残しはしない」 (RM 11)

り、彼が「思弁哲学」と呼ぶものの性質である*6。

この思弁哲学の運動、「思弁的運動」(speculative movement)とでも呼べるものが形成され盛り上がりを見せたのが18世紀から19世紀にかけてのドイツであった。ヘーゲルらによって起こったこの運動は、その後カント主義的な認識論への回帰が起こったことをきっかけに、その活動の場をドイツから英語圏に移すことになる(RM 6-8)。グリーン(Thomas Hill Green、英、1836-1882)やブラッドリーなどのイギリス観念論者たちはこの思弁的運動の継承者であった。以上のような歴史認識のもと、晩年のボザンケは、「思弁哲学」を掲げて、ポスト・カント主義の哲学を引き継ぐ一人としての自己の立場を改めて明確にしようとしており、この立場から当時の新たな実在論や観念論の動きに対して応答を試みているのである。

3. 思弁哲学と新観念論

以上、思弁哲学の基本的性格を、その哲学的背景と共に確認した。このことを踏まえたうえで、以下では、観念論と実在論のさまざまな立場に対するボザンケの評価と応答を見ていくことにしたい。思弁哲学者であるボザンケが、世紀転換期の実在論や観念論に対して、「経験」およびその対象をどのように扱っているか、という観点から評価を下しているのを見ていこう。

本節では最初にボザンケによる新観念論に対する評価を見ていくことにしよう。20世紀初頭、当時のイタリアでは、ジョバンニ・ジェンティーレ(Giovanni Gentile、伊、1875-1944)やクロッチェ(Benedetto Croce、伊、1866-1952)らによる「新観念論」の動きが起っていた。ボザンケの理解するところでは、ジェンティーレらによるイタリアの新観念論は、自己創造的な「思考(thought)」ないし「思考作用(thinking)」こそが唯一の実在で

*6 ダナムらは、ボザンケの観念論を『両極の一致』の表現を用いて「巨大スケールの経験論」(ME 182)であると表現している(Dunham et al., 2011/2014, p. 205.)。たしかにこの名称は、ボザンケの立場を表現するのに最適なもののようにも思える。ただし、同書でのボザンケは「巨大スケールの経験論」という名称を、自身の最終的な立場とは異なる立場を指すために否定的に使用しているため、この名称でもって彼の哲学を表現するには慎重であるべきだろう。

あり、創造者、究極の原理であると主張する観念論である (ME viii)。この観念論をボザンケはどのように理解し、そしてそれに対して、いかなる評価を下していたのだろうか。

一見したところ観念論の立場を共有する新観念論とボザンケの思弁哲学は近い思想であるようにも思える。しかしそうした印象に反して、ボザンケは「思弁哲学」と「新観念論」の差異を繰り返し強調している。『両極の一致』の冒頭箇所を引用しよう。

たしかに、「現代的」観念論者ないし「新」観念論者は、実在の創造者であり条件、唯一本来のタイプとしての思考——現実的思考作用——を主張しているが、別の観念論が存在すること、少なくとも、等しく思弁哲学という名をかかげ、[にもかかわらず] 新観念論者から拒否されており、新実在論者への支持を訴えることもありうるような、ある哲学的な立場が存在することを心にとどめておくべきだろう。(ME 1-2)

引用でのボザンケは自らの「思弁哲学」は新観念論とは別の観念論であると言い、そしてこの観念論は、新観念論よりむしろ新実在論と親和的な観念論であると述べている。こういった記述からも示唆されているように、『両極の一致』でのボザンケは一貫して、新観念論の主張に対して批判的であり、むしろ新実在論への共感を繰り返し語っている。ではその評価を分けているのは何なのだろうか。この点を理解するうえで鍵になるのが「経験」である。

ジェンティーレらの新観念論は、あらゆる経験をすべて唯一の究極の原理である「思考作用」へと還元してしまい、個々の存在者はこの思考作用による被造物であるとみなす。このような思想が行き着く先をボザンケは、「宇宙なき統一 (the unity without the universe)」という言葉で表現している (ME 159)。ここでの「宇宙」は実在物から想像的なものまでを含めた存在者の総体を指している (cf. ME 177)。新観念論は、あらゆる経験を一足で飛び越えて真の実在としての思考作用を論じる。この思考作用はすべてを統一する原理ではあるが、その思考作用は、統一されるべき存在者、本来経験において出会われる存在者たちを持っていない。つまり、統一の原理はあ

るが統一されるべき宇宙が欠けている。まさにこの点が、ボザンケの思弁哲学と新観念論が相いれない根本的な点であった。多様な経験の収集・分析を通して全体としての実在へとアプローチする観念論として「思弁哲学」を掲げ、この意味での観念論こそヘーゲルらから継承した最良の形での観念論であると考えるボザンケからすれば、ジェンティーレらの考える新しい観念論はむしろ理論的に後退しているとさえ見えていたようだ。

経験の観点から見た、実在論と観念論、そして思弁哲学の位置づけを明確にするため、もう一つ同じ第一章から引用をしておこう。

自然への愛と充足した経験への憧れに靈感を受けた者は誰でも、私が思うに、安んじて新観念者から新実在論者へ、あるいはより古いかつての、より堅固な観念論者へと転向するはずである。その者は、あらゆる形態の経験を一つのタイプないし種類へと還元しようとする傾向に強く反発するのだ。(ME 3)

「経験」を求める者、あるいは、経験の対象となる自然を愛する者は、新観念論には満足できず、自ずと新実在論か古い観念論（ポスト・カント主義的観念論）の立場に移行するはずだ、と主張されている。ここでもやはり、ボザンケは新観念論よりも新実在論を評価している。なお、引用では新実在論と古い観念論とが並列されているが、後に見るようにボザンケ自身は、新実在論よりも古い観念論の方が経験をより十全な仕方であげようとされており、経験を重視する者なら最終的に、この古い観念論に行き着くはずだ、と考えている。言うまでもなく彼の「思弁哲学」は、新観念論および新実在論を経由したうえで回帰していく、この観念論に相当している。では実在論の議論に対してボザンケは何が不足していると考えていたのだろうか。この点を理解するためにも、次節からボザンケの実在論に対する評価を見ていくことにしよう。

4. 新實在論に対する評価と批判

4.1 新實在論者による批判への反論

實在論のうち本節ではまず新實在論に対するボザンケの評価を確認する。ボザンケは新實在論者として、ペリーやホルトラアメリカの「6人組」(the Six)とイギリスのサミュエル・アレクサンダー (Samuel Alexander, 英, 1859-1938)*7を想定している (ME viii)。彼らの實在論は、一つの思想としてまとめることが難しいほど論者ごとにその主張が異なっているが、従来の観念論の認識論に偏った議論を批判し、認識から独立した事物の實在を認める点においてはおおよその意見が一致していると言えるだろう。ボザンケ自身は、心を有限な物の創造者や構成者として考えるのではなく、さまざまな物とともに宇宙の要素として併置する立場が新實在論であるとも説明している (Ibid.)。

ボザンケはこの新實在論の立場をどのように理解していただろうか。まず観念論を認識論偏重の立場とみなす理解については、すでに前節で見た理由からボザンケは誤解であるとしてそれを退けている。新實在論者たちが批判の対象としているポスト・カント主義の観念論者たちは、そうした認識論からの脱却をこそ試みたのである。『新實在論』の刊行直後に書かれた『心とその対象の区別』では、新實在論者たちの批判からグリーンやブラッドリーを守るための論陣が張られている (Bosanquet, 1913, pp. 51–60)。こういった議論を見る限りではボザンケは新實在論に対して否定的であったように見え、実際著作集の編者であるスウィートも、ボザンケは新實在論の主張を徹底して退けたと述べている (Sweet, 2007, p. 20)。だが、こうした理解は後の「實在論と形而上学」や『両極の一致』の議論まで考慮に入れるならば正確ではない。というのも、ボザンケは新實在論の観念論批判そのものについ

*7 アメリカの新實在論の主張については詳しくは概 (2022) を参照。アメリカの新實在論とアレクサンダーの新實在論の主張の異同についても検討すべき点はあるが、本稿では、ボザンケが7人をまとめて「新實在論者」として扱っていることを重視し、この立場全体に対する彼の評価を確認することで、批判的實在論やその他の哲学との評価の違いを明確にすることを目指すことにしたい。

てはそれを誤解として退けながらも彼らの実在論的な主張そのものには一定の理解を示しているからである。

4.2 新実在論者の基本姿勢の評価

では、どういった点においてボザンケは新実在論を評価しているのだろうか。端的に述べるならば、新実在論者の多様な存在者を認める態度と経験の多様なアプローチとを彼は評価している。

『両極の一致』でのボザンケは、アメリカの新実在論者のうちでは特にホルトの哲学を評価している。『新実在論』所収の彼の論文を参照しながら、物的なものも心的なものも、論理的なもの、真も偽も「宇宙」(the universe)の要素として認める彼の主張に対しては共感を示しており (Holt, 1912, p. 372; ME 11, 29)、あらゆるものをまずはすべて受け入れる、という姿勢において「思弁哲学者」という呼称は(昨今の観念論者よりも)新実在論者にこそふさわしいように思える、とさえ彼は述べている*8 (ME 10)。

加えて、ボザンケは、新実在論の哲学者たちが「界面説 (cross-sectionist doctrines)」や「行動主義 (behaviorism)」など、各々の立場を取っている点についても、それらが、「内観」(introspection)とは違う仕方では経験を「探査 (inspection)」する大胆なアプローチであるとしてその意義を認めており、思弁哲学者もその探究の成果から得るものがあると考えている (ME 20)。

4.3 新実在論者に対する批判点

このように新実在論者の基本的な姿勢についてはボザンケはそれを好意的に受け止めている。彼は新観念論には欠けていた「宇宙」(多様な存在者の総体)と具体的な経験の分析とを新実在論のうちに見出していたと言うこともできるだろう。とはいえ、ボザンケは新実在論の主張に全面的に同意している訳でもなかった。新実在論は多様な存在者を実在として認めてはいる

*8 ただし、この言葉の後に「もし新実在論者たちが、そのすべてのものを本来の場所に位置づけたままにして、両立しあわない諸性質をコンパクトさ (compactness) に圧縮しさえしなければ」という留保が付く (ME 11)。

が、それらの存在者を心から独立したものと考えるために、その存在者どうしの関係性の位置づけに問題を抱えている、とボザンケは見ていた。

ここで話が少し迂回する形になるが、ボザンケの新實在論に対する批判のポイントを見通しやすくするためにも、彼が議論の前提としている三つのタイプの存在者の区別を『両極の一致』から取り出ししておくことにしたい。この区別は、後の批判的實在論やホワイトヘッドの哲学に対する評価を整理するうえでも重要になるものである。

ボザンケは『両極の一致』第一章の冒頭でムーア (George Edward Moore、英、1873-1958) の「観念論論駁」(“The Refutation of Idealism,” 1903) を取り上げて、ムーアの想定に反して、本来の思弁哲学は、椅子などの物やその感覚的な現れが存在することも、また椅子が物理学的に見れば電子などの存在から成ることも認める立場であることを強調している (ME 3-7)。このような主張を行うボザンケは、同書の続く議論において (必ずしも明示的ではないものの) 三つのタイプの存在者、つまり、①色などの個々のセンサ (sensa)、②椅子などのわれわれが日常的に知覚し把握している「物 (thing)」、③科学が扱うような分子や電子などの物理的対象 (physical object)*9 を前提としながら、各實在論者たちがこれらをどのように位置づけているかを論じている。

以上のような三つのタイプの区別を想定したうえで、ボザンケの新實在論の批判を見ていくことにしよう。まずはセンサについてだが、ボザンケの理解するところでは、新實在論者たちは、これを物的 (physical) で自己現存的 (self-existent) なものとみなしている。つまり、われわれが見る形や色などは、それ自体としては知覚から独立した存在であるとされる。さらに、「物」についても、知覚から独立した無数の性質を持つ複合体として彼らは理解している。たとえばキンポウゲは、真昼の光のもとでは黄色に見え、闇夜では黒く見えるだろうが、新實在論の立場から考えるならば、花という「物」が、知覚から独立した黄色や黒を性質として持っていることになる。ボザンケ

*9 『両極の一致』でのボザンケは「物理的対象」の語を批判的實在論の議論を意識しながら使用しており (ME xv)、これをホワイトヘッドの「科学的対象 (scientific object)」と重ねて理解している (ME 144)。

は、さまざまなセンサが「自らの権利において」存在していることを認めているが (cf. ME 2)、新实在論者がセンサを知覚や思考から独立した物的なものとするのは行き過ぎであると考えており、また、物についても、知覚や思考を行う心との相対性なしで考えようとするために、矛盾しあう性質を含んだ複合体になってしまっている点を問題であるとみなしている (ME 10, 19)。さらにボザンケは、センサを物的で自己現存的なものともみならず新实在論者は、そのセンサと科学の研究において要請される物理世界 (物理的対象から成る世界) との連続性について、示唆をしているだけで合理的な説明はできていないとしている (ME 10-11)。

まとめると、新实在論のあらゆる存在を宇宙の要素として認める点と経験の多様なアプローチについては評価しているが、センサと物と物理的対象などの宇宙内の要素の関係性についての体系的な説明ができておらず、またセンサや物を知覚や思考から独立させて理解しているために、その議論に無理が生じている、というのがボザンケの新实在論に対する評価であった。『両極の一致』の後半でボザンケは——これは特にアレクサンダーについて論じている文脈でだが——彼の新实在論を「統一なき宇宙 (the universe without the unity)」を捉えたものとして語っている (ME 159)。この評価はアメリカの新实在論にも当てはまるだろう。新实在論は「宇宙なき統一」に行き着く新観念論とは反対の苦境に陥っているのだ。

5. 批判的实在論に対する評価と批判

次に、新实在論に続いてアメリカに登場した批判的实在論に対するボザンケの評価を確認することにしたい。彼は『両極の一致』のなかで、1920年の『批判的实在論論集——知の問題についての協働研究』(Drake et al., 1920)を参照し、この实在論についての批判的な検討を行っている。

批判的实在論は、端的にいえば、新实在論が実在とみなしている「性質群 (quality-group)」、つまり現れを実在からは明確に区別する实在論であり、認識論の問題に立ち戻る实在論である。ボザンケが論文を参照しているジェイムズ・ビセット・プラット (James Bissett Pratt、米、1875-1944) は、批判的实在論を、意識に対して現れている性質群とその原因である知覚

対象とを区別したうえで、前者を後者の現前を知るための「手段」として扱う実在論であると説明している (Pratt, 1920, p. 97.)。「性質群」は「本質 (essence)」とも呼ばれ、これらは意識においてのみ存在する。それに対し、それ自体で存在する実在は「現存 (existent)」とも呼ばれる。どのような用語を使うにせよ、批判的実在論者は、本質 (性質群) のグループを現存のグループから明確に区別し、そのうえで、われわれの知の成立条件を問題とする。

さて、ボザンケはこの批判的実在論をどのように評価しているのだろうか。この点を明確にするために、ここでさきほどの、「センサ」と「物」と「物理的対象」の区別を改めて持ち出すことにしよう。あらかじめ述べておけば、ボザンケは、この三つの対象の区別を批判的実在論の「本質」と「現存」の区別に結びつけながら、センサと物の扱いについては批判的実在論を評価しつつも、物理的対象の扱いに関しては批判を行っている。

新実在論は、センサを自己現存的、つまり知覚から独立したものと考え、「物」をそのようなセンサの複合体とみなす。それに対して、ボザンケの理解する限りでの批判的実在論は、「物」とそのさまざまな現れを、他の物や知覚の働きの全体的な文脈において考える。新実在論が矛盾しあう無数の性質を一つの「物」に押し込めてしまうことを問題視していたボザンケは、知覚者を含む全体の文脈において物を理解する批判的実在論の態度を——この点に限って言えばブラッドリーの哲学にも通ずるものがあるとしながら——センサと物に関する新実在論の行き過ぎを修正するものとして一定の評価をしている。

「物理的対象」の扱いについてはどうだろうか。ここで「本質」と「現存」の区別が問題になる。ボザンケの解釈では、われわれの意識に対して現れ、経験の対象となっているセンサや物は「本質」(性質群) に属している。他方で、科学の扱う物理的対象は批判的実在論が主張するところの「現存」である (ME 128, 131)。「本質」としてのセンサや物は意識に対して存在しているが、それ自体で存在するものではない。他方で、「現存」としての物理的対象は、真の実在であり経験の原因でもあるが、それ自体として経験に現れることがない (ME 138–139)。新実在論は、センサと物理的対象の世界の連続性について説明に成功していないという問題があったが、そこで、その

二つをあえて切り離すことを選んだのが批判的实在論であるというのがボザンケの見方であった。

ボザンケが批判的实在論に対して強い異議を向けるのは「現存」と「本質」を隔絶させ、前者を後者の原因としてのみ扱うこの態度に対してである。現存は本質から原理的に切り離されていた結果、外的世界（物理的世界）の实在はわれわれの経験を超越したアクセス不可能なものになってしまう。また、われわれが経験しえたものはいずれも本質であるとされることで、現存は常に経験からは逃れていく、具体的な内容を欠いた空虚なものになる。批判的实在論の考える物理的対象としての現存は結局のところ「物自体」ないし「ヌーメノン」(ME 138)であって、そのうえで知の可能性を論じる批判的实在論は、实在論によるカント主義の回帰とボザンケには見えていた。この理由から、1917年の「实在論と形而上学」でのボザンケは、批判的实在論を思弁哲学にとっての「敵」としてとさえ言っている*¹⁰ (RM 12)。こうした批判的实在論とは対照的に、ボザンケの構想する思弁哲学は实在を探究する形而上学であって、センサや物も物理的対象も宇宙に含み入れ、経験される性質群（本質）のうちにも「展開する全体」(ME 149)としての实在のある仕方での現前を見て取ろうとする哲学であった。

新観念論は「宇宙なき統一」に行き着き、新实在論は「統一なき宇宙」に行き着く。批判的实在論は、宇宙を共に構成するはずの要素の間にボザンケから見れば不必要な断絶を作ってしまう。ボザンケが实在論と観念論に対する各立場に対する以上のような限界を見ていたことを踏まえ、次に、彼がホワイトヘッドの哲学に見ていた可能性を確認することにしてしよう。

*¹⁰ より正確には、『両極の一致』でのボザンケは、『批判的实在論論集』の議論を踏まえて、批判的实在論の議論には、現存をカント的な「物自体」としてしまおうような主張と、それを回避するような主張が混在している、ないし使い分けているという解釈しており、この点で「实在論と形而上学」の時点よりも慎重な解釈が示されているが、批判的实在論の基本的な姿勢に対して否定的である点は一貫している。

6. 「最も具体的な実在論」としてのホワイトヘッドの評価

第1節で引用したとおり、ボザンケはホワイトヘッドの『自然という概念』のなかに経験の分析の理想的な例を見出していた。『両極の一致』の第一章での彼は同書について一節を割いて論じている。思弁哲学の主張を明らかにするためにも、以下では、まずボザンケの関心に沿う形でホワイトヘッドの「自然の二元分裂批判」と「システムとしての自然」という二つの主張を取り上げ、次にその哲学的主張に対するボザンケの評価を見ていくことにしたい。

6.1 自然の二元分裂批判

ボザンケが参照している『自然という概念』は、ホワイトヘッドの中期の著作であり、この著作での彼は、「自然の二元分裂」を避ける仕方で、自然科学が研究する「自然」とは何であるかという問題に取り組んでいる。「自然の二元分裂 (the bifurcation of nature)」というのは、われわれの感覚する色や音、匂いなどに満ちた「現れる自然 (apparent nature)」と、電子や分子などの科学的対象から成る「因果的自然 (causal nature)」の二つにわれわれの自然観が分裂した状態を意味している (CN 30-32, 藤川訳 pp. 35-37)。『自然という概念』を含む中期ホワイトヘッドの課題は、「現れる自然」と「因果的自然」とに自然を分裂させて後者を前者の原因とみなすような自然観に抵抗し、分裂を生じさせない仕方で、科学にとっての自然とはどのようなものでなければならないかを論じることにあつた。

この課題に取り組むにあたって、ホワイトヘッドは、認識する心と認識される自然との関係をめぐる形而上学的な議論に入り込むことはしないことをあらかじめ断ったうえで、感覚覚知 (sense-awareness) に開示される自然を「出来事 (event)」や「対象 (object)」といった概念を用いて分析する方法を取っている。『自然という概念』での彼は、この方法でもって、センサや、日常において出会われるような物、そして電子のような科学的対象^{*11}

*11 本稿の註9で述べたとおり、ボザンケはホワイトヘッドが「科学的対象 (scientific

をいずれをも自然の要素とみなして、その存在者間の相互関係の解明を行っている。

6.2 システムとしての自然

さらに、ホワイトヘッドは、感覚覚知に現れる自然は、孤立した物質の寄せ集めではなく、一つの「全体」ないし「システム」であるとも主張する。われわれは（センサを含む）個別の対象をバラバラに認識しそれを推論でもって結び合わせているのではない。われわれの前には一つの全体的な生起、出来事としての自然があり、われわれはその自然のうちにあるものとして個々の存在やそれらの関係性を識別している。たとえば「青」を知覚するとは、青という感覚的对象とそれが進入している状況としての出来事、そして知覚者という出来事（観察者の身体）、その他の諸出来事の関係性を知覚することなのである（cf. CN 152, 藤川訳 pp. 171–172）。

『自然という概念』でのホワイトヘッドは、この著作は形而上学を主題とするものではないため哲学者たちのように「実在は一つのシステムである」とは主張しない、あくまでここでは「自然は一つのシステムである」というより控え目な主張にとどめておき、この主張については自然よりも大きなものを扱う哲学者たち（おそらく観念論者たちのことも念頭にあるだろう）も同意してくれるはずだ、という趣旨のことを述べている（CN 146, 藤川訳 pp. 164）。

6.3 ボザンケのホワイトヘッドに対する評価

以上が、ホワイトヘッドの『自然という概念』における、特にボザンケが注目している主張である^{*12}。ボザンケは、自然を多様な存在者を内包する

object)」と呼ぶものを「物理的对象」と呼んでいる（ME 144）。ホワイトヘッド自身は日常に出会う「物」を「知覚的对象（perceptual object）」と呼び、「物理的对象（physical object）」を知覚的对象のうち幻覚でない対象を表すのに使用している（CN 155–156, 藤川訳 pp. 176–177）。

^{*12} なお、本稿では扱うことができないが、この他に『両極の一致』でのボザンケは、相対性理論の問題にも関心を示しており、観察者の問題をめぐるホワイトヘッドの記述を参照している（ME 14–16）。

システムとみるその哲学を「真理は全体である」というヘーゲル的な原理を内包した「最も具体的な实在論」(ME 16)であると称してこれを高く評価している。なぜ、彼はそこまで評価するのだろうか。それはおそらくボザンケの目に、ホワイトヘッドの議論が、新实在論や批判的实在論の(さらにいえば新観念論の)抱えていた問題を乗り越えるものとして映っていたからだと考えられる。この点について、センサ、物、物理的対象の三つの区別を改めて参照しつつ考えてみよう。

ボザンケは批判的实在論が、本質と現存を分離して、後者は経験されえないが、前者の原因として想定されるものとみなしていたことを批判していた。『両極の一致』での彼は、批判的实在論の主張をホワイトヘッドが「自然の二元分裂」と呼ぶ思想と重ね合わせて理解している(ME 139)。ホワイトヘッドの哲学は、感覚覚知に開示される自然についての分析に徹することによって「自然の二元分裂」を避けて、センサも物も物理的対象もその要素として含む自然を考えるものであって、あくまで主題を自然に限定しているものの、批判的实在論のような断絶を持ちこまない点をボザンケは評価していたといえる。

また、ボザンケは新实在論について、新实在論者があらゆる存在を宇宙の要素として認めている姿勢を評価しつつも、知覚から独立したセンサや物と物理的対象の世界とのつながりを合理的に説明できていない点を批判していた。それに対してホワイトヘッドの哲学は、自然を一つのシステムとして見ながら、センサや物、そして物理的対象を孤立した仕方では扱わず、それらに対してシステム内の整合的な位置づけを与えるものであった。

ボザンケは、ホワイトヘッドが観念論者に目配せしながら、哲学者たちも「自然は一つのシステムである」という自分の主張を受け入れてくれるだろうと述べていた箇所を引用して、これに肯定的に応じるような仕方、経験の直接的かつ公平な仕方での研究はわれわれを「宇宙の統一性 (the unity of the universe)」の認識へと導くことをホワイトヘッドの哲学は示している、とコメントしている(ME 18)。ここでさりげなく使われている「宇宙の統一性」という言葉は、『両極の一致』全体の主張を象徴する言葉である。ボザンケが新实在論の思想を「統一なき宇宙」であるとしており、また他方で、新観念論の思想を「宇宙なき統一」と表現していたことはすでに述べた。

ボザンケは、経験について精緻な分析を行うホワイトヘッドの議論に、新实在論と新観念論をいわば「止揚」する契機を見出しているのだと言える。

ホワイトヘッドの哲学にボザンケが目目していたのは以上のような理由からであるだろう。しかし、ボザンケはホワイトヘッドの哲学にもやはり限界はあると見ていた。そもそもホワイトヘッドの立場は、認識する心と認識される自然をめぐる形而上学的な問題には立ち入らずに自然を扱うというものであって、この態度による探究で得られた洞察も「自然は一つのシステムである」というものである。ボザンケは、ホワイトヘッドの関心が科学哲学にあり形而上学にないことを正しく理解しており、その限りでこの態度の妥当性を認めている。しかし、「实在のシステム (the system of reality)」を探究するなら、心との相関性の問題は避けて通ることはできず、そして経験の探究を続けていくなれば、「心による自然の汚染 (contamination)」（ME 13）があること、つまり、自然には心が混ざりこんでおり、二つの明確な境界線を引くことはできないことが明らかになるはずだと主張している。このような指摘は、ボザンケの思弁哲学が目指すものを示唆してもいる。すなわち、思弁哲学が探究の対象とするのは「实在のシステム」なのであって、そのためにボザンケは、ホワイトヘッドが自然に主題を限定することで到達した「宇宙の統一性」の認識を、心についての考察を含みいれることによって拡張し^{*13}、より十全なものにする必要があると考えていたのだろう^{*14}。

^{*13} ボザンケの死後に『心の本性についての三章』（Bosanquet, 1923）が刊行されている。これは未完に終わった著作の原稿をまとめたものであり、『両極の一致』以後の彼が心の問題に本格的に取り組むつもりであったことを示唆するものである。

^{*14} 2021年に刊行された講義録によると、ホワイトヘッドは1926年の講義の中でボザンケの『両極の一致』に言及している（Whitehead, 2021, p. 187）。1924年以降のホワイトヘッドは自らの形而上学体系の構築に取り組んでおり、ボザンケとは別の仕方ですべて「实在のシステム」の探求を進めつつあった。この時期の彼が1920年の『自然という概念』に対するボザンケの評価と批判をどのように受けとめていたのか、彼が構築した形而上学体系にボザンケからの影響や彼への応答を見出しうるのかについては別の機会に検討したい。

7. おわりに

本稿では、晩年のボザンケの思弁哲学の基本的性格を確認し、彼の思弁哲学の観点からの世紀転換期の实在論および観念論の評価を概観した。ボザンケの思弁哲学は、原理からの演繹を行う独断論でもなければ、「われわれは实在を知りうるのか」を問う批判哲学でもない。経験および思考によるその分析を通して全体としての實在にアプローチしようとする形而上学である。

ボザンケから見た实在論のさまざまな立場の評価は次のようにまとめることができる。新实在論はセンサや物、物理的対象を含む「宇宙」を考えるが、センサや物と物理的対象の世界との連続性を説明することに成功していない。批判的实在論は、センサと物を、他の物や知覚者との全体的な関係においてとらえる視点がある点で評価できるが、本質と現存の断絶を持ち込んでしまっている。ホワイトヘッドの「最も具体的な实在論」は、心と自然の混淆の問題について踏み込めてはいないものの、センサ、物、物理的対象〔科学的対象〕をいずれもシステムとしての自然の要素とみなす点で優れており、経験の精緻な分析がヘーゲル主義的な見解への接近を示すことの良い例となっている。

このように経験において出会われるものの分析を通して实在論が、多様な存在を含む宇宙の統一性の認識に近づいているのに対して、新観念論は、究極的な統一の原理としての思考作用を想定しはするが、その思考作用にすべての経験を還元してしまうせいで、統一すべき存在を無化してしまっている。こういった点に、ボザンケが自らの思弁哲学を、新観念論とは対立するものとみなし、实在論にむしろ近いものとみなしたことの理由があると言えるだろう。

生前最後の公刊著作である『両極の一致』でのボザンケは、かつて、彼自身が最初の哲学的著作『知識と实在——F. H. ブラッドリー氏の『論理学原理』批判』(*Knowledge and Reality, A Criticism of Mr. F. H. Bradley's 'Principles of Logic,'* 1885) で記したことを振り返っている。そこで彼は、ポスト・カント主義者の時代は終わったという当時の風潮に対して「巨匠たちの計画がその実行のため少しずつ職人たちの手に引き継がれつつあるの

だ」とコメントしていた。『両極の一致』でのボザンケは、同時代の哲学の展開を見ながら、自分のかつての言葉がおおむね正しかったことを実感している。しかし同時に彼はグリーン「すべてをやり直さなければならない」という言葉も同じように重要であると言い、今日の議論における地道な掘り下げが、「具体的な仕方での思弁哲学の再構築」につながるだろうと述べている（ME 27）。

ボザンケにとって世紀転換期の哲学、特に実在論を中心としたその展開は、ポスト・カント主義の否定ではなく、ポスト・カント主義者たちの計画したものの具体的な「実行」であり、その「やり直し」の行程だったのである。実在論者たちは、経験の領野を探查しつつ、さまざまな対象を「宇宙」の要素に含み入れるような議論を展開しており、中には、ホワイトヘッドのように「真理は全体である」という観念論の原理に到達している者も現れていた。ボザンケは、こうしたさまざまな「職人」たちの成果を引き継ぎ、「宇宙の統一性」を十全な仕方です捉えようような思弁哲学の再構築を目指していたと考えられるが、結局のところその作業は1923年の彼の死によって中断されることになった。一方で、アメリカの新実在論者や批判的実在論者たちもその協働的活動は長くは続かず散り散りとなり、アレクサンダーやホワイトヘッドは、各々独創的な形而上学の体系を作り上げたが、多くの人の理解を得られたとは言えず、その後長く哲学史上の孤立した存在として扱われることになる。観念論の動向にも眼を向ければ、イタリア新観念論のジェンティーレはクロウチェとの思想的な対立を深めながらファシズムの思想家へと変貌していく。

計画は頓挫したかに見える。しかし21世紀の現在、ヘーゲルらの観念論の新たな読み直しが進みつつあり、また実在論の議論がふたたび盛り上がりを見せている。こうした現代の哲学の展開は、あるいはそこに至るまでの20世紀の哲学の過程は、ボザンケが「計画」と語ったものの実行、またはその「やり直し」として解釈できるのだろうか。それとも何か根本的に異なる計画の考案や実行と見るべきなのだろうか。ここではこの問いは開いたままにせざるを得ない。

文献

- Armour, L. (2007). The balance of extremes: Metaphysics, nature, and morals in the later philosophy of Bernard Bosanquet. In W. Sweet (Ed.), *Bosanquet and legacy of British idealism* (pp. 147–177). Toronto: University of Toronto Press. <https://doi.org/10.3138/9781442684058-009>
- Bosanquet, B. (1913). *The distinction between mind and its objects. The Adamson lecture for 1913 with an appendix*. Manchester: University Press.
- Bosanquet, B. (1917). Realism and metaphysics. *The Philosophical Review*, 26, 4–15. [=略号 RM] <https://doi.org/10.2307/2178285>
- Bosanquet, B. (1920). *Implication and linear inference*. London: Macmillan.
- Bosanquet, B. (1921). *The meeting of extremes in contemporary philosophy*. London: Macmillan. [=略号 ME]
- Bosanquet, B. (1923). *Three chapters on the nature of mind*. London: Macmillan.
- Cunningham, G. W. (1926). Bosanquet on philosophic method. *The Philosophical Review*, 35, 315–327. <https://doi.org/10.2307/2178980>
- Drake, D., Lovejoy, A. O., Pratt, J. B., Rogers, A. K., Santayana, G., Sellars R. W., & Strong, C. A. (1920). *Essays in critical realism: A co-operative study of the problem of knowledge*. London: Macmillan.
- Dunham, J., Hamilton, G. I., & Watson, S. (2011/2014). *Idealism: The history of a philosophy*. London: Routledge.
- Holt, E. B. (1912). The place of illusory experience in a realistic world. In E. B. Holt, W. T. Marvin, W. P. Montague, R. B. Perry, W. B. Pitkin, & E. G. Spaulding, *The new realism: Cooperative studies in philosophy* (pp. 303–373). New York: Macmillan Company.
- Holt, E. B., Marvin, W. T., Montague, W. P., Perry, R. B., Pitkin, W. B., & Spaulding, E. G. (1912). *The new realism: Cooperative studies*

- in philosophy*. New York: Macmillan Company.
- Mander, W. J. (2011). *British idealism: A history*. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Metz, R. (1938). *A hundred years of British philosophy*. J.W. Harvey, T.E. Jessop, & H. Sturt (Trans.), J. H. Muirhead (Ed.), London: George Allen & Unwin. (*Die philosophischen Strömungen der Gegenwart in Großbritannien*. Leipzig: Felix Meiner Verlag, 1935.)
- Pratt, J. B. (1920). Critical realism and the possibility of knowledge. In D. Drake, A. O. Lovejoy, J. B. Pratt, A. K. Rogers, G. Santayana, R. W. Sellars, & C. A. Strong, *Essays in critical realism: A co-operative study of the problem of knowledge* (pp. 85–113). London: Macmillan.
- Sweet, W. (1996). F. H. Bradley and Bernard Bosanquet. In J. Bradley (Ed.), *Philosophy after F. H. Bradley* (pp. 3–30). Bristol, UK: Thoemmes Press.
- Sweet, W. (2007). Introduction: Rediscovering Bosanquet. In W. Sweet (Ed.), *Bosanquet and Legacy of British Idealism* (pp. 3–30). Toronto: University of Toronto Press. <https://doi.org/10.3138/9781442684058-002>
- Whitehead, A. N. (1920). *The concept of nature*. Cambridge: Cambridge University Press. [=略号 CN] (ホワイトヘッド, A. N. 藤川吉美 (訳) (1982) 自然という概念 松籟社)
- Whitehead, A. N. (2021). *The Harvard lectures of Alfred North Whitehead, 1925-1927: General metaphysical problem of science*. B. G. Henning, J. Petek, & G. R. Lucas Jr. (ed.), Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 大島 正徳 (1931). イギリス理想主義哲学——プラグマチズム 英米新實在論—— 誠文堂
- 大厩 諒 (2022). 新實在論の興亡——ペリー、スポールディング、ホルトを中心に—— プロセス思想, 22, 38–48.

本研究は JSPS 科研費 JP20K00015、JP22K19977 の助成を受けたものです。

第4章 フィーリングの形而上学： 観念論と实在論のあいだ

齋藤 暢人

Keywords: フィーリング（感受・情態・感じ）、意識の流れ、直接経験、根本的経験論、見かけの現在、過程の形而上学、現象学、ベルクソニスム、プラグマティズム、持続、直観、本質、存在

1. はじめに

世紀転換期の英米哲学における観念論と实在論の相克は、多様な主題をめぐって複雑な展開をみせた。その経過を観察すると気づかれるのは、ひとつの概念が思想史の潮流の中に残す一筋の軌跡である。それはフィーリング feeling である。英国観念論とプラグマティズムの背景にはつねにフィーリングがある。そして、この概念そのものが取り立てて注目され、主題化されることはないが、しかし認識論的・形而上学的な思索の諸帰結は、主題である個々の問題への回答であったばかりではなく、同時にフィーリングの正体へと迫るものであったかのようにみえる。この小論では、フィーリングに関心を集中することにより、分析哲学誕生の前夜における形而上学とは何だったのかについて、一つの光を投じてみたい。

「Feeling」には哲学者ごとに異なる訳語が定着していることがある。中立的に用いたいときには「フィーリング」とし、文脈によって感じ、感受（ホワイトヘッド）、情態（パース）などの訳語を用いてゆくことにする。

2. 観念論とフィーリング：ブラッドリー

英国観念論の代表格はブラッドリー（Francis Herbert Bradley、英、1846–1924）である。彼の思弁の出発点となるのは、無味乾燥な概念ではなく、われわれの直接経験である。この立場は主著『現れと实在』（Bradley, 1893/2002）

のなかでも明らかであるが、その姿勢がより直截的に表現されているのは、『真理・実在論集』(Bradley, 1914/2012)に所収の論文「直接経験のわれわれの認識について」(“On Our Knowledge of Immediate Experience,” 初出1909年)である。観念論では感じ(feeling)がどのようなものとしてとらえられているのか、まずはそこから確かめてみよう。

ブラッドリーによれば、私の意識をみたま直接経験、感じは、直接に気づかれるものの全体であり、多の一における、経験された、非関係的な統一である(Bradley, 1914/2012, p. 175f.)。直接経験はあらゆる知的な分析に先立つものであり、主客の対立などの以前のなにかであって、もはや単なる意識状態ではなく、いわば形而上学的な基体である(cf. McHenry, 1992, p. 22)。

このような形而上学的概念としての感じのなかでは何が生じているのだろうか。絶対者ならぬわれわれは感じの有限の中心である(cf. McHenry, 1992, pp. 28-37; Sprigge, 1983)。感じは統一的であるが、そこには内的な差異が無限にありうる(Bradley, 1914/2012, p. 174)。具体的には、摩擦、抗争であり、心理的には意識されない不安、不快さとして現れる。また、直接経験の全体は、一部が現在として、他方は現在ではないものとして感じられるのであり、したがって超越的でありうる(ibid.)。感じなるものはわれわれにとってのすべてでありながらも、そのなかで外的な世界の存在を示唆する。統一体としての感じには関係が含まれてはいないのであるが、そのなかで感じられる多なるものは発達しきらない理念性であり(ibid.)、やがて明確に分離して多様な関係項へと変貌しうる質料である(cf. 遠藤, 1980)。

Manderが述べるように、ブラッドリーはふつう観念論者とみなされるが、このような彼の直接経験論はむしろ経験主義という印象すら与える(Mander, 1994, pp. 10-14)。それゆえ、ブラッドリーの絶対的観念論は、いわゆる唯心論とは似て非なるものだと言うべきであろう。思考と実在とが不即不離であるとする点でヘーゲル的であるが、実在には思考以上のものがあることを認めており(ibid., Ch.2.)、ヘーゲルのように、実在は抽象的なものである、とはしないのである。

このようなブラッドリーの観念論とは、知的反省に先立つ直接経験の質を基礎とし、それをやがて展開すべき諸事物の萌芽と見立てる思想である。直

接経験は一面では現在の主観の心理なのであるが、形而上学的基体としてみるならば時間の経過を超越した何ものかなのである。

3. 実在論とフィーリング：ジェイムズ

このようなブラッドリーの絶対的観念論と鋭く対立するのがジェイムズ (William James、米、1842-1910) の根本経験論である。彼は実在論者であり、ブラッドリーが認めない関係の存在を積極的に主張し、一元論を斥けて多元論を採る。

両者は実際に激しい論争を交わしており、その立場は正反対であるが、直接経験から出発するという点は一致している。ジェイムズは純粹経験という、あらゆるフィーリングを包括する主客未分の状態を指定するが、これにはブラッドリーの直接経験に一脈通じるところもある。

しかし、ブラッドリーとジェイムズのあいだにはやはり根本的な相違があると云わざるを得ない。ブラッドリーにとって時間は、関係と同様、虚妄である。これに対して、ジェイムズはフィーリングを含む直接経験の総体を時間的な流れとしてとらえる。いわゆる「意識の流れ」の説である。また、このような流れとしてのありかたを前提として、われわれの時間意識の本質的特徴が指摘される。それは、現在は瞬間的ではなく、厚みをもっているという「見かけの現在 (Specious Present)」の説である。

3.1 意識の流れ

ジェイムズの『心理学原理』(James, 1890/1950)によれば、われわれの意識には固定したところと流動的なところがあるが、全体は絶えず変化している。そして、同じことを再び同様に経験することは決してできない。他方で、意識は連続的である。同一人物の意識が不連続性を訴えるということはない。まさにこの再現不可能性と連続性が、川のような本物の流れがもつ性格を想起させるのである。

ジェイムズの意識の流れの説は、世紀転換期に登場した他の学派に、英米哲学の枠組みを超えて多大な影響を及ぼした。ベルクソンの哲学、フッサール現象学との親近性が容易に想起されるが、この点については再説する。

3.2 見かけの現在

時間は一方では流れなのであるが、われわれはこれを単なる瞬間の連続とは見ない。ここから、物理的な時間は瞬間の総和として分析できるが、心理学的時間のなかには厚みがある、という説が出てくる (James, 1890/1950)。

この見かけの現在については近年議論が活発であり、Gallagher、Dainton、Zahavi らによって蓄積された研究成果がある (cf. Gallagher, 1998; Dainton, 2003; Zahavi, 2020, Ch.5)。また、Sprigge (1993, Part I, Ch. 4) による研究においても、ジェイムズ哲学のなかでも、その発展に応じていくつかのヴァージョンがありうるとされる。つまり、見かけの現在の研究は現代時間論の入り口のひとつなのであるが、しかしながら議論は複雑であり、ここでこれ以上立ち入るのは難しい。いまは上述のような第一近似で満足しておこう。

3.3 活動性の経験

さて、このような時間論の上に展開されるジェイムズ哲学においては、フィーリングのありかたはブラッドリー哲学におけるそれとは相当に異なる。ジェイムズ自身の表現によれば、その实在論は「モザイク哲学」であり、意識はさまざまな要素から構成されている (James, 1912/1996, Ch.2)。そうしたなかで、フィーリングは、流れとしての意識、その構成単位としての見かけの現在のいわば主成分ということになるであろう。それゆえ、意識全体のもつ動的な性質は、これらのなかにもまた引き継がれている (ibid., Ch.6)。フィーリングは、動的なものとしてとらえ直されることによって、包括的全体を満たす質という、ブラッドリーにおける感じとは存在論的な基本性格において異なるものとなっている。

ジェイムズによって採られた見かけの現在の説は、その後、英米哲学のなかで抬頭してくる实在論の中で重要な役割を果たしてゆく。Sprigge (1999) によれば、ホワイトヘッドとサンタヤーナは、いずれも見かけの現在の説を採用し、それぞれの立場から形而上学を発展させたという。両者の思想を検討してみよう。

4. 実在論の展開とフィーリング：ホワイトヘッドとサンタヤーナ

見かけの現在にホワイトヘッド（Alfred North Whitehead、英、1861–1947）はそれほど言及しないが、サンタヤーナ（George Santayana、米、1863–1952）は明示的に言及している。しかし、以下でみてゆくように、両者の思想には共通点が多い（cf. 遠藤、1996a）。一見極めて特異に見えるホワイトヘッドの過程の形而上学（Process Metaphysics）の体系のなかには、われわれの直接経験の分析に相当するものが含まれており、そこには見かけの現在の概念を読み込むことができる。

4.1 ホワイトヘッド

ホワイトヘッド哲学の特徴はその時間論にある。彼によれば、アリストテレス以来の三次元的な実体は虚構であり、四次元時空連続体こそが実在である。周知のように、英国におけるブラッドリー、マクタガート（John McTaggart、英、1866–1925）らの観念論の支配を打破し、実在論勃興の烽火を上げたのはラッセル（Bertrand Russell、英、1870–1972）、ムーア（George Edward Moore、英、1873–1958）らのケンブリッジの若き哲学者たちであったが、彼らに続いたブロード（Charlie Dunbar Broad、英、1887–1971）、ラムジー（Frank Plumpton Ramsey、英、1903–1930）らを含めて、ホワイトヘッドの時間論は強い影響力をもった。現代時間論における反実体主義の起源のひとつはホワイトヘッドである。

この時間論はホワイトヘッドの初期・中期の科学哲学に関する著作から、後期の形而上学の主著『過程と実在』（Whitehead, 1929/1978）まで一貫しているが、後期の思弁的形而上学においては実在の相互内在、滲透を主張する「有機体の哲学」が展開されるまでに成長してゆく。ホワイトヘッドは、時空の基本構造を与える四次元的な延長を措定し続けるのであるが、存在論のなかに時間の原子論という重要な修正を加える。実在の単位は持続することなく生成消滅する現実存在性（actual entity）であるとするのである。

現実存在性は一般化された感受である抱握（prehension）によって相互関係するが、これによって現実存在性は相互に内在し、そのなかに合生の階層

構造を含む。ブラッドリーは、有限の中心同士が共感し、包括的全体のなかで多が共存すると言うのだが、ホワイトヘッドの形而上学もまた、この点においてブラッドリーのそれに非常に近づいている。実際、ホワイトヘッドはブラッドリーの感じを換骨奪胎すると明言するのである（Whitehead, 1933/1967, Ch.15）。

しかしながら、ホワイトヘッドは抱握によって現在が過去を与件として含むことを認める。このような、消滅したにもかかわらずいまや主体的形式と化して現在に影響し続ける過去は実在的潜勢態（real potentiality）と呼ばれる。つまりホワイトヘッドは過去の存在を認める時間論における実在論者である。他方でホワイトヘッドは実念論者として非実在的、理念的なものの存在を認める。これは永遠客体（eternal object）と呼ばれる純粋潜勢態（pure potentiality）である。潜勢態の区別はいわばある種の無の分析であり、無時間的なものともはやないものとの区別であるが、これが過去の実在を前提することは明らかであろう。

現在と過去がこうして区別される以上、現在とはなにかという問いは不可避なものとなる。それゆえホワイトヘッドは、直接経験論をブラッドリーと共有せざるをえない。具体的には『過程と実在』の知覚論である（Whitehead, 1929/1978, Part II, Ch.8; cf. 京屋, 1991）。ホワイトヘッドによれば、知覚には二つの純粋様相、現在呈示的直接性（presentational immediacy）と因果的効果（causal efficacy）がある。前者は現在であり、いわば宇宙の断面の知覚である。他方で、後者においては、過去が直接に知覚されている。

これらはいずれも知覚の要素ではあるが、その極限的な様態であり、意識には上らない。これらの混合物である象徴的指示（symbolic reference）がいわゆる知覚であり、われわれの日常的経験の世界はこれによって成立している。

このような知覚の分割は、先述の時間論と密に関係する。時間の本来の姿は因果的効果によってしかとらえられない。しかし、そのときには現在は瞬間的なものになってしまう。この瞬間と同時的なものは、因果的に独立なものからなるひとつの持続（duration）を構成するが、これをいわゆる知覚とみなすことはできない。知覚にはより多くの要素が含まれており、したがっ

て複数の持続が関係しなければならない。現在呈示的直接性はそのような複数の持続からなるひとつの場、現在化された場を形成しており、これが見かけの現在にあたる。ホワイトヘッド形而上学においては、このような事情から見かけの現在と真の時間の対比が生じるのである。

4.2 サンタヤーナ

サンタヤーナは『懐疑主義と動物的信（哲学逍遙）』（Santayana, 1923/1955）、『存在の領界』（Santayana, 1942）などで批判的實在論（Critical Realism）の立場から体系的な形而上学を提示したが、そのなかにはホワイトヘッドの過程の形而上学に接近した考えがみられる。『存在の領界』第二巻「物質の領界」第四章「絵画的空間と感傷的時間」における議論である。

サンタヤーナによれば、われわれの日常的な空間である絵画的空間は超越論的である（Santayana, 1942, p. 243）。存在と変化は時間的であり（*ibid.*, p. 253）、直観によって時間的視野が現在において総合されなければならない（*ibid.*, p. 254）。そうした存在と現在の対比をふまえるならば、見かけの現在とは精神が世界に与えた全体性の形式であって（*ibid.*, p. 260）、存在は見かけの現在において統合される（*ibid.*, p. 262）。おおまかにいえば、本質は無時間的であり、存在は流れを構成するのである。

サンタヤーナ時間論のなかには、自然的契機という注目すべき概念が含まれる（*ibid.*, pp. 280-281）。これは瞬間ではなく、その中にはもはや変化がないような、究極の具体的要素である。これは時間の単位であり、ホワイトヘッドの現実存在性の概念を強く連想させる。

このようなサンタヤーナの所説を Sprigge (2011, Ch. 11) に依拠しつつまとめると、次のようになるであろう。サンタヤーナ存在論の基本項目は、本質と存在である。本質は無時間的であるが、存在は時間的である。この区別のゆえに、サンタヤーナの時間論は、見かけの現在の概念を含まざるを得なくなる。サンタヤーナにおける見かけの現在は直観によって構成されており、その主成分は本質である。これに対比される存在は直ちに流れ去っており、こちらが真の時間である。過去や未来はこの真の時間においては存在し

ないのであるが、しかし見かけの現在においては存在する。現在は自然的契機として存立しており、したがって過去の実は時間の原子論によって説明されるのである。

以上から、ホワイトヘッドとサンタヤーナの形而上学の共通点の所在はもはや明らかであろう。見かけの現在の概念こそが両者の類似性の本質である (ibid., Ch. 8)。ブラッドリーの観念論とコントラストをなすジェイムズの実在論にはさらにヴァリエーションが可能であり、それは具体的にはホワイトヘッド形而上学やサンタヤーナ形而上学なのであるが、突き詰めれば、それは見かけの現在をどうとらえるのかという問題なのである。

ホワイトヘッドとサンタヤーナの相違点としては、目的論的傾向の濃淡が興味深い。ホワイトヘッドは有神論を隠さず、目的論的な傾向があり、その視点はいささか超越的である。これに比して、後者は唯物論を自称するほどに懐疑主義に接近し、その視点はより内在的である。

これまで、直接経験のとらえ方という一点に注目して、ブラッドリーの観念論から始めて、ジェイムズ、ホワイトヘッド、サンタヤーナの実在論を概観してきた。次のように言ってもよいであろう。彼らのなかに現れた実在論のヴァリエーションはフィーリングのとらえ方の差異でもある。フィーリングに対する距離のとりかたが思想の電位差を生み、思索の原動力となるのである。

ここで議論を整理しておこう。観念論にとっての直接経験は意識される質が提供される場であるが、それ自体は無時間的なのであった。現在は絶対的であって、時間はそもそも虚妄である。見かけの現在という概念はその体系のなかに入り込む余地がない。この概念自体が時間の実在を前提するからである。

他方で、実在論にとって直接経験はやはり質をとらえるための場として不可欠なものであるが、さらに過去の存在もまた認めざるを得ないものである。それゆえ、ここではなんらかのかたちで見かけの現在と真の時間の区別が必要となってくる。

5. 実在論の可能性とフィーリング：ベルクソニズムと現象学

本稿の主題は英米哲学における観念論と実在論の相克であるから、いわゆる大陸哲学の系統に属する現象学やベルクソニズムをわざわざ扱う必要はないのであるが、にもかかわらずこうして一節を割くのは、彼らの思想が、学派間の相違を超えてフィーリングの思想と共振するかのようと思われるからであり、現象学やベルクソニズムについての考察はフィーリングに関する理解を深めることになるからである。

尤も、ジェイムズとベルクソン (Henri-Louis Bergson、仏、1859-1941) のあいだに強い共感を伴った交流があったことは事実であり、フッサールもジェイムズから、主著『心理学原理』の読解によって多くを学んだことが知られていて、彼らのあいだの影響関係は予め自明であるとも言える。だが、ここで改めてみておきたいのは、彼らの間柄に関する事実ではなく、その思想をフィーリングの概念を通して見たときに明らかになる内的関連である。

5.1 ベルクソン

ベルクソンの思想は複雑微妙であり、その全体像の把握は容易ではないが、しかし、彼の哲学ではつねに直観と持続が重視されてきたという基本性格について異論はないであろう。ここに注意するならば、『意識の直接与件についての試論』(Bergson, 1889/1927)における質としての内包量 (intensité) をめぐる議論において、これまで検討してきたフィーリング概念との関連性は明らかである。

カントは『純粋理性批判』原則論の直観の公理および知覚の予料において、外延量と内包量の区別によって現象の具体的内容の可能性をアプリアリに規定しようとした。この説の特徴は二種類の内容をいずれも量として表象するところである。ベルクソンはこれに反対し、可測な量である外延量とは本質的に異なるものとしての内包量を質とすべきだとする。感性を満たすのは、量的多様体に還元することはできない質的多様体なのである。

質は知性による分析、あるいは空間化・記号化によってはとらえられないものであって、それゆえ本質的に時間的なものである。純粹持続としての時

間は質によって構成されている。

持続の最も重要な特徴は流れであり、その点でベルクソンは、ジェイムズの説に親近性を見ている (Bergson, 1934/1938, Ch.8)。他方で、その流れの中であってひとつの単位を構成するはずの現在については多くを語らず、見かけの現在という考え方もあからさまには採用されない。

しかし、ベルクソンが持続に基づく時間論を採った理由は、ゼノンの逆理を回避するためであった。ベルクソンは、時間は空間と同様に分析可能であるとする憶断がパラドックスの原因だとみたのである。このような議論の文脈が示唆するのは、ホワイトヘッドの現実的存在性のように、あるいはサンタヤーナの自然的契機のように、ベルクソンにおいても不可分な時間的単位をなす現在が想定されている可能性である。それは現在における直観がとらえる時間的パースペクティブであり、見かけの現在の一種であろう。もっとも、これに対比されるべき因果的な時間についてベルクソンは沈黙するのであり、それゆえ議論の要点が覆い隠されているようにも感じられる。しかし、物質のなかに無数の振動、リズムや、メロディーを見る (Bergson, 1896/1939, Ch.4; 1934/1938, p. 76ff.) という彼の主張には、瞬間の連鎖である因果性としての時間への周到な配慮あるいは抜かりのない目配りが感じられるようにも思われる。

ベルクソンの直観をホワイトヘッドの形而上学にいつそう正確に結びつけようとするれば、その対応物はおそらく自然的指向であろう (cf. 甕, 1996; 遠藤, 1996b)。これは、単純物的抱握や概念的感受より高次でありながらも知的フィーリングに対立し、また、本能にも近い。それゆえここには (知性によって) 空間化される以前の、しかし一定の視野を形成するだけの広がりがある。

5.2 フッサール

ジェイムズのフッサール (Edmund Gustav Albrecht Husserl, 独, 1859-1938) への影響の大きさは、フッサールの著作のなかに、フリンジ、意識の流れといった概念が容易に見つかるということから推し量ることができる。本稿の文脈に即して考えるならば、フッサールの内的時間意識の分析は、ま

さにジェイムズ的な概念による意識分析の徹底化であるようにもみえるであろう。

フッサールによれば、現在は幅をもっており、印象は単独で瞬間的に意識されるのではなく、過去の直観である一次記憶、過去把持を引きずっている (Husserl, 1913/1992, §81, §82)。この現象学的な現在の概念はあきらかに見かけの現在に相当する。時間には感性に特有の地平構造があるとされるが、これを見かけの現在と比定することもできよう。

しかし、他方で因果的な時間のほうはどうであろうか。先にベルクソンの哲学を検討した際に感じられたように、意識の哲学者の関心は、意識の典型である知覚と、そこで開かれる場としての幅ないし厚みをもった見かけの現在のほうへと向かいがちであり、定義上知覚不能な瞬間からなる時間の問題系は素通りされてしまう。

そこで、内的時間意識への集中をひとまず解き、より典型的な見かけの現在の構造が現れるはずの知覚の分析のほうへ目を向けてみよう。『イデーニ I』では、ノエシス・ノエマ構造が知覚の本質として取り出された。そのなかに直接に因果的な時間が流れ込んでくることはないものの、見かけの現在と因果性がつくり出すコントラストは、たしかに浮かび上がるように思われる。

フッサールによれば、知覚はヒュレーと呼ばれる与件が志向的に解釈されたものである (ibid., §85)。このとき、解釈するノエシス的作用に呼応してノエマの意味が構成される。ヒュレーやノエシスが意識の実的な構成要素であるのに対して、ノエマは意識の志向的構成要素である (ibid., §88)。

意識の根本構造である志向性はこのような機構をもっているのであるが、ここで気になるのはヒュレー、ノエシスとノエマとのあいだの原理的緊張である。知覚におけるヒュレーは感覚内容であるが、無規定であり、つまりは質である。また、ノエシスは与件に対する意識作用で、知覚の場合は、対象にそれ自体を与えているという性格を帰属させる。これらはあわせて、直接経験を構成するフィーリングであると言えよう。

他方で、知覚内容はこれらによって構成されたノエマであるが、われわれが実際にみる時間的光景は、実は実的ではありえず、志向的であり、したがってノエマ的である。今の視点は現在として個別化されており、地平、あ

るいは奥行きを伴っている。それは厚みのある現在であり、したがって見かけの現在である。

サンタヤーナにおいては、本質と直観が明示的に結びついており、直接経験の与件は本質である。フッサールをサンタヤーナの思想に近づけて解釈すれば、フッサールが現象学的還元の見出すノエマは、直観によって意識を満たす本質であるということになるのではないか。

かくして、ベルクソニズムとフッサール現象学は言うまでもなく独立した形而上学であるが、見かけの現在の概念を介することによって比較検討が可能となる。むしろ、先に触れたホワイトヘッド形而上学とも同一平面で論じることができるであろう。こうした試みが明らかにするのは、本質、時間、存在といった形而上学の重要テーマについての多様な解釈の可能性なのであるが、この試みは同時に、思索の手段としてのフィーリングそれ自体の解明にもなっている。ホワイトヘッドにおけるフィーリングは一種の関係概念の趣があるが、ベルクソンにおいてフィーリングに相当する直観は空間化以前の質と深く結びついており、フッサールにとってのフィーリングはヒュレーとして与えられるが、ノエシスとの対比において定義上無規定なもの、連続的なものとなりそうである。しかしこれらはみなフィーリングの属性であって、形而上学者たちはそれぞれ視点からその一面を強調したのに過ぎない。形而上学的思考が展開する舞台としてのフィーリングの真の姿は、そうした多くの視線が交錯するところに浮かび上がる幻である。

6. 観念論と实在論、フィーリング：パース

これまでブラッドリー観念論とジェイムズ实在論の対立に端を発する形而上学の展開を、フィーリングに注目して追跡してきたが、見かけの現在の概念が果たした役割は重要で、現在の意識が念入りに分析されることになったが、その深さは、議論の全体を時間論としてとらえ直すこともできるのでは、と思わせるほどである。当然ながら、形而上学者たちの関心は、現在の意識としての知覚と真の時間との間の区別に向かいがちであった。こうした関心のもち方には肯首できる面もあるが、しかし、形而上学におけるフィーリングが心理学のそれではないということは、すでにブラッドリーにおいて

予告されていた。フィーリングの解明は、われわれの意識の事実の解明ではないはずだったのである。フィーリングは形而上学の根本概念なのであり、その本性についてさらなる分析の余地はなかったのであろうか。

このように考えてみると、これまで触れなかったパース (Charles Sanders Peirce、米、1839–1914) の思想が注目すべきものとして浮かび上がってくる (cf. 船戸, 1996)。もちろん、パースはジェームズの思想に直接的な影響を与えており、関連の深い哲学者であった。しかし、明確にデカルト主義を斥け、記号作用を基礎とする独自の立場は、他の形而上学者との乖離が大きく、同列に置いての比較がためらわれた。しかし、いまやこの独自性が、かえって思索のさらなる展開のための重要なヒントとなりそうである。パースには独自の現象学があり、われわれが直接経験の分析から始めるほかはないことを認めている。そのかぎりにおいてパースは、ブラッドリー、ジェームズらに始まる直接経験論と議論の前提を共有しうるのである。パースの思想の特性上、これまでフィーリングの意識作用の面に注目が集まりがちであったのに対して、意識内容のほうに向かう考察が期待できる。

このような見通しの下で、パースの情態 (feeling) についての考えをみてゆこう。まずこれらが詳論されるのは、論文「なぞなぞへの推測 (A guess at the riddle)」とそれに関連する草稿においてである (cf. Foster, 2011, pp. 113–119; Atkins, 2018, pp. 150–159)。それによれば、情態は分析、比較を含まず (Peirce, 1931/1998, p. 306)、過程も含まない (ibid.)。また、情態は他のものとは無関係に、それ自体としてあるものである (ibid.)。そして、情態は出来事ではない (ibid., p. 307)。

周知のように、これらを記述するのにパースは独自のカテゴリを用意する。上述のようなものとしての情態は第一性であり、他の現象とは本質的に異なる。争闘、反作用は第二性であり (ibid., p. 322)、媒介、過程は第三性である (ibid., p. 337)。

やがてパースのカテゴリ論は整備がすすみ、同時に現象学はパース哲学体系「プラグマティズム (Pragmatism)」における基礎分野のひとつ「ファネロスコーピー (Phaneroscopy)」へと成長してゆく。ハーヴァード大学講義「現象学について」「形而上学の七体系」などには、情態についての充実した議論をみることができる (Peirce, 1998, Ch. 11, Ch. 13; cf. Atkins,

2018, 150–159)。情態は現前性であり、それを抽象的なものとしたヘーゲルは誤っている。情態は単純で積極的であり、関係を含まず、部分もない。また、変化せず、反省を含まない。具体的には色、香り、痛み、音などとして現れるが、それらに限定されはしない。

こうした情態は典型的な第一性として、争闘、反作用、知覚における自我と非我の対立などの第二性や、一般性や未来、習慣、法則、媒介性などの第三性と対比されることによってその性格を浮き彫りにされてゆくのである。

このように、パースの思想の展開を情態概念に焦点を当てて概観すると、情態は直接経験の内容、質であって、時間を超越したもの、無時間的なものであることが強調されている。この点で、パースの情態にはブラッドリーの感じを彷彿とさせるところがある。

しかし、パースはブラッドリーのように時間を否定したりはしない。変化は一種の媒介であって、それは第三性という別のカテゴリのなかに包摂されている。フィーリングの分析を通じて時間の実在を認めるのはブラッドリーと対立するジェイムズ的実在論の立場であったから、パースには実在論者たちに通じる面もあることになる。

実在論者たちは、ブラッドリーの感じとは異なるフィーリングのとらえかたをそれぞれ模索してきたと言えよう。ジェイムズはブラッドリーの絶対的観念論の帰結を斥けるため、無時間的なフィーリングのありかたを否定して、意識の動的な性格、時間的な性格を強調したのであった。そして、強弱の程度の差はあれ、その影響下にある実在論者たちは、見かけの現在と真の時間を区別することでわれわれの時間経験を正当化し、なかでもホワイトヘッドはそれを根拠に、ブラッドリー観念論を乗り越える可能性を示したのだった。

だが、ブラッドリーへの反駁には注意すべき点がある。関係や時間の非実在性という結論を覆そうと急ぐあまり、その感じの説を全面的に退けてしまうと、直接経験におけるフィーリングの実在性までもが掬い取った手から零れ落ちてしまうことになる。フィーリングを質としてとらえつつ、それを時間の実在性と両立させるというパースの立場は、この問題を切り抜けるためのひとつのアイデアではあるだろう。

そうであるとすれば、パースは観念論対実在論という二項対立によって陥

りがちな手詰まりの局面を打開する可能性を示したことになるが、そうした視点の転換はなぜ可能だったのであろうか。

パースのカテゴリ論について再考してみると、当面の問題の本質は次のように説明できるかもしれない。つまり、ブラッドリーの感じにおいてとらえられた質は第一性であるが、實在論者（サンタヤーナ）が認めた見かけの現在と真の時間の対立、本質と存在の対立には、生成消滅と持続の対比や、分裂、否定、総合などの諸契機が複雑に絡み合っており、慎重で精細な分析を必要とする。これを實在論の立場から一括りに処理するのは、形而上学的には無意味なのだ。つまり、多様な第二性、第三性の契機による分析が必要であり、パースが指摘するようなカテゴリの退化形式を考慮に入れなければならないのである（Peirce, 1998, Ch.12）。

このような説明は図式的ではあるが、事象の整理のための分析力は切れ味抜群である。この性能の秘密は何であろうか。私見では、そもそも相互の差異が明確な様相概念とカテゴリとの結びつきが重要なのでは、と思われる。

第一性、第二性、第三性には、それぞれ可能性、現実性、必然性が結びつけられる。もちろんパースのカテゴリは形式的カテゴリ（formal category）であり、その事例のひとつに過ぎない実質的カテゴリ（material category）である様相には還元できない。しかし、そうであるにもかかわらず、様相概念を抜きにしてパースのカテゴリを理解することは難しいであろう。そのくらい堅く両者は結びついている。

パースの情態が可能態として特徴づけられ、反作用や表象といった他の概念と明確に区別されたことには、事態の解明に大きく資するものがあつたのではないか。そして、パースのこの形而上学的洞察は、ブラッドリーとジェイムズらのあいだの論争の意義を分析するうえでも有効であろう。改めて實在論者たちの説を振り返ると、彼らもそれぞれ、パースほど明確ではないにせよ、フィーリングの本質を感知していたのではないかと思われる。ホワイトヘッドの永遠客体と實在的潜勢態、サンタヤーナ、フッサールの本質、ベルクソンの純粹記憶など、いずれも可能態とみることができが、これらはそれぞれの形而上学体系をその根底で支える礎石ではなかったであろうか。

7. おわりに

以上、世紀転換期に活動した哲学者たちの思想の流れを、直接経験としてのフィーリングに焦点を当ててたどってきた。彼らはそれぞれ巨匠であって、現代思想史の神々ともいえる存在である。その包括的検討はなかなか困難であるが、しかしそれはなされるべきである。

尤も、いまひとたびの世紀転換期（あるいは千年紀転換期）を経験したわれわれは、彼ら巨匠たちの思索の精髓が、二十世紀の言語論的転回の熱狂のうちに放擲された「神々の黄昏」を知っている。二十一世紀のいま、それともはや昔話になりつつあるのではないか。いまこそ彼らの思想が再び取り上げられてもよいだろう。

観念論にせよ実在論にせよ、そこにはフィーリングの分析があり、それゆえ当時の形而上学はある種の現象学の風貌を呈してることがある。パースの思想はこの事情をよく象徴するものといえよう。他方で、われわれの考察はフッサールの現象学を包含するものでもあった。このようにフィーリングについて思索の跡をたどることで、フッサール現象学がその露頭のひとつであるような、一般現象学の鉅脈というべきものが存在するのでは、とも思われてくるのである*1。

文献

伊藤 邦武 (2006). パースの宇宙論 岩波書店

伊藤 邦武 (2009). ジェイムズの多元的宇宙論 岩波書店

遠藤 弘 (1980). 感じ、絶対者、神——ブラッドリーからプロセス神学へ——
フィロソフィア, 68, 1-22.

遠藤 弘 (1996a). 後期サンタヤーナ存在論に立脚したホワイトヘッド形而上学の批判 プロセス思想, 7, 13-21.

*1 本稿のようにブラッドリー、ジェイムズ、フッサール、パースらを、学派の垣根を超えて一度に俎上に載せて論じようとする試みが、近年の観念論研究においてみられる (Cf. Guyer & Horstmann, 2023)。なお、パース、ジェイムズの思想については伊藤 (2006, 2009) がある。

- 遠藤 弘 (1996b). 時間における物と心——サンタヤーナとベルクソン——
早稲田大学大学院文学研究科紀要, 41, 37–51.
- 京屋 憲治 (1991). 合生と知覚 プロセス思想, 4, 59–68.
- 船戸 幸喜 (1997). C. S. パースのカテゴリーと情態の連続体 日本デューイ
学会紀要, 38, 62–67.
- 襲 由己夫 (1996). 直観と自然的指向——ホワイトヘッドによるベルクソン
解釈の一側面—— プロセス思想, 7, 31–41.
- Atkins, R. K. (2018). *Charles S. Peirce's phenomenology: Analysis and
consciousness*. Oxford: Oxford U. P.
- Bergson, H. (1889/1927). *Essai sur les données immédiates de la con-
science*. Paris: PUF.
- Bergson, H. (1896/1939). *Matière et mémoire*. Paris: PUF.
- Bergson, H. (1934/1938). *La pensée et le mouvant*. Paris: PUF.
- Bradley, F. H. (1893/2002). *Appearance and reality*. London: Routledge.
- Bradley, F. H. (1909/1914). On our knowledge of immediate experience.
In Bradley (1914), pp. 159–191.
- Bradley, F. H. (1914/2012). *Essays on truth and reality*. Cambridge:
Cambridge U. P.
- Dainton, B. (2003). *The stream of consciousness*. London: Routledge.
- Forster, P. (2011). *Peirce and the threat of nominalism*. Cambridge:
Cambridge U. P.
- Gallagher, S. (1998). *The inordinance of time*. Evanston: Northwestern
U. P.
- Guyer, P. & Horstmann, R. P. (2023). *Idealism in modern philosophy*.
Oxford: Oxford U. P.
- Husserl, E. (1913/1992). *Ideen zu einer reinen Phänomenologie
und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch: Allgemeine
Einführung in die reine Phänomenologie, Gesammelte Schriften 5*.
Hamburg: Felix Meiner (略号 Ideen I)
- James, W. (1890/1950). *The principles of psychology, vol 1, vol. 2*. NY.
: Dover Publications, Inc.

- James, W. (1912/1996). *Essays in radical empiricism*. Lincoln: Nebraska U. P. (ジェイムズ, W. 伊藤 邦武 (訳) (2004). 純粹経験の哲学 岩波文庫)
- Mander, W. J. (1994). *An introduction to Bradley's metaphysics*. Oxford: Clarendon.
- McHenry, L. B. (1992). *Whitehead and Bradley: A comparative analysis*. New York: SUNY Press.
- Peirce, C. S. (1931/1998). *Collected papers of Charles Sanders Peirce Vol.1 principles of philosophy*. Bristol: Thoemmes.
- Peirce, C. S. (1998). *The essential Peirce: Selected philosophical writings vol. 2 (1893–1913)*. Bloomington: Indiana U.P.
- Santayana, G. (1923/1955). *Skepticism and animal faith*. New York: Dover. (サンタヤーナ, G. 磯野 友彦 (訳) (1966). 哲学逍遥 勁草書房)
- Santayana, G. (1942). *Realms of being, one-volume edition with a new introduction by the author*. New York: Charles Scribner's Sons.
- Sprigge, T. S. L. (1983). *The vindication of the absolute idealism*. Edinburgh: Edinburgh U. P.
- Sprigge, T. S. L. (1993). *James and Bradley: American truth and British reality*. Chicago: Open Court.
- Sprigge, T. S. L. (1999). Whitehead and Santayana. *Process Studies*, 28, 43–55.
- Sprigge, T. S. L. (2011). *The importance of subjectivity*. Oxford: Oxford U. P.
- Whitehead, A. N. (1929/1978). *Process and reality*, Corrected Edition. New York: The Free Press.
- Whitehead, A. N. (1933/1967). *Adventures of ideas*. New York: The Free Press.
- Zahavi, D. (2020). *Self-awareness and alterity: A phenomenological investigation, A New Edition*. Evanston: Northwestern U. P.

本研究は JSPS 科研費 JP20K00015 の助成を受けたものです。

第3部 アメリカンリアリズム

第5章 「6名の実在論者による探究計画および 第一綱領」 訳解

大厩 諒

Keywords: 新實在論、認識論、内的関係（内的見方）、外的関係（外的見方）、自然科学、心理学、パークリー

【解題】

以下に訳出したのは、Holt, et. al., “The Program and First Platform of Six Realists,” *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 7, No. 15 (Jul. 21, 1910), 393–401 の全訳である。アメリカ哲学は、1910年代の諸論争を通じて、その基調を認識論的観念論——認識主体としての精神が根源的な實在であり、事物の存在はその精神に依存する——から實在論——対象の存在は認識されることに依存しない——へと転換した。この転換において大きな役割を果たしたのが、新實在論と呼ばれる立場であり、この「綱領」論文は、その主唱者たちがみずからの主要原理の概略を示したものである。

この論文の執筆者6名は、主に米国で専門職的訓練を受け、上級学位を取得した哲学者である。これは、この時期の米国の大学が急速な近代化の途上にあり、専門職の養成機関として制度を整備しつつあったことの表れである。

この論文は、哲学の悲惨な現状とそれに対する改革の方向性を述べた序論部と、各論者が一節ずつ担当し、おのおの新實在論の基本テーゼと考えるものを列挙する6つの節とで構成されている。まず序論では、哲学に対する悪評の原因が、「協働作業をせず、用語を共通に使わず、基礎となる前提に関して暫定的にでも同意することがない」ことにあるとし、そのような汚名を返上し、哲学における「本当の進歩」を実現するための協働の必要性が主張される。新實在論の目標は、こうした作業によって、「共通の技法と共通の

用語法を発展させ、最終的には自然科学が有する信頼性のある程度享受できるような共通の学説を発展させ」ることである。

新実在論の基本テーゼは、以下の三点にまとめられる。

- ① 認識対象に関する実在論：認識論的観念論が、事物の存在と本性は認識されることによって規定されるとするのに対して、新実在論は、認識対象が認識主観および認識関係から独立した存在と本性を持つと主張する。いいかえれば、新実在論は、観念論による存在と認識の不当な同一視を否定する。
- ② 直接的実在論：実在するものと知覚されるものは数的に同一である。実在する対象は、表象や観念といった媒介物なしに、認識主観によって直接知られる。こうして新実在論は、不可知の実在を要請する表象的実在論（デカルトやロックに代表され、『世界と個』においてロイスが徹底的に批判した実在論）を否定する。
- ③ 外的関係説：認識関係は、認識対象の存在と本質に変更を加えない仕方では項を結合する。この特徴によって、①と②は両立可能となる。かりに関係が内的であるとすれば、関係項は、当の関係から外れた場合、その本質が変わるため数的に別個のものになる。これを認識の場面に適用すれば、対象は、主観との直接的な認識関係に入ったり、そこから外れたりすることで、数的に別の存在者になってしまうということである。これでは実在論は成り立たない。したがって、認識対象の独立性を保ちながら ①、表象的実在論が含意する二元論や不可知論を避ける ②には、外的関係説を採用する必要がある。

この論文が掲載された *Journal of Philosophy* 誌は、Frederick J. E. Woodbridge と Wendell T. Bush——彼らも実在論者である——によって1904年に創刊された専門雑誌で、世紀転換期の米国における観念論と実在論の論争の多くはこの雑誌上でおこなわれた。

「綱領」論文は当時の哲学界の耳目をおおいに集めたが、誤謬や錯覚の問題——外界の対象が直接に知覚されるとしたら、錯覚されたものも外界に実在することになるのではないか——をめぐる困難に直面し、新実在論内部でも意見が分かれ、收拾することができなかった。その結果、1920年代に入

るとグループは離散した。このように、新実在論の盛期は短かった（約10年）が、その後のアメリカ哲学の実在論的な基調を準備したという点で大きな影響を与えた。

この時期のアメリカ哲学における観念論と実在論との論争を考察するうえで参考となる主な文献は以下である。

- ① De Waal, Cornelis. (Ed.) (2001). *American New Realism 1910–1920*. 3 volumes. Bristol: Thoemmes Press.
- ② Kuklick, Bruce. (2001). *A History of Philosophy in America 1720–2000*. New York: Oxford University Press. (『アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで』大厩諒・入江哲朗・岩下弘史・岸本智典訳、勁草書房、2020年)
- ③ Charles, Eric P. (Ed.) (2010). *A New Look at New Realism*. London & New York: Routledge.
- ④ 大島正徳 (1943). 『現代實在論の研究』、至文堂
- ⑤ 加賀裕郎 (2009). 『デューイ自然主義の生成と構造』、晃洋書房
- ⑥ 豊泉俊大・磯島浩貴 (2023). 「『新実在論：哲学における協働研究』「序文」」、『共生学ジャーナル』第7号、大阪大学大学院人間科学研究科、314–360頁

①は書名のとおり新実在論をめぐる当時の論考を集めた貴重なアンソロジーであり、編者のドヴァールによる序論は世紀転換期の哲学的状況について有益な概観を与えてくれる。②は、アメリカ哲学の約300年にわたる変遷を、宗教、政治、制度といった広範な視点から俯瞰しており、今後のアメリカ哲学研究において避けてはとれない画期的通史である。また⑤の第II部第2,3章、第III部第2章は、20世紀初頭の観念論および実在論をデューイ哲学との関連において論じたものとして稀有な研究である。

なお、本章は2021年に「「六人の実在論者による計画趣意書および最初の綱領」訳解」と題して『中央大学文学部紀要 哲学』第63号に掲載された。本論文集に再録するにあたって、あらためて全体を見直し、修正を加えた。その際、編著者の染谷昌義先生から有益なご指摘を多数頂いた。記して感謝の意を表する。

【凡例】

- ・ 亀甲括弧〔 〕内の補足は訳者によるものである。
- ・ 原文におけるイタリックによる強調は下線で再現した。ただし、原文のイタリックが強調以外の目的で施されている場合（ラテン語の成句など）はこの限りではない。
- ・ 原文の構造が複雑な場合には、訳文を分かりやすくするためにしばしば原文にないダッシュ——を挿入した。他方で原文のダッシュ（em dash）は、訳文ではダッシュによって再現したが、煩雑さを避けるために再現しなかったケースもある。
- ・ 丸括弧（ ）で囲った上付き数字は原註を表し、各節の末尾に配置した。
- ・ ＊記号付きの上付き数字は訳註を表し、脚註として配置した。

6 名の実在論者による探究計画および第一綱領

哲学と言えば意見の相違で有名であり、そのせいで哲学は、非科学的だとか主観的だとか気分次第だといった不評を少なからず買ってきた。なるほど、こうした意見の相違の一因が哲学が問題にする事柄にあることは事実である。しかし、その主要な原因は、言葉を厳密かつ統一して使用していないこと、そしてきちんと協働して研究していないことにある。こうした欠陥があるという点で、哲学と物理学や化学などの諸科学との隔たりはいまだに大きい。そのため、哲学はただの憶測と見なされがちである。というのも、人と交流しない理論家たちの著述には比喩やいいかげんな表現が散見され、哲学の問題とその解決は本質的に人それぞれでしかないといった印象が生じるからである。この印象は、哲学自身が感情や気質や好みに関わるものであるということからして、さらに強くなる。協働作業をせず、用語を共通に使わず、基礎となる前提に関して暫定的にでも同意することがないために、哲学の真の問題がずっとぼやかされつづけ、哲学の本当の進歩がひどく妨げられつづけてきた。

以上の理由から、ここに名を連ねた者たちは、協働作業をすることで哲学の真の問題を明らかにし、明晰な哲学的思考を遂行し、本当の進歩への道を開くことを期待して一堂に会し、熟慮のうえ合意に達しようと心血を注いできた。このような協働作業には、はっきりと区別できる——とはいえ、必ずしも連続しているわけではない——三つの段階がある。第一に、基礎となる原理と学説を言語で表明する段階、第二に、これらの原理および学説を基礎にした方法を用いて、建設的作業の計画を立てる段階、最後に、公理、方法、仮説、事実からなる体系を獲得する段階、しかも、到達された公理、方法、仮説、事実は、少なくとも協働作業に加わった探究者たちが総じて受け入れることのできるようなものとして定式化される段階である。

幾度かの会合を経て、連名者たちは互いに一定の学説を共有していることを確認した。連名者たちはここに、実在論の綱領を構成するこうした学説の

うちのいくつかを、上述の計画をさらに推し進めることを期待して公表するものである。各リストは異なる執筆者が書いたものだが、ほかのメンバーも詳細に検討し、改訂を施し、合意に至ったものである。したがって、以下の六つのリストは、定式化の仕方こそ異なっているが、同じ学説を表していると見なしてほしい。

私たちは今後、ここで取り上げる以外の項目について協議し、アイデアを交換し、互いの表現の仕方や方法や仮説を組織的に吟味しあうことによって、共通の技法と共通の用語法を発展させ、最終的には自然科学が有する信頼性のある程度享受できるような共通の学説を発展させたいと考えている。私たちの出版するものがほかの哲学者たちに影響を与え、類似した目標を持つ小さな協働作業グループが作られるなら、私たちの目的のひとつは達成されたことになるであろう。

エドウィン・B・ホルト^{*1}、ハーヴァード大学
ウォルター・T・マーヴィン^{*2}、ラトガース・カレッジ
W・P・モンタギュー^{*3}、コロンビア大学
ラルフ・バートン・ペリー^{*4}、ハーヴァード大学
ウォルター・B・ピトキン^{*5}、コロンビア大学

*1 Edwin Bissell Holt, 1873–1946：ハーヴァードでジェイムズとミュンスターバーグに影響を受けながら PhD を取得し (1901)、その後同大学の准教授となり、心理学実験室を運営した。1918 年に職を退いたあとは、プリンストンなどで教えた。6 名のなかで最も才能豊かな哲学者だった。

*2 Walter Taylor Marvin, 1872–1944：ドイツのボン大学で PhD を取得し (1898)、コロンビア、ウェスタン・リザーヴ・カレッジ、プリンストンで短期間教えたあと、1910 年からラトガース・カレッジ (のちにラトガース大学) で教えた。

*3 William Pepperell Montague, 1873–1953：ハーヴァードで PhD を得て (1898)、短期間カリフォルニア大学バークリー校などで教えたあと、長年にわたりコロンビア大学で活躍した。

*4 Ralph Barton Perry, 1876–1957：ハーヴァードで PhD を取得したあと (1899)、同大学の哲学部で 40 年以上権勢をふるい、新实在論者のなかで最も影響力があった。ジェイムズの高弟として彼の著作を編纂したり、ピューリッツァー賞を受賞した評伝 (*The Thought and Character of William James*) を著したりした。

*5 Walter Boughton Pitkin, 1878–1953：ミシガン大学を卒業後、1905 年から 43 年までコロンビア大学で教えた。新实在論運動が衰えたあと、*Life Begins at Forty* (1932; 『人生は四十から』大江専一訳、六欧社、1953 年) を書きベストセラーとなるなど、多

E・G・スポールディング*6、プリンストン大学

I

1. 論理学、数学、物理諸科学が研究対象とする存在者 (entities) (対象や事実など) は、「心的 (mental)」という語の日常的な意味においても固有の意味においても、心的ではない。
2. こうした存在者の存在 (being) と本性は、こうした存在者が〔認識者に〕知られることによって、いかなる意味においても条件づけられない。
3. 存在者同士のあいだに存立する (subsist) 統一性、整合性、結合といったものの度合いは、経験的に確証されうる事柄である。
4. 私たちの目下の知識段階においては、おそらく多元論が正しいだろう。
5. ほかの存在者との一定の関係において存立する存在者は、すでに存立している関係を必ずしも否定したり変容させたりすることなく、新たな関係に入ることができる。
6. これまでに生み出された無矛盾な論理学ないし自己充足的な論理学 (あるいは論理学の体系) はすべて、認識の「有機的」理論ないし関係についての「内的」見方*7を支持しない。

くの自己啓発書を書いた。また、対日関係について論じた *Must We Fight Japan?* (1921; 『日本と戦はん乎』上下、佐藤綱次郎訳、目黒分店、1921年) という著書もある。

*6 Edward Gleason Spaulding, 1873–1940: 経歴は本書第6章3.1を見よ。

*7 関係を「内的」関係と「外的」関係の二種に区別することは、ジェイムズやブラッドリーをはじめ、ジョアキム、ボザンケ、エヤーなど、当時の英米の哲学者たちに広く共有されていた。一方の外的関係は、関係項の本性に基礎を持たない偶然的ないし恣意的な関係、いかえれば複数の項が互いに影響を与えあわない関係である。これに対して内的関係は、関係項の本性に基づく必然的な関係、いかえればこの関係が変わると項そのものも数的に別個なものになるような関係であり、関係項を関係項たらしめ、関係項が何であるかを決定するものである。外的関係の例としては空間的關係が挙げられる。コップは机の上にあっても机の横にあっても本質的な影響を受けず、数的に同一のコップでありつづける。他方、内的関係の例としては、2 という自然数が 1 に対して持つ「次の数である」という関係が典型的である。「1 の次の数である」ことは 2 にとって本質的であり、1 に対して「次の数である」という関係を持たないような数は 2 ではありえない。つ

7. 上記〔6〕のような（反实在論的）見方をとる人は、議論において、自身の学説と矛盾する論理学を用いている。

エドウィン・B・ホルト

II

1. 認識論は論理的な基底ではない⁽¹⁾。
2. 認識論に論理的に先行する多くの存在命題と非存在命題が、同様にあ
る⁽²⁾。
3. すべての科学の体系および形而上学の体系に論理的に先行する論理学
の一定の原理がある。そうした原理のひとつが、通常、関係について
の外的見方と呼ばれるものである。
4. この見方は以下のように述べることができる。「項 a が項 b と関係 R
にある「 aRb 」という命題において、 aR はいかなる意味においても
 b の構成要素にはならないし、 Rb は a の構成要素にはならないし、 R
は a と b どちらの構成要素にもならない、と。
5. 情報の総体には、いかなる変容も加えることなく、新たな命題が付け
加わることが可能である。
6. （正確に言えば）一部が真で一部が偽であるようなひとつの命題はな
い。なぜなら、そのような命題の個別例はすべて、真なる命題と偽な
る命題という少なくとも二つの命題へと論理的に分析されうるから
である。したがって、認識が進展するとき、古い認識についての命題
に対して施される論理的に可能な修正は、以下の二つしかない。すな
わち、その命題が偽として退けられるか、あるいは少なくとも二つの
命題へと分析され、そのうちのひとつが〔偽として〕退けられるか
である。

まり、自然数 2 は、その本性からして必然的に 1 の次の数である。このことを指して、
自然数 2 は自然数 1 に対し「次の数である」という内的関係を有していると言われる。
二種の関係については、本章 II 節の 4 と VI 節も見よ。

以上の系として以下のものがある。

7. 実在の本性は、認識の本性だけからは推論されえない。
 8. 論理学、数学、物理学、その他多くの科学で研究される存在者は、心的という語の固有の意味においても日常的な意味においても、心的ではない。
 9. 「この対象やあの対象が知られている」という命題は、そうした対象が知る作用によって条件づけられることを含意しない。換言すれば、「～が知られている」という命題は、認識対象が精神的 (spiritual) であることや、認識対象が精神の経験内容としてのみ存在することや、認識対象がまさに知られるとおりに究極的に実在するわけではないといった推論を私たちに強制しないのである。
- (1) 論理学の原理のなかには、他の命題から演繹されるいかなる命題にも論理的に先行するものがある。この理由のため、認識の本性についての理論や、認識とその対象との関係についての理論は、論理学の原理に対して論理的に後続する。ようするに、論理学は認識論のあらゆる理論に論理的に先行している。さらに、実在についての理論も〔論理学の原理から〕演繹して、論理学法則と合致するように形成できるので、論理学に対して論理的に後続する。よって、論理学がそうした実在についての理論のなかに論理的に伏在する以上、論理学はそれ自身、実在についての理論であるか、または実在についての理論の一部なのである。
 - (2) 常識や心理学において認識、意識、経験と呼ばれている項は論理的な基底ではなく、意識や経験ではない項の存在と、それらとの関係とを支持する実在についての理論の少なくとも一部に対して論理的に後続する。たとえば、心理的なものは物理的なものや生理学的なものから区別される。

さて、観念論はみずからの認識論ないし実在についての理論に含まれる認識、意識、経験という項が、論理的な基底であるとか定義不可能であるといったことを示してきたわけではないし、別のところでみずからの実在についての理論からは明確に排除されており、その理論に論理的に先行するような項を使わずに、認識、意識、経験という項をうまく定義できたわけでもない。ようするに、観念論の認識論者たちは、認識、意識、経験という項を心理学から借りているくせに、論理的に先行している心理学の命題を無視したり否定したりしている。換言すれば、現在に至るまで認識論は、心理学からの論理的独立を示せたわけでも、心理学の常識的二元論という軛から論理的に自由になれたわけでもない。むしろ事態は正反対であって、ロックから今日に至るまでの認識論は、少なくとも部分的には心理学の一部門だったし、そうありつつけているのである。

ウォルター・T・マーヴィン

III

I. 実在論の意味

1. 実在論は以下のように主張する。知られる事物は知られていないときも変わらずに存在しつづける。すなわち、事物は認知関係に出入りするときにその実在性を損なわないし、事物の存在は誰かがそれを経験したり知覚したり考えたりといった任意の様式で意識するという事実には相関してもいないし依存してもいない、と。
2. 実在論が反対するのは、主観主義、つまり認識論的な観念論である。認識論的な観念論は、事物が、それが経験されることから離れて、つまり認知関係から独立して存在する可能性を否定する。
3. 実在論と観念論のあいだの争点は、唯物論と唯心論（spiritualism）、〔自由意志を否定する〕自動機械説と〔心身の〕相互作用説、経験論と合理論、あるいは多元論と絶対主義〔的一元論〕のあいだの争点と混同されるべきではない。

II. 実在論への反論

実在論に対するさまざまな古典的論駁のなかには、以下に見られるような誤った前提や推論が顕著である。

1. 心理学的論証：精神の直接的対象はみずからの観念ないし状態だけであって、外的対象は存在するとしても妥当性に疑問の余地があり、役に立つかも覚束ない推論過程によってただ間接的に知られるにすぎない。〔これに対してモンタギューは答える。〕この原理は誤りである。というのも、認識過程は認識自身の対象ではなく、むしろ何かほかの対象を知るための手段だからである。このような仕方では知られたり指示されたりする対象は、〔認識過程とは〕別の心的状態や物理的事物、あるいはたんに論理的な存在者なのである。
2. 直観的論証：この論証はバークリー哲学において最も顕著である。こ

れには二つの形態がある。ひとつ目は、自明の事柄と馬鹿げた事柄とを混同して同一視する。自明の事柄とは、私たちが対象の存在を知ることができるのは、その対象が知られているときだけだということである。馬鹿げた事柄とは、対象は知られているときにだけ存在することができるということを私たちが知っているということである。〔他方で〕論証の第二の形態は、観念という語を弄ぶことで勢いを得ており、以下のように論じる。あらゆる「観念」（心的過程や心的状態を意味する）は精神を離れては存在できない。ところで、知られる存在者はおしなべて「観念」（思考の対象を意味する）である。それゆえ、知られる存在者はおしなべて精神を離れては存在できない。観念論が自分のことを公理だなどと夢想できるのは、以上の誤謬を見逃しているからである。

3. 生理学的論証：私たちの受け取る感覚は、私たちがどのような対象を知るかを規定する。それゆえ、知られる対象は私たちの知覚経験の構成物ないし産物である。〔これに対してモンタギューは答える。〕ここでの誤りの本領は、感覚が外界の認識根拠であるという真なる前提から、感覚が外界の存在根拠であるという誤った結論へと進む点にある。

III. 実在論の含意

1. 認知は、生きている存在者 (a living being) と任意の存在者 (any entity) とのあいだに存立しうる特殊なタイプの関係である。
2. 認知が属する世界は、認知対象の世界と同一である。認知は自然の秩序のなかに位置づけられる。認知について超越論的なものも超自然的なものもいっさいない。
3. 意識は自然にどの程度浸透しているのか、また、意識はどのような条件のもとで生じ、持続するのかという問いは、もし解決されうるとすれば、経験論および自然主義の方法によってのみ解決されうる。

W・P・モンタギュー

IV

1. 意識の対象や内容が何らかの存在者であるのは、反射神経が示す特定の仕方では他の存在者がそれに対して反応する限りにおいてである。こうして、たとえば物理的自然は、ある状況のもとでは意識に直接現前する。

歴史に当てはめると、これはデカルト的二元論と表象説が誤りであることを意味し、精神と自然を互いに他方へと、あるいは第三の実体へと還元することによってこれら二つの立場を乗り越えようとする試みが根拠を持たないということの意味する。

2. ある存在者を意識内容として規定する特定の反応は、その存在者に対して内容という身分を与えるだけであって、直接的な変容を加えるものではない。いいかえれば、意識は自身が創り出すのではない存在者の領域から選択する〔にすぎない〕のである。

歴史に当てはめると、これはバークリーの観念論とポスト・バークリーの観念論の誤りを含意する。というのも、この観念論は意識が一般的な存在根拠だと主張するからである。

3. ある存在者を内容として規定する反応は、それ自身、類似した仕方では反応されうるし、内容にされうる。いいかえれば、主観と意識対象との違いは、質や実体の違いではなく、配列 (configuration) における働き (office) や位置の違いなのである。

歴史に当てはめると、これはデカルト的二元論の誤りを含意するだけでなく、主観は不可知であるか、さもなければ直観や内省といった何らかの独特な仕方でのみ知られうる——なぜなら主観と対象は交換不可能なものと想定されているからである——と結論するあらゆる観念論的二元論の誤りをも含意する。

4. 同一の存在者は、ひとつのクラスの成員であることによって内在性を有し、また無際限に多くのほかのクラスにも属することができるという事実によって超越性も有する。いいかえれば、内在性と超越性は両立可能であって、相反する述語ではない。

歴史に当てはめると、これは、自我中心的状況設定 (ego-centric

predicament)*⁸に基づく主観主義的論証——存在者は意識内容なのだから意識を超越することもできないという論証——の誤りを含意する。これはまた、超越論的主観性についての観念論的理論が、そうした主観主義的前提に依拠している以上不当であることも含意する。

5. 存在者はある関係とは独立に別の関係を持つ。関係についての限られた認識は、さらなる関係を知らなくても、またさらなる関係を見出しても、無効にならない。

歴史に当てはめると、これは、ある存在者が持つ関係を知るためにはその存在者が持つあらゆる関係を知る必要があり、つまり真理全体だけが完全に真であるという絶対的観念論の主張の誤りを含意する。

6. 統一性に関わる論理的カテゴリー——同質性、無矛盾性、整合性、相互関係など——は、いかなる場合も統一性の確定された度合いを含意しない。それゆえ、世界が有する統一の度合いは、経験に先立って論理的には規定されえないのであって、ただ認識の特殊な諸部門の結果を組み合わせることによってのみ規定される。こうした証拠に基づけば、現段階における推定では、全体としての世界はその部分のあるものよりも統一性が低いという仮説が支持される。

歴史に当てはめると、これは、プラトンやスピノザ、または現代のある種の観念論者たちの偉大な思弁的一元論が独断的かつ証拠に反することを含意する。

ラルフ・パートン・ペリー

*⁸ これは新実在論が認識論的観念論の主要原理と目したものである。これは本来、認識対象と認識主観の不可分性についての主張、いいかえれば認識論的な場面に関するものである。しかし、観念論はこの設定を不当に拡張する。すなわち、観念論は、認識されていないものは認識されていないという（トートロジカルな）主張に基づいて、認識されていないものは存在もできないと主張するのである。こうした状況は、観念論者が精神の認識作用を過度に重視し、存在を認識に同化させるという（暗黙の）前提を指定することから生じるものであり、ペリーたち実在論者はまさにこうした議論の立て方そのものを批判している。それゆえ、観念論の陥る状況があくまで観念論者自身による設定に由来するという点を強調するために、“predicament” はあえて「状況設定」と訳すこととし、「苦境」とは訳さない。なお、本章 III 節の II-2 のテーゼにおいて批判されているのも、これと同じ論点である。

V

実在論者の主張は、知られる事物は知るといふ関係の産物ではないし、知られる事物の存在やふるまいが、この関係に本質的に依存してもしないといふことである。この学説は、諸君が同意してくれるならば、三つの主張をしている。第一に、実在論はあらゆる人が持つ自然で直観的な信念であり、それゆえ、ほかに理由がないのであれば証明責任はこの学説を信じない人のほうにある。第二に、管見の限り、実在論に対する論駁はすべて、この学説の専売特許である含意のいくつかを前提しているか、あるいは実際に採用さえしている。第三に、実在論は心理学を含む自然科学のあらゆる観察と仮説によって論理的に要請される。

実在論の見解と程度の差はあれ密接に関わるのは、以下のものである。

1. 一にして同一の項は、多くの関係に入ることができる。
2. ひとつの項は、みずからに対する関係やほかの項に対するその他の関係すべてを変化させることなく、いくつかの項に対するいくつかの関係を变化させることができる。
3. 関係の所与の変化によってどの関係が変化するのかということは、必ずしも問題となっている項や関係の本性だけから演繹されうとは限らない。
4. 「主観がなければ対象もありえない」という仮説は純然たるトートロジーである。どう見てもこれは認知の状況にだけ当てはまる記述であり、それどころか、これが述べているのは、経験されるものはすべて経験されるということ〔だけ〕である。こんなことは、上述の1、2、3の学説が誤っているというまったく無根拠な想定をしなければ意義を持たない。しかし、このように想定してしまうと、真なる命題がひとつもありえないことになるので、観念論者が仮定する発見にとっては致命的である。この想定を認めることで、観念論者は自分を論駁する羽目になる。
5. 可能的認識が制限されているとか、その制限がどのようなものであり

うるかといったことは、認識のいかなる総体のなかにも、また認識関係の本性に関する証拠のなかにさえも、見出すことはできない。

6. 存在者は、いわゆる「知る精神」や「意識」に対して超越しているが、それは、項がみずからの関係に対して超越しているのと同じ仕方において、いいかえれば、以下の二つの根本的に異なる仕方においてのみである。第一に、項がその個別の関係と同一でないのと同様に、認識関係における事物もその関係そのものと同一ではない。第二に、項が本質的な変化を被ったり破壊されたりせずに個別の関係に出入りできるのと同様に、認識対象も、認識関係に入る前にも入ったあとにも存在できるし、認識関係から除去される前にも除去されたあとにも存在できる。こうして、超越とはまずもって区別を意味し、つぎに機能的独立を意味するのである。
7. 公理的真理とか直観的真理というものが存在しうる。しかし、ある真理がこれら二つのいずれかのクラスに属するという事実があるからといって、その真理が認識の理論にとって基礎的だとか重要だということにはならないし、まして実在の理論にとってはなおさらである。ほかのすべての真理と同じく、公理的ないし直観的真理もまた、ほかの関連する真理の光のもとで解釈されなければならないのである。
8. なるほど項は新たな文脈のなかに持ち込まれることによって変容されないとはいえ、このことは、ある存在が別の存在によって変化することはありえないということを含意するわけではない。

ウォルター・B・ピトキン

VI

1. 実在論は、すべての知られる存在者が知ることや経験や意識と関係するというトートロジーを認める一方で、この知ること等々が除去可能であるから、その存在者は知ることが生じなかった場合にそうであるだろうとおりに知られると主張する。簡潔に言えば、その存在者は、

自身の存在、ふるまい、性格に関して、知ることから独立している。この立場は常識と科学に同意して、(1)すべての存在者が心的、意識的ないし精神的であるわけではなく、また(2)存在者が現に知られることなしに知られうる、と主張する。

2. 複数の項が認知関係のなかにあるという事実は、項同士が依存しあうとか、項と関係が依存しあうとか、互いに変容を加えあうことがありうるといったことを含意しない。同様に、先の事実は、この依存等々がほかのどんな関係におけるどんな二つの項にとっても成立しているといったことも含意しない。こうした依存等々があるという命題は、関係についての「内的見方」にはほかならない⁽¹⁾。实在論に反対するほとんどの体系がこの「内的見方」を前提しているのを示すことは可能である。しかし、この見方が自己矛盾しており、しかも「外的見方」を前提しているのを示すこともまた可能である。
3. 言明され、論証され、真だと見なされるいかなる立場の条件としても前提されるところの論理的学説の含意を受け入れ、それを整合的な仕方を使い発展させることに部分的に依拠するような立場は、そのことによつてみずからの正しさを支持するために作り出される強力な推定を有する⁽²⁾。
4. 真と見なされるどんな体系によつても究極的に前提されている論理的学説と原理が、少なくともひとつある。その学説とは関係についての「外的見方」であり、その原理とは、証明は真理から独立していないが、真理は証明から独立しているというものである。第一のものの意味するところは、簡潔に以下のように表される。
5. (1) 項と関係は両方とも(不変の)要素ないし存在者であること。(2) 項は、ひとつ以上のほかの項との、ひとつ以上の関係に入りうること。(3) これらの項のすべて、またこれらの関係のいくつかは、欠如可能であること、そして、ほかの項や関係は、残りの項やすでに現前している項ないし関係といったものの変容等々という結果を何ら伴わずに現前しうること。
6. この「外的見方」によつて、知る過程とその対象が質的には似ていないはずだということが論理的に可能になる。(1を見よ。)

7. この原理（4を見よ）の意味は、一方で、いかなる命題も精査や批判、証明の要求から免除されていると見なしうるほどには確実ではないが、他方で、いかなる命題も自己矛盾から解放されていけば（何らかの体系においては）真であるかもしれないということである。この意味で、あらゆる命題は暫定的であり、それはこの綱領の諸命題でさえも同じである。

系——「絶対的」という概念が、ある基準や定義、理論、内容——それがどのようなものであれ——が絶対的に真である、いいかえれば暫定的以上のものであるということによって絶対的に知ったり証明したりできるような基準や定義、理論、内容を得ることは不可能である。そのような基準等々について主張できることは、せいぜい、証明されてはいないけれども絶対的に真であるかもしれないということだけである。

8. あらゆる存在者は、あらゆる点において知られなくても、またそれと関係するほかの存在者が知られなくても、ある点において実際にあるとおりに知られうる。その結果、知識は堆積 (*accretion*) によって増加することができる。
9. 知ること、意識等々は、ほかの事実と同じ方法によってのみ探究されるべき事実であって、ほかの事実よりも重要だということには必ずしもならない。
10. この綱領で表明された立場は、ほかの事柄に関する立場であるのと同様に、知ることに関する立場でもあり、認識に関してみずからが主張したすべての命題を、認識の特殊な実例として自己適用することができる⁽³⁾。

- (1) 私の考えでは、「内的見方」の主張とは以下のものである。すなわち、関係が〔項を〕関係づけるためには、その関係は(1)項に浸透する (*penetrate*) か、(2) 基底底 (超越的) な実在によって媒介されるか、いずれかでなければならない。浸透からは、(a) 変容や (b) 類似性や (c) 矛盾の発生が演繹される。以下の拙論を見よ。“The Logical Structure of Self-refuting Systems: I. Phenomenalism,” *The Philosophical Review*, Vol. 19, No. 3 (1910), 277–282.
- (2) 私は主張では、このような体系こそが実在論なのである。その主な特徴は、認知関係

第5章 「6名の実在論者による探究計画および第一綱領」訳解

を「関係についての」「外的見方」に従って解釈することである。この「外的見方」は實在論とまったく整合的に真であると見なすことができるし、この意味において自己充足的だと私は考えており、私見によれば實在論も同様である。したがって私は、實在論がたんなる独断的な体系ではないということ、また、實在論は自己充足的なので、「内的見方」に基づくせいで自己論駁に陥る対立する体系を頭ごなしに否定するわけではないということ、さらに主張する者である。

- (3) 思うに、この理由のために、ここで述べられた立場は自己批判的であり、このことが歴史的体系の大きなクラス、とりわけ現象主義、主観的および客観的観念論、絶対主義からこの立場を区別するものである。

エドワード・グリーンソン・スポールディング

第 6 章 E・G・スポールディングの分析概念と 分析的实在論：世紀転換期アメリカ哲学史 (3) ^{*1}

大厩 諒

Keywords: 分析的实在論、分析という方法、そのままにする分析、存在者、存立者、存立する、価値、幻覚、理念、ブラッドリー、ベルクソン、ラッセル

1. はじめに

前章では、米国の新实在論者 6 名の旗揚げとなる論考を見た。本章では、そのうちの一人であるスポールディング (Edward Gleason Spaulding、米、1873–1940) の思想を概観する。とりわけ、彼が提唱した「分析」という方法論と、それに基づく「分析的实在論」の内実が明らかになるだろう。検討するテキストは、『新实在論——哲学における協働的研究』(*The New Realism: Cooperative Studies in Philosophy*, 1912) 所収の論考「分析の擁護」(“A Defence of Analysis”)と、スポールディングの主著『新合理論——現代の論理学と科学に基づく、複数の対立する哲学体系の批判をとおしたひとつの構成的实在論の展開』(*The New Rationalism: the Development of a Constructive Realism Upon the Basis of Modern Logic and Science, and Through the Criticism of Opposed Philosophical Systems*, 1918) である。本章の議論によって、世紀転換期の实在論の一側面の解明が図られる。

2. 『新实在論』について

新实在論者 6 名は、「綱領」論文を公表した 2 年後に、運動の集大成となる論文集を出版した。それが『新实在論』である。『新实在論』は「綱領」論

^{*1} 本章は、世紀転換期のアメリカ哲学史を新たに描きなおすという計画の一部をなすものである。副題にある「世紀転換期アメリカ哲学史」の (1) と (2) は以下である。大厩 (2021) ; 大厩 (2023)。なお、大厩 (2022) もこの計画の一環である。

文において提唱された分業体制をとって哲学の諸領域を論じたもので、その目次は以下のとおりである（章番号は振られていない）。

- ・「序論」
- ・マーヴィン「認識論からの形而上学の解放」
- ・ペリー「独立に関する实在論的な理論」
- ・スポールディング「分析の擁護」
- ・モンタギュー「真理と誤謬に関する实在論的な理論」
- ・ホルト「实在論的な世界における錯覚経験の位置」
- ・ピトキン「生物学に関するいくつかの实在論的な含意」

【付録】

- ・「綱領」論文（転載）
- ・モンタギュー「ホルト教授の論考への註記」
- ・ホルト「モンタギュー教授の論考への註記」
- ・ピトキン「ホルト、モンタギュー両教授の論考への註記」

「序論」は無署名であるが、ペリー（Ralph Barton Perry、米、1876–1957）とモンタギュー（William Pepperell Montague、米、1873–1953）がそれぞれ独立に発表していた論文（Perry, 1910; Montague, 1912）に手を加えたうえでつなぎあわせ、6名の共通見解として提示したものである*2。また、付録に収められた新实在論者同士の相互批判は、後世の歴史家によって「同胞殺しの議論」（Kuklick, 2001, p. 207 大既他訳 2020 p. 300）とも呼ばれ、哲学において統一見解を打ち立てることの困難さを物語っている。

この論文集の出版直前には、主要な学派を概括的に論じ、それらに代わるべき立場としての实在論を詳述したペリーの『現在の哲学的諸傾向——自然主義、観念論、プラグマティズムおよび实在論の批判的概観、ウィリアム・ジェイムズの哲学の総観とともに』（*Present Philosophical Tendencies: A Critical Survey of Naturalism, Idealism, Pragmatism and Realism Together with A Synopsis of the Philosophy of William James*, 1912）や、マーヴィン

*2 「序論」の邦訳は豊泉・磯島（2023）である。

(Walter Taylor Marvin、米、1872–1944)の『はじめての形而上学』(*A First Book in Metaphysics*, 1912)といった著作が相次いで公刊された。その後、ホルト (Edwin Bissell Holt、米、1873–1946)の形而上学的主著である『意識の概念』(*The Concept of Consciousness*, 1914)や、本章で扱うスポールディング『新合理論』も出版されたことで、新实在論運動は成熟の域に達したと言われる (De Waal, 2001, pp. xiii, xxxi–xxxii; 大塚, 2021, 355–363)。

3. 「分析の擁護」について

本節では、『新实在論』所収のスポールディングの論考「分析の擁護」を読解し、哲学の方法としての分析と、それに基づいた形而上学を概観する*3。

3.1 スポールディング略伝

彼の哲学の内容を扱う前に、その経歴を見ておこう (Hull, 2013, 157–158)。スポールディングは、1873年8月6日バーモント州バーリントンで弁護士の父アメリカスと母メアリーとのあいだに生まれた。先祖のエドワードは1619年にヴァージニアに渡ったジェームズ・シティの最初の入植者の一人だった。バーモント大学、コロンビア大学を経て、スポールディングは1900年にドイツのボン大学でPhDを取得した。そのときの博士論文は、加筆されたうえで『エネルギー論の立場から見た精神物理学的平行論の批判に対する貢献』(*Beiträge zur Kritik des Psychophysischen Parallelismus vom Standpunkte der Energetik*, 1900)というタイトルで出版された。

その後、1900年から1905年までシティ・カレッジ・オブ・ニューヨーク (CCNY) で教えたあと、ウッドロー・ウィルソン学長の招きによってプリンストン大学の哲学助教授 (1905–1914)、同教授 (1914–1936) を務めた。最終的には「マコッシュ哲学教授」に任命され、1940年に亡くなるまでその職にあった。1932年から33年にはアメリカ哲学会東部部会会長を務めた。

また、夏期休暇中にマサチューセッツ州ウッズホールにある海洋生物学研

*3 「分析の擁護」に見られる分析概念と形而上学については、大塚 (2022, 38–40) において手短かに論じた。本節の議論はこれを拡張したものである。

究所の哲学講師としても教鞭を取り、第一次世界大戦ではアメリカ陸軍化学兵器部隊の工兵中尉として従軍した。

3.2 分析とは何か

つづいて、「分析の擁護」(Spaulding, 1912, pp. 155–247)の内容を検討する。冒頭でスポールディングは以下のように述べる。「私の具体的な目的は、たんに分析としての分析を擁護することだけでなく、この方法によって、全体と部分の両方に対する一般的な実在論的解釈を擁護することである」(Spaulding, 1912, p. 155)。すなわち、分析という哲学的方法と、それに基づく実在論的立場の両方を擁護することが彼の目的である。

そのうえで、スポールディングは分析を、「もろもろのもの [entities] —— 分析される全体が実在的であるのとまったく同じ意味において実在的であるような諸部分 —— を発見する知の方法」(Spaulding, 1912, p. 155)と定義する。すなわち分析とは、概念や言語を対象とするのではなく、実在する当の事物を対象としたものであり、実在する全体のなかに部分を発見する作業である*4。

さらに、スポールディングは分析を二つのタイプに区別する。第一のタイプは「形相的 [formal]」分析と呼ばれる (Spaulding, 1912, p. 155)。これは、投射体の運動、電流の流れ、数列、時間の連続性といった全体に適用される。形相的分析は全体のなかに複数の部分を発見するが、対象を現実には分解しないため全体そのものは元の状態を保つとされる (Spaulding, 1912, p. 156)。

第二のタイプの分析は、「実験的ないし「質料的 [material]」分析である

*4 分析という方法については、『新実在論』の「序論」においても論じられている。分析はそこで、哲学の改革のために必要な「規範」のひとつだとされる (Holt et. al., 1912, p. 21; 豊泉・磯島, 2023, 337–338)。そのうえで分析は、「厳密な知識一般に関する方法」、すなわち「問題含みな事柄が単純者の複合体であることを発見する手続きに関する方法」(Holt et. al., 1912, p. 24; 豊泉・磯島, 2023, 340)と定義される。この意味での分析は、「言説のあらゆる主題を注意深く、体系的に、余すことなく吟味すること」(Holt et. al., 1912, p. 24; 豊泉・磯島, 2023, 341)にほかならず、哲学における問題の混同 (さらには存在するものの混同) を取り除くために用いられる。

(Spaulding, 1912, p. 155)^{*5}。化学物質の分析がこの種の分析の例である。分析対象となる物質は現実に物理的に分解される。その構成要素は、全体としての化学物質と同じ仕方で明らかにされる。ほかに、物理学や生物学、心理学の実験においても、このタイプの分析が用いられる (Spaulding, 1912, p. 156)。

つづいてスポールディングは、分析される全体についても以下のような分類を設ける (Spaulding, 1912, p. 157)。

- (1) 恣意的に寄せ集められた全体。たとえば、「いま私が関わっているもの」という枠組みで寄せ集められた全体 (この椅子、このテーブル、このペン、私の思考、「全体」という概念など)。これは「集合」と呼んだほうがよいだろう。
- (2) それ自体でまとまりを持つ全体。たとえば、炭素原子、すべての電子、偶数の整数など。
- (3) 下位の全体から構成される全体。たとえば、整数という全体は、奇数

^{*5} ここでスポールディングは、『新實在論』所収のペリーの論考「独立に関する實在論的な理論」(Perry, 1912b)の一節を指示している (Spaulding, 1912, p. 155n2)。当該箇所においてペリーは次のように述べている。「2. 全体-部分。全体はその部分に、すなわち全体が含むものに依存しており、その部分へ分割されたり分析されたりすることができると言われる。ここで、全体-部分という依存の「質料的」な実例と「形相的」なそれとの区別を導入することは有意義である。前者は、現在のロンドン市とトラファルガー広場の関係、あるいは合衆国の現政権とタフト大統領〔任 1909-14〕の関係に示される。後者は、街とその街路の関係、あるいは政権とその長の関係に示される。いいかえれば、質料的関係は変項の特定の値同士の関係であり、形相的關係は変項同士の関係である。部分に対する全体の依存は、どちらのタイプでもありうる。3. 部分-全体。部分は、それが属する全体が「有機的」であるとき、その全体に依存していると言われる。ここでも「形相的」と「質料的」という区別が適用可能である。たとえば、直角三角形の斜辺は、直角三角形の定義に形相的に依存している。それは全体への参加からその意味を導き出すだけでなく、その大きさは対角や隣接する辺など他の部分との相互関係によって決まる。特定の斜辺も同様に、それが属する特定の三角形における質料的なメンバーシップによって定義され、決定される。同様に、生物学的な意味での器官やメンバーは、その意味に関しては形相的に、またその構造や機能に関しては質料的に、それが属する生物の統合性に依存していると言われる」(Perry, 1912b, pp. 107-108)。また、同じ p. 155n2 では、ラッセル *Principles of Mathematics*, 第1巻の各所も併せて指示されている。なお、*Principles of Mathematics* への参照指示は「分析の擁護」の随所に見られるが、これとスポールディングとの比較については他日を期すこととする。

と偶数という下位の全体から構成される。

- (4) 統一を持った全体。たとえば、特定の時空間に存在する任意の有機体や分子など。

とはいえ、これらの区別の詳細に立ち入る必要はない。重要なのは、分析が、「あるものが何らかの意味において部分から形成ないし構成されているのを発見すること」であり、「いかなる場合であれ部分の発見を意味する」ということ、しかも、これらの部分は「分析や発見から独立してすでに存在ないし存立している」(Spaulding, 1912, p. 158)という点である。いいかえれば、実在にはもともと複数の部分があり、それを見出すことが分析なのである。部分はいくまで発見されるものであって、人為的な作業によって捏造されたり歪曲されたりした結果ではない。こうした立場が、スポールディングの「分析的实在論」(Spaulding, 1912, p. 155)である*6。彼は以下のように述べる。

实在論者によれば、分析とは、少なくとも大部分においては、分析や発見から独立に存在ないし存立する要素や部分を、ひとつの全体のなかに発見することである […。](Spaulding, 1912, p. 158, 下線強調は原文でイタリックの箇所を表す。以下同様。)

他方で、分析に対する正反対の見方の代表者として言及されるのがベルクソン (Henri Bergson、仏、1859–1941) である。スポールディングはベルクソンの『創造的進化』(*L'Évolution créatrice*, 1907) を挙げながら、その見解を以下のように要約する。ベルクソンによれば分析とは、自然の予測や制御といった実際的な目的のために、实在を部分へ人為的に改変することである。分析はたんなる知的道具、適応の様式にすぎず、あくまで人間の観点からなされるものである。これはプラグマティズムとも結びつけられたうえで、「分析についてのヒューマニズム的解釈」(Spaulding, 1912, p. 158)と

*6 ラッセルは“Le Réalisme analytique”という論文を1911年(『新实在論』刊行の前年)のフランス哲学協会の機関誌に発表しているが、この論文がスポールディングに与えた影響や、より広く、論理的原子論というラッセルの立場と新实在論との関係は現時点では不明である。

呼ばれる。

くわえて、別の立場として、実在の本来のあり方は連続的かつ統一的な全体であって、分析によって切り出される部分は非実在だとする立場もある (Spaulding, 1912, pp. 159–160)。ここでもベルクソンが典型例として紹介され、さらには、ブラッドリー (Francis Herbert Bradley、英、1846–1924) の『仮象と実在』 (*Appearance and Reality*, 1894) も挙げられる。彼らは、分析は改竄と同義であり、実在本来のあり方である統合的全体と相容れない諸部分というものを捏造する所業にはかならないと論じる。究極の実在は一なるもの、一なる絶対者、一なる進化である。諸部分や諸要素はおしなべて「普遍的な相互浸透」 (Spaulding, 1912, p. 165) においてあり、全体から切り離して取り出すことで本性ごと代わってしまうのだとされる。

しかし、スポールディングによれば、こうした分析一般への非難そのものが分析の妥当性を前提している。というのも、反論者たちが自身の立場を明らかにしたり相手の立場を検討したりするとき、彼らはまさに分析を用いて議論をおこなっており (そうでなければまともに議論することなどできないだろう)、その際の分析は妥当なものだと暗黙裡に認められているからである。つまり、「その攻撃の意に反して、〔分析という〕攻撃手段の妥当性が前提されている」 (Spaulding, 1912, p. 161)。しかも、かりに分析を全面的に廃棄すれば、彼らは自分たちが奉じる全体なるものに対する合理的なアプローチを失うため、一種の神秘主義にならざるをえない。こうして、分析に対する攻撃は、二枚舌を用いるか合理的探究を放棄するかというディレンマに陥ることになる。

それゆえ、哲学的方法としての分析はまったく妥当であると結論される。

分析された全体が下位クラスを持つクラスであるような種類の分析、あるいは最終的に項としての個体を持つクラスであるような種類の分析は、〔…〕実在的である〔…〕ようなものを発見する方法でありつづける。 (Spaulding, 1912, p. 236)

私たちは実在の分析を進めることで個体に至る。それは、実在の歪曲でも想像の産物でもなく、実在そのもののあり方を反映したものである。その意味で、分析結果は実在的であり真なのである。

3.3 「分析の擁護」における实在

以上で、分析という方法の妥当性が示された。それでは、この分析によって発見される实在のあり方はどのようなものか。「分析の擁護」では、この点について詳しく述べられていない。ただし、分析対象となるものが「すべての項、関係、クラス、概念、命題などであり、これらは存在ないし存立している」(Spaulding, 1912, p. 163)という記述が見出される。これは、实在是感覚的、知覚的な所与ではなく、きわめて理論的かつ科学的に分析された単純者(項および関係)だということである(大島, 1943, pp. 286-288)。単純者は、日常的な事物という全体を分析することで発見される、精神や認識から独立した部分である。

以上を踏まえて「分析の擁護」におけるスポールディングの立場をまとめれば、以下ようになる。

- (1) 实在論的な分析観。分析は、概念や言語を対象とするのではなく、实在する当の事物を対象としている。
- (2) 発見的な分析観。分析は实在の歪曲や捏造ではなく、实在本来のあり方を発見する方法である。
- (3) 多元論的な实在観。实在の諸部分は分析によって発見されるが、实在それ自体としても複数の部分を持つ。

4. 『新合理論』について

4.1 『新合理論』の意図と全体像

『新合理論』はスポールディングの哲学的名著であり、分析に基づいた自身の实在論を縦横に展開したものである。「はじめに」においてスポールディングはその企図を以下のように述べる。「本書は歴史的方法ときっぱり袂を分かち、各哲学体系を論理的に導出しうる公準とは何か、また、あらゆる体系に共通し、あらゆる体系によって論理的に前提される諸原理の総体というものが究極的には存在するかを確認することに努めた結果を示すものである」(Spaulding, 1918, p. vi)。それゆえ、本書で示される諸原理は「合理的

に哲学する努力のなかにおしなべて論理的に現われる」(Spaulding, 1918, p. vi) ものである。こうして、『新合理論』は、「感覚に対して開示され、私たちが自然と呼ぶものを形成する実在的なものについての新实在論」を提唱すると同時に、「理性によって発見される理念的なものについての新实在論」(Spaulding, 1918, p. vi) をも提唱する。ようするに、全哲学に共通する基礎を理性によって発見し、そのような基礎である理念および価値の実在性を堅持することが、スポールディングの目論見である。

このように、スポールディングの新たな合理論(理性主義)は、あらゆる事柄の「擁護と論駁の手段」(Spaulding, 1918, p. vii) である理性に立脚し、感覚の事実と理性の事実をひとしく率直に認識する。いいかえれば、スポールディングは、数学や論理学だけでなく、美学、倫理学、宗教も人間本性から独立しているとする厳格な实在論を採用する。新实在論者の一人で、本書を評したマーヴィン(Walter Taylor Marvin、米、1872-1944)の言を借りれば、スポールディングの世界は、主観主義とは対照的に、「善いもの、真なるもの、美しいものは、世界史というドラマのなかで人間が現われたり消えたりすることによっては追加されることも減じられることもない、永遠にありつづけるプラトンの世界を形成している」(Marvin, 1919, 219)*7。

こうした实在論の背後には、理念的なものを否定したり軽視したりする唯物論ないし自然主義への批判という意図がある。スポールディングは、この種の哲学が、当時進行中であった第一次世界大戦という未曾有の暴力を正当化する哲学にほかならなないと見なした。したがって彼は、「世界をその文明の根底から覆しつつあるこの自然主義に対して哲学的な論駁が可能であることを確かめること、また、そうした論駁があるとすればそれが何であるか、その手段はどこに見出されうるかを確かめること」(Spaulding, 1918, p. vii) を目指したのである。

このように『新合理論』は、合理論の確立と唯物論の論駁という表裏一体の目標を追求したものである。

さらに、スポールディング哲学の全体像については、『新合理論』公刊の翌年に『フィロソフィカル・レビュー』上で発表された書評が、以下のよう

*7 理念の実在性については4.3.3でさらに論じる。

な簡潔な見とおしを与えている (Schaub, 1919, 414)。評者はヴントの著作の翻訳を数多く手がけた米国の哲学者シャウブ (Edward L. Schaub、米、1881-1953) である。

- (1) 实在論：知る主体である意識と知られる対象は外的に関係しており、他のものから独立している。それゆえ、対象は知られることによって変容せず、そのままにする分析 (後述) をとおして考察可能である。
- (2) 新たな形態の合理論：現代数学に見られる、より新たな分析に立脚した立場。
- (3) 存在論的多元論：実は、構成要素および要素間の関係において多である。
- (4) 汎客観主義：錯覚や幻覚も含めたあらゆるものは客観的でありうる。
- (5) 認識における絶対主義：対象は、認識関係に対して絶対的である。すなわち、対象は認識主体から切り離されて存在することが可能であり、正しく知られたり、そうでなかったりするし、知られるようになったり、知られなくなったりもする。

4.2 『新合理論』における分析

本書においてスポールディングは、新たな論理学に基づいてみずからの实在論を展開している。すなわち、「本書で受容、擁護、説明される实在論は、アリストテレス的伝統のもとにある論理学と形而上学に真っ向から対立する論理学と形而上学の学説に基づく」(Spaulding, 1918, p. 10)。新たな論理学は、系列 (series) の論理学とか秩序の科学と呼ばれ (Spaulding, 1918, pp. 10-11)、個体の「秩序づけられたクラス」(Spaulding, 1918, p. 156) である系列の分析によって発見された原理から構成されると言われる (Spaulding, 1918, p. 174)。この論理学は、実体・性質・因果関係を偏重する古い論理学を否定し、関係を重視するという形而上学に依拠する。「現代の論理学が関係の概念を中心に据えるのに対して、アリストテレス的な論理

学は実体と因果の概念を中心に据える」(Spaulding, 1918, p. 157)*⁸。

そのうえでスポールディングは、前述の分析——部分の本性に変更を加えずに分離する考察方法——を「そのままにする分析 [analysis *in situ*.]」と呼ぶ。これは、現在でも医学や生物学などの諸分野で使われる用語だが、スポールディングはこれを、分析主体が分析対象に対して外的にしか関わらない分析という意味で用いる。先の「分析の擁護」においても一度だけ用いられたが (Spaulding, 1912, p. 243)、『新合理論』においては鍵概念として多用される。彼自身の記述を見てみよう。

新たな論理学の方法は分析的かつ総合的である。分析するということは、全体のなかの部分、あるいは全体に含まれる部分を発見することであり、また、部分間の関係の性格を発見することでもあるが、これが達成されると、そこには総合というものもあることになる。なぜなら、実験的に諸部分を総合する準備段階は、部分を発見したあとにそれらをどのように組み合わせるかを見出すことだからである。ところが、実験が不可能な場合でも、部分とその部分が持つ関係の特定の性格とが発見されているのだから、すでに総合というものがあることになる。この第二の方法は、そのままにする分析および総合である。私たちは全体でもって事を始め、そのなかに部分を発見するが、部分は影響を受けずに残される。(Spaulding, 1918, p. 158)*⁹

*⁸ このような新たな論理学に関する文献として、スポールディングは以下を列挙している (Spaulding, 1918, p. 175)。なお、書誌情報の表記はスポールディングのものに従う (註 9, 11, 12 も同様)。Cassirer, *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*; Huntingdon, “The Continuum as a Type of Order,” *Annals of Mathematics*, 1905; A. B. Kempe, “The Subject-matter of Exact Thought,” *Nature*, Vol. XLIII, 1890, 156ff.; Nernst, *Theoretische Chemie*, trans. K. A. Lehfeldt, 365; C. S. Peirce, “The Logic of Relations,” *Monist*, Vol. VII., 1897, 353ff.; Royce, “The Relations of the Principles of Logic to the Foundations of Geometry,” *Transactions of the Am. Math. Soc.*, Vol. VI, 1905, 161ff.; also “The Principles of Logic” in the *Encyclopedia of the Philosophical Sciences*; B. Russell, *Principles of Mathematics*, 1903, and *Scientific Method in Philosophy*, 1914; Whitehead and Russell, *Principia Mathematica*; Whitehead, *Introduction to Mathematics*; J. W. Young, *Fundamental Concepts of Algebra and Geometry*.

*⁹ スポールディングによれば、「そのままにする分析」という語は数学において用いられ

ここでは、实在論の要となる方法として分析と総合の二つが挙げられたうえで、実験によって実際の分析および総合が可能な場合と不可能な場合とについて述べられている。そのままにする分析は、後者の場合に複合物の詳細を発見しようとするとき、近代科学において用いられてきた (Spaulding, 1918, p. 27)。そして、分析と並んで部分の総合についても、対象の本性に変更を加えない操作が可能であることが述べられている。いいかえれば、实在の部分同士は外的な仕方でも関係しあうのである。

認識の場面においても事情は同様である。認識主体と認識対象は数的に別個であり、互いに外的に関係しあう。机やペンや犬は、あなたや私から独立に存在しているし、誰かに知られたからといって変容を被ることはない。この認識関係を経験的に分析するのが、そのままにする分析である (Spaulding, 1918, p. 372; Schaub, 1919, 415–416)。すべての事物が必ずしも内的に関係づけられているのではないことは経験から明らかである以上、少なくともある場合には、そのままにする分析が可能なのである (Spaulding, 1918, p. 396)。

このような实在論と分析法が確立されれば、「あらゆる分析はそれ自体で改竄である」というブラッドリーやベルクソン流の主張は無効となる (Spaulding, 1918, pp. 396–397)。こうした主張は、複数の事物はすべからく内的に関係づけられていなければならないという独断にすぎない (Spaulding, 1918, pp. 400–401)。分析は分析対象となる事物を変化させたり偽ったりしない。ボールが床の上を転がり、猫が餌を食べるとき、そこにはボールと床、猫と餌といった関係項同士の外的な結びつきがあるだけである。分析される事物は、分析という作用に関係づけられてはいるが、そこから独立しうるのである。

こうして分析は、感覚や直観といった他の方法と同様に、实在する諸事物を発見し説明するための信頼できる方法なのである。

るものだが、ここではそれを認識一般という、より広い場面で用いている (Spaulding, 1918, p. 27n2)。また、同じ箇所では以下の文献が挙げられている。Cajori, *History of Mathematics*, p. 220; Russell, *Principles of Mathematics*, 141, 466。

4.3. 『新合理論』における実在

つづいて、スポールディング自身の実在論的な形而上学がどのようなものかを論じる。これは「分析の擁護」では十分に展開されなかったものである。

彼の存在論は『新合理論』の随所で論じられるが、全体の見取り図となる表が第44章「宇宙論の一部としての認識論と心理学」で示されている (Spaulding, 1918, p. 494 = 表1)。そのため、以下ではこの表に即して彼の実在論を解説しよう。

表 1

| | | | |
|------------------------------------|--|--|--|
| "Consistents" or Subsistents | { Exists (perceived and inferred, remembered and imagined) Past (that which is correlated with time-periods that precede the present). Future } | { Physical Psychical } | { 1. Simples 2. Complexes a. Things. b. Events. c. Appearances, such as convergence of rails. d. Qualities. Any process, simple or complex, of perceiving, remembering, imagining, reasoning, willing, and all emotions. a. Events. b. Appearances. c. Qualities. } |
| | | { Implied subsistents; discovered by reason; Non-existent Subsistents (in some cases non-spatial and non-temporal); also perceived and inferred, remembered and imagined. } | { 1. Entities presupposed as logically prior conditions for existents: relations, such as similarity and difference; classes as <i>such</i> ; numbers, space, time, logical principles; series, infinity, and continuity. 2. Simples and complexes; terms and qualities. 3. "Ideal" entities, contrary to existent fact, yet discovered by reason; some spatial and temporal (in general), some not. Examples, <i>perpetuum mobile</i> , "ideal" justice. } |
| | { Experienced, but not implied subsistents; some spatial and temporal, and some not. } | { 1. "False" hypothetical entities, e.g., phlogiston. 2. Imagined entities, such as centaurs and satyrs. 3. Illusory and hallucinatory objects (dreams), such as the "snakes" of <i>tremens</i> . } | |

まず注意すべきことは、表に含まれるすべてのものが認識主体や意識から独立しているという点である。いいかえれば、この表全体が、認識主観に対する認識対象の依存を否定する実在論的立場の表明である。同時にこの表は多元論を主張してもいる。実在の根底に万物の統一者のようなものを措定する一元論に対して反対するからである*10。さらに、スポールディングの立場

*10 「宇宙の外側において宇宙を統一するような概念など存在しない。実際、経験的な証拠

は、プラグマティズム——いくつかの存立者や存在者は、何世代にもわたって受け継がれてきた人間の意識の流れが生み出したたんなる発明品であり役に立つ図式にすぎないと考える立場——とも対立する (Spaulding, 1918, p. 495)。

■4.3.1 存立者 さて、左端に置かれた「整合者」ないし「存立者」は最大のカテゴリーであり、实在全体を包括する。そこには、時間と空間のなかに存在する物理的なものと心的なものが含まれると同時に、時空間のなかには位置を占めないもの——関係やクラスといった論理的なもの、理念など——も含まれる。以下で説明するように、实在是、いわゆる客観的な事物に加えて、知覚内容であれ記憶であれ、夢や幻覚であれ、意識に現われるすべてのものも含んでいる。これらはおしなべて「存立者」と呼ばれる。スポールディングは次のように述べる。

この实在論の主張においては、知ることができ、なおかつ知られることから独立しているもののような存立者からなる領域は、存在するものからなる領域よりもはるかに多様かつ広範である。(Spaulding, 1918, p. 11)*¹¹

この存立者は「整合者」とも呼ばれている。なぜなら、いかなる哲学も「自己矛盾の欠如」(Spaulding, 1918, pp. 418–419) という意味での整合性を前提し、それに従う義務があるからである。それゆえ、「丸い四角」

は、宇宙がひとつのクラスや種類の「事物」などではなく、多くの種類の「事物」だということを示している」(Spaulding, 1918, p. 190)。

*¹¹ スポールディングは「存立者」の学説に共感するものとして以下の文献を列挙している (Spaulding, 1918, p. 493n8)。Plato, *Republic*, especially Books V., VI., and VII., *Theaetetus*, *Parmenides*, *Phaedo*, and *Cratylus*; A. Meinong, *Gegenstandstheorie*, 1904, especially the essay by E. Mally, pp. 121–203, *Über die Stellung der Gegenstandstheorie im System der Wissenschaften*, 1907; B. Russell, “Meinong’s Theory of Complexes and Assertions,” *Mind*, N. S., XIII., 204ff, 336ff, 559ff.; “On the Relations of Universals and Particulars,” *Proc. Arist. Soc.*, Vol. XI., 1911–1912; *Problems of Philosophy*, pp. 127–157; *Principle of Mathematics*, 449ff.; R. B. Perry, 1912b, *Present Philosophical Tendencies*, Chap. X.; W. H. Sheldon, “The Metaphysical Status of Universals,” *Phil. Review.*, Vol. XIV., 1905; R. H. Nunn, *Aims and Achievements of Scientific method*, 4ff.

や「黒い白さ」といった矛盾したものは、たんなる「単語の組み合わせ」(Spaulding, 1918, p. 490)にすぎない。なるほどそれらは「言及可能なもの [mentionables]」(Spaulding, 1918, p. 489)だが、存立してはいない。個々の丸いものや四角いもの、丸さや四角さは存立者である。けれども、「丸い四角」はどんな経験においても与えられることはない。いいかえれば、「丸い四角」という一個の存立者があるのではなく、丸と四角という二つの存立者があり、それぞれ別の場所にあるということである (Spaulding, 1918, p. 490)。したがって、矛盾したものの居場所はスポールディングの宇宙にはない*12。

■4.3.2 存在者 存立者に続くカテゴリーは二つに分けられる。まず、上段にある「存在者 (知覚、推論、想起、想像の対象となる)」から見ていこう。存立者が時空間に限定されないものであるのに対して、存在者は「時間的に個別化され、おそらくは空間的にも個別化された」(Spaulding, 1918, p. 11)ものである。それゆえスポールディングは存在者を、「個別の場所、個別の時間「に」 [...] かつてあった、いまある、これからあるであろうもの」と定義する (Spaulding, 1918, p. 490)。ここには過去、現在、未来という時制が含まれており、表にあるように、現在は「私の身体および感覚知覚が相関するのと同じ実例 [instance] と相関するもの」、過去は「現在に先立つ時間的区分と相関するもの」、未来はそれ以外と相関するものとされる。

ただし、個別の時空間にあるという規定だけでは存在者の定義として不十分である。なぜなら、夢や幻は、時空的性質を持つてはいるが存在者ではな

*12 スポールディングによれば、項同士の矛盾は排他関係を意味する (Spaulding, 1918, p. 137)。たとえば、個別の赤という項に対して矛盾するのは、同じ時と場所にあるほかの色である。なぜなら、両者のあいだには排他関係が成立しているからである。また、命題同士の矛盾も項の場合と本質的に同じである。そして、排他関係自体は肯定的な事実である (Spaulding, 1918, p. 138)。矛盾する命題は、異なる言説の宇宙に、あるいは「異なる論理的場所 [different logical loci]」(Spaulding, 1918, p. 139)に存立するとされる。この点に関してスポールディングが挙げる文献は以下である (Spaulding, 1918, p. 136n1)。Whitehead, *Introduction to Mathematics, on the meaning of zero*, Chaps. V. to VII.; also Russell, *Principles of Mathematics, and Scientific Method in Philosophy* (see his index) ; cf. also Bergson, *Creative Evolution*, Chap. IV.

いからである。したがって存在者は「物理学、化学、生物学、心理学といった諸科学によって経験的に持っていると判断されるような十全な特徴を備えていなければならない」(Spaulding, 1918, p. 491)という追加規定が必要である。こうして、存在者は諸科学における経験的手法が全面的に用いられるもの、経験的な探究が可能なものだとされる。

つづいて、存在者が物理的、心的という二種類に分けられる。物理的存在者はさらに単純者と複合者に分けられる。前者は、複合という事態を可能にするが、それ自体は複合的ではない究極的な「単純な項」(Spaulding, 1918, p. 178)であり、点と瞬間がその例である(これは、物理的な実験によって分離されたり同定されたりすることはないが、「そのままにする分析」によって発見可能だとされる)。後者の物理的で複合的な存在者には、事物や力、エネルギーに加えて、固さや弾性といった性質、原因・結果といった関係、物体の落下や電流の流れといった出来事も含まれる。これらには直接知覚されるもの(事物、力、エネルギー)もあれば、直接知覚されるものを説明するために推論されるものもある(Spaulding, 1918, p. 491)。

また、表中のcにあるように、平行する二本のルールが地平線上で収束しているように見えるといった「仮象 [Appearances]」も物理的で複合的な存在者に分類される。なぜなら、収束するルールという見えているもの自体は、意識や認識作用によって構成されたものではないという意味で客観的だからである(Spaulding, 1918, p. 375)。ルールの収束は、光がそれぞれのルールから目へ向けてまっすぐ進むという「客観的な関係複合体 [an objective relational complex]」(Spaulding, 1918, p. 376)が持っている特徴であり、その複合体のなかに位置づけられる。こうして、いわゆる錯覚の対象は意識によって構成されたものではなく、錯覚でない通常の知覚と同様に客観的なのである。

他方で、心的な存在者とは、単純か否かを問わず、知覚や想起、想像、推論、意志、情動といった過程すべてのことである。これは経験的心理学の対象であり、ある特定の時間に生じるものとされる(Spaulding, 1918, p. 491)。心的な存在者が特定の時間に生じるのは、その条件となる組織化された神経系がその時間にあるからである。この点で、心的な存在者は時間のなかに位置づけられる。

■4.3.3 存在しない存立者 つぎに、表の下段、「存在しない存立者」に移ろう。これは、「(非時間的だったり非空間的だったりする場合がある)」が、「知覚、推論、想起、想像の対象となる」と言われる。この存立者は、(1) 理性によって発見される「含意された存立者」と(2) 時空的なものもあるがそうでないものもある「経験されるが含意されない存立者」の二つに分けられる。(1)と(2)のあいだの違いは、「発見のモードの違い」(Spaulding, 1918, p. 492)である。すなわち、ある存立者は理性によって発見される一方で、他の存立者は夢によって、また別の存立者は覚醒時の想像力によって発見される。

(1)「含意された存立者」は三つの下位区分を持つ。1は、「存在者にとって論理的に先行する条件として措定されるもの」であり、例として、類似や差異といった関係、それ自体としてのクラス、数、空間、時間、論理学の原理^{*13}、系列、無限性、連続性が挙げられる。2は「単純者と複合者」であり、もろもろの項と質がそれに当たる。最後に、3は「理念的」なものである。これは、存在する事実とは対立するが理性によって発見され、時空間一般のなかに位置づけられるものもあれば、そうでないものもある。たとえば、永久機関は、現実の個別の時空間内には存在しえないことが証明されているけれども、それがどのようなものかを考えることはできるし、そのとき永久機関は時空間なあり方をしていて——不定の時と場所にある——と見なされる(Spaulding, 1918, p. 493)。また、理念としての正義も理性によってその実在を推論できるため、3に位置づけられる。ただし正義はそのあり方からして時空間に位置づけられるようなものではない。

ちなみに、理念にこのような独自の実在性を認めるのはスポールディングの特徴である。理念はこの表中に示されたほかのものと同様に実在的かつ認識可能である。私たちの生きている具体的な社会や個々の行為がいかに悪辣なものであろうと、理念としての正義が存立しなくなるわけではない。人

^{*13} スポールディングは、論理学の原理や対象(クラス、個体、系列など)が存立していること、すなわち、客観的実在であることを認める(Spaulding, 1918, p. 20)。私たちの宇宙には、こうした論理的存立者が住まっている。それゆえ、論理学はこの宇宙そのもののあり方を扱う学問であり、「論理的科学の領域を拡張するのは世界における経験的研究である」(Spaulding, 1918, p. 173)と言われる。

類の誕生以前も滅亡以後も、理念は変わらずありつづける。理念は不完全な実例から独立し、数的に区別されたものだからである (Spaulding, 1918, p. 499)。このように、「理念が実在するという点で、現代の実在論と古代のプラトンの理想主義は同盟を組む」(Spaulding, 1918, p. 498)。正義や善や真理は時空間のなかにある事物によっては影響されない。すなわち、それらは非時間的であるという意味において永遠的であり、非空間的であるという意味において遍在する。理念は存立するが存在はしないのである。それゆえ、「時空間に条件づけられたもの——私たちが「存在者」と呼ぶもの——は、さまざまな度合で理念に近似してはいるが、けっして理念に到達することはない」(Spaulding, 1918, p. 498)。

道徳は、このような理念に基づくがゆえに、独自の存在論的身分を持っている。そのため、道徳を物理学や生物学といった自然科学の法則から導出したり、それらに還元したりすることはできない (Spaulding, 1918, p. 506)。こうして、「私たちの道徳的価値についての哲学は、私たちの実在論的宇宙論という、より大きな全体においてその位置を占める」(Spaulding, 1918, p. 507)。

最後に、(2)「経験されるが含意されない存立者」がリストアップされる。上述の(1)と同様に(2)も三つの下位区分を持つ。すなわち、1. 「偽」である仮説的なもの、たとえばフロギストン」、2. 「ケンタウロスやサテュロスのような想像されたもの」、3. 「^{しんせんせんもう}振顫譫妄の患者が見る「蛇」のような錯覚や幻覚の対象(夢)」である。

このうち、新実在論をめぐる最も議論的となった3について見ておこう。スポールディングによれば、「対象の一部をありのままに知覚するが、その全体を正しく知覚しないということはまったくありうる」(Spaulding, 1918, p. 376)。たとえば、迷信深い人が天井裏や庭からの音を知覚するとき、そのような音を知覚しているという点ではどこにも間違いはない。しかし、この人がその音を幽霊の仕業だと解釈したとすれば、この点にこそ誤りがある。幽霊が存在し、音を立てていると思いつくことが、その人の知覚的誤りである。つまり、ある事物について、実際のあり方とは別様にあると考えてしまうことが誤りの本質なのである (Spaulding, 1918, pp. 376-377)。

さらに、スポールディングが強調するのは、夢や幻覚であっても矛盾しているわけではないという点である。私たちが日々経験する夢の内容は、なるほど支離滅裂で理論的な整合性を持たない。すなわち、夢には、「心理学や物理学が存在する対象に本質的なものとして認めている性質、少なくとも時空的定位を含む性質の完全な割り当てが欠けている」(Spaulding, 1918, p. 492)。つまり夢は存在者ではない。しかし、夢は「四角い円」のような矛盾した対象とは異なる。夢は自己矛盾していないという意味であくまで整合的であり、想像力や理性の対象が持っているのと同じステータスを持っている。「こうした夢の内容は、どのような対象とも同じぐらい客観的なものと推論されるのであって、ただ存在する対象ではないというだけのことである」(Spaulding, 1918, p. 377)。

また、表中にはないが、時間、空間、数も存立者である (Spaulding, 1918, p. 493)。これらは、一方では理性による探究に開かれており、他方では、すでに述べたとおり、存在者にとっての条件である。しかし、時空間と数はみずからにとっての条件ではない。したがってそれらは存在者ではなく存立者である。

このように、伝統的には「非実在的」と見なされてきたものも、スポールディングの実在論的な宇宙のなかで一定の位置を占める。彼の存在論は、「私たちが生きている世界の、通常受け入れられている客観的な豊かさと同様性を増大させる」(Spaulding, 1918, p. 378)。そして、これらの性格を決定するためには、体系的かつ科学的な調査——すなわち経験に訴えること——が不可欠だとされるのである (Spaulding, 1918, p. 489)*¹⁴。

*¹⁴ このようなスポールディングの存在論に対して、先に挙げたシャウプは、処分に困ったものを屋根裏部屋に詰め込んだだけのように見えると批判している (Scaub, 1919, 415)。彼はまた、(1) 存立者の不変の秩序を、進化や時間という事実とどのように調和させるのか、(2) 存立者は存在者の秩序とどのように関係するのか (たとえば正義と正しい行為はどのように関係するのか) という鋭い問いを提起している。

5. おわりに

本章では、世紀転換期におけるアメリカ哲学の知られざる一面に光を当て、スポールディングの分析という方法と实在論的な形而上学の内実を明らかにした。たしかに、ドヴァールも言うように、「新实在論は、科学の成功した戦略を哲学に導入する試みとしては価値があるし、19世紀末の発展に対応して哲学者たちがどのようにみずからを再定義しようとしたかを示す例としても興味深い、それが哲学の真の綱領となることはけっしてなかったし、それは創設者たちにとってさえ同じことだった」(De Waal, 2010, p. xxiv)。しかし、新实在論の試みと失敗を知ることは、古典的プラグマティズムと初期分析哲学のあいだにある哲学史的な空白を埋め、両者に対する歴史に基づいた再評価の素地を提供することになるだろう。

文献

- De Waal, C. (2001). Introduction. In C. De Waal (Ed.), *American new realism 1910-1920*, Vol. 1 (pp. xiii-xxxv). Bristol: Thoemmes Press.
- De Waal, C. (2010). Preface. In E. P. Charles (Ed.), *A new look at new realism* (pp. xiii-xxvii). London & New York: Routledge.
- Holt, E. B. (1914). *The Concept of Consciousness*. New York: Macmillan Company.
- Holt, E. B., Marvin, W. T., Montague, W. P., Perry, R. B., Pitkin, W. B., & Spaulding, E. G. (1912). *The new realism: Cooperative studies in philosophy*. New York: Macmillan Company.
- Hull, R. T. (2013). Edward Gleason Spaulding. In R. T. Hull (Ed.), *The American philosophical association centennial series: Presidential addresses of the American philosophical association 1931-1940* (pp. 157-158). Charlottesville: The Philosophy Documentation Center.
- Kuklick, B. (2001). *A history of philosophy in America 1720-2000*. New

- York: Oxford University Press. (ククリック, B. 大厩 諒・入江 哲朗・岩下 弘史・岸本 智典 (訳) (2020). アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで—— 勁草書房)
- Marvin, W. T. (1912). *A first book in metaphysics*. New York: Macmillan Company.
- Marvin, W. T. (1919). Review of *The New Rationalism*. *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, 16(8), 218–222.
- Montague, W. P. (1912). The new realism and the old. *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, 9(2), 39–46.
- Perry, R. B. (1910). Realism as a Polemic and Program of Reform. *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, 7(13), 337–353 & 7(14), 365–379.
- Perry, R. B. (1912a). *Present philosophical tendencies: A critical survey of naturalism, idealism, pragmatism and realism together with a synopsis of the philosophy of William James*. London, New York: Longmans, Green & Co..
- Perry, R. B. (1912b). A realistic theory of independence. In E. B. Holt, W. T. Marvin, W. P. Montague, R. B. Perry, W. B. Pitkin, & E. G. Spaulding, *The new realism: Cooperative studies in philosophy* (pp. 99–151). New York: Macmillan Company.
- Schaub, E. L. (1919). Review of *The New Rationalism*. *The Philosophical Review*, 28(4), 410–416.
- Spaulding, E. G. (1912). A defense of analysis. In E. B. Holt, W. T. Marvin, W. P. Montague, R. B. Perry, W. B. Pitkin, & E. G. Spaulding, *The new realism: Cooperative studies in philosophy* (pp. 155–247). New York: Macmillan Company.
- Spaulding, E. G. (1918). *The new rationalism: the development of a constructive realism upon the basis of modern logic and science, and through the criticism of opposed philosophical systems*. New York: Henry Holt & Co..
- 大島 正徳 (1943). 現代實在論の研究 至文堂

- 大厩 諒 (2021). 観念論から实在論へ——世紀転換期アメリカ哲学史 (1) —— 人文研紀要, 98, 345–378.
- 大厩 諒 (2022). 新实在論の興亡——ペリー、スポールディング、ホルトを中心に—— プロセス思想, 22, 35–48.
- 大厩 諒 (2023). J・E・クレイトンの思弁的観念論——世紀転換期アメリカ哲学史 (2) —— アメリカ哲学研究, 1, 3–19.
- 豊泉 俊大・磯島 浩貴 (2023). 『新实在論——哲学における協働研究』「序文」 共生学ジャーナル, 7, 314–360.

本研究は JSPS 科研費 JP20K00015 の助成を受けたものです。

第7章 もう一つの世紀転換期

アメリカ実在論、自然主義：

デューイ、ウッドブリッジ、コーエンから
ネーゲルへと続く「科学的な哲学」の系譜

小山 虎

Keywords: 自然主義、自然主義的実在論、新実在論、批判的実在論、アリストテレス主義、ヘーゲル主義、記号論理学、科学的な哲学、分析哲学、プラグマティズム

1. はじめに

本稿で取り上げるのは自然主義である。特に、世紀転換期アメリカ哲学におけるもう一つの実在論、という自然主義の側面に焦点を当てる。自然主義は実在論ではなく、プラグマティズムと結びつけられることが多い。しかし本稿では、自然主義を二つに分け、このうちの一つを実在論とみなすという見解を採用する。二つに分けられた自然主義のうち、一つは科学との連続性を強調する通常 of 自然主義であり、「方法論的自然主義 (methodological naturalism)」と呼ばれるのに対し、もう一つは自然の實在にコミットする立場としての自然主義であり、「形而上学的自然主義 (metaphysical naturalism)」や「存在論的自然主義 (ontological naturalism)」と呼ばれる (cf. Verhaegh, 2022, p. 45; Papineau, 2023)。本稿では、後者を実在論とみなし、「自然主義的実在論 (naturalistic realism)」と呼ぶことにする。

上述の形而上学的ないし存在論的自然主義を実在論の一種とみなすこと、そして、世紀転換期のアメリカ実在論の一種としてそれを位置付けることは、本稿独自の発想ではない。例えばジェイムズ・オシェイは、批判的実在論を扱った節の後半部を自然主義に充てている (O'Shea, 2008, pp. 219–221)。また加賀裕郎は、自然主義の代表的哲学者であるジョン・デューイ (John

Dewey、米、1859–1952) は1905年以降、実在論に接近し、新実在論者や批判的実在論者との論争を経て、自身の立場を新実在論とも批判的実在論とも区別される「自然主義的実在論」として精緻化したと主張している(例えば、加賀, 2009, p. 126)。オシェイと加賀の記述は完全に一致しているわけではない。特に、前者は批判的実在論の一種として自然主義を位置付けているのに対し、後者は批判的実在論と(デューイの)自然主義的実在論の相違点を論じている。しかし、20世紀初頭のアメリカ哲学には、新実在論や批判的実在論に加えて、自然主義的な実在論もあったという点では両者は一致している。

ただし、本稿で自然主義的実在論に注目するのには、オシェイや加賀とは異なる理由がある。それは、新実在論や批判的実在論とは異なり、自然主義的実在論は現代に引き継がれていると考えられることである。世紀転換期にアメリカ哲学の中心へと躍り出た新実在論と批判的実在論が20世紀後半にはほとんど消え失せてしまったのに対し、自然主義は現代に至るまで、アメリカ哲学の中心的立場の一つであり続けている。

自然主義が新実在論や批判的実在論のように消え失せることなく、両者を凌駕して現代に至るまで広まっていったことのキー・パーソンの一人が、科学哲学者のアーネスト・ネーゲル(Ernest Nagel、米、1901–1985)である。ネーゲルは論理実証主義の受け入れに貢献したことで知られる20世紀アメリカを代表する科学哲学者だが、デューイ以降(20世紀後半)の自然主義(特に自然主義的実在論)を代表する哲学者である。また、*Journal of Philosophy*の編集長やアメリカ哲学会東部支部会長、アメリカ科学哲学会会長などの要職を歴任した極めて影響力のある哲学者だった。現代哲学のバックグラウンドとして世紀転換期の実在論や観念論に注目するならば、現代への繋がりが見て取れる自然主義的実在論を無視することはできないのである*1。

ネーゲルを通じて自然主義(および自然主義的実在論)が広まったとし

*1 ネーゲルが論理実証主義を受け入れたことと彼の自然主義は無関係ではない。自然主義の枠内に記号論理学をどう位置付けるかという問題が、彼を論理実証主義に近づけたからだ。Pincock (2017), Ch. 11 を見よ。

ても、ネーゲルの自然主義的実在論は何に由来するものなのだろうか。大きな影響を及ぼした可能性のある人物が三名いる。一人は、彼の学部時代（ニューヨーク市立大学）の指導教員であるモリス・ラファエル・コーエン（Morris Raphael Cohen、米、1880–1947）、もう一人は彼の出身大学院であるコロンビア大学哲学科を自然主義の中心地にしたフレデリック・ウッドブリッジ（Frederick James Eugene Woodbridge、米、1867–1940）、そして最後の一人は、ネーゲルの博士論文の指導教員であるデューイである。

古典的プラグマティストの一人であるデューイの立場もまた自然主義的実在論であるということは上述の通りである。コーエンとウッドブリッジについては、現代ではほとんど知られていない。両者の立場もまた一種の実在論であり、新実在論とも批判的実在論とも分類し難いものだった。

以下では、ネーゲルの自然主義的実在論の系譜を遡ることで、世紀転換期アメリカ実在論の第三の立場を発掘する。具体的には、デューイ、コーエン、ウッドブリッジの立場をネーゲルの自然主義的実在論と比較することで、もう一つの世紀転換期アメリカ実在論としての自然主義がどのようなものだったのかの輪郭を明らかにする。

2. ネーゲルの自然主義的実在論

ネーゲルは今日ではもっぱら、科学理論間の還元の標準的定式化、あるいは W. V. O. クワイン（Willard Van Orman Quine、米、1908–2000）や Ch. W. モリス（Charles W. Morris、米、1903–1970）と共に、論理実証主義がアメリカに定着することに大きな役割を果たしたアメリカの科学哲学者として知られているだろう。彼自身の研究テーマは、博士論文のテーマである「測定（measurement）」をはじめ、科学の様々な領域に及ぶが、ネーゲルは一貫して、彼自身の哲学的立場を自然主義（naturalism）に分類していた（Verhaegh, 2022, p. 44）。同じ自然主義者でもクワインの場合、直接的な影響元の特定が難しいのに対し、ネーゲルの場合はかなり明白である。なぜなら、彼の博士論文を指導したのは自然主義の第一人者であるデューイであり、彼が大学院生時代を過ごした 1920–30 年代のコロンビア大学は、デューイのもと自然主義のメッカとして知られていたからである。

第1節で述べたように、自然主義は「方法論的自然主義」と「形而上学的自然主義」ないし「存在論的自然主義」に分類することができる。方法論的自然主義とは、哲学と科学や常識の連続性を強調する立場であり、代表例はクワインである。とりわけ科学哲学や分析哲学では「自然主義」と言えば、こちらの自然主義が連想されるだろう。一方、形而上学的自然主義ないし存在論的自然主義は、超自然的 (supernatural) なものの実在を認めない立場である。両者は論理的には独立しているが、仮に後者を受け入れるならば、自然的なものしか実在しないのだから、自然についての最良の探求方法である科学的手法の適用範囲が限定されていると考える必要はなくなる。よって、前者も受け入れる理由になりうる。

興味深いことに、ネーゲルは、前者を受け入れることにより、後者を受け入れる。その理由は、歴史的なものである。彼によれば、「自然」に関する研究の歴史を見るならば、過去の研究者が対象としていたものが一致しているようには全く見えない。だが、彼らには共通の方法 (method) はある。よって、仮に超自然的ものが実在するにしても、それらに対する研究方法は、自然に対して用いられてきたものと同じ——すなわち科学的方法——となるだろう (Verhaegh, 2022, pp. 45–46)。

さて、このような方法論的自然主義と形而上学的自然主義の同居は、デューイに由来すると考えることもできる。デューイは一貫して実在論には否定的立場を取り続けたが (Godfrey-Smith, 2002, S26)、科学的方法論に裏打ちされた形而上学 (すなわち形而上学的自然主義) を支持していたからである (Hilderbrand, 2018, sec. 3)*²。しかしながら、ネーゲルが自身の立場の名称として「自然主義」という言葉を選んだ理由は、おそらくデューイただ一人に由来するものではないだろう*³。なぜなら、ネーゲルはその人生の大半をニューヨークで過ごしたが*⁴、ネーゲルが若かりし頃のニューヨークでは

*² 実際、『哲学心理学辞典』(Baldwin, 1901)の「自然主義」の項目のデューイ執筆部分では、この二つが区別されていない。また実証主義とほぼ同じだと述べられている (Baldwin, 1901, pp. 137–138)。大塚諒氏のご教示に感謝する。

*³ 少なくとも、ネーゲルはデューイを高く評価していなかったようである。Neuber & Tuboly (2022c) pp. 308–309を見よ。

*⁴ ネーゲルの出生地は旧オーストリア・ハンガリー帝国北部 (現在のスロバキア) であり、10歳の時にアメリカに移民している (Nauber & Tuboly, 2022b, p. 1)。

自然主義が流行しており、ネーゲルにとって大学院以降のアカデミック人生のほぼ全てを過ごしたコロンビア大学は、その中心地だったからだ。

3. コロンビア自然主義：デューイとウッドブリッジ

1920年代から1960年代まで、「コロンビア自然主義 (Columbia Naturalism)」と呼ばれる学派が存在した (Jewett, 2011, 92; Cahoon, 2017, 465)。コロンビア自然主義を代表する哲学者は、もちろんデューイである。しかし、デューイの存在によってコロンビア大学で自然主義が芽生えたのではない。むしろ逆である。デューイはコロンビア大学にやってくることによって、現在我々の知るような自然主義者デューイになったのだ。少なくとも、本稿で重要な役割を果たす自然主義的実在論にデューイが傾倒し始めるのは、1904年にコロンビア大学に移籍し、彼を招聘したウッドブリッジとの議論を通じてである (Hilderbrand, 2018, sec. 3; Jewett 2011, 98, n. 25; 加賀, 2009, p. 183)。

ウッドブリッジは1867年、オンタリオ州に生まれる (Shook, 2016, 1051)^{*5}。1885年にマサチューセッツ州のアマースト大学 (Amherst College) に入学、卒業後はニューヨークのユニオン神学校 (Union Theological Seminary) で学ぶ。1892年に哲学史に関する奨学金を得て、ドイツ・ベルリン大学に留学。そこでウッドブリッジは心理学者ヘルマン・エビングハウス (Hermann Ebbinghaus、独、1850–1909) の哲学史の講義を聴講すると同時に、アリストテレス研究で知られる F. A. トレンデレンブルク (Friedrich Adolf Trendelenburg、独、1802–1872) の著作を通じ、アリストテレスから大きな影響を受ける。1902年、ウッドブリッジはコロンビア大学の教授となり、1937年に引退するまで教鞭をとる。1940年にニューヨークで死去。

ウッドブリッジの仕事で、最もわかりやすいものは、*Journal of Philosophy* の創刊である (1904年)。ただし、当時の名称は *Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods* だった。この名称から、当時のコロ

^{*5} ウッドブリッジについては、彼のひ孫にあたる哲学者のジェームズ・ウッドブリッジ (ネバダ大学ラスベガス校哲学科教授) が作成したウェブサイト (<https://jwood.faculty.unlv.edu/fjew/index.html>) に情報がまとめられている。

ピア大学では哲学と科学的方法の関係が大きな関心を集めていたことがうかがえる。

今日ウッドブリッジの名前はほとんど知られていない。しかし、かつてウッドブリッジは、哲学史やアリストテレス哲学（特に第一哲学としての形而上学）を20世紀のアメリカに復活させた哲学者、あるいはアメリカ哲学の主流が観念論から実在論ないし自然主義へと移行したことの立役者だと評価されていた（Lamprecht, 1955, p. 486; Shook, 2016, p. 1051）。少なくとも、ネーゲルはコロンビア大学哲学科でのウッドブリッジの影響は大きなものだとみなしていた（Neuber & Tuboly, 2022c, p. 310）。

ウッドブリッジもまた、自然主義を標榜していた。ただし、彼の自然主義は、アリストテレス流の自然主義、ないし自然主義的に解釈されたアリストテレス主義とでも呼ぶべきものだった（Lamprecht, 1955, p. 496）。ウッドブリッジにとっては形而上学も一種の科学である。形而上学的探究とは、「何が存在するか」を科学的方法でもって明らかにすることであり、自然科学との違いは主題の違いに過ぎない（Shook, 2016, pp. 1051–1052）。つまり、ネーゲルと同様にウッドブリッジも、方法論的自然主義から形而上学的自然主義に至るのである。

このように、トレンデレンブルク研究からアリストテレス主義者になったウッドブリッジの自然主義がかなり実在論寄りのものであり、一見したところ、デューイの自然主義とは大きく異なるように見える。例えば、同じ自然主義者であっても、デューイは方法論的自然主義者であるのに対し、ウッドブリッジは逆に形而上学的自然主義者だったのであれば、両者の違いは問題にならないだろう。しかし、このような単純化には問題がある。もしデューイとウッドブリッジの立場が方法論的自然主義と形而上学的自然主義に綺麗に分かれるのであれば、どうしてデューイはウッドブリッジから影響を受けて形而上学に傾倒するのだろうか。このような「謎」はデューイ哲学の複雑さ、難解さに由来するものなのかもしれないが、もっと単純な説明としては、デューイとアリストテレスの親近性がある。

初期デューイのヘーゲルからの影響はよく知られている。大きな影響として挙げられることがあるのは、デューイのジョンズ・ホプキンス大学大学院時代の指導教員であるジョージ・シルベスター・モリス（George Sylvester

Morris、米、1840–1889)である。モリスはドイツ帰りの新ヘーゲル主義者として活躍しており、彼を通じてデューイは、T. H. グリーン (Thomas Hill Green、英、1836–1882)をはじめとするイギリスの新ヘーゲル主義に親しんでいたという (Good, 2006, 301)。しかし、デューイ本人は、モリスを新ヘーゲル主義の信奉者とは思っていなかった。デューイによるモリスの追悼文によれば、むしろ一時期のモリスはアリストテレス主義者だった (Dewey, 1889, pp. 6–7)。実際、モリスはユニオン神学校からベルリン大学へ留学するというウッドブリッジと同じ経歴を持っており、当時はまだ存命だったトレンデレンブルクから直接指導を受けている (Dewey, 1889, p. 3)。また、デューイによれば、モリスがドイツ留学時代に購入したヘーゲルの著作には「無意味 (nonsense)」という書き込みがあったという (Dewey, 1889, p. 7)。初期デューイがヘーゲル主義に傾倒していたことは否定されるものではないが、ヘーゲルと同様に、モリスを通じてトレンデレンブルク経由のアリストテレスにもある程度親しんでいたはずである (Kirby, 2008, 45–46)。

このような背景を鑑みると、デューイとウッドブリッジは異なる自然主義を標榜していたというよりは、デューイはウッドブリッジと同僚になることにより、アリストテレス哲学と再会 (もしかすると再対決) することになったと考える方が適切だと思われる (Sleeper, 1986, p. 92)。よって、コロンビア大学大学院生でネーゲルがどっぷり浸かった自然主義は、デューイとウッドブリッジという異なる自然主義的傾向を持つ二人の対話から醸造されたものだと考えられる。

もはやデューイとウッドブリッジのどちらの方がネーゲルに大きな影響を与えたのかは重要ではない。今日ではデューイの影に隠れているが、コロンビア自然主義を作り上げたウッドブリッジも、ネーゲルと同じく方法論的自然主義と形而上学的自然主義が同居した自然主義哲学者だった。ネーゲルの自然主義はこのような環境で生まれたと考えるのが適切だろう。

4. コーエンと自然主義：論理と実在

ネーゲルとデューイの大きな違いは、前者は記号論理学に精通していたのに対し、後者はほとんど関心を示さなかったことである (この点ではウッド

ブリッジも同様である)。ネーゲルが論理実証主義を理解するにあたって、記号論理学の能力が重要だったことは言うまでもない。そしてこのことは、両者のもう一つの大きな違いに関わる。デューイがどちらかといえばアメリカ国内に目を向けていたのに対し、ネーゲルは極めて積極的にヨーロッパの傾向を取り込んでいたことである。このような違いが生まれたのは、ネーゲル本人も最も影響を受けた哲学者だと語るコーエンの存在があると考えられる (Verhaegh, 2022, p. 49)。

コーエンは1880年、ベラルーシのミンスク生まれる。12歳の1892年にアメリカに移住し、ハーバード大学で哲学の博士号を取得した後、ニューヨークのシティ・カレッジ (City College of New York) でポストを得る。定年退職したコーエンは、その後、三年間シカゴ大学で教え、引退。1947年に死去する (Cahoone, 2017, 449–452)。このように、コーエンは、東欧地域に生まれ10代でアメリカにきたユダヤ系移民として大学に職を得た最初期の人物であり、その点でもネーゲルの先達になる。

当時、シティ・カレッジの授業料は無料であり、そのため貧しい移民が高等教育を受ける望みの綱となっていた。ネーゲル自身、授業料を払う必要がないからシティ・カレッジに入学したのであり、シティ・カレッジがなければ高等教育を受けることは諦めていただろうと述べている (Neuber & Tuboly, 2022c, p. 260)。結果的にネーゲルだけでなくニューヨーク出身のユダヤ人哲学者のほとんどがコーエンの薫陶を受けることになった。

ネーゲルに対するコーエンの影響は本人も認めている通りである (Neuber & Tuboly, 2022c, 270)。また、記号論理学に関しては、デューイやウッドブリッジと異なり、コーエンはラッセルとホワイトヘッドの『プリンキピア・マテマティカ』 (*Principia Mathematica*, 1910) の詳細な書評を書くほど強く関心を示しており (Cahoone, 2017, 458; Verhaegh, 2022, p. 50)、ネーゲルと共に『論理・科学的方法入門』 (*An Introduction to Logic and Scientific Method*, 1934) という記号論理学の教科書を書いている。このように、記号論理学に関しては、ネーゲルに対するコーエンの影響は明らかである。

コーエンもまた自然主義者だったが、彼の自然主義はデューイともウッドブリッジとも異なっていた。ネーゲルは、コーエンとウッドブリッジが似た見解を持っていたと述べた上で、ウッドブリッジを「アリストテレス的」、

コーエンを「プラトンの」¹と形容している (Neuber & Tuboly, 2022c, p. 294)。その意図は、ウッドブリッジが方法論的自然主義から形而上学的自然主義に至るのに対し、コーエンは最初から形而上学的自然主義を受け入れている——すなわち、実在論者である——という点である。

コーエンとデューイとの違いは、両者の「論理」観の違いに表れている。デューイが「論理」は経験を通じて獲得されると考えていたのに対し (Hilderbrand, 2018, sec. 4.1)、コーエンはラッセルの『数学の諸原理』 (*The Principles of Mathematics*, 1903) の実在論を支持していた (Cahoone, 2017, 458)。

コーエンはデューイ、ウッドブリッジを厳しく批判している。ただし、これはコーエンは方法論的自然主義を支持しないということではない。コーエンもデューイやウッドブリッジ、そしてネーゲルと同じく、方法論的自然主義者である。方法論的自然主義に関するコーエンとデューイの違いは、デューイが、おそらくはプラグマティストであるがゆえに、(方法論的)自然主義が観念論と実在論の対立を無効化する (自然主義を採用するならば、観念論と実在論という二つの対立する見解のどちらが正しいかという問題はもはや生じない) と考えていたのに対し、コーエンが自然主義は観念論と実在論の対立にも適用できると考えたことである。別の言い方をすれば、デューイは自然主義によって旧来の哲学的問題 (それには観念論と実在論の対立も含まれる) は消え失せると考えていたのに対し、コーエンは自然主義を旧来の哲学的問題に取り組むための方法だと考えていたのである (Richardson, 2002, S41)。

5. 自然主義の「科学的な哲学」

第1節で、本稿で自然主義的実在論に注目するのは、新実在論や批判的実在論とは異なり、自然主義的実在論は現代に引き継がれているからだ²と述べた。では、自然主義的実在論は、新実在論と批判的実在論とどのように異なっていたがゆえに現代にまで引き継がれたのだろうか。これまでに登場したデューイ、ウッドブリッジ、コーエンという三名の世紀転換期の自然主義者は、違いこそあれ自然主義的実在論 (すなわち形而上学的自然主義) を支

持するという共通点があったものの、もともと観念論者で実験心理学を通じて自然主義へと至ったデューイと、アリストテレス主義の延長で自然主義者になったウッドブリッジは、いわば正反対の方向から自然主義にやってきたようなもので、両者の違いは少なくない。より実在論的傾向が強く、かつ記号論理学にも積極的だったコーエンとの違いはより明瞭である。しかし、もしこれら三名の共通点が単に自然主義という一点のみであるならば、自然主義的実在論だけが現代に引き継がれたのは、単なる偶然のようにしか見えなくなってしまうだろう。

デューイ、ウッドブリッジ、コーエンの三名は確かにみな自然主義者だった。しかし「自然主義」という言葉を使ってしまうと見えにくくなるが*6、彼らの共通点のキーワードを挙げるとすれば、「自然」というよりは、「科学」である。

コロンビアに移って以降のデューイが主張したことの一つに「科学的な哲学 (scientific philosophy) の推進」が挙げられる。コロンビアに移る前のシカゴ大学時代に実験心理学を通じて自然主義者になっていたデューイが『哲学の改造』(*Reconstruction of Philosophy*, 1920) で主張したことは、哲学を科学化することで哲学が目を向ける先を、閉塞感を伴う旧来の哲学的問題から、20世紀に生じた新たな諸問題へと変えることだった (Richardson, 2002, S40)。

前節で述べたように、自然主義によって旧来の哲学的問題が消え失せるという点では、コーエンはデューイと意見を異にする。一方で、コーエンは哲学と科学のゴールは同じだと考えており、その点でデューイよりもラディカルな「科学的な哲学」を主張していた。しかし、両者が一致するのはこの点のみである。コーエンとデューイは、「科学的な哲学」を目指す理由についても、科学化された哲学の対象や内容についても意見を異にしていた (Richardson, 2002, S41)。

ウッドブリッジもまた、デューイやコーエンに比べると穏健ではある

*6 哲学史家の A. W. リチャードソンは、世紀転換期ではなく 1930 年代のアメリカ哲学に關してだが、「自然主義」(および「プラグマティズム」) という言葉は曖昧であり、避けるべきだと警鐘を鳴らしている (Richardson, 2002, S38)。

が、「科学的な哲学」を支持していた。それを端的に示しているのは、彼が創刊した *Journal of Philosophy* の最初の名称が、*Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods* だったことである。ウッドブリッジはデューイが実験心理学に携わったことや、コーエンが記号論理学に強い関心を持ったとは異なり、科学に直接関わるようなことはしなかったが、アリストテレス主義者らしく、形而上学もまた一種の科学的探究であり、経験的に探究されると考えていた。

また、ウッドブリッジは、形相や質料といったアリストテレス主義的概念には頼らず、その代わりに「構造 (structure)」や「行動 (behavior)」という科学的探究に適した概念を用いていた。実のところ、彼の「行動」は後の行動主義 (behaviorism) に関わるようなものではなく、目的論的概念である (Lamprecht, 1955, pp. 489–490)。しかし、論理実証主義の全盛時ならいざ知らず、現代の生物学の哲学の議論を考えれば、ウッドブリッジの目的論的概念の採用は先駆的だったとすら言えるかもしれない。

6. おわりに

本稿では、20 世紀後半のアメリカ哲学に大きな影響を及ぼした科学哲学者ネーゲルを皮切りに、ネーゲルの自然主義的实在論に大きな影響を与えたデューイ、ウッドブリッジ、コーエンという三名の自然主義者の立場とそれぞれの違いを概観した。彼ら三名の共通点が自然主義よりは「科学的な哲学」にあるということは、ネーゲルへの影響を考えれば、自然主義や实在論に注目するよりは、より納得のいく説明だと思われる。特に、ネーゲルが論理実証主義者の受け入れに尽力したことが、彼個人の論理実証主義への共感に基づくというよりは、むしろデューイ、ウッドブリッジ、コーエンの「科学的な哲学」の実現というプロジェクトを引き継いだものだとすると、論理実証主義のアメリカでの受け入れや、その後の分析哲学の興隆を説明する筋道を与えてくれるだけでなく、新实在論や批判的实在論とは異なり、自然主義的实在論のみが現代にまで引き継がれたことを説明してくれるだろう。

一方で、「科学的な哲学」に注目することは、新实在論や批判的实在論にも適用可能である。実際、批判的实在論を代表する哲学者の一人である。

ロイ・ウッド・セラーズ (Roy Wood Sellars、米、1880–1973) を自然主義者に加えて、コーエン、ウッドブリッジと比較する研究もある (Delaney, 1969)。また、新実在論のマニフェストである「新実在論——6人のリアリストたちのプログラムならびに第一綱領」(“New Realism: the Program and First Platform of Six Realists,” 1910。本書第5章に翻訳を所収) は、その内容から見ても、出版されたのが *Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods* であるという点から見ても、「科学的な哲学」と無縁なものではない。すると、新実在論、批判的実在論、自然主義的実在論は、細部こそ異なるがどれも「科学的な哲学」を目指したものであり、世紀転換期から現代に至るアメリカ哲学の大きな流れを「科学的な哲学」としてまとめることもできるかもしれない。

文献

- Baldwin, J. M. (Ed.) (1901). *Dictionary of philosophy and psychology*. Macmillan Co.
- Cahoone, L. (2017). The metaphysics of Morris R. Cohen: From realism to objective relativism. *Journal of the History of Ideas*, 78(3), 449–471. <http://doi.org/10.1353/jhi.2017.0025>
- Delaney, C. F. (1969). *Mind and nature: A study of the naturalistic philosophies of Cohen, Woodbridge, and Sellars*. University of Notre Dame Press.
- Dewey, J. (1889). The late professor Morris. *Palladium*, 31, 110–118. Reprinted in J. A. Boydston (Ed.) (1972), *The early works of John Dewey 1882–1898, vol. 3 (1889–1892)* (pp. 3–13). Southern Illinois University Press.
- Godfrey-Smith, P. (2002). Dewey on naturalism, realism and science. *Philosophy of Science*, 69, S25–S35. <http://doi.org/10.1086/341765>
- Good, J. A. (2006). John Dewey’s “permanent Hegelian deposit” and the exigencies of war. *Journal of the History of Philosophy*, 44(2),

- 293–313. <http://doi.org/10.1353/hph.2006.0026>
- Hildebrand, D. (2018). John Dewey. In E. N. Zalta (Ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy (winter 2018 edition)*. Retrieved December 12, 2023, from <https://plato.stanford.edu/archives/win2018/entries/dewey/>
- Jewett, A. (2011). Canonizing Dewey: Naturalism, logical empiricism, and the idea of American philosophy. *Modern Intellectual History*, 8(1), 91–125. <http://doi.org/10.1017/S1479244311000060>
- 加賀 裕郎 (2009). デューイ自然主義の生成と構造 晃洋書房
- Kirby, C. C. (2008). Naturalism in the philosophies of Dewey and Zhuangzi: The live creature and the crooked tree. USF Tampa Graduate Theses and Dissertations. Retrieved December 12, 2023, from <https://digitalcommons.usf.edu/etd/337>
- Lamprecht, S. P. (1955). *Our philosophical traditions*. Columbia University Press.
- Neuber, M. & Tuboly, A. T. (Eds.) (2022a). *Ernest Nagel: Philosophy of science and the fight for clarity*. Springer. <https://doi.org/10.1007/978-3-030-81010-8>
- Neuber, M. & Tuboly, A. T. (2022b). Introduction: Ernest Nagel and the making of philosophy of science a profession. In Neuber & Tuboly (2022a). https://doi.org/10.1007/978-3-030-81010-8_1
- Neuber, M. & Tuboly, A. T. (2022c). Interview with Ernest Nagel by Rimmel Nunn, In Neuber & Tuboly (2022a). https://doi.org/10.1007/978-3-030-81010-8_13
- O’Shea, J. R. (2008). American philosophy in the twentieth century. In D. Moran (Ed.), *The Routledge companion to twentieth century philosophy* (pp. 204–253). Routledge.
- Papineau, D. (2023). Naturalism. In E. N. Zalta & U. Nodelman (Eds.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Fall 2023 Edition)*. Retrieved December 12, 2023, from <https://plato.stanford.edu/archives/fall2023/entries/naturalism/>

- Pinkock, C. (2017). *Analytic Philosophy*. Routledge. <https://doi.org/10.4324/9781315733050>
- Richardson, A. W. (2002). Engineering philosophy of science: American pragmatism and logical empiricism in the 1930s. *Philosophy of Science*, 69, S36–S47. <http://doi.org/10.1086/341766>
- Shook, J. R. (Ed.) (2016). *The Bloomsbury encyclopedia of philosophers in America: From 1600 to the present*. Bloomsbury Publishing.
- Sleeper, R. W. (1986). *The necessity of pragmatism: John Dewey's conception of philosophy*. University of Illinois Press.
- Verhaegh, S. (2022). Nagel's philosophical development. Neuber & Tuboly (2022a). https://doi.org/10.1007/978-3-030-81010-8_3

本研究は JSPS 科研費 JP20K00015 の助成を受けたものです。

第8章 観念論的でも機械論的でもない 社会のかたち： 世紀転換期米国におけるタコの形象

入江 哲朗

Keywords: 実在論の背景言説、タコの形象、自然主義、専門職化

1. はじめに

「外国においては、時代遅れでまったく事実に即さない (sachfern) と私には思われるような概念的言語がいまだに話されつづけている」と、ハンス＝ゲオルク・ガダマー (Hans-Georg Gadamer、独、1900–2002) は1991年に述べている (Gadamer, 1991/1995, p. 270)。ドイツのメスキルヒで催されたマルティン・ハイデガー協会の大会での講演においてのことである。哲学者のロドルフ・ガシェ (Rodolphe Gasché) はこの発言と続く箇所を引いて、米国の哲学科でガダマーが得た経験がここで念頭に置かれているのは「明らか」だと断じるのだが (ガシェ, 2020, p. 168, Note 13)*¹、かりにガシェの言うとおりでとすると、さきの引用に続く以下の一文は、アメリカ哲学史の特殊性に関するガダマーの観察として興味深い。「そこでは人びとは、「実在論」と「観念論」について、さらには「客観的」と「主観的」について、あたかも形而上学史上のかかる諸概念が現代科学の時代における意味の完全な変容をこうむらなかつたかのような (…) 様子で話している」 (Gadamer, 1991/1995, p. 270)。

実在論と観念論をめぐる議論に関して言えば、アメリカ哲学史上の最初の

*¹ ガダマーが講演のためにはじめて米国を訪れたのは1968年である。「このころから八〇年代前半まで、ガダマーはアメリカのいくつかの大学でも客員教授として授業を行い、アメリカでのガダマー哲学および解釈学理論の普及に尽力した」 (佐々木, 2008, p. 391)。

特筆すべき盛り上がりは、19 世紀末から 20 世紀初めにかけての世紀転換期にある。米国の哲学思想の筆頭と見なすべきプラグマティズムは、ウィリアム・ジェイムズ (William James、米、1842–1910) の 1898 年の講演「哲学的概念と実際の帰結」(“Philosophical Conceptions and Practical Results”) や 1907 年の著書『プラグマティズム』(*Pragmatism*) などのおかげで世界的に有名になったが、1870 年代以降のプラグマティズムの成長は、それ以前の米国でのドイツ観念論受容を踏まえないことには十分に理解できない。ブルース・ククリック (Bruce Kuklick) の『アメリカ哲学史』(*A History of Philosophy in America*, 2001) においては、プラグマティズムは「観念論の一形態」だとさえ言われている (ククリック, 2020, p. 139)。他方で 20 世紀初めのアメリカ哲学は、エドウィン・ビッセル・ホルト (Edwin Bissell Holt、米、1873–1946) らの『新実在論』(*The New Realism*, 1912) とデュラント・ドレイク (Durant Drake、米、1878–1933) らの『批判的実在論論集』(*Essays in Critical Realism*, 1920) という、2 冊の重要な実在論論集も生み出した。

世紀転換期のアメリカ哲学にある観念論 vs. 実在論という構図は、一面においては、ジェイムズ (1842 年生まれ) らとホルト (1873 年生まれ) らとの世代間対立である。しかしもちろんこの側面に還元しきれないわけではない。すなわち、観念論 vs. 実在論というアメリカ哲学の構図が 20 世紀後半まで冷凍保存されたとはさすがに言えない (これがガダマーの言いたかったことなのかに関しても検討の余地がある) にせよ、この構図がたんなる世代間対立以上の意味を担っていることも確かであり、たとえばククリックは、ジェイムズらとホルトらとのあいだに挿まれる思想史的ファクターとして哲学界の専門職化 (professionalization) を挙げている (ククリック, 2020, 第 3 部。世紀転換期米国における哲学界の専門職化については Wilson (1990) も見よ)。じじつジェイムズは、1903 年の論文「PhD オクトパス」(“The Ph.D. Octopus”) で専門職化への懸念を表明していた。曰く、「本質的な人間らしさ (essential manhood)」における卓越の証だったはずの博士号がいまやしばしば「外面を飾るバッジ」のごとく扱われていることは嘆かわしい傾向であり、「アメリカの生に対する PhD オクトパスの強まりつつある掌握」は抑制されねばならない (James, 1903/1987, pp. 70, 73, 邦訳 pp. 19,

24. 訳文は邦訳を参考にしたが、文脈に合わせ一部を引用者が変更した。以下も同様)。

本稿の主題は、このジェームズの論文でも利用されているタコの形象 (figure) である。専門職化に対するジェームズの警告自体は現代的でありうるとしても、そこになぜタコの形象が付随しているのかは現在の読者にとって自明の問いではなく、本稿はまさしくこの問いに取り組む。それは、実のところ、世紀転換期のアメリカ哲学の観念論 vs. 实在論という構図を考究するためではない。筆者の関心は、この構図がなぜ生じたのかの説明にも寄与しうるより大きな思想史的構図にあり、本稿は、思想史の先行研究が提示してきた世紀転換期米国に関する構図 (第3節で説明される) を批判的に再検討しようとしている。世紀転換期米国におけるタコの形象に注目することで従来の思想史的構図をどう修正すべきかが見えてくるというのが本稿の主張である。中心的な主題としては、ジェームズの「PhD オクトパス」に加えて、フランク・ノリス (Frank Norris、米、1870-1902) の1901年の小説『オクトパス——カリフォルニア物語』(*The Octopus: A Story of California*) が取り上げられる。

2. タコへの注目の理由と方法

2.1 ノリスの『オクトパス』におけるタコの形象

アメリカ自然主義文学の主要な担い手であるノリスの小説『オクトパス』において、“octopus” という語は本文中に2度現れる。カリフォルニアはサンホアキン・ヴァレーの小麦農家とパシフィック・アンド・サウスウェスタン鉄道 (以下「PS 鉄道」) との抗争を物語の軸に据えている同作は、まず第1部第1章の末尾で、鉄道の表象のひとつとしてタコを選んでいる。より具体的に言うと、サンホアキン・ヴァレーの牧歌的な風景が鉄道によって蹂躪されつつあることの脅威を詩人プレスリーが感じる場面に、「大地をつかむ鉄の触手を持ったリヴァイアサン、魂なき力 (Force)、鉄の心臓を持つ権力 (Power)、怪物、コロッサス、タコ」といった語句が鉄道の表象として並んでいる (Norris, 1901/1986, p. 617、邦訳 p. 49)。サンホアキン・ヴァレーの農場主たちは結局 PS 鉄道との抗争に敗れるが、そのことが同作末尾

の「結論」で「諸農場はタコの触手に捕らえられた」(Ibid., p. 1096、邦訳 p. 550)と総括されており、これが“octopus”の2度目の登場である。

しかしこれら2か所以外に、“octopus”の語は用いられていないもののタコのイメージを喚起する場面がひとつある。『オクトパス』第2部第8章の、プレスリーがPS鉄道のオーナー社長のシェルグリム——第1部第3章によれば「世紀末金融の巨人」(Norris, 1901/1986, p. 659、邦訳 p. 91)——と面会する場面である。プレスリーは、サンホアキン・ヴァレーのデリック家の食客であるため抗争の当事者とは必ずしも言えないものの、鉄道委員会による運賃改訂と沿線区画の土地所有権というふたつの争点をめぐる戦いにおいてマグナス・デリックら農場主たちが敗北したことを悲しみ、ゆえに衝動的にPS鉄道の本社を訪れてシェルグリムとの面会を試みる。そして面会を許されたプレスリーは、シェルグリムが実のところ「人食い鬼、野獣、恐るべき鉄血漢」(Ibid., p. 1035、邦訳 p. 486)といった事前のイメージにはまったく収まらないほどスケールの大きな人物——「偉大 (great) であるのみならず巨大 (large) でもある男」(Ibid., p. 1036、邦訳 p. 486)——だという事実にうろたえる。かかる場面に、シェルグリムのふるまいを描写する次の一節が含まれている。

かつてなく感覚を研ぎすましていたプレスリーが観察したのは、不思議にも、シェルグリムが体を動かさないことであった。腕は動くし頭も動くが、この男の巨体は動かないままその場に留まっていた。会談が進むにつれてこの異様さはますます顕著になった。シェルグリムは、言うなれば、頭と脳と手が独立して働いているあいだ体を椅子に沈めて休息をとらせている——そんな奇妙な考えをプレスリーは抱きはじめた。(Norris, 1901/1986, p. 1035、邦訳 pp. 485-486)

腕と頭を動かすが体は動かさない。これを、体が後景に退いて手足と頭だけが前景化していると言い換えれば、この場面でシェルグリムがタコという頭足類 (cephalopod) ——頭と足だけがあって体がないかのように見える生物——になぞらえられていることがより明瞭になるだろう。ノリスはシェルグリムをタコのかたちに描いている。本稿が「形象 (figure)」という語を用いているのは、いま述べた「かたち」を概念化するうえで(「シンボル」や

「アレゴリー」などと較べて)より適切だからでもある*2。

2.2 タコの表象ないし形象に関する先行研究

動物の表象ないし形象に対する関心は、文学研究者たちのあいだで近年いっそう強まっている。これは、「アニマル・スタディーズ」と呼ばれる領域横断的な新分野の興隆と関連する動向である(文学研究とアニマル・スタディーズとの関係はたとえば Bennett & Royle (2023, Ch. 21)で概説されている)。本稿の主題であるタコも、哲学的なアニマル・スタディーズの一例であるピーター・ゴドフリー＝スミス(Peter Godfrey-Smith)の『タコの心身問題』(*Other Minds*, 2016)が取り上げている。同書によれば、人間を含む脊椎動物とタコ(頭足類)を含む軟体動物との進化上の分岐は約6億年前に生じており(ゴドフリー＝スミス, 2018, p. 8)、かくも人間から縁遠いにもかかわらずタコが高度な知性を持つという事実を同書は、哲学的思考をして人間中心主義から脱却せしめる契機と捉えている。もっとも、本稿のより具体的な主題、すなわちタコの形象が20世紀初めまでの米国で辿った軌跡は、筆者の知るかぎりアニマル・スタディーズの先行研究でいまだ論じられていない。

他方で文化史ないし思想史の領域においては、タコに関する重要な先行研究としてロジェ・カイヨワ(Roger Caillois)の『タコ』(*La pieuvre*, 1973)がある。同書は、古代から20世紀までのあいだに人びとの想像のなかでタコがいかなる変身を遂げたかを論じるべく文献を博搜しており、フランスのロマン主義文学におけるタコの表象を詳しく論じているほか、ヘンリー・リー(Henry Lee、英、1826-88)が1875年にロンドンで上梓した『タコ——「悪魔の魚」の虚構と事実』(*The Octopus; or, The “Devil-Fish” of Fiction and of Fact*)と日本におけるタコとにそれぞれ1章を割いている(カイヨワ, 2019, 第5-6章。ほかに、日本のタコに関する民俗学的研究としてたと

*2 「形象」の概念に関して筆者が主に参照したのはジュネット(1991)である。また平倉(2019)は、ダナ・ハラウェイ(Donna Haraway)による——“figuration”(形象化)に「キメラ的ヴィジョン」という古い語義があることを踏まえた——「形象」の定義を敷衍して、「形象」の意味を「多数の人間の・非人間の作用が絡まりあう、心的-物的な記号過程の結び目をなす形」と説明している(p. 10)。

えば刀禰 (1994) がある)。リーはブライトン水族館の博物学者 (naturalist) であり、彼が『タコ』を著したのは、ヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo、仏、1802-1885) の『海に働く人びと』 (*Les travailleurs de la mer*, 1866) における描写により一気に西洋に普及してしまったタコの怪物的なイメージを修正するためであった (Lee, 1875, Ch. 2)。

カイヨワの『タコ』は米国での例をほとんど取り上げていないため、その欠落を本稿は埋めうるだろう。またカイヨワの『タコ』は、「本来の意味」のタコのみを問題とし “pieuvre” (タコ) というフランス語の「隠喩的な意味」には触れないと序論で宣言しているため (カイヨワ, 2019, p. 13)、本稿とは題材のみならず研究上の関心においてもあまり重なっていない。しかし他方で、先述のとおり本稿はあくまでも世紀転換期米国の思想史的理解の一助となることを期しており、ゆえに文学的なアニマル・スタディーズとも関心を異にしている。本稿がノリスの『オクトパス』という文学作品を取り上げるのも、世紀転換期米国の思想史的構図に同作を位置づけなおすためであって、同作から現代的意義を読みとるといった作業には本稿は従事しない。同作は本稿において、文学的な読解が試みられるかわりに、タコが描かれた諷刺画やタコの形象を用いた哲学者ジェイムズの記事と並べられることとなる。

本稿は次節で、(第 1 節で少し触れた) 世紀転換期米国に関する従来の思想史的構図を整理し、続く第 4 節で、タコの形象がその構図をどう攪乱しているかを示す。第 5 節は、まず 5.1 節を、タコの形象に関してユゴーがふるった影響力の大きさの説明と、19 世紀半ばまでの米国でタコがどう言及されていたかの概観とにあてる。続いて 5.2 節および 5.3 節で本稿は、19 世紀末の反独占運動とタコの形象との親和性に注目しながら、タコの形象の世紀転換期米国における思想史的文脈を論じる。最後に第 6 節で、第 3 節で説明した構図を本稿の議論がどう修正しうるかについて述べる。

3. 世紀転換期米国に関する従来の思想史的構図

3.1 弁証法的な近似

ジョン・デューイ (John Dewey、米、1859–1952) が1930年にいみじくも指摘したとおり、ジェイムズは「生きているもののカテゴリーと機械的なもののカテゴリーとの差異に対する奥深い——本来的にはおそらく「科学的」というよりむしろ芸術的かつ道徳的な——感覚」を有していた (Dewey, 1930/1984, p. 157, 邦訳 p. 294)。デューイはさらに、ジェイムズの「一般的な哲学的見解におけるもっとも特徴的な諸要素、すなわち多元主義や新奇さや自由や個性などのすべてが、生きているものの質および特性に対する彼の感情とどれほど結びついているか」にも注意を促している (Ibid., p. 158, 邦訳 p. 294)。デューイの洞察はしかし、鋭いだけにいっそう、本稿第1節ですでに示唆した謎を際立たせる。すなわち、ジェイムズは1903年になぜ、学界が「本質的な人間らしさ」から離れつつあることへの批判をタコという「生きているもの」に仮託したのかという謎である。要するにタコの形象は、自然 vs. 機械というなじみ深い二項対立の攪乱をとおして、世紀転換期米国に関する従来の思想史的構図に修正を迫っている。

従来の構図とは、しかしそもそもいかなるものか——この問いにひとまず答えるべく、ジョン・ハイアム (John Higham) とトマス・L・ハスケル (Thomas L. Haskell) というふたりの著名な思想家がそれぞれ1970年と1977年に発表した1890年代米国論 (Higham, 1970; Haskell, 1977/2000, Ch. 1) を総合して、以下の①～③から成る弁証法的な思想史的構図を仮設する。

- ① 自律的行為や自己信頼を重視する19世紀的個人主義が、急速かつ広汎な工業化および都市化によって前提を蝕まれたため、とりわけ「ブラーミン (Brahmins)」と呼ばれるニューイングランドの知識階級のあいだで、進歩の可能性を懐疑するような敗北主義的ムードが蔓延する。
- ② ヴィクトリア朝ふうの——のちに「お上品な伝統 (the genteel tradi-

tion)」というレッテルを貼られる——ハイカルチャーに対する、主に大衆文化の側からの反動が、たくましくて好戦的な男性の理想化とといったかたちのアクティヴィズム的諸傾向として噴出する。

- ◎ 相互依存性 (interdependence) が眼前の動的な社会を理解するための鍵概念だと気づいた者たちが、社会科学という領域を、(19世紀的個人主義の前提を許さないくらい) 高度に相互依存的な社会を説明する能力に重きを置く専門職的 (professional) な学問へと再編する。また、この動向に沿うかたちでほかの領域でも専門職化が進行する。

ハイアムの1890年代論は④から⑥へという流れを概説しており、対してハスケルは◎を論じている。④についてはT・J・ジャクソン・リアーズ (T. J. Jackson Lears) の重要な先行研究もある (リアーズ, 2010。あわせて、入江 (2020, pp. 280–288) におけるリアーズの議論の批判も参照のこと)。⑥のアクティヴィズム的諸傾向の例としてハスケルは、たくましくて好戦的な男性の理想化 (たとえばジンゴイズムやナポレオン・ブーム) のほかにも、野生の自然に対する関心の復活などを挙げており、ノリスら自然主義作家たちにも言及している。

3.2 ノリスの自然観

ハイアムによるノリスの位置づけは、ノリスの歿後刊行の評論「文学における「自然」復興」(“The ‘Nature’ Revival in Literature,” 1903) によって裏書きされるだろう。なにしろそこでノリスは、アメリカのフィクションを「エリートないし少数者ないし貴族階級に保護されるようなもの」へと矮小化した「ニューイングランド派」に対する「うんざりさせられた公衆」の側からの反動についてさまざまに論じたのち (Norris, 1903/1964, p. 42)、こう述べていたのだから。

これらすべて(「ニューイングランド派」に対する反動の諸相——引用者註)はさしたる驚きではない。大いに驚くべきなのは、そこに見られる自然への回帰であり、あらためて生 (life) を掌中に収めるべく基本へ立ち戻ろうとする的確な模索である。(…) たんなる文学は生に

道を譲らねばならなくなった。いまや太陽があり、力強い風や、アリゾナの砂漠の焼けたアルカリの臭いや、コロラドの斜面に生えるタール草の悪臭がある。自然は科学の分類として存在することをやめ、植物学や動物学や地質学といったものの集合として誤解されることもなくなり、親しみやすくして身近で賦活的 (rejuvenating) なものとなった。(Norris, 1903/1964, p. 42. 強調は原文に拠る。)

この引用からも窺われるように、世紀転換期のアメリカ自然主義文学は、フランスからの影響を受けつつ興隆したにもかかわらず、自然や（主に白人男性の）身体をおおむねフランス自然主義文学よりも肯定的に、活力に満ちたものとして描いた。フランス主義文学のマニフェストと広く見なされたエミール・ゾラ (Émile Zola、仏、1840–1902) の論文「実験小説」(“Le roman expérimental,” 1879) の、「実験小説は、今世紀の科学的進化の結果であり、化学および物理学に依拠する生理学をさらに受け継ぎ完成させる」(Zola, 1879/1968, p. 1186, 邦訳 p. 802) とか「それ(実験小説——引用者註)は、抽象的人間ないし形而上学的人間の研究を、理化学的な法則に服し環境の影響に決定される自然的人間の研究に置き換える」(Ibid.) といった主張とさきの引用とを較べれば、ゾラの自然観(「理化学的な法則」に統べられた自然)とノリスの自然観(「親しみやすくして身近で賦活的な」自然)との違いはいっそう否定しがたくなる*³。

3.3 社会科学の優勢へ

ノリスの自然観には、デューイが指摘したジェイムズの哲学の特徴と重なるところがある。ハイアムもジェイムズの哲学から、「静的で閉じられた秩序パターン」は何であれ拒むという、歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナー (Frederick Jackson Turner、米、1861–1932) や建築家フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright、米、1867–1959) とも共通する姿勢を読みとっており、そのうえで、「動的な流れ——絶え間ない生成変化のイ

*³ アメリカ自然主義文学がフランス自然主義文学からこうむった影響はAhnebrink (1961) で比較的包括的に論じられている。また、アメリカ自然主義文学の身体観に関する研究としてはたとえばDudley (2004) がある。

メージ——がライトの建築に行きわたっており、同様にジェイムズの哲学を貫いている」と論じている (Higham, 1970, pp. 96–97)。しかしながら、かりに「静的で閉じられた秩序パターン」の拒否が、パターンなるものが属する一般性の次元の全面的な拒否にまで行きついてしまえば、あらゆる事象が完全に個別的に（そのたびごとに特異な仕方）で生じることとなり、因果的な説明が成り立つ余地がいっさいなくなってしまう。この帰結は、文学的ないし形而上学的なヴィジョンとしては許容しうるかもしれないが、反省や予測に携わる科学者たちにとっては致命的である。したがって世紀転換期米国の社会学者たちは、それまで社会に当てはめてきた「静的で閉じられた秩序パターン」の多くがいまや無効化していることを自覚しながらなお、動的なものへと更新されつつある社会像をいくらか——反省や予測が可能な程度にまで——閉じる概念を必要としていた。

そうした概念として相互依存性が見出されたと主張するのが、ハスケルの1890年代米国論である。彼は、「歴史主義」と「文化有機体説 (cultural organicism)」というふたつの概念に規定された「新しい参照枠組み」をモートン・ホワイト (Morton White, 米、1917–2016) の『アメリカにおける社会思想』 (*Social Thought in America*, 1949) が打ち立てたことを踏まえながら、さらに進んで、「通時的」な歴史主義と「共時的」な文化有機体説とを「人間的な事柄の宇宙における全現象の本質的な相互依存性」という観点から統一的に把握する (Haskell, 1977/2000, pp. 10–12)。ハスケル曰く、世紀転換期米国における新世代の社会学者たちは、相互依存性を鍵概念としたことにより、社会の諸事象がいまや「独立変数」の想定を許さないくらい複雑であることを理解し、相互依存的な社会について説明するためには専門知識の集団的な共有が不可欠であることを認識し、その認識に沿うかたちで自分たちを専門家集団として組織化した。かくして専門職化した新世代の社会学者たちは、「優れた説明能力 (explanatory prowess)」——社会に関する反省や予測の能力——でもって、「自律的行為」や「自己信頼」といった19世紀的個人主義に基づく諸概念しか持ちあわせなかった旧世代の理論家たちを凌駕し、ひいては「社会科学による文化的権勢の確立」を実現したのであった (Ibid., pp. 1, 13–14)。

さて、ハイアムとハスケルそれぞれの1890年代米国論を総合して得られ

た上記の弁証法的構図と対照してみると、タコの形象が④～⑥の3側面すべてにまたがっていることが見てとれる。タコはまぎれもなく「生きているもの」であり、ゆえにタコの形象の普及はいっけん、野生の自然に対する関心の復活を一要素とする⑥に分類するのが適切であるように感じられる。しかしノリスの『オクトパス』は、先述のとおり、巨大な鉄道会社が広汎に線路を張りめぐらせながら社会的な支配力を高めてゆくさまをタコの形象と重ねあわせていた。すなわちタコの形象はそこで、19世紀的個人主義の前提を許さないほど複雑な社会的事象を否定的に自然化するために持ち出されており、その否定性において④に通底している。同じことは、学界の専門職化——これ自体は⑥に属する——の弊害を嘆いたジェイムズの「PhD オクトパス」にも当てはまる。こう考えることによっていや増すタコの形象の思想史的な興味深さを、次節でいまい少し詳しく論じよう。

4. タコの形象の思想史的な興味深さ

4.1 有機的なもの

前節の構図の④に含まれる、19世紀的個人主義の前提が蝕まれつつあるという不安は、世紀転換期米国においてしばしば機械 (machine) の形象にも仮託されていた。こちらについてはタコの形象以上によく知られているはずで、マーク・トウェイン (Mark Twain、米、1835–1910) の『人間とは何か』(*What Is Man?*, 1906) が掲げる人間機械論や、ヘンリー・アダムズ (Henry Adams、米、1838–1918) が自伝『ヘンリー・アダムズの教育』(*The Education of Henry Adams*, 1907) に綴ったダイナモへのアンビヴァレンスなど、有名な例がいくつもある。第2節で引きあいに出した『オクトパス』第1部第1章の末尾、すなわち鉄道 (という機械) による牧歌的な風景 (という自然) の蹂躪を目にしたプレスリーが脅威を感じるくだりは、レオ・マークス (Leo Marx) の『田園のなかの機械』(*The Machine in the Garden*, 1964) によれば、アメリカ文学がながらく利用してきた「風景のなかにいきなり機械が出現するというイメージ」が世紀転換期にはひとつの「クリシェ」と化したことを示す例である (Marx, 1964, pp. 16, 343、邦訳 pp. 17, 371)。

機械の形象は、「疎外」や「物象化」といったマルクス主義の諸概念とも結びつきやすい。たとえば「私は会社の歯車にすぎない」が疎外感の表明でありうるのは、人間の有機性と機械の無機性との対比を前提としているからである。これを逆向きに捉えると、人びとの疎外感が深刻化している社会の改良が、有機的な社会の実現と軌を一にするという解釈の余地が生じる。じじつ、前節で言及されたホワイトの『アメリカにおける社会思想』は、世紀転換期の革新主義的な社会思想家たちによる「形式主義への反抗」——ハイアムの言葉で言い換えれば、「静的で閉じられた秩序パターン」の拒否——には文化有機体説が含まれると論じており (White, 1976, Ch. 2)、ハスケルからすればそれは、相互依存的な社会というヴィジョンの系論なのであった。

「有機的 (organic)」という形容詞はたしかに革新主義者たちのテキストにしばしば現れる。デューイの『学校と社会』 (*The School and Society*, 1899) は、いかにして学校を「互いに孤立する諸部分の複合体」ではなく「ひとつの有機的な全体 (an organic whole)」とするかを説いた (Dewey, 1899/1976, p. 54, 邦訳 p. 176)。同じフレーズが社会学者エミリー・グリーン・ボルチ (Emily Greene Balch、米、1867–1961) の『我が同胞のスラヴ系市民たち』 (*Our Slavic Fellow Citizens*, 1910) でも、アメリカは「ひとつの有機的な全体であり、そのあらゆる部分が相互に感応しあっており、ひとつの伝統によって彩られており (…)」というふうに使われている (Balch, 1910, p. 403。この一節は中野 (2015, p. 2) においても引かれており、そこの議論に筆者は裨益された)。

4.2 分散された諸部分の複合体

ところで、自然 vs. 機械という対比の例としてマークスが挙げていた『オクトパス』第1部第1章の末尾は、先述のとおり、鉄道をタコになぞらえてもいた。すでに機械である鉄道がタコという動物になぞらえられることによって、鉄道の無機性はむしろ減じられているのではないか。とはいえこれは、鉄道の (人間にとっての) よそよそしさが減じられていることを必ずしも意味しない。なぜならタコは、機械のそれとは異なる (人間にとっての) よそよそしさを担うからである。

このよそよそしさは興味深さにもなりうる。第2節で言及したゴドフリー＝スミス『タコの心身問題』にとってのタコは、人間が進んできたのとは別の道筋により精神 (mind) に至れるという可能性を示す興味深い動物である。また同書は、タコのふるまいを観察すると、8本の腕がそれぞれ独立に思考しているように見えることがあるとも述べている (ゴドフリー＝スミス, 2018, pp. 79–84)。人間の神経系が中央集権型である一方、タコの神経系はもしかすると、デュエイが呼ぶところの「互いに孤立する諸部分の複合体」に比較的近いのかもしれない。「互いに孤立する」はしかしタコに関しては言いすぎであろうから、ここではひとまず、分散された諸部分の複合体と表現しなおしておく。

第2節で引いた、『オクトパス』におけるシェルグリのタコ的な身体の描写も、「頭と脳と手が独立して働いている」とあるからには、タコの独特のふるまいに関する知識にある程度基づいていると考えられる。逆に言えば、そうした知識が十分に共有されていない場合、タコのよそよそしさが機械のよそよそしさと同一視されることもありうる。たとえばジュール・ミシュレ (Jules Michelet, 仏、1798–1874) の1861年の著書『海』 (*La mer*) は、次のようにタコを機械になぞらえている。「タコ、この恐ろしい機械は、蒸気機関のように力を蓄えることができ、過剰に蓄えることもあり、はかりしれない弾力を得て海から船へ飛び移るほどの勢いを持つこともある」 (Michelet, 1861, p. 203, 邦訳 p. 160)。1861年からの約半世紀間にタコに関する知識の共有がどう進展したかは次節で検討されるだろう。

『オクトパス』における機械の形象としては、サンホアキン・ヴァレーの農場主のアニクスターが口にした「私はかつて機械だった」という台詞 (Norris, 1901/1986, p. 950, 邦訳 p. 397) も重要である。その趣旨は、当初は女性が苦手であった彼が、自らの農場で働くヒルマとの恋を成就させるまでの過程で経験した変化に存している。もはや「機械」ではなくなったアニクスターは、しかしその後、農場主たちとPS鉄道との土地所有権争いに端を発する銃撃戦——後述するマッセル・スラウ事件に材を取った『オクトパス』のクライマックス——により命を落としてしまう。かくして「諸農場はタコの触手に捕らえられた」のであって、機械化＝物象化を免れたアニクスターも、タコの形象によって否定的に自然化された「力 (force)」 (この語は

『オクトパス』に頻出する)からは逃れられなかったわけである*4。

世紀転換期米国において、自然 vs. 機械という対立からはみ出るこうした否定性がタコに仮託されていたことは、次節で取り上げられる『オクトパス』以外のさまざまな例からも読みとれる。それらの諸例は、第 3 節で掲げた思想史的構図——「社会科学による文化的権勢の確立」(ハスケル)がすべてを総合したかのような弁証法的構図——が否定性を低く見積もりすぎていることを示唆するだろう。かかる示唆が、第 3 節の構図を具体的にどう修正しうるかは第 6 節で述べられる。

5. 世紀転換期米国におけるタコの形象

5.1 19 世紀半ばまでの米国におけるタコ

第 2 節で述べたとおり、タコの怪物的なイメージの大衆化にはユゴー『海に働く人びと』が大きく寄与した。たとえば『オックスフォード英語辞典』(*Oxford English Dictionary*)の“devil fish”の項目は、タコを指す用法の初出として『海に働く人びと』第 2 部第 2 章の「イギリスの水夫たちはそれ(タコ——引用者註)を Devil-fish、悪魔の魚と呼んでいる」を挙げている(Oxford University Press, 2023)。カイヨワは『タコ』で、1866 年にブリュッセルで出版された『海に働く人びと』が同年中に 15 版以上も版を重ねた事実に触れたのち、タコが「半空想的動物の仲間入りをしたのは、比較的近年のことだ」と述べている(カイヨワ, 2019, p. 64)。

米国の雑誌ないし新聞におけるタコの出現は、筆者の調査の範囲内だと、『海に働く人びと』の影響が届くまえの数少ない例はおおむね、啓蒙的スタンスで書かれた科学的記事に限定されていた。たとえばボストンで刊行されていた科学雑誌『サイエンティフィック・トラクツ・アンド・ファミリー・ライシーム』(*Scientific Tracts and Family Lyceum*)の 1834 年 10 月

*4 『オクトパス』をもっぱら機械の形象の観点から読もうとするがゆえにタコの形象の意義が見えにくくなってしまおうという偏りは、マークスの『田園のなかの機械』のみならず、たとえば Seltzer (1992) にも見受けられる。他方で Michaels (1987) は、『オクトパス』がシェルグリュムにタコ的な身体をまとうせている点に注目しており、そこに、「有機的な全体」vs. 「機械的なシステム」という対立を越える仕方での「身体化 (embodiment)」のモメントを見出している (pp. 208, 210)。

15日号の記事は、「ボストン港ないし近隣の海岸」で発見されたことのある「コウイカ (cuttle fish)」についての情報を読者に提供したのち、「博物学者たちに知られている」近縁の種に話を広げるなかでタコに言及している (“Cuttle Fish,” 1834, p. 248)。匿名の著者はこの記事について、科学的関心を抱く「紳士たちの助けとなることを期して」はいるものの「一般読者」にとっては「無味乾燥な記録」かもしれないと述べている (Ibid.)。すなわちここではタコは、大衆の興味を引く主題とは見なされていない。

『海に働く人びと』と同年にロンドンで刊行された、旅行家ジョン・キースト・ロード (John Keast Lord、英、1818–72) の手になるヴァンクーヴァー島およびブリティッシュコロンビアの全2巻の観察記は、同地のタコについても記録している (Lord, 1866, Vol. 1, pp. 192–198)。フィラデルフィアの新聞『プレスビテリアン』 (*Presbyterian*) の1867年1月26日号がその記録を紹介しているが、記事のタイトル「本物のデヴィル・フィッシュ——ヴィクトル・ユゴーの物語匹敵さる」 (“A Real Devil Fish: Victor Hugo’s Narrative Matched”) はむしろ、『海に働く人びと』の影響力の大きさを伝えている。雑誌『ムーアズ・ルーラル・ニューヨーカー』 (*Moore’s Rural New-Yorker*) の1872年2月3日号巻頭の、大きな一枚絵とともにタコについて解説する記事も、ユゴーへの言及から始まっている (“The Octopus Vulgaris,” 1872。 “The Octopus” (1875) も同様の、タコに関するユゴーへの言及から始まる記事である)。

「タコといえばユゴー」という連想が米国においても当時これほど強力だったからにはやはり、『オクトパス』を構想中のノリスが『海に働く人びと』のことも念頭に置いていた可能性は高い。しかし、『オクトパス』の前史としてユゴーの作品それ自体よりも重要なのは、カリフォルニアでの反独占運動においてすでにタコの形象が利用されていたという事実である。

5.2 ケラーによるタコの形象の利用

ノリスの『オクトパス』は、「マッセル・スラウの悲劇 (the Mussel Slough Tragedy)」と呼ばれる1880年の銃撃戦に材を取っている。カリフォルニア州ハンフォード近郊で起こったこの事件は、マッセル・スラウ地域の広大な

農地をめぐる移住者たちとサザン・パシフィック鉄道（以下「SP 鉄道」）との抗争に起因する。SP 鉄道はかつて、連邦政府から供与されたマッセル・スラウの土地に、当地はいずれ安価で売られると謳うパンフレットをとおして移住者を集めていた。移住者たちの開発によりマッセル・スラウにはいくつもの小麦農場が生まれたが、SP 鉄道が同地域の土地を市価で売ろうとしはじめると、土地の付加価値は自分たちの開発がもたらしたと考える移住者たちは、パンフレットでの約束を SP 鉄道は守っていないと声高に主張した。以後の複雑な経緯のすえ、1880 年 5 月に、連邦保安官およびその同行者たち（SP 鉄道の間人も含まれる）と退去に抗う移住者たちとのあいだで銃撃戦が勃発し、結果として 7 人が死亡した。法思想史の観点からマッセル・スラウ事件を論じたリチャード・マクスウェル・ブラウン（Richard Maxwell Brown）はこれを、「ホームステッド倫理」と「アメリカの巨大な統合（consolidation）運動」との衝突の悲劇的な一局面と見なしている（Brown, 1991, pp. 90–91）。マッセル・スラウへの移住者たちの、各自の開発により同地域は発展したという自負に基づく「倫理」は、第 3 節で言及した 19 世紀的個人主義の系論コロラダーとも捉えられるだろう。

マッセル・スラウ事件は、SP 鉄道という大企業へのカリフォルニア州民の反感を増幅し、ひいてはカリフォルニアにおける反独占運動を促進し、同時にタコの形象の新しい利用法を生み出した。最後の点をもブラウンは論じており、とりわけ、サンフランシスコの諷刺雑誌『ワズプ』（*The Wasp*）に掲載されたジョージ・フレデリック・ケラー（George Frederick Keller、米、1846–?）の一連の彩色諷刺画に光を当てている。マッセル・スラウ事件の約 2 か月後に発売された『ワズプ』1880 年 7 月 10 日号の誌面は早くも、鉄道をタコになぞらえたケラーの諷刺画で飾られていた（Keller, 1880）。彼は同様の諷刺画を 1882 年までに複数描いたが、「なかでももっとも印象的」とブラウンが評するのは（Brown, 1991, p. 112）、『ワズプ』1882 年 8 月 19 日号の、「鉄道の独占」と大書されたタコふうの怪物がカリフォルニア州民を襲っている諷刺画「カリフォルニアの呪い」（“The Curse of California”）である（Keller, 1882. Lewis (1938, pp. 391–398) もあわせて参照のこと）。

しかし本稿はむしろ、マッセル・スラウ事件以前の『ワズプ』1878 年 7 月

第3部 アメリカンリアリズム

6日号に載った、「我々の流れゆく先」(“What We Are Drifting to”)と題するケラーの諷刺画(次図)に注目する。

図 『ワズプ』1878年7月6日号掲載のケラーによる諷刺画「我々の流れゆく先」
(Keller, 1878)



マッセル・スラウ事件への反応を論じるブラウンがこの諷刺画を取り上げないのは当然だろうが、本稿としては、そこにすでにタコが現れているという事実を見逃すわけにはいかない。この諷刺画の、「太平洋岸諸州(Pacific States)」を象徴する女性を襲っているタコは、頭部に「全面的な破壊(General Destruction)」と書かれており、なぜか9本ある腕のそれぞれに「土地の横奪(Land Grabbing)」、「鉄道と水の独占(Railroad & Water Monopoly)」、「腐敗した政府(Corrupt Government)」、「中国人移民(Chinese Immigration)」などと書かれている。要するに、第4節で「分散された諸部分の複合体」と表現したところのタコをケラーは、相互の関連

が必ずしも明瞭ではない諸事象を「全面的な破壊」の名のもとに——人間の理解を超えた仕方でも——複合する形象として利用したわけである。

そもそもケラーはいかにしてタコの形象の利用を思いついたのか。タコについての知識を彼はどれほど有していたのか。この諷刺画のタコの「中国人移民」と書かれた足が、中国人らしき人物の載る船に入り込んでいるのはなぜか。これは、排華的な諷刺画を『ワズプ』に数多く寄せたケラーの排華感情の曖昧な表れなのか。それとも彼は、タコはアジア的な食べ物だという具体的なイメージを抱いていたのか。これらの問いは、残念ながら、ケラーに関する現存の史料が乏しいせいもあっていまだ解かれていない（ケラーに関する史料の多くはおそらく 1906 年のサンフランシスコ地震により失われたと Walfred (n.d.) は推測している）。

5.3 独占の表象としてのタコ

関連の不明瞭な諸事象を不気味な仕方でも複合する形象としてのタコは、先述のとおりその後ケラーによって、19 世紀的個人主義の前提を脅かすほどにまで巨大化した鉄道会社に重ねあわされた。やがてタコは米国において、鉄道会社の表象として、あるいは独占の表象として普及する。

たとえばカリフォルニア州オークランドの人民党員は 1893 年に、「つねに腹を空かせている太平洋のタコ (the ever hungry Pacific Octopus) による掌握から」港を解放することの必要性を訴えており (cited in Griffiths, 1970, p. 103)、これはもちろん SP 鉄道への当てつけである (cf. Magliari, 1989)。また、1901 年から翌年にかけて開催されたヴァージニア憲法制定会議のなかで、鉄道会社の弁護士でもあるアルフレッド・ペンブローク・トム (Alfred Pembroke Thom、米、1854–1935) は、教会の法人化が認められると州による諸教会への介入がもたらされてしまうと考える者たちの不安を取り除くために、「巨大な宗教的タコ (a great religious octopus) がやってきて我々を食べつくしてしまうおそれなどありません」と述べた (cited in Buckley, 2003, p. 347)。ニューヨークの諷刺雑誌『パック』(*Puck*) の 1904 年 9 月 7 日号には、ウド・ジョゼフ・ケプラー (Udo Joseph Keppler、米、1872–1956) の手になる、スタンダード・オイル——石油の独占の代名

詞——を表象するタコが連邦議会議事堂やホワイトハウスなどへ触手を伸ばしている諷刺画「次!」(“Next!”)が掲載されている (Keppler, 1904)。

まさしくこうした文脈に、ノリスの『オクトパス』のみならずジェイムズの「PhD オクトパス」も位置づけられる。そもそもジェイムズが1903年にこの論文を著したきっかけは、ハーヴァードの大学院に1890-1892年に在籍していたアルフレッド・ホッダー (Alfred Hodder、米、1866-1907)の学位をめぐるトラブルにあった。ホッダーは1895年にプリンマー・カレッジの英文学講師として採用されたものの、同校は辞令を出したあとに、彼が博士号を得ていないことを問題視した。以後の経緯にジェイムズも関わる事となったため、「PhD オクトパス」の冒頭はこのトラブルを(匿名化したうえで)引きあいに出している。曰く、「必要性と動機との自然な組みあわせは何であれ、大規模に制度化された場合にはつねに、専門的な事柄への道をひた走りがちであり、排除と墮落という予期せざる力を持つ専制的機械 (a tyrannical Machine) を伸張させがちである」(James, 1903/1987, p. 70、邦訳 p. 18。ホッダーのトラブルについては、James (1903/1987, p. 568)にある編者による註も参照のこと)。学位制度も、当初は「必要性と動機との自然な組みあわせ」から始まったのにいまや「PhD オクトパス」へ変貌しつつあるとジェイムズは言いたいわけだが、注目すべきはもちろん、機械の形象とタコの形象を彼が同居させていることである。

第1節で述べたとおり、同時代の米国の哲学界においては専門職化がまさしく進行中であり、ジェイムズはこの趨勢に批判的であった(哲学の専門職化に対するジェイムズの異議については、Wilson (1990, pp. 133-134)およびCotkin (1990, p. 15)も参照のこと)。学界が「専制的機械」と化すことは、「静的で閉じられた秩序パターン」(ハイアム)を拒むジェイムズからすれば容認しえない帰結のはずである。しかしもしかすると、批判対象である学界に自分も属しているという事実ゆえの躊躇が、機械の形象からタコの形象(少なくとも「静的」ではない形象)へ彼をぶれさせたのかもしれない。あるいは彼はたんに、同時代に流行していたタコの形象を、読者への訴求力を期しつつ利用しただけなのかもしれない。本節が明らかにした文脈は、どちらかと言えば後者の可能性をより高めるだろう。

6. おわりに

19世紀半ば以降の米国におけるタコの形象を思想史的に考察してきた本稿が最後に確かめたのは、20世紀初めまでにタコが、SP鉄道やスタンダード・オイルといった独占的企業の表象として米国で普及したことである。他国におけるタコの形象を筆者はまだ十分に調査できていないけれども、20世紀初めの時点では、独占的企業の表象としての用例はもっぱら米国に顕著だと筆者はいまのところ判断している。前節においてケラーの1878年の諷刺画をとおして確かめたとおり、分散された諸部分の複合体としてのタコは、複合の仕方の不明瞭さゆえに、「全面的な破壊」のような広汎かつ曖昧な概念をも表象しうる。しかしタコの形象はやがて、世紀転換期米国の人びとが脅威と感じていた企業（corporation）なる存在に重ねられた。逆に言うと、巨大企業の一望しがたい境界はタコの輪郭へ想像的に収斂した。第3節で筆者は、相互依存性に関して、動的な社会像をいくらか「閉じる」概念と表現したが、それを敷衍すれば、本稿の議論を次のようにまとめられるだろう。タコの形象と想像上の企業との重ねあわせが、互いをいくらか閉じることとなり、かかる実際の効果ゆえにタコの形象は世紀転換期米国で普及するに至った、と（企業に焦点を据える発想において筆者はMichaels（1987）に裨益されている）。

こうした本稿の議論は、第3節で掲げた従来の思想史的構図をどう修正しうるだろうか。そもそも、第3節の構図の中核を成すハスケルの議論は、近年の研究においても一定の意義を認められており*5、しかし同時に批判が寄せられてもいる。第3節の構図からは、ハスケルの言う「社会科学による文化的権勢の確立」が最後にすべてを総合したかのような印象が得られるけれども、たとえばアメリカ史家の松原宏之（2013）は、「科学を携えた専門家たちの新時代到来」を論じるような世紀転換期米国論を、「世紀末アメリカの社会編成原理がまったく不確かだったことの深刻さを勘案できていない」

*5 たとえばSklansky（2002）は、ハスケルの著書よりも歴史的な視野をいくらか広げたうえで、ハスケルの「自己信頼から相互依存性へ」に代わる「政治経済から社会心理学へ」というテーゼを打ち出している。

と評している (p. 19)。この「不確か」さが人びとにもたらした不安を掬い上げようとする意識は、松原自身の議論のみならず、チャールズ・ポステル (Charles Postel) の——米国のポピュリズムの研究として名高い——『ポピュリスト・ヴィジョン』 (*The Populist Vision*, 2007) にも見受けられる。カリフォルニアでの反独占運動をも俎上に載せている同書は、しかしいささか残念なことに、「自然をかき乱す機械としての鉄道というノリス (の『オクトパス』——引用者註) の自然主義的描写は、ポピュリズムの典型的なテーマから逸脱している」という一節を含んでいる (Postel, 2007, p. 317, Note 33)。こうした分析の精度が不十分であることはすでに本稿第4節で論じられている。

本稿は、「社会編成原理」が「まったく不確か」であるという世紀転換期米国の不安を「社会科学による文化的権勢の確立」のたんなる前日譚とは見なさない点において松原やポステルの議論に通底しており、特にポステルの議論を部分的に改訂する可能性を備えている。そればかりか、タコに関する科学的な知識が19世紀後半でどう共有されていったかをも辿った本稿は、第3節の構図における「科学」の位置づけにも疑問を投げかけている。なにしろ世紀転換期米国において事態は、「科学」の勝利によってタコの否定的イメージが解消されるというふうには進展しなかったのだから。自然科学にある程度精通していたはずのジェイムズまでもがタコの形象に否定性を仮託したという事実は、ジェイムズらの思想——具体的にはプラグマティズム——と生物学が独特の関係で結ばれていたことを示唆するだろう。この関係は、実のところ最近、トレヴァー・ピアース (Trevor Pearce) の『プラグマティズムの進化』 (*Pragmatism's Evolution*, 2020) などによって解明が進められつつある。本稿は、世紀転換期米国における生物学思想の研究という興隆中の分野にも新しい光を投げかけているはずである。

* 本稿の一部は、2019年6月22-23日のアメリカ哲学フォーラム第6回大会における筆者の発表と、2022年6月4-5日のアメリカ学会第56回年次大会における筆者の発表とに基づいている。これらの発表に対して貴重なコメントをくださった方々にあらためて御礼申し上げる。

文献

- Åhnebrink, L. (1961). *The beginnings of naturalism in American fiction: A study of Hamlin Garland, Stephen Crane, and Frank Norris with special reference to some European influences, 1891–1903*. Russell & Russell.
- Balch, E. G. (1910). *Our Slavic fellow citizens*. Charities Publication Committee.
- Bennett, A., & Royle, N. (2023). *An introduction to literature, criticism and theory* (6th ed.). Routledge.
- Brown, R. M. (1991). *No duty to retreat: Violence and values in American history and society*. Oxford University Press.
- Buckley, T. E. (2003). “A great religious octopus”: Church and state at Virginia’s constitutional convention, 1901–1902. *Church History*, 72(2), 333–360.
- カイヨワ, R. 塚崎 幹夫 (訳) (2019). 蛸——想像の世界を支配する論理をさぐる—— 青土社
- Cotkin, G. (1990). *William James, public philosopher*. Johns Hopkins University Press.
- Cuttle fish. (1834, October 15). *Scientific Tracts and Family Lyceum*, (2), 248–249.
- Dewey, J. (1899/1976). The school and society. In J. A. Boydston (Ed.), *The middle works of John Dewey, 1899–1924: Vol. 1. 1899–1901* (pp. 1–109). Southern Illinois University Press. (デューイ, J. 北田 佳子・黒田 友紀 (訳) (2019) 学校と社会 デューイ, J. 上野 正道 (訳者代表) デューイ著作集 6——教育 1 学校と社会, ほか—— (pp. 119–242) 東京大学出版会)
- Dewey, J. (1930/1984). From absolutism to experimentalism. In J. A. Boydston (Ed.), *The later works of John Dewey, 1925–1953: Vol. 5. 1929–1930* (pp. 147–160). Southern Illinois University Press. (デューイ, J. 河村 望 (訳) (1995) 絶対主義から実験主義へ デューイ, J. 河村 望 (訳) デューイ = ミード著作集 1——哲学・心理学論文集 (pp. 280–297)

人間の科学社)

- Dudley, J. (2004). *A man's game: Masculinity and the anti-aesthetics of American literary naturalism*. University of Alabama Press.
- Gadamer, H.-G. (1991/1995). Europa und die Oikoumene. In *Hermeneutik im Rückblick* (pp. 267–284). J. C. B. Mohr (Paul Siebeck).
- ガシエ, R. (2020). タイトルなしで ガシエ, R. 宮崎 裕助 (編訳) 入江 哲朗・串田 純一・島田 貴史・清水 一浩 (訳) 脱構築の力——来日講演と論文—— (pp. 124–177) 月曜社
- ゴドフリー＝スミス, P. 夏目 大 (訳) (2018). タコの心身問題——頭足類から考える意識の起源—— みすず書房
- Griffiths, D. B. (1970). Anti-monopoly movement in California, 1873–1898. *Southern California Quarterly*, 52(2), 93–121.
- Haskell, T. L. (1977/2000). *The emergence of professional social science: The American Social Science Association and the nineteenth-century crisis of authority*. Johns Hopkins University Press.
- Higham, J. (1970). The reorientation of American culture in the 1890's. In *Writing American history: Essays on modern scholarship* (pp. 73–102). Indiana University Press.
- 平倉 圭 (2019). かたちは思考する——芸術制作の分析—— 東京大学出版会
- 入江 哲朗 (2020). 火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史—— 青土社
- James, W. (1903/1987). The Ph.D. octopus. In F. H. Burkhardt, F. Bowers, & I. K. Skrupskelis (Eds.), *Essays, comments, and reviews* (pp. 67–74). Harvard University Press. (ジェイムズ, W. 関 静雄 (訳) (1966). 蛸怪獣 Ph.D. 帝塚山論集, 85, 13–26)
- ジュネット, J. 矢橋 透 (訳) (1991). 文彩 ジュネット, J. 花輪 光 (監訳) フィギュール I (pp. 237–256) 書肆風の薔薇
- Keller, G. F. (1878, July 6). What we are drifting to [Cartoon]. *San Francisco Illustrated Wasp*, 2(101), 776–777.

- Keller, G. F. (1880, July 10). California's inducements to immigrants [Cartoon]. *San Francisco Illustrated Wasp*, 4(206), 808–809.
- Keller, G. F. (1882, August 19). The curse of California [Cartoon]. *Wasp*, 9(316), 520–521.
- Keppler, U. J. (1904, September 7). Next! [Cartoon]. *Puck*, 56(1436).
- ククリック, B. 大塚 諒・入江 哲朗・岩下 弘史・岸本 智典 (訳) (2020). アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで—— 勁草書房
- リアーズ, T. J. J. 大矢 健・岡崎 清・小林 一博 (訳) (2010). 近代への反逆——アメリカ文化の変容 1880–1920—— 松柏社
- Lee, H. (1875). *The octopus; or, The “devil-fish” of fiction and of fact*. Chapman and Hall.
- Lewis, O. (1938). *The big four: The story of Huntington, Stanford, Hopkins, and Crocker, and of the building of the Central Pacific*. Alfred A. Knopf.
- Lord, J. K. (1866). *The naturalist in Vancouver Island and British Columbia* (Vols. 1–2). Richard Bentley.
- Magliari, M. (1989). Populism, steamboats, and the octopus: Transportation rates and monopoly in California's wheat regions, 1890–1896. *Pacific Historical Review*, 58(49), 449–469.
- Marx, L. (1964). *The machine in the garden: Technology and the pastoral ideal in America*. Oxford University Press. (マークス, L. 榊原 胖夫・明石 紀雄 (訳) (1972). 楽園と機械文明——テクノロジーと田園の理想—— 研究社)
- 松原 宏之 (2013). 虫喰う近代——一九一〇年代社会衛生運動とアメリカの政治文化—— ナカニシヤ出版
- Michaels, W. B. (1987). Corporate fiction. In *The gold standard and the logic of naturalism: American literature at the turn of the century* (pp. 181–213). University of California Press.
- Michelet, J. (1861). *La mer*. Librairie de L. Hachette. (ミシュレ, J. 加賀野井 秀一 (訳) (1994). 海 藤原書店)
- 中野 耕太郎 (2015). 20世紀アメリカ国民秩序の形成 名古屋大学出版会

- Norris, F. (1901/1986). The octopus: A story of California. In D. Pizer (Ed.), *Novels and essays* (pp. 573–1098). Library of America. (ノリス, F. 八尋 昇 (訳) (1983). オクトパス——カリフォルニア物語——彩流社)
- Norris, F. (1903/1964). The “nature” revival in literature. In D. Pizer (Ed.), *The literary criticism of Frank Norris* (pp. 40–430). University of Texas Press.
- The octopus. (1875, October 9). *Appletons’ Journal of Literature, Science, and Art*, 14(342), 478–479.
- The octopus vulgaris. (1872, February 3). *Moore’s Rural New-Yorker*, 25(5), 81–82.
- Oxford University Press. (2023, July). Devil fish, n. In *Oxford English Dictionary*. <https://doi.org/10.1093/OED/3306313051>
- Pearce, T. (2020). *Pragmatism’s evolution: Organism and environment in American philosophy*. University of Chicago Press.
- Postel, C. (2007). *The Populist vision*. Oxford University Press.
- A real devil fish: Victor Hugo’s narrative matched. (1867, January 26). *Presbyterian*.
- 佐々木 一也 (2008). ガーダマー 野家 啓一 (編) 哲学の歴史 第10巻——危機の時代の哲学—— (pp. 377–413) 中央公論新社
- Seltzer, M. (1992). *Bodies and machines*. Routledge.
- Sklansky, J. (2002). *The soul’s economy: Market society and selfhood in American thought, 1820–1920*. University of North Carolina Press.
- 刀禰 勇太郎 (1994). 蝟 法政大学出版局
- Walfred, M. (n.d.). *George Frederick Keller*. Illustrating Chinese Exclusion. Retrieved January 1, 2024, from <https://thomasnastcartoons.com/west-coast-view/the-san-francisco-wasp/george-frederick-keller/>
- White, M. (1976). *Social thought in America: The revolt against formalism*. Oxford University Press.
- Wilson, D. J. (1990). *Science, community, and the transformation of*

第8章 観念論的でも機械論的でもない社会のかたち

American philosophy, 1860-1930. University of Chicago Press.
Zola, É. (1879/1968). Le roman expérimental. In H. Mitterand (Ed.),
Œuvres complètes d'Émile Zola (Vol. 10, pp. 1175-1203). Cercle du
Livre Précieux. (ゾラ, É. 古賀 照一 (訳) (1970). 実験小説論 ゾラ, É.
古賀 照一・川口 篤 (訳) 新潮世界文学 21——ゾラ—— (pp. 780-821)
新潮社)

本研究は JSPS 科研費 JP20K00015、JP23K18602 の助成を受けたものです。

第9章 ジョサイア・ロイスの教授学論と その知的文脈：

ハーヴァード教育大学院誕生前夜の哲学者たち^{*1}

岸本 智典

Keywords: 観念論哲学の教育学的側面、教育の科学、『エデュケーショナル・レビュー』、精神科学、心理学的精神、ナチュラリスト、ハーヴァード教育大学院

1. 序

本章では、20世紀への転換期の米国でしばしば議論された、教育は「科学 (Wissenschaft/science)」か「技芸 (Kunst/art)」かというテーマを念頭に置きながら、特にハーヴァードの哲学者ジョサイア・ロイス (Josiah Royce、米、1855–1916) がこの問題をめぐって果たした役割や歴史的意義を検討する。

米国ではすでに1820年代に、教育の質の向上や教員の専門職的な地位の向上を期して「教育の科学 (science of education)」を求める動きが存在した。たとえば、教員養成学校の設立や普及を推進しようとしたノーマルスクール運動の指導者ジェイムズ・G. カーター (James Gordon Carter、米、1795–1845) は「教育の科学はすべての人類の進歩の基礎」と考えたし、1827年からブラウン大学学長を務め、1830年設立のアメリカ教育会 (the American Institute of Instruction) において初代会長に選出されたフランシス・ウェイランド (Francis Wayland、米、1796–1865) も「教育の科学は、それ自体の主題、目標、法則を持つ独自の科学」とし、その発展を期待していた (Robarts, 1968)。本章で扱うロイスが教育の科学という主題を論

^{*1} 本章は、2023年8月24日に日本教育学会第82回大会にて、ラウンドテーブル11「アメリカにおける教師の専門性の史的変遷」の一報告として発表したものに加筆修正を施したものである。

じた背景には、米国での半世紀以上にわたるこうした文脈があった。

ロイスがこの問題を取りあげて主題的に論じたのは、1891年に刊行を開始した雑誌『エデュケーショナル・レビュー』の1月号と2月号に連載された「教育の科学は存在するか」という論考においてである。この論考は日本の教師教育史研究の文脈でも時に参照され、影響力を持ってきた。しかしながら、たとえば三好信浩『教師教育の成立と発展——アメリカ教師教育制度史論』での言及のように、教師教育史の文脈ではロイスの見解が教育実践や教員養成における「研究の欠如」という問題と結びつけられ、彼の論考は教育科学に対する疑念ないしは蔑視の系譜の出発点として位置づけられることになる。

(…)「研究の欠如」という問題は、元を辿れば、教職を裏うちできる科学があるのかどうかという古くからの論争につながっている。一八九一年、ハーバード大学のロイスは、「教育の科学は存在するか」と題する論文の中で、教職は「アート」であるが、教育の科学は存在しないと断じた。今日では、多くの大学に教育学部や教育学科が設けられ、大学院水準をもった研究活動がなされているが、そこに至る道程は決して平坦ではなく、今なお教育科学に対する疑念なり蔑視なりが存在している。(三好, 1972, p. 6)

本章の第3節で確認するように、たしかにロイスは教育を技芸と考え、教育の科学は存在しないと主張している。しかし、教育と科学との関係について論じる彼の議論を紐解くと、むしろロイスは教師が積極的に当時の科学にアクセスすることを奨励していることがわかるし、また、制度史的な観点から彼の立ち位置を眺めるならば、三好の述べるような教育学における「大学院水準をもった研究活動」が開始される素地をハーヴァードにおいてロイスが用意したと解釈する可能性も見えてくる。三好が言うように「教育科学がどのように発達し、それが教師教育とどのように結びついてきたかを考察する必要がある」(三好, 1972, p. 6)と考えるならば、ロイスの当該論考の議論をその内的文脈に即して丁寧な追う内在的な検討とともに、それが受け入れられた当時の外的な知的文脈とを同時に検討する必要もあるだろう。本章では前者の検討を中心に扱いつつも、後者の見通しを同時に示すことで、米

国における教育（科）学と教師教育との関係という問題へのひとつの視座を用意したい。

ところで、ロイスの当該論考は、前半部（1月号掲載）が同時代のドイツの哲学者ヴィルヘルム・ディルタイ（Wilhelm Dilthey、独、1833–1911）による直近の論考「普遍妥当的教育学の可能性について」（1888年）への応答となっており、後半部（2月号掲載）ではそれを受けてロイス自身の教育論が展開されるという構造を持っている。次節以降で論じるように、ロイスのディルタイ理解には問題含みな点もある。そこで本章ではまず、もともとのディルタイの主張やその位置づけを確認したうえで（第2節）、ロイスの理解のあり方や教育学に対する主張の仕方を検討する（第3節）。さらに、一方でロイスが世紀転換期米国の観念論的立場を代表する哲学者だったという知的な文脈を考慮に入れつつも、他方で彼がまた当時のハーヴァードにおける高等教育改革の渦中の人物であったという制度史的文脈とを合わせ考えることで、彼の教授学論が持ちえた思想史的意味を探りたい（第4節）。

2. ディルタイ「普遍妥当的教育学の可能性について」の概要と位置づけ

ディルタイは「普遍妥当的教育学の可能性について」の冒頭部分において、ヘルバルトやシュライアーマッハー、スペンサーなどの「優れた教育学の諸体系は、教育の目標、教授科目の価値、教授の方法を普遍妥当的に、つまりまったく異なった民族や時代に対して（通用するよう：邦訳者注）規定することを要求する」（Dilthey, 1888 坂越訳 2008, p. 476：煩雑さを避けるため以下では翻訳版のページ数のみを記す）と述べ、教育学（教授学）が持つ普遍妥当性の要求を確認する。このような要求を抱える教育学が、19世紀末当時、他の学問領域に比して遅れをとってしまっているとする診断が本論考序盤の主題である。

他の人文社会領域の学問と同様に、ヘルバルトへと至る18世紀までの教育学は「その目標に関する知識を倫理学から受け取らなければならず、教育によってその目標を達成しようとするさいに生じる、個々の経過や対策についての知識を心理学から受け取らなければならぬ」（p. 477）だったことを

ディルタイは指摘するが、問題とされるのは、他の領域では19世紀以降に歴史学派が台頭し抽象的な諸理論に対して厳密な歴史学的手法によって補完や更新がおこなわれたのに比べて、教育学ではまだそのような展開が起きていないという点である。教育目標については「個人の啓蒙」という18世紀までの生や教育の理想を抽象的に表現したものである点で、また、教育の過程や方法については直観から概念へ、事実から抽象へと向かう発達規則といった不十分な心理学を適用したものである点で「限界があり、相対的な価値しかもたない」(p. 481)とするディルタイの主張には、同時代の学問的状況への目配りから教育学に対して下した彼の評価が見てとれる。

このような抽象的で普遍妥当な教育学は、その従来のあらゆる形態において、自然神学の仲間であり、また自然法や抽象的な国民経済学や国家学の仲間である。歴史学派がそれ以外のあらゆる領域において、はるか以前から自然的体系を排除し、歴史の見解に至ったのに対し、教育学だけは遅れたまま取り残された。このように、教育学は今日の科学における一つの変り種なのである。(p. 482)

したがってディルタイからすれば、当時の人々が教育学に対して軽蔑の態度を向けることは、「それがまだけって近代的な意味での科学ではないという正当な感情にもとづいている」のであり、教育学は「存在するものの歴史的深みや有意味な構造」に目を開かねばならない(p. 482)。後に見るように、ロイスは教育学が近代的な科学ではないとするディルタイのこうした診断を重く受け止めている。

ただし、教育学は科学ではない、と主張することがディルタイの論考の本旨ではない。彼はあくまでも「普遍妥当な教育学の可能性」、すなわち、どのような条件のもとで教育学が成立しうるかを論じようとしている。そこでまず確認されるのが、教育学が当為あるいは価値を問題にせざるをえないことである。ディルタイが述べるには、たとえば公的な文書や印刷物、学校規則、教科書、個人の成績に関する通知表などに基づく純粋な歴史的研究が重要だとしても、「最終的にわれわれは事柄がどうであったかということを知ろうと欲するだけではない。すべてのほかの時代がそうであったように、現代もまた教育的行為に関する諸規則を必要とする」(p. 483)。したがって、

倫理学、政治学、経済学などの類似した領域と同様、教育学においても「いかなる点において、存在するものについての認識から、存在すべきものについての規則が生じるのか」(p. 483)を問わざるをえないのである。

ディルタイの論考の中盤以降は「教育的行為に関する諸規則」を当時の進化論など諸学の知見を下敷きにして導くことに費やされている。彼の議論によると、教育は「心的生の発展に、手段として寄与するもの」であるから、教育という行為の規則は、目的であるところの「心的生の発展」に依存する(p. 483)。したがってわれわれが教育の諸規則を知るためには、心的生の発展の規則を知る必要がある。彼は、因果法則に基づく「機械的な自然の秩序」と対照させて心的生に「目的論的性格」を見てとり、それを、諸部分が「完全性」へと向かう合目的な連関として捉える(pp. 488-489)。先に見たように、たしかにわれわれの「生の内容的目標はどの時代においても歴史的に規定される」けれども、他方で「心的生の完全性は、心的生の個々の過程やその連関において人間に普遍的に与えられた条件なのであり、内容に関するどのような目標もこの条件のもとで達成される」。たしかに「ある時代ある民族の教育理想は、その内容的充足や現実性において、歴史的に制約され性格づけられている」けれども、そうした現実のなかでの各人による目標への発達にとって心的生の「目的論的連関の完全性は、普遍的な条件である」とされる(pp. 489-490)。要するにディルタイは、心的生の内容と形式を区別し、前者が歴史的に規定されることを認めながらも、後者については生の発展を考えるうえでの普遍的な条件として捉え、それがあって初めて教育の規則も考えることができる——普遍妥当的教育学が成立する——とするのである。

普遍妥当的教育学はいかに成立可能か。それは、人間に普遍的に与えられた心的生の完全性を条件として想定することで可能となる。それはたしかに歴史から抽象されたものであるけれども、歴史研究——出来事がいかに展開されてきたかの研究——を介してそれ自体も叙述可能だし、そうした完全性に向かうための手段をたとえば心理学で補完しながら「学問的に叙述」(p. 490)することも可能である——これがディルタイの立場であった。このような彼の試みが成功しているか否かは先行研究でも評価がわかれているが(瀬戸口, 2023)、見過ごされてはならないのは、上述の彼の議論が超越論的

な特徴を持つことである。この議論がおこなわれた1880年代後半を含む時期について、舟山(2006)は、それがディルタイ哲学形成史上の「中期」に当たることを確認しつつ、中期の特徴の一つとして「精神科学に対する超越論的な基礎づけ」の姿勢を見いだしている。1880年代から1890年代にかけての中期ディルタイの議論は、「一方で精神科学の基礎づけをいわば超越論的に主体的で意識的な体験へ遡及することによって論究しようとする姿勢と、他方で人間の心的・社会的生を、人間と環境世界との間の実践的(行為論的)相互作用として捉えようとする視点を特徴とするもの」であり、「こうした基礎づけに関する一般的な認識論的・体系的な研究とならんで、個別精神科学に即してもその探求を試みているのであり、このことはディルタイ哲学の形成史上見過ごすことのできない点である」(舟山, 2006, p. 38)とされる。本節で扱った「普遍妥当的教育学の可能性」も、「個別精神科学」の一つとしての教育学に関して超越論的な基礎づけをおこなったものとして位置づける必要があるのである。なおディルタイは、本論考の終盤にかけての残りの部分(第3節「教育学のきわめて限定された連関」)で、成立しうる教育学全体のマッピングをおこなっている。これについても瀬戸口(2023)に詳しいが、本節ではロイスによる受容のポイントである上記の超越論的な基礎づけという議論の性格を確認し、次節に進みたい。

3. ロイス「教育の科学は存在するか」におけるディルタイ理解と彼の教授学論

ここからは、上述のディルタイの論考を米国の地でロイスがどのように理解し紹介したか、また、それを踏まえてどのような教育論を展開したのかを見る。ロイスの紹介の仕方には、誤読とまでは言えないまでも、ミスリーディングなところが認められ、後の米国の教育現場へと与えた影響力の大きさからも彼の読解や紹介の仕方、独自の主張の内容は無視されるべきものではない。

『エデュケーション・レビュー』創刊号(1891年1月)に掲載されたロイスの論考「教育の科学は存在するか(1)」は、論考の意図に言及する前書きから始まる。この論考は、教育問題の研究の「展望と困難」を論じること

にあるとされ、また、「教師の関心を、かれらの専門職における理論的側面の点で強めたい」と彼が願っていることが述べられる (Royce, 1891a, 15: 以下ではページ数のみを記す)。以下で見えていく本論考で扱われる主題についてはロイス自身の言葉で次のようにまとめられている。

断片的ではあるが示唆的なところもある、たとえば教育の技芸を学ぶ学徒にとって有益に追求されるかもしれない諸研究のプログラムや、現代教授学に関する一定の重要なニーズの徴候、性急な一般化に対する警告、そして、子どもを愛するすべての観察者に対して、日常生活の複雑さを無視することなく心理学という科学を研究し、単なる教授学的ドグマの言葉を信頼するのではなく、みずからの温かな経験を賢く利用するようにという激励——これらが私の論文で提供したいものの一部である。(15)

ただし、大学教師として「(…)「科学」といった銜ったところのある慰めになるような名称を、教育者の骨の折れる問題含みの技芸をどのようなかたちであれ議論する営みに適用することに対しては、常に尻込みの念を覚えている」というように、教育という「技芸」を扱う営みに対して「科学」という名称を用いることへの距離感も同時に表明されている点からは、哲学者ロイスらしさを見てとることもできるだろう。

第一節は、ディルタイの論考の要約となっている。先に取り上げたディルタイの論考が「1888年7月にベルリンの科学アカデミーで読み上げられ同アカデミーの会議録に掲載された、広く知られ多くの議論を呼んだ論文」(16)として紹介される。ディルタイについて「多面的で慎重な学徒として知られ、特に哲学のより歴史的で人文科学的側面についての研究で知られる」とするロイスは、「教授学の分野に対する彼の試みは、彼のいつもの注意深さと学識によって特徴づけられる」と評価する (16)*²。ディルタイの問いが「普遍的に妥当な教授学的科学の可能性」にあることが確認され、そ

*² 第2節では邦訳に合わせ、Pädagogik や pädagogischen Wissenschaft に「教育学」という訳語を当てたが、本節の引用部では英語の pedagogy については「教授学」または「教授法」、science of education については「教育の科学」または「教育科学」という訳語を用いて区別している。

の論考の冒頭部分が「否定的で批判的な調子」であることを強調する。ロイスは「普遍的に妥当な教授学の教説」の限界についてディルタイが述べている点を「きわめて注目し値する」ものとし、「彼の懐疑は痛烈である」として、教育学批判の否定的側面により着目している(16)。

その否定的側面とは、先に見た教育学における歴史学的知見の欠如である。ディルタイの論を受けてロイスがまとめるには、「歴史やさまざまな状況を無視して、政治生活の絶対的な形式を全人類に当てはまるように定めようとし、その結果、人々を歴史的な社会秩序全体に対する反乱へと駆り立てた、旧態依然とした国家論 (theories of the state) の装いとまったく同じ」(16) 装いを、著名な教育学体系はすべて備えている。「この種の理論化は17世紀から18世紀にかけてのもので、フランス革命で頂点に達し、われわれの時代には政治科学における歴史学的手法によって置き換えられてきた」(16-17) けれども、「教授学は(…)まさにこの旧態依然とした理論化の流儀を代表するものである」(17)。教育学が考察対象としてきた人間本性や教育目的については、「事実として、人間本性は、その特性についてのどんな抽象的で普遍的な定式化によっても適切に記述されえない」し、「人間本性は、進化の産物として、国によって、世紀によって多様に異なるもの」であり、また、「生の倫理的目的を抽象化されたかたちで普遍的に定式化することさえ、有益な企てではない」(17)。したがって、「教育者は、自分が常に働きかけなくてはならない素材——すなわち人間本性——も、自分が常に目指さなくてはならない目的——すなわち教え子の最高の道徳的完成——も、抽象的な普遍性を備えたかたちで自身のために定義することは望めない」(17)のである。

このようにロイスは、ディルタイの見解を受けて教育学の持つ必然的な限界を示す。ここまではディルタイ以上に教育学の限界を強調しているかに見えるロイスだが、他方で、教授学的科学 (pedagogical science) に残される対象領域についても以下のように書いている。

とはいえ、このような必然的な限界があるにもかかわらず、教授学的科学にはまだ領域が残されているのではないだろうか。イエス、とディルタイは答える。ただし、人間本性や生きることの目的について

の抽象的な記述ではなく、人間の進化の典型的な形態についての真に心理学的な研究が、現代の歴史学的研究や生物学的研究が可能にした仕方では追求される場合にはそうなのである。人間本性の内容に対してではなく、その有機的な成長の様式について、いくつかの一般的な法則がある。これらの生物学的な法則は、実際的な意義を持つことが判明するだろう。(17-18)

ディルタイが心的生の目的論的構造について論じていた箇所を要約して、ロイスは、「人間の進化の典型的な形態」や「有機的な成長の様式」については科学的に法則を見出させるものであり、それらを踏まえて教授学的科学は成立しようとするディルタイの考えを示している。ディルタイがいわば内省的に導き出していた「心的生」についての考察を、「人間本性」についての考察に置き換えている点は問題含みであるものの、「人間の成長の型 (type)」(19) が科学的に明らかになることによって教育に関しても「科学的かつ一般的な議論が可能になるという意味は残って」(19) おり、「子供の生の秩序を実際に (do) 高める過程については、比較的一般的な説明をすることができる」(19) と書くロイスは、ディルタイが議論していた心的生の内容と形式との区別について一定程度妥当な理解を持っていたと言えるだろう。そうした理解を踏まえてロイスは次のように述べる。

要するに、科学的教授学は、人間本性とは何か、どのようなものでなければならないか、そして人間本性に対して何をなすべきかについて、最終的かつ完全に教師に教えることはできず、全体として何がよい秩序へと向かう傾向にあるのか、また諸衝動の性格への組織化へと向かう傾向にあるのかについての指摘にとどまることだろう。(…)
特定の時代、国家、家庭、子供の状況に適用することは、科学ではなく、技芸の問題となるだろう。(20)

ここで着目したいのは、「技芸の問題」という表現である。ディルタイが当該論文では必ずしも主題的に論じていなかった「科学」と「技芸」との関係を問う視点が、ロイスの論考では教育学の限界を議論する際に現れてくることになる。第1節の最終部で、ディルタイ論考の結論部における「教授学

の領域のマッピング」(20)を紹介する際も、教授学的科学の知見については「教育者がみずからの国や年齢や子供の諸条件を常に参照する以外には、決してすぐに適用できるような規則ではない」(20)とし、「それらは補助にはなるかもしれないが、個人の洞察力の代替には決してならない」(20)とロイスは強調する。また、第1節でのディルタイ論考の要約を踏まえて自身の教育論が論じられる第2節では、「歴史諸科学の教訓」として「成長それ自体の一般的な型についての説明から、この生の細部の豊かさのすべてを推論することを期待してはならない」(21)ことが強調されたり、教師に対して、「あなた自身の状況 (surroundings)」や「立ち位置 (position)」、「立場 (place)」、「関係性 (relation)」、「経験 (experience)」といった「型よりも細部」を重視すべきことが述べられたりする(21)。「これらすべての事柄が、あなたの持つ教授学的原理を真に科学的に適用するようなことを適切にも妨げることだろう」(21-22)と述べるロイスは、ディルタイ論考の主題を離れて、教師が「科学」に対して持つべき姿勢について論じているように見える。そして、「真の教授法 (pedagogy) は技芸である」(22)と言いきり、精神医学 (psychiatry) における精神病のケアと治療との類比のもと、「科学から生へと戻る者は、適切な瞬間に定式化を忘れる技芸や、記述可能な型よりも生き生きしたもの (the live thing) を愛する技芸を学んでいないならば、哀れな弟子である」(22)として、教師にとって重要なのは、適切に科学を忘れ、生を愛する「技芸」であることをロイスは主張するのである。

ただしロイスは、教師が「科学」抜きの「技芸」のみで教育をおこなうことについては賛成していない。たしかに、「それだけですべての子供たちが救われるといったような、これやあれやの完全で科学的で最終的な「教授学の体系」を発見したかのように見せかけ続けている術学者たち」(22)は誤っているけれども、他方で「教師はみずからの天職のために科学的な訓練を必要とする」(23)とも主張している。ロイスの考えでは、教授学の体系を強調する術学者たちと、科学を無視する無知な教師たちは、ともに間違っている。科学の学識は教師にとっても出発点として必要であり、科学は教育を直接代替するのではなく「部分的に支えるもの」(24)だとするのがロイスの立場である。

こうした議論を踏まえてロイスは、最終的に自身の見解を次のように示

す。曰く、「特殊な差異はさておき、全体として私はディルタイに同意すべきだろう。完全な定式化が可能で、個々の生徒や教師に直接に適用できる普遍的に妥当な教授学的科学は存在しない」(24)、と。ここで、ディルタイとの論調の差異に気づかされる。前節で確認したように、ディルタイは普遍妥当性を持つのが科学であり、教育学がそうした普遍妥当性を持った科学たりうるためにはどのような条件が必要かについて議論していた。しかしながらロイスは、科学の適用についての普遍妥当性を組上に載せ、そのような意味での普遍妥当性を持った教授学的科学が存在しないという主張へと議論をシフトさせている。こうした論点のシフトとともに提示されていたのが、教師にとっての「技芸」の重要性だったのである。「教育の科学は存在するか(1)」の最終部でもロイスは、「単一で確定的な科学としての教授学について、私は常に重大な疑念を抱いてきた」(24)と述べ、「私は教授学的体系を拒否する」(25)と重ねて立場を表明している。こうしたロイスにおけるディルタイとの論調の違いは、本章のはじめに言及した、以後の歴史における「教育科学に対する疑念や蔑視」について考察する際に有効な視点として働くだらう。

『エデュケーション・レビュー』の次号に掲載された「教育の科学は存在するか(2)」では、(1)の論考の末尾で予想的に示される内容が詳しく論じられる。その「第一は、教師は言うなれば博物学者ナチュラリストであるべきで、まさに他のナチュラリストが他の有機体の生を把握しようとするのと同様に、子供や若者の生を愛し、可能な限り科学的に把握すべきであるということ」であり、「第二は、教師は理性的な理想を持つ人間であるべきで、自分がどのような道徳的および社会的目的のために奉仕したいのか、そしてなぜ自分がそれらを価値あるものとするのかを知っていなければならないということ」(25)である。

第二の点である倫理的原理をめぐる論点が先に扱われる。まず、「普遍的な同意を得た道徳体系はない」とするディルタイに対して、ロイス自身は「普遍的な倫理的原理の可能性を信じている」という立場であることが明言されるが、「しかし厳密に哲学的な問題については、ここは語るべき場所ではない」(Royce, 1891b, 121: 以下ではページ数のみを記す)として、本論

考ではそれ以上の議論はおこなっていない。また、「宗教的精神」と「科学的
精神」とを区別して、教師には後者への関心を持つことが望まれるものの、
米国の現状——「聖職者による道德教育の一部の知恵の無さ」(122)が批判
される——から考えると、科学よりも忠実な本能が、そしてたとえ誤った理
想に対してであったとしても「献身に奮闘的であること (strenuousness of
devotion)」がより重要であるとも主張される(121-122)。宗教、科学、倫
理の関係をロイスがどのように整理し考えているかはここだけでは判然とし
ない。ただし、「これらすべての状況にもかかわらず、未来の教授学は、教
師のあいだで理性的な倫理的反省を促すことを、その責務の一つとして私は
主張せざるをえない」(122)と述べ、教師にとっての理性的な倫理的反省の
意義は強調している。(2)の論考の前半である第3節の結末部においては
「(…)教師にとっても生徒にとっても倫理的洞察そのものが重要な価値を持
つからこそ、道徳的な問題を真に科学的に扱うことも、真に科学的な教員養
成も、とりわけ困難なものとなる」(123)とする認識が示されており、こ
こで多くは議論されないものの、ロイスにとっては教員養成の課題の中核には
倫理の問題があったことがわかる。

最後の第4節は、その分量からしても、本論考でロイスが最も力を込めて
書いている箇所と言える。まず、当時の専門化し実践の展望から離れた心理
学に対して教師が抱えた混乱(123-124)について触れたあと、教師に必要な
ものは、心理学体系でも心理学理論でもなく「心理学的精神」であり、そ
のために心理学を研究、読解すべきことが説かれる(124-126)。

第一に、若い教師に覚えていてもらいたいことは、教師に必要なもの
が心理学の「体系」でもなく、「人間の心の諸力」の完全な理論でもな
く、むしろ心理学的精神 (the psychological spirit)、すなわち心的診
断 (mental diagnosis) という目的に必要な愛と技術だということだ
である。私が教師はナチュラルリストであるべきだと言ったのは、子供た
ちの精神生活をそれ自体のために観察し、その気分や傾向の相対的価
値を判断する習慣を身につけるべきだという意味である。(124)

ここから読み取れるように、ロイスは「心理学的精神」をある種の「習慣」
と捉えている。ではそれはどのような習慣か。彼は、「出版された心理学的

研究を学ぶことは、このような生きた子供の観察に向けた教師の準備を主に意図するものであるべき」(124)としながら、二人の人物の研究を紹介してそれを説明する。一人は、『児童の精神 (*Die Seele des Kindes*)』(1882: 英訳は *The soul of the child*, 1888) を出版したプライヤー (William Thierry Preyer、独、1841–1897) であり、彼の研究習慣から教師は以下のことを学ぶべきとされる。

(…)それがどのような状態か、どのような心的色彩か、どのような内的生の過程かを観察することなく、単に心が善か悪かを判断する習慣は、心を善か悪かにしてしまう。すなわち、この習慣は、私たちのほとんどに染み付いているため、単なる見積もり (estimation) ではなく診断をおこなったり、その人に対する単なる表面的な好き嫌いではなくその心的諸過程を愛情を持って研究したりすることを学ぶのは常に困難である。しかしながら、このような内的過程の研究こそが、教師の理論的な仕事の大部分なのである。(126)

もう一人の参照されるべき人物は、「ミツバチやアリやスズメバチを研究してそれらがどのような意味で知能を持っているのかを知ろうとした人物」(126)として紹介されるラボック (John Lubbock、英、1834–1913) である。ここで重要なのは、教師が体系的という意味ではなく「精査する (scrutinizing)」(127) という意味での心理学者の態度で子供の状態を問うべきとされていることであり、ロイスの「科学」観が見てとれる点である。曰く、教師は「科学的な一般化をおこなう者としてではなく、観察するナチュラルリストとしての、心的事実の収集家としての心理学者」(127) の姿に学ばねばならない。要するに、ロイスの言う「心理学的精神」とは、心という内的過程を愛を持って観察する習慣のことであると理解してよいだろう。そして、「内なる魂という生の過程の素晴らしい世界を精査する機会を持つことができるのは教師の特権であり、心理学はそうした機会の使い方を学ぶために学んでほしい」(128) とロイスは教師たちに呼びかけるのである。

最後に、たとえばヘルバルトの原理を含む、教育学的に重要ないくつかの当時までの心理学的な帰納的結論 (128–131) について触れたあと、ロイスはあらためて本論考の主張をまとめている。そこでは次のように、教えるこ

とは技芸であり、心理学に代表される科学は素材を提供するのみであること、「教育の科学」は存在しないことが断定されるのである。

以上、理論的な研究と教師の仕事との関係についてごくわずかなことのみを提案し、また最も不十分な仕方の説明しようとした。それは一言でまとめることができる。すなわち、教えること (teaching) は技芸である、と。したがって、実際のところ教育の科学は存在しない。そうではなく、実際に存在するのは、教育者が研究するための素材を提供する科学の世界である。(131-132)

4. ロイス教授学論の知的文脈

ここまで、ディルタイおよび彼の思想を受容するロイスの各々の教授学論をかれらの議論の内的文脈に即して確認しながら、ロイスによる受容の仕方の特徴を分析してきた。ディルタイは、教授学 (教育学) が 18 世紀的な普遍的に妥当する理想や心的発達過程を前提としており、他の学問領域が 19 世紀の歴史意識によってそれらを徐々に脱していったことを考えると、教授学は遅れていると診断した。そのうえで、普遍的に妥当する教授学が仮にありうるとするならば、それは教育の内容に関するものではなく、心的生の目的論的な構造を前提とする型に関する科学としてありうるといふ、当該学問についての超越論的——まさに論考のタイトルが示すように、普遍妥当的教育学の可能性の条件を問題とするという意味で——な基礎づけを試みていた。他方で、ロイスの場合は教育学の学問としての基礎づけにはさほど関心が無いようにも見える。彼は、ディルタイの見解が馴染み深いものであり、全体として、そして特に、普遍妥当的教授学に対する疑念に対して同意する旨を表明する。そのうえでロイスは、教師が科学に対してどのように向き合えばよいかという、教育と科学との関係についての考察へと進んでいく。曰く、教育にとって、教師にとって必要なのは、適切に科学を忘れ、生を愛する「技芸」であり、普遍的な教育の科学からすべての実践が導き出せると考えるのは傲慢である。他方で、出発点としての科学を知らない無知も問題であり、教師には科学的訓練——特に心理学者の心を観察する習慣を学ぶこと

——も不可欠である。以上のようにロイスは論じていた。

本章の最終節では、こうしたロイスの主張の知的文脈について触れたい。ディルタイとは違って、ロイスは科学と具体的な教育実践との関係を問題にしている。その場合の「科学」とは心理学などの他領域の科学であり、教育の科学はありえない、ということがロイスの主張には——少なくともロイスが検討するディルタイの論考での主張を超えて——含まれていた。このようなロイスの主張の背景には、諸科学の教育への応用の仕方やそれらの関係をめぐる種々の立場からの議論が展開される南北戦争以後の米国という知的土壌とともに、教師教育を大学システムへと取り込む事業拡大という当時のハーヴァードが抱えたローカルな課題が存在していた。

ここで思い出したいのは、「教えることは芸芸であり、教育の科学は存在しない」とする主張がロイスに独自のものではなかったという点である。よく知られる同時代のもので言えば、ハーヴァードでの彼の同僚であったウィリアム・ジェイムズ (William James、米、1842–1910) が『教師への講話』(1899年)のなかでおこなった同様の主張がある。ジェイムズ著作集の当該巻に解説を寄せているマイヤーズは、その背景について次のように言及している。ジェイムズの『教師への講話』の背景には「教授技能へのハーヴァードの高まる関心」があり、同時期の1891年におけるハーヴァードでのポール・ヘンリー・ハヌス (Paul Henry Hanus、米、1855–1941) の教授史・教授技術助教授への任命は、後の1906年にアーツ&サイエンス部のなかに教育学科が、1920年にハーヴァード教育大学院 (HGSE) ができるという一連の流れの最初のステップであった。こうした動きは、南北戦争以後の米国教育の拡大とそれに付随するあらゆるレベルでの教師の重要性への関心を反映しており、教育領域以外のハーヴァードの指導者たちは各専門分野から教授についてのコースを提供するよう要請されていた (Myers, 1983)。このなかに、ジェイムズやロイスも入っていたのである。なお、ロイスとハヌスは同じ1855年生まれであり、1891年はまさにロイスの当該論考が世に出た年である。

実のところ、1891年にロイスが論考を寄せた『エデュケーション・レビュー』という雑誌自体が「南北戦争以後の米国教育の拡大とそれに付随するあらゆるレベルでの教師の重要性への関心」を反映するものの一つだっ

た。マッキナニーはこの雑誌についての歴史研究のなかで、それが抱えたもろもろの立場の緊張関係を説明している。ニコラス・マレー・バトラー (Nicholas Murray Butler、米、1862–1947) が学校改革の重要な時期に創刊し、編集した本誌は、改革とそれに対する賛否両論を伝える最も重要な伝達手段の一つとして登場したものであり、バトラーが同誌を創刊した主な目的は、教育の科学的研究と教育現場 (teaching field) の専門職化を推進することにあった。ただし、寄稿されたもののなかには教育への「伝統的」なアプローチに依るものと新しい「進歩的」な学校教育運動にコミットするものがあり、また、後者のなかでもジョン・デューイ (John Dewey、米、1859–1952) に代表されるような哲学が科学的探究を支配するという立場と、エドワード・ソーナダイク (Edward Lee Thorndike、米、1874–1949) に代表されるような科学的精神が哲学を支配するという立場の双方が緊張関係を伴って存在していた (McInerney, 1989)。ロイスの二つの論考は、この雑誌の最初期に掲載されたものであるが、では、当時の教育改革に関する上述の知の布置なかで、一つの事例としてハーヴァードの哲学者ロイスが果たした役割とはどのようなものだったのだろうか。

今世紀に入ってあらためてロイスの教授学論を検討するプリヴィテッロも、その思想史的背景に言及している。彼は特にハーヴァード内でのロイスの役割と当時の学長エリオット (Charles William Eliot、米、1834–1926) との関係に着目する。「1890年8月25日、ロイスはハーヴァードの学長エリオットから、教師のための特別な教授学的指導のコースを検討する「師範コースに関する教授委員会 (Faculty Committee on the Normal Course)」の委員長に指名された旨の手紙を受け取って」おり、1891年1月の論考「教育の科学は存在するか」は、この問題について考察した「エリオットに対するロイスからの返答の産物」であった (Privitello, 2010, 123)。重要なことは、先に見たロイスの考えとエリオットによるハーヴァード大学改革の方向性とは親和的であった点である。ロイスは、教師のための「訓練に対してより広い範囲を追加すること」を推奨しており、心理学を「拡大の一つの道として提案」していた。そうしたロイスの推奨は「大学院生と学部生の両方に気を配っていたエリオットにとって的を射た」ものだった (Privitello, 2010, 123)。またプリヴィテッロは、1891年以降ハーヴァードの哲学部長を数回

歴任していた重鎮のバルマーが1908年に表明していた「指導者がみずからの主題に制限を設けている限り、ここでの（ハーヴァード大学での：引用者注）よい教授（good teaching）は決して得られない」（Palmer & Palmer, 1908, pp. 18–19）とする考えとエリオットの考えとの一致に触れながら、エリオットがそれを確信するに至るのに「テクニカルな哲学と歴史的な哲学との混合や幅広い人文的研究を含む彼（ロイス：引用者注）独特のアプローチ」が手伝ったことを指摘している（Privitello, 2010, 123–124）。要するに、ハーヴァードで提供される科目の幅を広げるエリオットの改革をロイスの思想が正当化した側面があるのである*3。

また、第3節で扱った倫理的原理に関するディルタイとロイスの考えの差異についてもプリヴィテッロは触れている。ロイスにとって教育の目的が「合理的な倫理的反省の奨励」に向けて将来の教育者を指導することにあつたように、ディルタイが倫理的原理に関して懐疑論をとるのに対して、ロイスは教授学が普遍的な倫理的原理の可能性の探究を必然的に伴うと考えている。プリヴィテッロはこうしたロイスの議論を1880年代における彼の他の論考と並べて論じることで、彼の教授学が持つ思想形成史上での位置という問題を俎上に載せる。

ロイスが以前に書いた二つの論文（1883年の「教授の自由（The Freedom of Teaching）」と1889年の「哲学の実践的価値（The Practical Value of Philosophy）」：引用者注）に照らしてみると、そのような原理は、生徒を原理の「信者」にするような一連のドグマと等価なものではなく、むしろ、人間の情熱を説明しうる理由に関する探究をおこなう者に開かれた経験や指針で構成されることになるだろう。ロイスは、虚栄心の過剰な露出によって形成される原理を警戒しており、初期の教授学のテキスト全体を通して、そのような諸前提のすべてに批判的であり続けることを目標にしていた。（Privitello, 2010, 124）

ここには、ロイスとディルタイとの分岐として、諸前提に批判的であるこ

*3 エリオットのハーヴァード改革のより一般的な側面については、たとえばガイガー（2023）の第8章を参照。

とをありうる倫理的原理として重視するロイスの姿が見出だされるが、たとえば「理由に関する探究をおこなう者に開かれた経験や指針」という言葉からは1910年代以降にロイス自身があらためて親近性を自覚することになるパース (Charles Sanders Peirce、米、1839–1914) など、古典的プラグマティストたちとの思想上の近接を見てとることも可能だろう (cf. Parker, 2008)。さらにプリヴィテッロは、ロイスが「ディルタイの論考を用いることで、人間的な衝動のあいだの統一への欲求 (desire) において、組織化された性格を形成するというヴィジョンに取り組むことができた」と論じ、「ロイスにとっての教育の問題は、人間的生の統一へのアクセス可能性に関わるもの」であり、ロイスの1885年の著作『哲学の宗教的側面』のなかの「生の組織化 (The Organization of Life)」の章には、「教育の科学は存在するか」と緊密に関連する細かな部分がいくつか見られる」点を指摘している (Privitello, 2010, 125–126)。教師教育のためのコースを求めるエリオットの要望に答えようとしたロイスの教授学論は、同時に、彼の当時の哲学的探究とも連続的なものだったのである。

ただし、ククリックが論じるように、ジェイムズやロイスなどケンブリッジのプラグマティストたちは哲学の諸分野に関してテクニカルな論理学や認識論、形而上学の知見が社会哲学領域の諸研究を基礎づけるといった階層的な見方をとり、ドイツで重視されたディルタイらの精神科学を哲学的探究の根本的部分と考えていなかった (ククリック, 2020, p. 249)。こうした学問観との関連も含めて、ロイス思想に内在的な連続性の具体的なありようについては稿をあらためて検討する必要がある。

最後に、本章の議論が持つ教師教育史研究への含意と、今後の課題について触れておきたい。第3節でも確認してきたように、実際にロイスの論考を読むと彼が教師の専門職性を認めていなかったわけでも、教師の仕事を低く見積もっていたわけでもないことが読み取れる。しかしながら、19世紀前半と比べると科学自体が諸領域で専門化していくなかで彼が持つようになった科学観に照らして、ロイスは「教育の科学は存在しない」とたしかに断定しているし、それゆえに、教師の専門職性を「教育の科学」との関わりにおいて定義することもしていない。したがって、その限りにおいて第1節で触れた三好 (1972) の見解は支持することができるし、さらにはロイスを、

教師の専門職性を「科学」との関わりにおいて定義しない系譜の出発点と考えることもできるかもしれない。すなわち、教育においては、抽象性の高い「科学」の知見の直接的適用ではなく、それは間接的な利用にとどめながら、教師にとっては温かい経験や細部への洞察力がむしろ重要とする立場の系譜である。実際にハーヴァードでは、20世紀の前半のもろもろの展開を経て、教育学の修士号や博士号（Master / Doctor of Education）とは区別された教授技芸の修士号（Master of Arts in Teaching）を中等教育教師の教育のために1936年に制度化しているが（Copenhagen, 2008）、実践的な技芸を重視しながら諸科学の応用を考えるこうした系譜の出発点にロイスの教授学論——とりわけ第3節で見た、教師に科学そのものを実践させようとするのではなく、教師には「心理学的精神」が必要と論じる姿勢——を位置づけることは、それぞれの内実について今後のさらなる検討を俟たねばならないものの、十分に可能だろう。

また、本章では「教育の科学は存在しない」とする立場のロイスに焦点を当て、同様の立場の論者であるジェームズらに言及してきた。しかしながら、こうした立場は同時代の他の教育論者たち——たとえばヘルバルト学派やペスタロッチ主義者、フレーベル主義者たち——とどのように関係し、どのような相違点を持つのか。同時代の教育科学論、教授学論の布置のなかでロイスら哲学者の位置を探る試みは、まだ緒についたばかりである。

文献

- Copenhagen, E. (2008). *Portraits of the harvard graduate school of education deans*. Cambridge, Massachusetts: Monroe C. Gutman Library, Harvard Graduate School of Education.
- Dilthey, W. (1888). Über die Möglichkeit einer allgemeingültigen pädagogischen Wissenschaft. In *Sitzungsberichte der Berliner Akademie der Wissenschaften, 1888* (pp. 807–832). Reprinted in H. -H. Groothoff & U. Herrmann (Eds.) (1971), *Wilhelm Dilthey, Schriften zur Pädagogik* (pp. 83–107). Paderborn: Ferdinand Schöningh. (ディルタイ, W. 坂越 正樹 (訳) (2008). 普遍妥当的教育

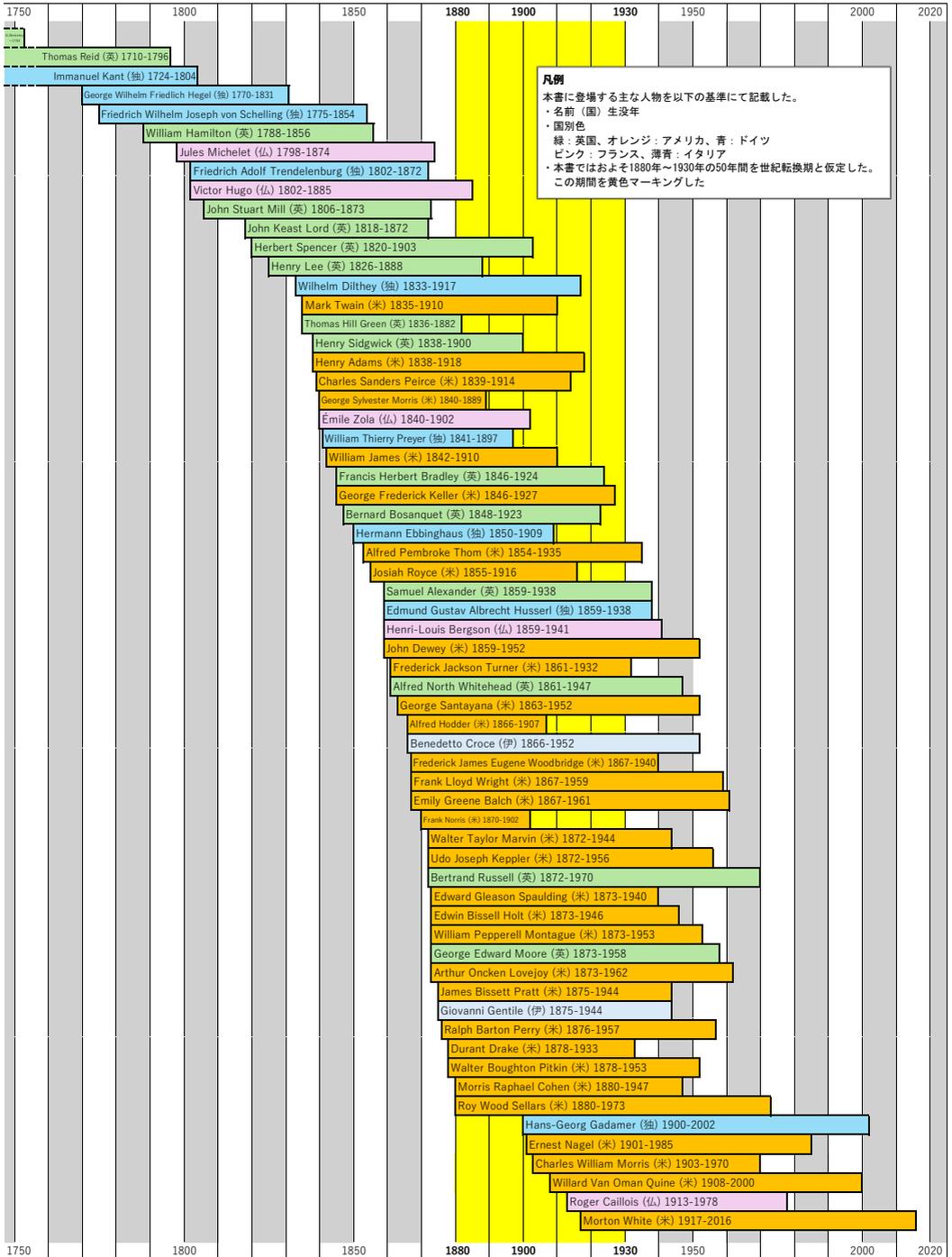
- 学の可能性について（一八八八年）ディルタイ，W. 小笠原 道雄・大野篤一郎・山本 幾生（編訳）ディルタイ全集 第6巻——倫理学・教育学論集——（pp. 475-506）法政大学出版局）
- 舟山 俊明（2006）. 教育理論の人間学的基礎——ディルタイ教育学における「心的生の目的論的構造」論の意義—— 田中克佳（編著）「教育」を問う教育学——教育への視覚とアプローチ——（pp. 33-56）慶應義塾大学出版会
- Geiger, R. L. (2014). *The history of American higher education: Learning and culture from the Founding to World War II*. Princeton, NJ: Princeton University Press. (ガイガー, R. L. 原 圭寛・間篠 剛留・五島 敦子・小野里 拓・藤井 翔太・原田 早春 (訳) (2023). アメリカ高等教育史——その創立から第二次世界大戦までの学術と文化—— 東信堂)
- Kuklick, B. (2001). *A history of philosophy in America, 1720-2000*. New York: Oxford University Press. (ククリック, B. 大厩 諒・入江 哲朗・岩下 弘史・岸本 智典 (訳) (2020). アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで—— 勁草書房)
- McInerney, P. M. (1989). A historical study in educational journalism: The “Educational Review,” 1891-1919 (Doctoral dissertation). Dissertations (1962-2010) Access via Proquest Digital Dissertations. AAI9014057.
- 三好 信浩（1972）. 教師教育の成立と発展——アメリカ教師教育制度史論—— 東洋館出版社
- Myers, G. E. (1983). Introduction. In F. Burkhardt (General Editor), *Talks to teachers on psychology and to students on some of life's ideals. The works of william james*, xi-xxvii. Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press.
- Palmer, G. H., & Palmer, A. F. (1908). *The teacher, essays and addresses*. Boston: Houghton Mifflin Co.
- Parker, K. A. (2008). Josiah Royce: Idealism, transcendentalism, pragmatism. In C. Misak (Ed.), *The oxford handbook of American philosophy* (pp. 110-124). New York: Oxford University Press.

- Privitello, L. A. (2010). Josiah Royce and the problems of philosophical pedagogy, part one. *Transactions of the Charles S. Peirce Society*, 46(1), 111–142.
- Robarts, J. R. (1968). The quest for a science of education in the nineteenth century. *History of Education Quarterly*, 8(4), 431–446.
- Royce, J. (1891a). Is there a science of education? (1). *Educational Review*, 1(1), 15–25.
- Royce, J. (1891b). Is there a science of education? (2). *Educational Review*, 1(2), 121–132.
- 瀬戸口 昌也 (2023). 教育学における「科学性 (Wissenschaftlichkeit)」とは何か——ディルタイの体系的教育学の構想の現代的意義について——大阪教育大学紀要 総合教育科学, 71, 1–19.

本研究は JSPS 科研費 JP20K00015、JP20H01638、JP21K02205、JP23H00935 の助成を受けたものです。

付録

生没年表



生没年表記載の人物一覧

国別・アルファベット順（姓）に列挙

| | 名前 | カタカナ表記 | 生没年 | 言及される章 |
|--|--------------------------------|-------------------------|---------------|------------------|
| イギリス | Samuel Alexander | サミュエル・アレクサンダー | 1859-1938 | 1, 3 |
| | Bernard Bosanquet | バーナード・ボザンケ | 1848-1923 | 3 |
| | Francis Herbert Bradley | フランシス・ハーバート・ブラッドリー | 1846-1924 | 1, 2, 3, 4, 5, 6 |
| | George Berkeley | ジョージ・バークリー | 1685-1753 | 1, 2, 5 |
| | Thomas Hill Green | トマス・ヒル・グリーン | 1836-1882 | 3, 7 |
| | William Hamilton | ウィリアム・ハミルトン | 1788-1856 | 1 |
| | Henry Lee | ヘンリー・リー | 1826-1888 | 8 |
| | John Keast Lord | ジョン・キースト・ロード | 1818-1872 | 8 |
| | John Stuart Mill | ジョン・スチュワート・ミル | 1806-1873 | 1 |
| | George Edward Moore | ジョージ・エドワード・ムーア | 1873-1958 | 1, 2, 3, 4 |
| | Thomas Reid | トマス・リード | 1710-1796 | 1, 2 |
| | Bertrand Russell | バートランド・ラッセル | 1872-1970 | 2, 4, 6, 7 |
| | Henry Sidgwick | ヘンリー・シジウィック | 1838-1900 | 2 |
| | Herbert Spencer | ハーバート・スペンサー | 1820-1903 | 1, 9 |
| | Alfred North Whitehead | アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド | 1861-1947 | 3, 4 |
| | Henry Adams | ヘンリー・アダムズ | 1838-1918 | 8 |
| | アメリカ | Emily Greene Balch | エミリー・グリーン・ボルチ | 1867-1940 |
| Morris Raphael Cohen | | モリス・ラファエル・コーエン | 1880-1947 | 7 |
| John Dewey | | ジョン・デューイ | 1859-1952 | 7, 8, 9 |
| Durant Drake | | デュラント・ドレイク | 1878-1933 | 1, 8 |
| Alfred Hodder | | アルフレッド・ホッダー | 1866-1907 | 8 |
| Edwin Bissell Holt | | エドウィン・ビッセル・ホルト | 1873-1940 | 1, 3, 5, 6, 8 |
| William James | | ウィリアム・ジェイムズ | 1842-1910 | 1, 3, 4, 5, 8, 9 |
| George Frederick Keller | | ジョージ・フレデリック・ケラー | 1846-1927 | 8 |
| Udo Joseph Keppler | | ウド・ジョセフ・ケプラー | 1872-1944 | 8 |
| Arthur Oncken Lovejoy | | アーサー・オンケン・ラヴジョイ | 1873-1962 | 8 |
| Walter Taylor Marvin | | ウォルター・テイラー・マーヴィン | 1872-1956 | 5, 6 |
| William Pepperell Montague | | ウィリアム・ペッパーレル・モンタギュー | 1873-1946 | 5, 6 |
| George Sylvester Morris | | ジョージ・シルベスター・モリス | 1840-1889 | 7 |
| Charles William Morris | | チャールズ・ウィリアム・モリス | 1903-1970 | 7 |
| Ernest Nagel | | アーネスト・ネーゲル | 1901-1985 | 7 |
| Frank Norris | | フランク・ノリス | 1870-1902 | 8 |
| Charles Sanders Peirce | | チャールズ・サンダース・ピアース | 1839-1914 | 4, 9 |
| Ralph Barton Perry | | ラルフ・バートン・ペリー | 1876-1957 | 1, 3, 5, 6 |
| Walter Boughton Pitkin | | ウォルター・パウトン・ピトキン | 1878-1953 | 5 |
| James Bissett Pratt | | ジェイムズ・ピセット・プラット | 1875-1944 | 3 |
| Willard Van Orman Quine | | ウィラード・ヴァン・オーマン・クワイン | 1908-2000 | 7 |
| Josiah Royce | | ジョサイア・ロイス | 1855-1916 | 9 |
| George Santayana | | ジョージ・サンタヤーナ | 1863-1952 | 4 |
| Roy Wood Sellars | ロイ・ウッド・セラーズ | 1880-1973 | 1, 7 | |
| Edward Gleason Spaulding | エドワード・グリーンソン・スポールディング | 1873-1953 | 5, 6 | |
| Alfred Pembroke Thom | アルフレッド・ペンブローク・トム | 1854-1935 | 8 | |
| Frederick Jackson Turner | フレデリック・ジャクソン・ターナー | 1861-1932 | 8 | |
| Mark Twain | マーク・トウェイン | 1835-1910 | 8 | |
| Morton White | モートン・ホワイト | 1917-2016 | 8 | |
| Frederick James Eugene Woodbridge | フレデリック・ジェイムズ・ユージン・ウッドブリッジ | 1867-1959 | 7 | |
| Frank Lloyd Wright | フランク・ロイド・ライト | 1867-1961 | 8 | |
| ドイツ | Wilhelm Dilthey | ヴィルヘルム・ディルタイ | 1833-1917 | 9 |
| | Hermann Ebbinghaus | ヘルマン・エビングハウス | 1850-1909 | 7 |
| | Hans-Georg Gadamer | ハンス＝ゲオルク・ガダマー | 1900-2002 | 8 |
| | George Wilhelm Friedrich Hegel | ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル | 1770-1831 | 1, 2, 3, 4, 7 |
| | Edmund Gustav Albrecht Husserl | エドムント・グスタフ・アルブレヒト・フッサール | 1859-1938 | 1, 4 |
| | Immanuel Kant | イマヌエル・カント | 1724-1804 | 1, 3, 4 |
| | William Thierry Preyer | ウィリアム・プライヤー | 1841-1897 | 9 |
| Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling | フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・シェリング | 1775-1854 | 1, 3 | |
| Friedrich Adolf Trendelenburg | フリードリヒ・アドルフ・トレンデレンブルク | 1802-1872 | 7 | |
| フランス | Henri-Louis Bergson | アンリ＝ルイ・ベルクソン | 1859-1941 | 4, 6 |
| | Roger Caillois | ロジェ・カイヨワ | 1913-1978 | 8 |
| | Victor Hugo | ヴィクトル・ユゴー | 1802-1885 | 8 |
| | Jules Michelet | ジュール・ミシュレ | 1798-1874 | 8 |
| イタリア | Émile Zola | エミール・ゾラ | 1840-1902 | 8 |
| | Benedetto Croce | ベネデット・クローチェ | 1866-1952 | 3 |
| | Giovanni Gentile | ジョバンニ・ジェンティール | 1875-1944 | 3 |

染谷昌義・小山虎・齋藤暢人（編著）(2024). 世紀転換期の英米哲学における観念論と實在論——現代哲学の

バックグラウンドの探究——ratik 付録

著作物等一覧表

本書で言及される著作・論文・作品（主要なもののみ）一覧
 国別色 緑：英国、オレンジ：アメリカ、青：ドイツ、ピンク：フランス

| 発表年 | 国 | 作者 | 著作・論文・作品名 | 言及される数 |
|-----------|---|------------------------------|---|--------|
| 1710 | 英 | G. Berkeley | A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge (『人知原理論』) | 1 |
| 1764 | 英 | T. Reid | An Inquiry into the Human Mind on the Principles of Common Sense (『常識の原理に基づいた人間の心の探究』) | 2 |
| 1785 | 英 | T. Reid | Essays on the Intellectual Powers of Man (『人間の知的能力に関する試論』) | 2 |
| 1861 | 仏 | J. Michelet | La mer (『海』) | 8 |
| 1865 | 英 | J. S. Mill | An Examination of Sir William Hamilton's Philosophy (『ウィリアム・ハミルトン哲学の吟味』) | 1 |
| 1866 | 仏 | V. Hugo | Les travailleurs de la mer (『海に働く人びと』) | 8 |
| 1871 | 英 | G. Berkeley | The Works of George Berkeley, edited by A. C. Fraser (『バークレー全集(フレイザー版)』) | 1 |
| 1875 | 米 | H. Lee | The Octopus; or, The "Devil-Fish" of Fiction and of Fact (『タコ——「悪魔の魚」の虚構と事実』) | 8 |
| 1878 | 米 | G. F. Keller | What We Are Drifting to (『我々の流れゆく先』) | 8 |
| 1879 | 仏 | É. Zola | Le Roman Expérimental (『実験小説』) | 8 |
| 1882 | 独 | W. T. Preyer | Die Seele des Kindes (『児童の精神』) | 9 |
| 1882 | 米 | G. F. Keller | The Curse of California (『カリフォルニアの呪い』) | 8 |
| 1883 | 英 | F. H. Bradley | The Principles of Logic (『論理学の諸原理』) | 2 |
| 1885 | 米 | J. Royce | The Religious Aspect of Philosophy (『哲学の宗教的側面』) | 9 |
| 1888 | 独 | W. Dilthey | Über die Möglichkeit einer allgemeingültigen pädagogischen Wissenschaft (『普遍妥当的教育学の可能性について』) | 9 |
| 1889 | 仏 | H. Bergson | Essai sur les données immédiates de la conscience (『意識の直接と件についての試論』) | 4 |
| 1891 | 米 | J. Royce | Is There a Science of Education?(『教育の科学は存在するか』) | 9 |
| 1893 | 英 | F. H. Bradley | Appearance and Reality(『現れと実在』) | 1,4 |
| 1895 | 英 | H. Sidgwick | The Philosophy of Common Sense(『常識の哲学』) | 2 |
| 1896 | 仏 | H. Bergson | Matière et Mémoire(『物質と記憶』) | 4 |
| 1898 | 米 | W. James | Philosophical Conceptions and Practical Results(『哲学的概念と実際の帰結』) | 8 |
| 1899 | 米 | W. James | Talks to Teachers on Psychology(『教師への講話』) | 9 |
| 1899 | 英 | G. E. Moore | The Nature of Judgment(『判断の本性』) | 2 |
| 1899 | 米 | J. Dewey | The School and Society(『学校と社会』) | 8 |
| 1901 | 米 | F. Norris | The Octopus: A Story of California(『オクトパス——カリフォルニア物語』) | 8 |
| 1901-1905 | 米 | J. M. Baldwin | Dictionary of Philosophy and Psychology(『哲学・心理学事典』) | 1,7 |
| 1903 | 英 | G. E. Moore | The Refutation of Idealism | 2,3 |
| 1903 | 英 | B. Russell | The Principles of Mathematics(『数学の諸原理』) | 7 |
| 1903 | 米 | W. James | The Ph.D. Octopus(『PhDオクトパス』) | 8 |
| 1903 | 米 | F. Norris | The "Nature" Revival in Literature(『文学における「自然」復興』) | 8 |
| 1904 | 米 | U. J. Keppler | Next!(『次!』) | 8 |
| 1905-1906 | 英 | G. E. Moore | The Nature and Reality of Objects of Perception(『知覚の対象の本性と実在性』) | 2 |
| 1906 | 米 | M. Twain | What Is Man?(『人間とは何か』) | 8 |
| 1907 | 米 | W. James | Pragmatism(『プラグマティズム』) | 8 |
| 1907 | 米 | H. Adams | The Education of Henry Adams(『ヘンリー・アダムの教育』) | 8 |
| 1909-1910 | 英 | G. E. Moore | The Subject Matter of Psychology(『心理学の主題』) | 2 |
| 1910 | 英 | A. N. Whitehead & B. Russell | Principia Mathematica(『プリンキピア・マテマティカ』) | 7 |
| 1910 | 英 | E. G. Balch | Our Slavic Fellow Citizens(『我が同胞のスラヴ系市民たち』) | 8 |
| 1912 | 米 | E. B. Holt et al. | The New Realism: Cooperative Study in Philosophy(『共著』『新実在論—哲学における協働的研究』) | 1,3,8 |
| 1912 | 米 | W. T. Marvin | A First Book in Metaphysics(『はじめての形而上学』) | 5,6 |
| 1912 | 米 | R. B. Perry | Present Philosophical Tendencies(『現在の哲学的諸傾向』) | 5,6 |
| 1912 | 米 | W. James | Essays in Radical Empiricism(『根本的経験論』) | 1,4 |
| 1913 | 独 | E. Husserl | Ideen zu einer reinen Phenomenologie und phänomenologischen Philosophie(『純粋現象学、及び現象学的哲学のための考案(イデーナ)』) | 4 |
| 1914 | 英 | F. H. Bradley | Essays on Truth and Reality(『真理・実在論集』) | 4 |
| 1914 | 米 | E. B. Holt | The Concept of Consciousness(『意識の概念』) | 5,6 |
| 1918 | 米 | E. G. Spaulding | The New Rationalism(『新合理論』) | 5,6 |
| 1920 | 英 | A. N. Whitehead | The Concept of Nature (『自然という概念』) | 3 |
| 1920 | 米 | J. B. Pratt | Critical Realism and the Possibility of Knowledge (『批判的実在論と認識の可能性』) | 3 |
| 1920 | 米 | J. Dewey | Reconstruction of Philosophy(『哲学の改造』) | 7 |
| 1920 | 米 | D. Drake et al. | Essays in Critical Realism(『批判的実在論論集』) | 1,8 |
| 1921 | 英 | B. Bosanquet | The Meetings of Extremes in Contemporary Philosophy(『現代哲学における両極の一致』) | 3 |
| 1923 | 米 | G. Santayana | Scepticism and Animal Faith: Introduction to a System of Philosophy(『哲学逍遙』) | 4 |
| 1925 | 英 | G. E. Moore | A Defence of Common Sense(『常識の擁護』) | 2 |
| 1929 | 英 | A. N. Whitehead | Process and Reality(『過程と実在』) | 4 |
| 1933 | 英 | A. N. Whitehead | Adventures of Ideas(『観念の冒険』) | 4 |
| 1934 | 米 | M. R. Cohen & E. Nagel | An Introduction to Logic and Scientific Method (『論理・科学的方法入門』) | 7 |
| 1934 | 仏 | H. Bergson | La pensée et le mouvant (『思想と動くもの』) | 4 |
| 1942 | 米 | G. Santayana | The Realms of Being (『存在の境界』) | 4 |
| 1949 | 米 | M. White | Social Thought in America (『アメリカにおける社会思想』) | 8 |
| 1973 | 仏 | R. Caillois | La pieuvre (『タコ』) | 8 |

染谷昌義・小山虎・齋藤暢人（編著）（2024）. 世紀転換期の英米哲学における観念論と実在論——現代哲学のバックグラウンドの探究

著者紹介

【編著者】

染谷 昌義（そめや まさよし） はじめに、第 1 章

東京大学大学院総合文化研究科博士学位取得（2006 年）。博士（学術）。専門は心理学の哲学。現在、北海道大学人間知・脳・AI 研究教育センター博士研究員。

著書に

- ・『知覚経験の生態学』（勁草書房、2017 年）
- ・ *Art and Philosophy in the 22nd Century: After Arakawa and Madeline Gins* (coauthored, ratik, 2023)
- ・『わざの人類学』（共著、京都大学出版会、2021 年）
- ・『22 世紀の荒川修作+マドリン・ギンズ』（共著、フィルム・アート社、2019 年）
- ・『身体とアフォーダンス』（共著、金子書房、2018 年）

訳書に

- ・ E. リード『魂から心へ——心理学の誕生』（共訳、講談社学術文庫、2020 年）

などがある。

アメリカの知覚心理学者 J. J. ギブソンの創始した「知覚と行動への生態学的アプローチ」をもとに、人間を含めた生物が環境に包囲されて生き存在する過程を生け捕りする言葉とアイデアを探している。現在の研究テーマは、無神経な生物（細菌・菌類・植物など神経細胞をもたない生物）に心のはたらきを認め、生命活動と心のはたらきを同一視する「アニマシー心理学」思想の構想、そしてその可能性と意義を探ること。

連絡先：ecoanima11someya@gmail.com

URL：<https://researchmap.jp/eco-someya-masayoshi>

小山 虎（こやま とら） 第 7 章

大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了（2004 年）。博士（人間科学）。専門は分析哲学、ロボット哲学、分析哲学史。現在、山口大学時間学研究所准教授。

著書に

- ・『知られざるコンピューターの思想史』（PLANETS、2022 年）

編書に

- ・『信頼を考える』（勁草書房、2018 年）
- ・『多様な一元論』（見洋書房、近刊）

訳書に

- ・ D. ルイス『世界の複数性について』（共訳、名古屋大学出版会、2016 年）

- ・ T. サイダー『四次元主義の哲学』（共訳、春秋社、2007年）

論文に

- ・ 「マクタガートの A 理論と B 理論の成立経緯と『時間の空間化』」（『科学哲学』、2023年）
- ・ “Analytic philosophy in Japan since 2000” (*Asian Journal of Philosophy*, 2022年)
- ・ “Against Lewisian Modal Realism from a Metaontological Point of View” (*Philosophia*, 2017年)

などがある。

分析哲学の中でも存在論や形而上学を専門にしているが、近年は分析形而上学の方法論や歴史などの「メタ形而上学」に強い関心がある。さらにその延長として、分析哲学とカント、ヘーゲル以降のドイツ近代哲学やイギリス観念論、プラグマティズムなどとの連続性や、認知科学、人工知能との歴史的類似性に注目しており、分析哲学の哲学史・科学史的位置づけを再検討することで、分析哲学に対する偏見を除去することを目指している。

連絡先：koyama@yamaguchi-u.ac.jp

URL：https://researchmap.jp/read0054855

齋藤 暢人（さいとう のぶと） 第4章

早稲田大学大学院文学研究科哲学専攻博士学位取得（2005年）。博士（文学）。専門は形而上学、論理学、現象学。現在、中央学院大学現代教養学部教授。

主要論文に

- ・ 「實在論の変容ーアリストテレスからホワイトヘッドへ」（『中央学院大学現代教養論叢』、2023年）
- ・ 「境界について」（『論理哲学研究』、2021年）
- ・ 「メレオトポロジーにおける随伴」（『論理哲学研究』、2019年）
- ・ 「アリストテレス的様相論理のメレオトポロジー的再構築」（『中央学院大学現代教養論叢』、2019年）

などがある。

現在の研究テーマは、メレオロジーを拡張した体系であるメレオトポロジーの理論的整備、およびメレオロジーの思想的背景としてのフッサール、ホワイトヘッドの思想の研究である。世紀転換期の英米哲学の思想史的研究との関連では、パース哲学の現象学的部門に関する研究を将来の課題として挙げておきたい。

連絡先：saitonbt@mc.cgu.ac.jp

URL：https://researchmap.jp/stnbt

【著者】

有村 直輝（ありむら なおき） 第3章

立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了（2021年）。博士（文学）。専門はアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの哲学。現在、立命館大学授業担当講師。著書に

- ・『生成の美と論理——ホワイトヘッドの形而上学』（晃洋書房、2022年）

主な論文に

- ・「ホワイトヘッドの「思弁哲学」の形成について——C. D. ブロード批判からの考察」（『アルケー』、2023年）
- ・「ホワイトヘッドにおける形而上学と論理学——1924-25年の資料に基づく一考察」（『プロセス思想』、2019年）

などがある。

現在はホワイトヘッドの哲学を19・20世紀の思想史の文脈のうちに位置づける研究に取り組んでいる。また現代のイザベル・ステンゲルスらによるホワイトヘッド哲学の解釈と展開にも関心を向けている。

連絡先：naokiarimura1990@gmail.com

URL：https://researchmap.jp/naoki_arimura

伊藤 遼（いとう りょう） 第2章

University of St Andrews and Stirling University Graduate Programme in Philosophy (SASP) PhD取得（2017年）。専門は、論理の哲学と初期分析哲学史。現在、早稲田大学文学学術院准教授。

論文に

- ・“An Interpretation of the Gray’s Elegy Argument” (*Journal for the History of Analytical Philosophy*, vol. 11, 2023年)
- ・「ラッセルの「見知り」について」（『哲学世界』、vol. 15, 2022年）
- ・「外部世界をめぐる論争における観念論と実在論」（『プロセス思想』、vol. 22, 2022年）
- ・「哲学史研究の越境と分業——ある推論主義の立場から」（『文学研究科紀要』、vol. 67, 2022年）

などがある。

研究テーマは、推論主義を手がかりにした、さまざまな種類の具体的な推論の分析と、初期分析哲学史における論理観の探究。

連絡先：ryo.ito.822@gmail.com

URL：<https://researchmap.jp/ryo-ito>

入江 哲朗（いりえ てつろう） 第 8 章

東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（2020 年）。博士（学術）。専門はアメリカ思想史、映画批評。現在、東京外国語大学世界言語社会教育センター講師。

著書に

- ・『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』（青土社、2020 年、表象文化論学会賞奨励賞受賞）
- ・『オーバー・ザ・シネマ 映画「超」討議』（共著、フィルムアート社、2018 年）

訳書に

- ・ジェニファー・ラトナー＝ローゼンハーゲン『アメリカを作った思想——五〇〇年の歴史』（ちくま学芸文庫、2021 年）
- ・ブルース・ククリック『アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで』（共訳、勁草書房、2020 年）

などがある。

目下のプロジェクトは、『英会話タイムトライアル』（NHK 出版）誌上で 2022 年度に連載していた「現代に息づくアメリカ思想の伝統」を書籍化すること。

連絡先：tetsuroirie@tufs.ac.jp

URL：https://researchmap.jp/t_irie/

大厩 諒（おおまや りょう） 第 5 章（訳解）、第 6 章

中央大学大学院文学研究科博士後期課程修了（2016 年）。博士（哲学）。専門は、ウィリアム・ジェイムズを中心とした世紀転換期のアメリカ哲学史、プラグマティズム。現在、中央大学、法政大学、実践女子大学などで兼任講師を務める。

著書に

- ・『経験の流れとよどみ——ジェイムズ宇宙論への道程』（見洋書房、2022 年）
- ・『ウィリアム・ジェイムズのことば』（共著、教育評論社、2018 年）

訳書に

- ・ブルース・ククリック『アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで』（共訳、勁草書房、2020 年）
- ・ラッセル・B・グッドマン『ウィトゲンシュタインとウィリアム・ジェイムズ——プラグマティズムの水脈』（共訳、岩波書店、2017 年）

がある。

現在の研究テーマは、20 世紀初頭の米国における観念論と実在論の実像を歴史的に再構成すること。

連絡先：omyry1983@gmail.com

URL：<https://researchmap.jp/omyr>

岸本 智典（きしもと ともりの） 第 9 章

慶應義塾大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学。専門は教育学、アメリカ教育思想史。現在、鶴見大学文学部准教授。

著書に

- ・『道徳教育の地図を描く』（編著、教育評論社、2022 年）
- ・『デューイの思想形成と経験の成長過程』（共著、北樹出版、2022 年）
- ・『西洋教育思想史 [第 2 版]』（共著、慶應義塾大学出版会、2020 年）
- ・『ウィリアム・ジェイムズのことば』（編著、教育評論社、2018 年）

訳書に

- ・ J. デューイ『デューイ著作集 2 哲学 2 論理学理論の研究、ほか——デモクラシー／プラグマティズム論文集』（共訳、東京大学出版会、2023 年）
- ・ B. ククリック『アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで』（共訳、勁草書房、2020 年）

論文に

- ・ 「W. ジェイムズ教育論における「注意の持続」の意味」（『日本デューイ学会紀要』第 58 号、2017 年）

などがある。

教育学諸領域（教育課程論・方法論・制度論や道徳教育論、生徒指導論、進路指導論など）を大学にて講義する傍ら、それらの日本での展開史を省みるときに現れる米国の思想や制度との接点を、アメリカ哲学史・思想史の視点から探ることを仕事にしている。特に関心があるのは、古典的プラグマティストたち、特に W. ジェイムズと当時の米国教育界との相互影響関係。

連絡先：fb040580@gmail.com

URL：http://researchmap.jp/t.kishimoto/

〈著作権法遵守のお願い〉

ratik が発行する電子書籍は、執筆者を「著作権者」とする「著作物」です。「著作権法」により、「ratik が発行する電子書籍」は、法が定める「例外」を除き、その「複製」が禁じられています。また「ratik の電子書籍」を、自らの web サイト、ブログ等にアップロードし、ダウンロード可能なかたちにするなど、「公衆送信が可能な状態」にすることは、法律で禁じられています。さらに、2012 年に改訂された著作権法に基づき、ratik 以外の web サイト、ブログ等に違法にアップロードされた「ratik の電子書籍」をダウンロードすることは「刑事罰」の対象になります。

ratik は、「著作権法」第 63 条（著作物の利用の許諾）に基づき、著作物を複製・頒布・公衆送信する「権利」について、執筆者（著作権者）との間で契約を交わしています。こうした手続きは、「企画」「編集・校正」「電子書籍ファイルの制作」「販売・広告」など「執筆者以外の目や手が入ること」で良きコンテンツを産み出し、情報集積のメリットを生じさせるプロセスを保証するためのものです。

ratik の事業運営の確保、ひいては学術コミュニケーションの活性化のために、著作権法遵守を強くお願いいたします。

なお「著作権法」は、「個人的に又は家庭内その他これに準ずる限られた範囲内において」使用する場合に限り、著作物の「複製」を認めています。

ratik の電子書籍は、「DRM フリー」すなわち「厳格なコピー防止策を講じることなく」、書籍データ（書籍ファイル）を読者のみなさんのお手元お届けしています。これは、印刷媒体の書籍が許容している「おおらかな使用」のメリットを考え、敢えて選んだ方法です。

ratik は、「同じく学問を愛する者」として、読者のみなさんの法令遵守の姿勢を信頼していきたいと考えています。

〈奥付〉

| | |
|---------|--|
| 書名 | 世紀転換期の英米哲学における観念論と實在論： 現代哲学のバックグラウンドの探究 |
| 著者 | 染谷 昌義・小山 虎・齋藤 暢人 編著 |
| 発行年月日 | 2024年3月21日 ver1.0 発行 |
| ISBN | 978-4-907438-65-4 |
| ファイル形式 | PDF |
| カバーデザイン | POSTICS 溝口 賢 |
| 販売価格 | 電子版 無料公開 |
| 発行者 | 特定非営利活動法人 ratic 〒603-8241 京都市北区紫野東泉堂町 42 番地 12 電話 (075) 432-8110 URL: https://ratic.org ©2024 |